

一般国道11号高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第一冊

SAKO NAGA IKE
浴・長池遺跡

1993.3

高松市教育委員会
建設省四国地方建設局



浴・長池遺跡出土土器

はじめに

高松市教育委員会では、平成元年度から足掛け4年にわたって、林、太田地区において東道路の建設に先立ち埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。

この両地区は、都市基盤整備、地場産業振興、文化発信の拠点として、区画整理が行われる一方、コンベンションセンター、県立図書館等の建設が進み、21世紀の高松の発展を支えるエリアとして、今大きく変貌を遂げつつあります。

しかし、この地域は、旧来の農村景観が鮮かに残り、古代から現在に至る讃岐の歴史的遺産を豊かに育んできた土地柄でもあります。現在の土地割りの中にも、千年余前の区画整理である条里制の区画が整然と残り、その一角には日本最古の莊園絵図である弘福寺領讃岐国山田郡田図の故地が確実視されています。近年の発掘調査でも貴重な遺跡が数多く発見されています。これらの文化財は、市民共通の郷土の遺産として大切にして行くことはもちろん、なかんずく、環境問題、真の生活の豊かさが社会全体の課題として衆目を集める昨今、示唆に富む事柄が多々あろうと存じます。

開発事業によって文化財に貴重な発見や多くの知見が得られるという現実には複雑な感情を禁じ得ません。しかし、そうであるからこそ、これらの調査成果を最大限に活用し、広く還元していくことが私どもに課せられた課題と心得ているところでございます。

浴・長池遺跡をはじめ一連の事業の実施に当たり、建設省香川工事事務所、地元関係者各位ほか、たくさんの方々のご理解とご協力をいただきましたこと、末尾ながら厚く御礼申しあげるものです。

平成5年3月

高松市教育委員会

教育長 山口 審式

凡　　例

- 1 本書は、一般国道11号高松東道路建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書の第1冊で、高松市林町に所在する浴・長池遺跡の調査報告を収録した。
- 2 本事業は、高松東道路、上天神一前田東間8kmのうち太田第2土地区画整理事業地に含まれる約1.7kmを対象とする。
- 3 本事業は、建設省四国地方建設局から高松市が受託し、高松市教育委員会が発掘調査を実施した。
- 4 事業費は、建設省四国地方建設局が全額を負担した。
- 5 調査にあたって下記の関係諸機関並びに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。

建設省四国地方建設局	建設省四国地方建設局香川工事事務所
香川県教育委員会	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
高松市都市開発部太田第2土地区画整理事務所	

文化庁文化財保護部 服部英雄 香川大学 木原溥幸 丹羽佑一
東京大学 石上英一 京都大学 金田章裕
奈良国立文化財研究所 工楽善通 牛嶋茂
高松工業高等専門学校 権藤典明 立命館大学 高橋学 皇學館大学 外山秀一
高知大学 内田忠賢 通商産業省工業技術院地質調査所 寒川旭（敬称略）

- 6 本書の報告にあたっては、次の機関並びに方々に分析及び鑑定を依頼した。

木製品樹種鑑定	金沢大学 鈴木光男
石器等石材鑑定	香川県立高松南高等学校 川村教一（敬称略）

なお、鑑定結果のうち本書に掲載できなかったものについては、後続の調査報告で順次報告の予定である。
- 7 調査全般を通じて、高松市内在住、未光甲正氏の協力を得た。

8 本遺跡の調査及び整理作業は、文化財係長藤井総括のもと、山本、中西、山元があたった。本報告書の執筆分担は次のとおりである。

調査の経緯・地理的環境・歴史的環境	藤井
遺構	山本
土器・石器	山元
木製品	中西

編集は山本・山元が共同であたった。

9 写真は、遺構については調査担当者が撮影し、遺物写真については写房 楠華堂（楠本真紀子）に委託した。

10 本遺跡の調査における各業務の委託先は次のとおりである。

発掘調査掘削工事	東海興業株式会社
遺跡写真測量業務	アジア航測株式会社
出土木製品保存処理業務	財団法人元興寺文化財研究所

11 本書で使用する遺構略号は次のとおりである。

SH 竪穴住居	SB 掘立柱建物	ST 方形（円形）周溝墓
SD 溝状遺構	SR 自然旧河道	SP 柱穴
SK 土坑	SA 柵列	SX 性格不明遺構

12 遺物番号は、土器、石器、木器とともに挿図（遺物実測図）ごとに1から順に付した。

13 本書第1~4図「主要遺跡分布図」の作製にあたり、国土地理院発行1/50,000地形図「高松」「高松南部」「玉野」「丸亀」を使用した。

浴・長池遺跡発掘調査報告書

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 地理的環境・歴史的環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第3章 発掘調査の結果	27
第1節 調査区の設定	27
第2節 遺跡の概要と層序	28
第3節 弥生時代前期以前の遺構と遺物	45
第4節 弥生時代中・後期の遺構と遺物	54
第5節 古代の遺構と遺物	138
第6節 中世以降の遺構と遺物	143
第7節 時期不詳の遺構と遺物	148
第4章 調査のまとめ	155
第1節 浴・長池遺跡周辺の地形と遺構の変遷	155
第2節 SR01 11層出土土器の編年的位置づけ	166
第3節 石器の組成と形態の特徴	167
第4節 出土木製品について	179

押 図 目 次

第 1 図	主要遺跡分布図（その1）	12	第41図 1・3区5b砂層出土土器（その4）	77
第 2 図	主要遺跡分布図（その2）	13	第42図 1・3区5b砂層出土石器（その1）	78
第 3 図	主要遺跡分布図（その3）	14	第43図 1・3区5b砂層出土石器（その2）	79
第 4 図	主要遺跡分布図（その4）	15	第44図 1・3区5b砂層出土石器（その3）	80
第 5 図	調査区設定図	28~29	第45図 1・3区5B砂層出土木製品	82
第 6 図	1・3区基本土層図（その1）	33~34	第46図 SH04完掘平面図	83
第 7 図	1・3区基本土層図（その2）	35~36	第47図 SB03完掘平面図	85
第 8 図	2・4区基本土層図（その1）	37~38	第48図 SB04完掘平面図	85
第 9 図	2・4区基本土層図（その2）	39~40	第49図 SB05完掘平面図	85
第10図	2・4区基本土層図（その3）	41~42	第50図 SB06完掘平面図	85
第11図	2・4区基本土層図（その4）	43~44	第51図 SR01西岸ピット群平面図	86
第12図	SR02 7層以下出土土器（その1）	46	第52図 SD09出土土器	88
第13図	SR02 7層以下出土土器（その2）	47	第53図 SP11遺物出土状況図	89
第14図	SR02 7層以下出土木製品（その1）	49	第54図 SP13遺物出土状況図	89
第15図	SR02 7層以下出土木製品（その2）	50	第55図 SK09遺物出土状況図	89
第16図	SR02西岸微高地上水田遺構	51	第56図 SP11出土土器	90
第17図	SR01西岸微高地上水田区画図	52	第57図 SP13出土土器	90
第18図	SH01炭化物出土状況	55	第58図 SK09出土土器	90
第19図	SH01完掘平面図	55	第59図 SR01第10・11層出土土器	92
第20図	SH01出土遺物	56	第60図 SR01第11層出土土器（その1）	94
第21図	SH02炭化物出土状況	56	第61図 SR01第11層出土土器（その2）	95
第22図	SH02完掘平面図	56	第62図 SR01第11層出土土器（その3）	96
第23図	SH03炭化物出土状況	57	第63図 SR01第11層出土土器（その4）	97
第24図	SB01完掘平面図	57	第64図 SR01第11層出土土器（その5）	98
第25図	SB02完掘平面図	57	第65図 SR01第11層出土土器（その6）	99
第26図	ST01完掘平面図	58	第66図 SR01第11層出土土器（その7）	100
第27図	ST02完掘平面図	58	第67図 SR01第11層出土土器（その8）	101
第28図	ST01・02出土土器	60	第68図 SR01第11層出土土器（その9）	102
第29図	ST02出土石器	61	第69図 SR01第11層出土土器（その10）	103
第30図	SX01出土土器	63	第70図 SR01第11層出土土器（その11）	104
第31図	SX03出土土器	64	第71図 SR01第11層出土土器（その12）	106
第32図	SX03出土石器	66	第72図 SR01第11層出土土器（その13）	107
第33図	SX03出土石器（その2）	66	第73図 SR01第11層出土土器（その14）	108
第34図	1・3区5b砂層杭列位置図	68	第74図 SR01第11層出土土器（その15）	109
第35図	1・3区5b砂層杭（その1）	70	第75図 SR01第11層出土土器（その16）	110
第36図	1・3区5b砂層杭（その2）	71	第76図 SR01第11層出土土器（その17）	111
第37図	1・3区5b砂層杭（その3）	72	第77図 SR01第11層出土土器（その18）	112
第38図	1・3区5b砂層出土土器（その1）	74	第78図 SR01第11層出土土器（その19）	113
第39図	1・3区5b砂層出土土器（その2）	75	第79図 SR01第11層出土土器（その20）	113
第40図	1・3区5b砂層出土土器（その3）	76	第80図 SR01第11層出土土器（その21）	114

第81図	SR01第11層出土土器（その22）	115	第122図	SR01 西岸微高地上の水田区画の標高分布	
第82図	SR01第11層出土土器（その23）	115			164
第83図	SR01第11層出土土器（その24）	116	第123図	浴・長池遺跡出土土器変遷図（1）	169～170
第84図	SR01第11層出土土器（その25）	117	第124図	浴・長池遺跡出土土器変遷図（2）	171～172
第85図	SR01第11層出土土器（その26）	118	第125図	浴・長池遺跡出土土器変遷図（3）	173
第86図	SR01第11層出土土器（その27）	119	第126図	浴・長池遺跡出土石庖丁形態分類	176
第87図	SR01第11層出土土器（その28）	119	第127図	浴・長池遺跡出土石庖丁にみる使用痕	177
第88図	SR01第11層出土土器（その29）	120	第128図	打製石庖丁の使用方法復元	178
第89図	SR01第11層出土土器（その30）	120	第129図	先端部における加工面の模式図	180
第90図	SR01第11層出土土器（その31）	121			
第91図	SR01第11層出土土器（その32）	122	表目次		
第92図	SR01第11層出土土器（その33）	123	第1表 整理作業工程表		2
第93図	SR01第11層出土土器（その34）	124	第2表 高松平野所在遺跡時代別変遷表		10
第94図	SR01第11層出土土器（その35）	125	第3表 SR01 西岸微高地上水田計測値一覧表		52
第95図	SR01第11層出土土器（その36）	125	第4表 8a水田計測値一覧表		141
第96図	SR01第11層出土石器（その1）	126	第5表 5a水田計測値一覧表		144
第97図	SR01第11層出土石器（その2）	127	第6表 6a水田計測値一覧表		146
第98図	SR01第11層出土石器（その3）	129	第7表 遺構別出土石器組成表		175
第99図	SR01第11層出土石器（その4）	130			
第100図	SR01第11層出土石器（その5）	131	遺物観察表		
第101図	SR01第11層出土石器（その6）	132			
第102図	SR01第11層出土石器（その7）	133			
第103図	SR01第11層出土石器（その8）	134			
第104図	SR01第11層出土石器（その9）	135			
第105図	SR01第11層出土木製品	137			
第106図	SD01・02完堀平面図	139			
第107図	1・3区4a層出土土器	133			
第108図	2・4区8a水田区画図	141			
第109図	2・4区6a～9b層出土土器	142			
第110図	2区5a水田区画図	143			
第111図	2区5a層瓦器検出状況写真	143			
第112図	2・4区5a・6a・8a水田層出土遺物	144			
第113図	2・4区6a水田区画図	145			
第114図	SD12完堀平面図	147			
第115図	SD06～11完堀平面図	149			
第116図	1・3区出土の石器	151			
第117図	2・4区出土の石器	152			
第118図	4区出土の木製品	153			
第119図	浴・長池遺跡遺構変遷図（1）	157～158			
第120図	浴・長池遺跡遺構変遷図（2）	159～160			
第121図	浴・長池遺跡遺構変遷図（3）	161～162			

図版目次

- 巻頭図版 浴・長池遺跡出土土器
- 図版 1-1 調査前状況全景（西から）
- 2 調査前状況（東から）
- 図版 2-1 3区調査区土層堆積状況（北壁）
- 2 3区 SR02 最深部土層堆積状況-1
- 図版 3-1 3区 SR02 最深部土層堆積状況-2
- 2 2区 SR01 最深部土層堆積状況
- 図版 4-1 3区 SR02 完堀状況（東から）
- 2 3区 SR02 遺物出土状況
- 図版 5-1 4区 SR01 西岸微高地上水田全景（北から）
- 2 4区 SR01 西岸微高地上土層堆積状況（南壁）
- 図版 6-1 3区 SH01 炭化材検出状況
- 2 3区 SH01 完堀状況（南東から）
- 図版 7-1 3区 SH02 炭化材検出状況（北から）
- 2 3区 SH02 完堀状況（南から）
- 図版 8-1 3区 ST01 完堀状況（北西から）
- 2 3区 ST02 完堀状況（南から）
- 図版 9-1 3区 SB01 完堀状況（東から）
- 2 3区 SD02 完堀状況（北から）
- 図版 10-1 1区 SX01 遺物出土状況
- 2 1区 SX03 完堀状況（西から）
- 図版 11-1 1区 5b砂層 遺物出土状況
- 2 1区 5b砂層 杖列検出状況
- 図版 12-1 4区 SH04 完堀状況（東から）
- 2 4区 SK09 遺物出土状況
- 図版 13-1 4区 SB SB03~05 完堀状況（東から）
- 2 4区 SB05、SA01、02 完堀状況（東から）
- 図版 14-1 2、4区 SR01 11層遺物出土状況
- 2 4区 SR01 完堀状況（西から）
- 図版 15-1 2区 SR01 8a層水田完堀状況（東から）
- 2 2区 8a層水田層堆積状況
- 図版 16-1 4区 SR01 6a層水田完堀状況（西から）
- 2 2区 SR01 5a層水田完堀状況（東から）
- 図版 17-1 SD12完堀状況（南から）
- 2 SD06.07完堀状況（南から）
- 図版 18-1 SR02 西岸微高地上水田遺構（北西から）
- 2 SD01.02完堀状況（北から）
- 図版 19 浴・長池遺跡出土土器
- 図版 20 1、3区 SR02 7層以下出土土器
- 図版 21-1 1、3区 SR02 7層以下出土土器
- 2 1、3区 ST01 出土土器
- 3 1、3区 ST02 出土土器
- 図版 22 1、3区 5b砂層 出土土器
- 図版 23 4区 SD11、SP11、SP13、SK09、出土土器
- 図版 24 2、4区 SR01 11層 出土土器 (1)
- 図版 25 2、4区 SR01 11層 出土土器 (2)
- 図版 26 2、4区 SR01 11層 出土土器 (3)
- 図版 27 2、4区 SR01 11層 出土土器 (4)
- 図版 28 2、4区 SR01 11層 出土土器 (5)
- 図版 29 2、4区 SR01 5a層～5b層 出土土器
- 図版 30-1 2、4区 SR01 出土土器、壺口縁部、
-2 浴・長池遺跡出土紡錘車
- 図版 31 2、4区 SR01 11層 出土石器
- 図版 32 2、4区 出土土器（石庖丁、削器）
- 図版 33 2、4区 SR01 11層他 出土石器
- 図版 34-1 2、4区 ST02 出土石器
-2 2、4区 SX03 出土石器
- 図版 35 1、3区 出土石器
- 図版 36-1 1、3区 SR02 7層以下 出土木器
-2 2、4区 SR01 11層以下 出土木器
- 図版 37 1、3区 5b砂層 出土杭

第 1 章

調査の経緯と経過

第1章 調査の経緯

埋蔵文化財調査事業について、香川県内では、国、県に関わる事業については、香川県教育委員会が、その他については、市町教育委員会が調査を実施することになっている。ただし、本調査事業は、その枠組みを逸脱して、高松市教育委員会が手がけることとなった。

本事業は、一般国道11号高松東道路の延長約8kmのうち、約1.7kmを、高松市が担当して埋蔵文化財にかかる調査を実施したもので、本市にとってはじめての大規模な調査事業であった。ところで、その1.7kmの範囲であるが、昭和62年2月2日の香川県都市計画審議会で都市計画決定された香川中央都市計画事業太田第2土地区画整理事業施工区域内にあたる。太田第2土地区画整理事業と一般に呼ばれている本事業は、施工者が高松市、その代表者が高松市市長である。そのため、一般国道11号高松東道路の計画路線のうち一部を高松市で担当することとなった。その総面積約80,000m²、行政区域でいえば、高松市林町から伏石町にまたがる区域で、かつては、山田郡林郷および香川郡太田郷と呼称されていた区域でもある。

調査の実施にあたって、一般国道11号高松東道路施工者である建設省四国地方建設局香川工事事務所長と、太田第2土地区画整理事業施工者高松市長と、発掘調査を担当する高松市教育委員会の教育長の3者の間で、太田第2土地区画整理事業区域内の一般国道11号高松東バイパス用地にかかる埋蔵文化財調査に関する覚書が締結されたのが、12月15日のことである。

そして実際の調査は、平成元年8月15日に着手することとなった。最初の調査地に選ばれたのが、埋蔵文化財の包蔵が確実視されていた浴・長池遺跡、すなわち本書に報告するところの遺跡である。その調査以降、平成2年度には、浴・松ノ木遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、井手東Ⅱ遺跡、平成3年度には、井手東Ⅰ遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡の一部、居石遺跡、蛙股遺跡の一部、平成4年度には、蛙股遺跡、居石遺跡の一部の調査を実施し、現地における発掘調査をすべて完了することができた。現在は、これらの成果をまとめらべく、整理作業に追われている段階である。

調査の経過

浴・長池遺跡の調査は、諸般の事情から工事請負方式によった。契約者が東海興業で、工事期間が平成元年8月15日～平成2年3月24日である。調査日程は、下記のとおり。

平成元年8月22日 機械掘削・表土層除去開始／仮設道敷設開始

9月22日 周囲安全柵設置工事開始

9月27日 第1工区発掘作業開始

10月14日 第2工区発掘作業開始

11月10日 協和中学校生徒現地学習（参加者約300人）
 12月15日 第3・第4工区発掘作業開始
 12月19日 第1・第2工区航空測量
 12月25日 第1工区埋戻完了
 平成2年1月10日 第2工区埋戻完了
 2月2日 第3工区航空測量
 2月22日 第3・第4工区航空測量
 3月12日 第4工区航空測量
 3月14日 第3工区埋戻完了
 3月19日 第4工区埋戻完了
 3月24日 発掘作業（現地作業）完了

整理作業の経過

泽・長池遺跡の整理作業は、平成2年の10月より5人の整理体制で基礎整理作業を開始し、翌年4月より1名増員した。整理作業は、現地作業と並行して行った上、大規模な発掘調査の整理作業は、今回がはじめてであるなど、困難な部分が多くあった。整理作業の工程は、第1表に示したとおりであり、最終的な詰めの作業は、現場作業が終了した9月末から行った。

1990												1991			
4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3				
←→ 注記・復元作業												←→ 弥生土器実測			
1991	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
←→ 弥生土器・須恵器実測												←→ 石器実測			
1992	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
←→ 復元作業												←→ 木器実測			
←→ 石器実測												←→ 遺物トレース・レイアウト			
←→ 遺構トレース・レイアウト												←→ 写真撮影			
←→ 原稿執筆												←→ 編集作業			
発行															

第1表 整理作業工程表

調査組織

浴・長池遺跡を含む一連の高松東道路埋蔵文化財発掘調査事業の遂行にあたっては、高松市教育委員会文化振興課が主管課としてあたった（平成4年度の機構改革により教育部文化振興課から文化部文化振興課に改称）が、事業予算管理と掘削工事請負に関する設計事務については太田第2土地区画整理事務所が担当した。事業関係者は以下のとおりである。

浴・長池遺跡発掘調査及び整理作業関係者

（発掘調査－平成元年度、整理作業－平成2年度～平成4年度）

教育長	三木 義夫（～H4.9）
	山口 寮式（H4.10～）
教育部長	多田 孜（～H4.3）
文化部長	増田 昌三（H4.4～H4.9）
	上里 文磨（H4.10～）
教育部次長	友國 隆夫（～H2.3）
	増田 昌三（H2.4～H3.3）
文化部次長	上里 文磨（H4.4～H4.9）
文化振興課長	三木 丸夫（～H2.3）
	多田 恒男（H2.4～）
文化振興課長補佐	亀井 俊（～H4.3）
	藤田 容三（H3.4～）
文化財係長	藤井 雄三
文化振興課主事	山本 英之 太田第2土地区画
	山元 敏裕（H3.4～） 整理事務所 小坂 伸夫（～H4.4）
文化振興課事務員	山元 敏裕（H2.5～H3.3） 為定 典生
文化振興課	
非常勤嘱託	中西 克也 大川 玲子（H2.10～）
	山元 敏裕（H2.2～H2.3） 吉本 みどり（H2.10～）
	岡田 信子（H元.11～） 出石 真理子（H2.10～）
	竹林 弘子（H2.10～） 佐々木由美子（H3.4～）
	井口 夫美子（H2.10～） ※一部期間継続せず

第 2 章

地理的環境・歷史的環境

第1節 地理的環境

瀬戸内海の中央部、備讃瀬戸と呼ばれる海域の南側に開けた平野がある。讃岐平野である。かなりの面積を測る平野ではあるが、そのまとまりに欠ける嫌いがある。すなわち、各々独立した小平野の集合体が讃岐平野と呼ばれているのである。

各々の小平野は、2～300メートル程度の山々で区画される。山々は、メサとかビュートと呼ばれる溶岩台地の侵食地形で、比較的単調な容姿を持つ。高松平野では平野の北東部に位置する、天然記念物「屋島」が、メサの代表例で、西側の中ほどに位置する「六ツ目山」が、ビュートの代表例であろうか。

ところで、高松平野の東は、屋島から南に、前田山（龍王山）、芳岡山、二子山に至って南方の讃岐山脈の山麓地帯に繋がり、西は、六ツ目山の南に、堂山（胴山）、北には、伽藍山、萬燈山、袋山、勝賀山、串の山（袋山から勝賀山は、五色台と呼ばれる山群の1つ）の山並みで、各々東西の境界を形成する。さらに、北は瀬戸内海、南は讃岐山脈の山麓部で画された区域が高松平野である。

この区域内には、先にあげた山々と同様の大きさをもった山が、独立丘陵のごとく点在するのも特徴である。積石塚古墳群や、栗林公園の借景として名高い石清尾山塊をはじめ、由良山、日山、上佐山等が上げられる。海岸部のすぐ北部に浮かぶ、男木島、女木島も同様に考えられよう。

高松平野は小平野のうちでは、比較的大きい方である。北に瀬戸内海、南に讃岐山脈が配されるため、他の小平野の同様、高松平野でも、川は北流する。しかもかなりな急流で雨水が一気に流れるため、當時は水量に乏しい。そのような河川の中で香東川（延長約33キロメートル、流域面積約120平方キロメートル）は、最大の河川である。その東西を流れる詰田川（延長約5キロメートル、流域面積約32平方キロメートル）、本津川（延長約21キロメートル、流域面積約51平方キロメートル）の両河川が、香東川の旧河道を流れる考えれば、高松平野の大部分を香東川の流域として把握することができよう。

これに対して、新川（延長約19キロメートル、流域面積約132平方キロメートル）、春日川（延長約15キロメートル、流域面積約63平方キロメートル）の流域は、高松平野東側の一部を占めるに過ぎない。

地形的にみても、香東川流域は、現在の香川町岩崎橋付近を扇頂とする扇状地であるのに対し、新川・春日川流域には、扇状地の発達はみられず、自然堤防帶が広がる。すなわち、両河川の間には営力の差が歴然としているのである。これは、源流が讃岐山脈の奥深くにある河川と、そうでないものの差であろうか。

香東川によって造られた扇状地は、新旧合わせて、5段階に分けられるという。浴・長池遺跡の扇状地は時代が最も新しい段階のものである。

高松平野の北部には、三角州帯が広がる。ここには、本来の三角州帯が含まれているが、大部分は、近年に至って埋め立てた土地が広大な面積をしめ、さらには人工改変が著しい市街地である。

さて、浴・長池遺跡は、そのような高松平野のほぼ中央、扇状地上に位置する。遺跡は、東と西に大きく分割することができる。東側は、香東川の比較的新しい旧河道である。後日報告する浴・松ノ木遺跡に続く。また、この旧河道には、低い地形を利用して南の方から分木池、下池、長池、大池そしてガラ池と、連続して溜池が造られている。

従って、西側は旧河道の西を画する微高地であり、これまた後述する浴・長池Ⅱ遺跡に続く。といっても、東は旧河道、西は微高地というように、単純に分割することはできないようである。扇状地の特色は、網目状の流路が、一見無秩序なように走る。浴・長池Ⅱ遺跡でも、調査結果と、そのような扇状地の特性とが、矛盾しなかったようである。

第2節 歴史的環境

発掘の調査の結果から、遺跡の性格一つ一つを取り上げることも大切ではあるが、他方、各遺跡のもつ性格を単純化して相互に比較検討することも必要ではなかろうか。そのような方針のもと、遺跡の性格を「遺構と遺物」について、「どの時代のもの」か、「存在する；存在しない；極めて多く存在する」に評価し、それを比較検討したのが別表である。以下、別表を中心に検討してみることを、本稿の大きな目的とすることとする。

更新世における高松平野の歴史は、現在のところさほど明確ではない。近年の発掘調査により、中間西井坪遺跡⁽¹⁾（中間町）から、比較的多くの旧石器時代の遺物が発見された。また、雨山南遺跡⁽²⁾（三谷町）、西畠遺跡⁽³⁾（生島町）でもナイフ形石器が、多くの剝片とともに採集されている。これらの遺跡は、低地を見下ろす小高い丘陵もしくは、山麓部に立地する。さらに具体化すれば、低地との比高差数十メートルという範囲に納まるといえよう。塩飽諸島の旧石器時代の遺跡群も同様である。

これらの事実は何を語るのか。国分台、城山両遺跡というサヌカイト原産地に所在する例を除いて、山地部と平地部には、旧石器時代の遺物は存在しないのか。それとも遺跡は存在するが現在は発見されていないのだろうか。

旧石器時代の生活の基盤とするところは、平野部を見下ろす小高い丘もしくは山麓部であるが、旧石器時代の遺跡をあたかも死者の住まいである古墳の立地を分析するように、評価することが妥当であろうか。本市で発掘を行った、井手東Ⅰ遺跡⁽⁴⁾（伏石町）、蛙股遺跡⁽⁵⁾（太田下町）では、アカホヤ層が検出された。これまで平地部における地山と考えられていた黄褐色粘質土層に、明白な層序を持ってアカホヤ層が存在することを確認した。それより上部の黄褐色粘質土層は、少なくともアカホヤ層以降、完新世の堆積であることが明らかである。

従って、井手東Ⅰ遺跡、蛙股遺跡のあたりでは、旧石器時代人の生活の舞台であった更新世の面は、比較的浅く、やや深くに埋もれることになる。ところで、両遺跡の近傍に位置する大池遺跡（木太町）では、有舌尖頭器2点が採集されている⁽⁶⁾。更新世の面がおもいのほか、浅いもしくは顔を出していると考えられる。このことから更新世の面は一様ではなく、場所によって凹凸の差があると推定される。現在の地形とはかなり違った地形であったことが類推できる。しかし、当時の地表は深くうずめられているのでなく、さらに断片的な遺物が発見されていることから考えて、今後この地域において、旧石器時代はいに及ばず、縄文時代草創期から前期の遺跡が発見される可能性は、皆無ではないといえよう。また、更新世の終わり頃において、既に安定した段丘面であったと推定される高松市南部の台地状の平野部には、現在のところ注目すべき遺跡は確認されていない。今後の調査によりこの地域で旧石器時代の遺跡が

発見されれば、丘陵性の山麓部のみに同時代の遺跡が立地するのではないことが、いっそう明白になるであろう。

縄文時代を、アカホヤ降灰以前と以後に分けて考えてみる。現在のところ、アカホヤ以前の遺跡は発見されていない。これについて、次の仮説を提案できる。遺跡が「存在する」という仮説と、「存在しない」という相反する両説である。

旧石器時代と遺跡の少なさでは類似するが、決定的に違うのは、表採・発掘のいずれにせよ、遺跡は発見されていないことである。皆無なのである。アカホヤ降灰は自然現象であり、人間の営みによって生じたものではなく、これを歴史上の区分として利用するのは適當とは思えないが、高松平野においては降灰以前と、以後に大きな断絶を認めざるを得ない。

縄文時代の遺跡は、下司遺跡⁽⁷⁾（東植田町）で、前期に属するとされる土器片が発見されている。さらに後期になると、前田東中村遺跡⁽⁸⁾（前田東町）は、注口土器を始めとして、多くの土器片が出土した。三谷三郎池C遺跡⁽⁹⁾（三谷町）で幾つかの土器片が採集されている。これらの遺跡は、高松平野の縁辺部に立地するのみで平野部中央付近からの出土は確認されていない。

これに続く、晩期中頃の遺跡として、平野部の中央に居石遺跡⁽¹⁰⁾（伏石町）が出現する。続いて縄文時代晩期末に属する遺跡として、林・坊城遺跡⁽¹¹⁾（林町）、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡⁽¹²⁾（林町）、井手東Ⅰ遺跡⁽⁴⁾、井手東Ⅱ遺跡⁽¹³⁾（伏石町）、前田東中村遺跡（前田東町）などが判明している。これらの遺跡はいずれも発掘調査で発見されたもので、発掘例（27例に対する7例）で、26%の出現率である。発掘調査実施場所は、現在における道路計画によって決定されたものであり、縄文晩期人の生活によって決定されたものではないから、標本の扱い方、母集団数等の資料操作に問題があるとは考えられるが、調査区の設定については任意性があると考えられよう。従って、出現率は縄文晩期の遺跡の存在率に近いと推測することも可能である。高松平野中央部においては、今後の発掘調査において、同様な傾向を示す可能性があることも指摘しておきたい⁽¹⁴⁾。

とすれば、縄文晩期において、山麓部、丘陵部という平地の縁辺部だけでなく、高松平野の中央部がある程度広範囲に開発されていたことも証明できそうである。すなわち、居住範囲が拡大していた、もしくは、拡大しつつあったと推定できよう。この傾向は弥生時代以降顕著となり、低地部の開発・集住が一般的となるようである。以上のことから、縄文時代晩期は高松平野における一つの画期として想定したい。

次に、弥生時代前期だが、井手東Ⅰ遺跡（伏石町）以外は、縄文晩期もしくは弥生時代草創期の遺跡を引き継ぐ。集落の立地等、遺跡を形成する諸条件にあまり異変がないものと判断したい。

この時期、浴・長池Ⅱ遺跡の例で明らかなように、高松平野では、比較的規則正しい区画を

もつ水田が出現した。浴・長池Ⅱ遺跡の近傍にも類似した水田が検出されている。浴・長池遺跡（林町）、弘福寺領山田郡田図比定地遺跡⁽¹⁵⁾（林町）がそれで、いずれも、弥生時代中期以前と推定される水田遺構で、以上の成果から、この時代すでに広範囲に水田が造成されていたと推定できよう。

遺跡の出現状況の大きな変動は、弥生時代中期に認められる。中期前半は、井手東Ⅱ遺跡（伏石町）、浴・長池Ⅱ遺跡、浴・長池遺跡（林町）等、前代に引き続いて存在する遺跡が認められるほか、浴・松ノ木遺跡⁽¹⁶⁾（林町）、上天神遺跡⁽¹⁷⁾（上天神町）、凹原遺跡⁽¹⁸⁾（下多肥町）等が、新たに出現する。弥生時代前期の集落が他地域に展開した姿を示すものと、解釈したい。ところが、弥生時代中期後半になると状況が一変する。平地部でこの時代に属する凹線文で装飾された土器の発掘例が報告されているのは、僅かに、浴・長池遺跡（林町）、前田東中村遺跡⁽⁸⁾（前田東町）のみである。その一方で、久米池南遺跡⁽¹⁹⁾（新田町）、中山田遺跡⁽²⁰⁾（池田町）、屋島境内遺跡⁽²¹⁾（屋島東町）など、高地性集落として把握できる遺跡の存在が顕著となる。その他に市内では、女木島の鷺ヶ峰遺跡⁽²²⁾（女木町）、摺鉢谷遺跡⁽²³⁾（峰山町）、伽藍山遺跡⁽²⁴⁾（御厩町）等も高地性集落の候補にあげられる。これらはいずれも、集落性遺跡の空白地帯であって、高松平野を見おろすことのできる小高い丘陵、もしくは山頂付近に位置し、視界を確保する上では極めて優位な占地といえる。

このように、突然に出現した高地性集落に対して、平地性遺跡の数の上での減少は、「たまたま、そうした遺跡を発掘していないだけ。」との、発掘調査実施に起因する偶然の減少として片付けてよいのであろうか。

さて、弥生時代中期後半における、このような特異な現象は、弥生時代後期の遺跡のあり方を比べてみると、より鮮やかになる。後期になると、遺跡数が飛躍的に増加するとともに、質的な充実も認められるようになる。

発掘調査例を述べると、中間西井坪遺跡⁽¹⁾（中間町）、上天神遺跡⁽¹⁷⁾（上天神町）、居石遺跡⁽¹⁰⁾（伏石町）、塵紋胴遺跡⁽²⁵⁾（伏石町）、蛙股遺跡⁽⁵⁾（伏石町）、太田下須川遺跡⁽²⁶⁾（太田下町）、井手東Ⅱ遺跡⁽¹³⁾（伏石町）、浴・長池遺跡（林町）、浴・長池Ⅱ遺跡⁽¹²⁾（林町）、浴・松ノ木遺跡⁽¹⁶⁾（林町）、林坊城遺跡⁽¹¹⁾（林町）、六条上所遺跡⁽²⁷⁾（六条町）、前田東中村遺跡⁽⁸⁾（前田東町）、天満宮西遺跡⁽²⁸⁾（松縄町）、松縄下所遺跡⁽²⁹⁾（松縄町）、凹原遺跡⁽¹⁸⁾（多肥上町）、空港跡地遺跡⁽³⁰⁾（林町）、葛谷遺跡⁽³¹⁾（西植田町）、久米池南遺跡⁽¹⁹⁾（新田町）があげられる。久米池南遺跡例は、住居址1棟の単独の存在であり、例外として除くと中間西井坪遺跡から、葛谷遺跡まで、平地もしくは台地状の占地をとる。また、大量の土器を出土するのも、これらの遺跡の特色である。

さらに、表面採集で発見されたこの時期に属する遺跡としては、全国的にも著名な大空遺跡

(新田町)をはじめとして、南谷遺跡⁽³³⁾(新田町)、大池遺跡⁽³⁴⁾(木太町)、竹元遺跡⁽³⁵⁾(東植田町)、佐料遺跡⁽³⁶⁾(鬼無町佐料)、是竹薬王寺遺跡⁽³⁷⁾(鬼無町は竹)等があげられる。これらの遺跡では、いずれも大量の土器片が採集され、前述した遺跡の発掘調査成果との共通項が認められる。

ところで、土器出土量は、堆積期間、保存状態、人口、一人あたりの使用量等の要素によって決定されると考えられよう。なかでも大きな問題となるのが、集落域における人口と、一人あたりの土器使用量であろう。

先の発掘調査例でも述べたように、大量の出土の原因として、人口増に伴う現象(集落が飛躍的に増加することに裏付けされた現象)と個人の使用量の増加を想定できよう。当時の社会において、大きな変革が起こったため、土器出土量の飛躍的な増加が高松平野において確認できるのであろう。

	旧 縄文	縄文	変換	弥生	弥生	弥生	弥生	古墳	古墳	古墳	奈良	平安	中世	中世
石器	アカホヤ	アカホヤ		中期	中期									
時代	以前	以降	期	前期	前半	後半	後期	前期	中期	後期	時代	時代	前半	後半
中間西井坪	回						◎回	◎回	○□	○□	◎回	◎回	○□	
薬王寺正箱											◎回	◎回	◎回	
上天神							◎回		○□	○□		○□		□□
上天神(新)					○□		◎回			○□				
太田下須川							◎回	◎回	○□	○□	○□	○□	○□	
蛙股							□□					□□		
居石			□□				□□	□□		□□	□□	□□	□□	
井手東I		□□			○回		□□					□□	□□	
井手東II		□□	□□											
浴・長池II		□□	□□	○□			□□					□□		
浴・長池		□□	□□	◎回	◎回	□□	□□			□□	□□	□□	□□	
浴・松の木						□□	□□			□□	□□	□□	□□	
林坊城		◎回	○□				○□							
六条上所							○□	○□				○□		
東山崎水田									○□			○□	○□	
前田東中村		○□	○□	○□		○□	◎回		○□	○□	◎回	◎回	◎回	
天満宮西				◎回			◎回				○□			
松繩下所			□□				□□				◎回		□□	
凹原				○□		◎回							□□	
弘福寺関係			□□				□□			□	□□	□□	□□	
空港跡地			○□				◎回	◎回		○□	□□	□□	○□	
諏訪神社等			○□			○□		○□		○□	○□		○□	
久米池南等						○□	○□	○□		○□		○□		
屋島						□				□		□		○□
光専寺山			□											
中山田						○□				○□				
葛谷							○回			○□				

少ないが存在
遺構物

存在

きわめて多く存在

□

○

◎

回

第2表 高松平野所在遺跡時代別変遷表

いずれにしても、人口の増加があったことは、想定せざるを得ないのではないか。とすれば、なおさら弥生時代中期後半の希薄さが浮かび上がるるのである⁽³⁸⁾。

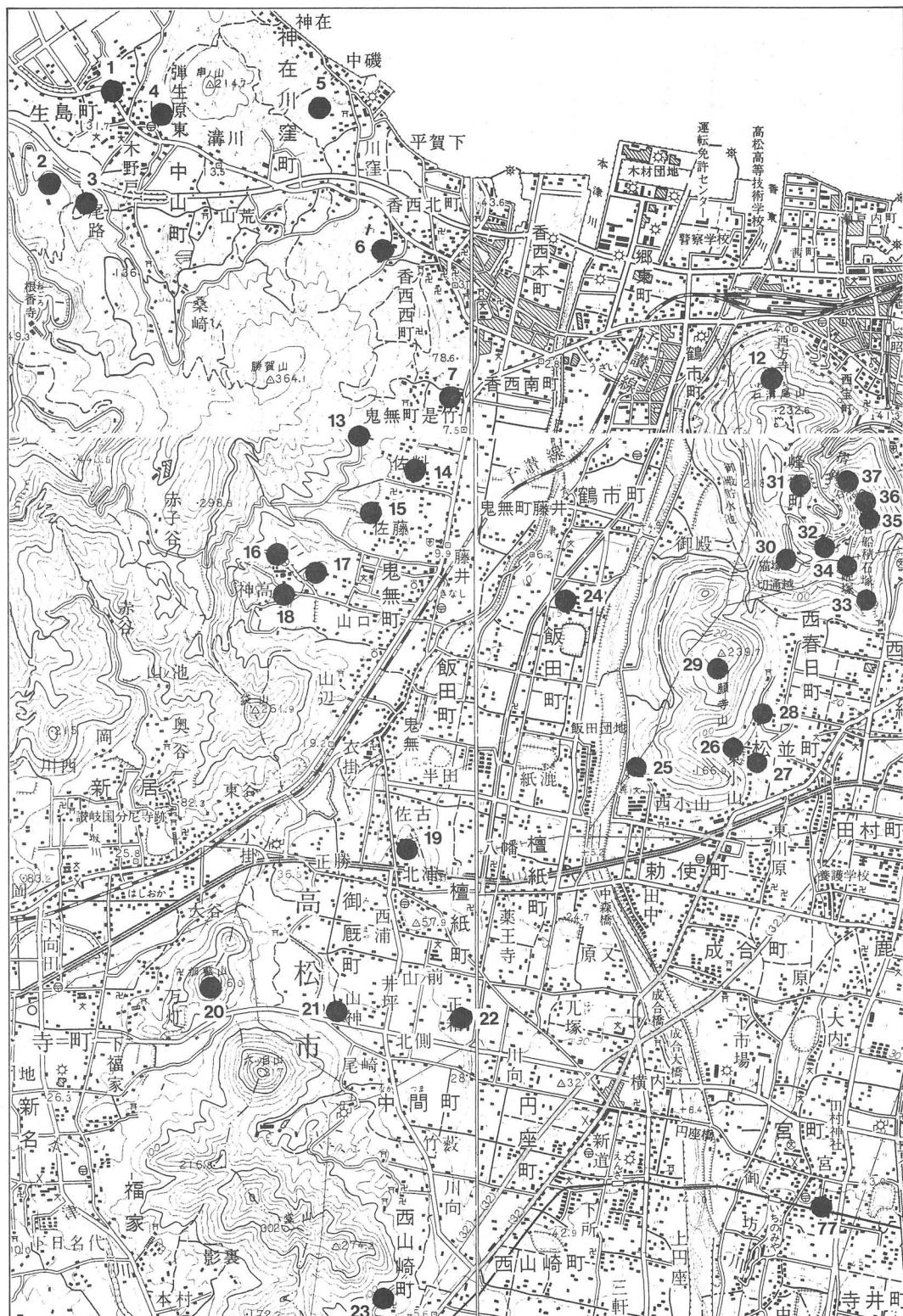
弥生時代後期に続く古墳時代前期から中期になると、状況が再び一転する。前期の遺跡とすれば、中間西井坪遺跡⁽¹⁾（中間町）、居石遺跡⁽¹⁰⁾（伏石町）、六条上所遺跡⁽²⁷⁾（六条町）、空港跡地遺跡（林町）が、中期の遺跡としては、中間西井坪遺跡（中間町）、太田下須川遺跡⁽²⁶⁾（太田下町）、前田東中村遺跡⁽⁸⁾（前田東町）がそれぞれあげられるが、これらの両時期の集落遺跡は、平地部における弥生時代中期後半の分布状況と同様、希薄な存在であることが指摘できる。特に古墳時代中期の希薄さは目立つところである⁽³⁹⁾。

では、古墳時代を象徴づける古墳の分布状況はどのようにであろうか。高松平野を見下ろす、小高い山や丘陵には、全国屈指の積石塚古墳群である石清尾山古墳群⁽⁴⁰⁾（峰山町ほか）のほか、高松市茶臼山古墳⁽⁴¹⁾（新田町ほか）、横立山経塚古墳⁽⁴²⁾（中山町）、小日山1号墳⁽⁴³⁾（三谷町）等の前方後円墳が、あたかも各々のテリトリーを尊重して存在する⁽⁴⁴⁾。

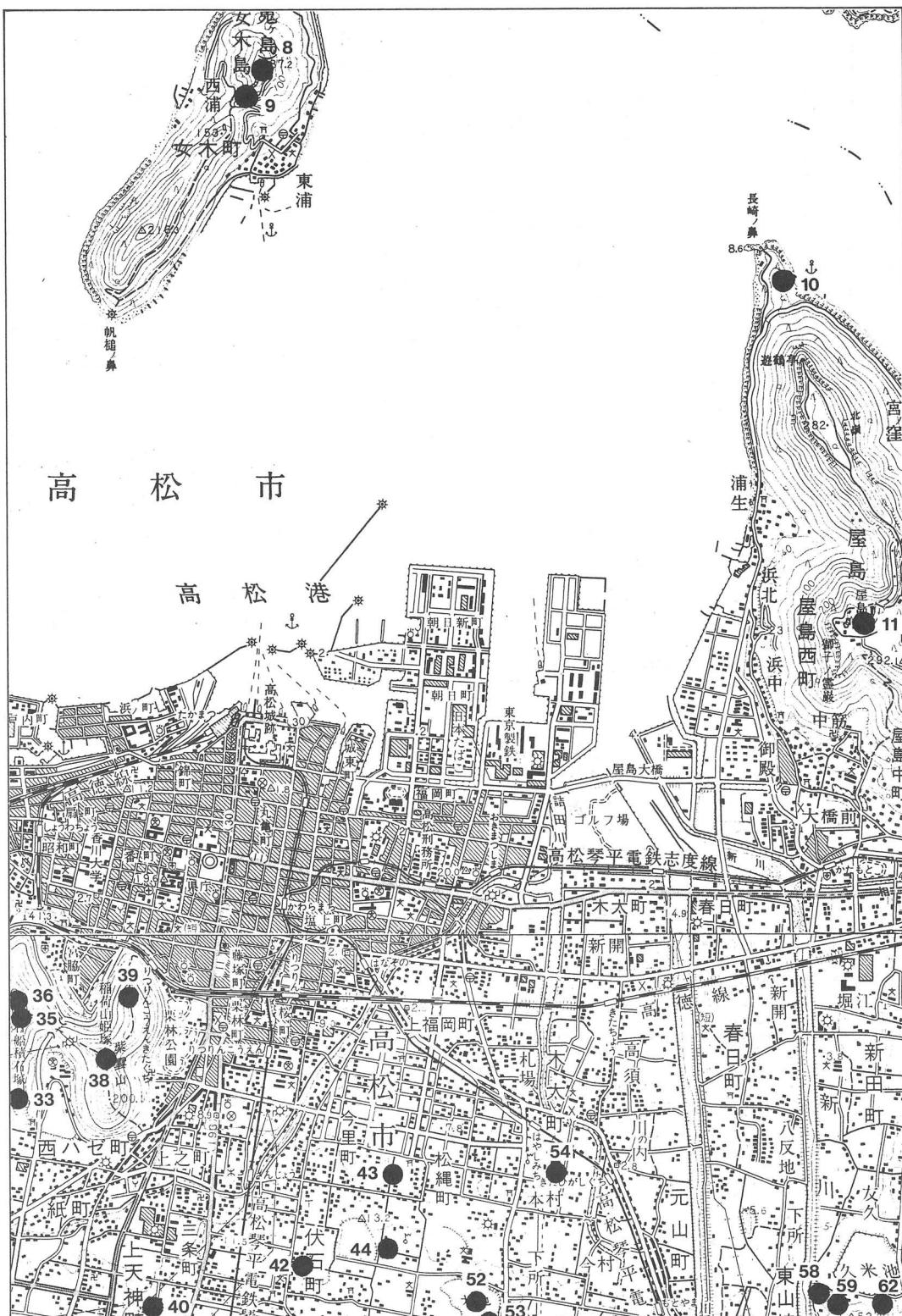
中でも、石清尾山古墳群は、その中の1基である最古級の前方後円墳である鶴尾神社4号墳⁽⁴⁵⁾（西春日町）によって先進性が示されるとともに、規模、内容において、他の古墳群と比べ圧倒的優位に立つ。

なるほど、諏訪神社墳丘墓⁽⁴⁶⁾（東山崎町）という古墳に先行する墓制をもち⁽⁴⁷⁾、さらには畿内的な性格が指摘されている高松市茶臼山古墳（新田町ほか）を出現させた高松市東部の勢力は相当有力であったと考えられるが、全体として把握した場合、規模が小さいことは否めない。さらに他の周辺古墳の勢力の総和でもってしても、石清尾山古墳群を形成した集団とは、経済力において到底太刀打ちできるとは考えられないである。さらに、範囲を広げて古墳時代における讃岐国の他の集団と比べても、その造墓に費やされたエネルギーには莫大なものがある。他と比較するすべもない。瀬戸内海沿岸部でも特筆される存在と考えられる。

次に、中期とその前後に属すると考えられるものとして、船岡山古墳⁽⁴⁸⁾（香川郡香川町）、三谷石舟古墳⁽⁴⁹⁾（三谷町）、高野丸山古墳⁽⁵⁰⁾（川島本町）、尾越古墳・大亀古墳⁽⁵¹⁾（西植田町）、西尾神社古墳⁽⁵²⁾（十川東町）、白山神社古墳⁽⁵³⁾（木太町）、長崎鼻古墳⁽⁵⁴⁾（屋島西町）、女木丸山古墳⁽⁵⁵⁾（女木町）、住吉神社西古墳⁽⁵⁶⁾（神在川窪町）、今岡古墳⁽⁵⁷⁾⁽⁵⁸⁾（鬼無町佐料）、相作牛塚古墳⁽⁵⁹⁾（飯田町）、がめ塚古墳⁽⁶⁰⁾（勅使町）、御廻天神社古墳（御廻町）、中間西井坪遺跡⁽¹⁾（中間町）、本堯寺北古墳⁽⁶²⁾（西山崎町）が、それぞれの規模の大小等、内容に相違はあるが、高松平野の各地域に比較的一様に散在する。そこには前期における石清尾山古墳群のような傑出した存在は認められない。わずかに、三谷石舟古墳から高野丸山古墳を続けて築造した集団が卓越するのみである。



第1図 主要遺跡分布図(その1)



第2図 主要遺跡分布図(その2)



第3図 主要遺跡分布図(その3)



第4図 主要遺跡分布図(その4)

たとえば、石清尾山古墳群（峰山町ほか）の卓越化は、それを支える相当規模の集落の存在を暗示する。従って、石清尾山塊からやや離れた高松平野中央部においては、集落が石清尾山の周辺に統合されたため、集落遺跡そのものが検出されないとも考えられる。しかし、特定の集団の政治的卓越によって、一定の地域に支配下の住民を集めることができるのであろうか。普通、住民・集落の集中化というより、政治的な影響力の拡大という手段によって、権力の拡大が図られさらには確立がなされるのであろう。また、石清尾山古墳群の中期における勢力の衰退を考えると、中期集落遺跡の希薄さの説明材料にはならない。

古墳時代前期から中期にかけて、急速に人口が減少したとの仮説を立ててみよう。前述した古墳各々が、どの程度の動員力をもって築造されたのかが判明しないことには、結論的なことがいえないが、仮に、長期間の工期をもって築造するならば、投入される作業員の1日あたりの人数は、過小であって当然である。当時、小さな古墳を造るだけでも大土木工事であったことは、容易に推察できるが、人口が多くない場合には、工事に長期間を設定すれば問題はないともいえる。従って、先の仮説が成立する可能性もある。

遺跡地名表

1 西畠遺跡	19 御厩大塚古墳	37 北大塚古墳
2 横立山経塚古墳	20 伽藍山遺跡	38 稲荷山姫塚古墳
3 横立山東麓古墳群	21 中間西井坪遺跡	39 稲荷山北端古墳
4 弾正原古墳跡	22 正箱乘王寺遺跡	40 上天神遺跡
5 住吉神社西古墳	23 本堯寺北古墳	41 太田下須川遺跡
6 勝賀廢寺	24 相作牛塚古墳跡	42 墓紋銅遺跡
7 是竹薬師遺跡	25 がめ塚古墳	43 天満・宮西遺跡
8 鷹ヶ峰遺跡	26 片山池窯跡	44 松縄下所遺跡
9 女木丸山古墳	27 坂田廃寺	45 蛙股遺跡
10 長崎鼻古墳	28 南山浦古墳群	46 居石遺跡
11 屋島寺境内遺跡	29 浄願寺山古墳群	47 井手東Ⅱ遺跡
12 下ノ山遺跡（銅鉢出土地）	30 猫塚古墳	48 井手東Ⅰ遺跡
13 かしが谷2号墳	31 石清尾山9号墳	49 浴・長池Ⅱ遺跡
14 佐料遺跡	32 摺鉢谷遺跡	50 浴・長池遺跡
15 今岡古墳	33 鶴尾神社4号墳	51 浴・松ノ木遺跡
16 平木古墳群	34 姫塚古墳	52 大池遺跡
17 大塚古墳	35 石船塚古墳	53 弘福寺領関係遺跡発掘地
18 古宮古墳	36 鏡塚古墳	54 白山神社古墳

55	林坊城遺跡	71	前田廃寺	87	三谷通谷遺跡
56	六条上所遺跡	72	前田東中村遺跡	88	高野丸山古墳跡
57	東山崎水田遺跡	73	潮満塚古墳	89	高野廃寺
58	諏訪神社墳丘墓	74	凹原遺跡	90	光専寺山遺跡
59	諏訪神社旅所遺跡	75	空港跡地遺跡	91	西尾天神社古墳
60	川添浄水場遺跡	76	拝師廃寺	92	中山田遺跡
61	高松市茶臼山古墳	77	田村神社旅所遺跡	93	尾越古墳
62	久米池南遺跡	78	船岡古墳	94	大亀古墳群
63	山下廃寺	79	雨山南遺跡	95	下司廃寺・下司遺跡
64	山下古墳	80	小日山1号墳	96	竹元遺跡
65	久本古墳	81	平石上古墳群	97	植田八幡社古墳
66	北山古墳跡	82	矢野面古墳	98	公渕池窯跡群
67	瀧本神社古墳	83	三谷三郎池西岸窯跡	99	円養寺遺跡
68	長尾古墳群	84	三谷三郎池C遺跡	100	葛谷遺跡
69	南谷遺跡	85	石舟池古墳群		
70	大空遺跡	86	三谷石船古墳		

いずれにしても、古墳時代後期になると、再び集落遺跡および水田の生産遺跡は増加していく。

中間西井坪遺跡⁽¹⁾（中間町）、上天神遺跡⁽¹⁷⁾（上天神町）、太田下須川遺跡⁽²⁶⁾（太田下町）、居石遺跡⁽¹⁰⁾（伏石町）、浴・長池遺跡（林町）、浴・松ノ木遺跡⁽¹⁶⁾（林町）、前田東中村遺跡⁽⁸⁾（前田東町）、空港跡地遺跡⁽³⁰⁾（林町）、中山田遺跡⁽²⁰⁾（池田町）、葛谷遺跡⁽³¹⁾（西植田町）などである。

さらに、横穴式石室の飛躍的な増加も確認できる。巨石墳もしくは、それに準ずる大型の横穴式石室には、彈正原古墳⁽⁶³⁾（中山町／滅失）、古宮古墳⁽⁶⁴⁾、大塚古墳⁽⁶⁵⁾（鬼無町山口）、御厩大塚古墳⁽⁶⁶⁾（御厩町）、矢野面古墳⁽⁶⁷⁾（三谷町）、潮満塚古墳⁽⁶⁸⁾（前田東町）、久本古墳⁽⁶⁹⁾、山下古墳⁽⁷⁰⁾、小山古墳⁽⁷¹⁾（新田町／小山古墳は滅失）等が、各地に散在する。これらは、単独で立地するもの、グループとして立地するもの、他の小型の横穴式石室墳とグループをなして立地するものの等様々である。

また、平木古墳群⁽⁷²⁾（鬼無町山口）、平石上2号墳⁽⁷³⁾、三谷石舟池古墳群⁽⁷⁴⁾（三谷町）、石清尾山古墳群⁽⁷⁵⁾（峰山町ほか）、南山浦古墳群⁽⁷⁶⁾（西春日町）、淨願寺山古墳群⁽⁷⁷⁾（西春日町・飯田町）、植田八幡神社古墳群⁽⁷⁸⁾（東植田町）、平尾古墳群⁽⁷⁹⁾（前田東町）、長尾古墳群⁽⁸⁰⁾・漆谷古墳群⁽⁸¹⁾（高松町）等が、極めて多く存在する中・小型古墳の中で、比較的内容が判明している古墳

群もしくは古墳である⁽⁸²⁾。横穴式石室墳が、地域の有力者の墳墓であるならば、これには有力者の居住した集落との間に関係が存在するはずである。一方、横穴式石室墳は、群集する傾向がある。ある一定の集落の有力者が共同で墓域を設定したのが、古墳群であると推定できよう。では、ある一定地域とは、どのような広がりが設定できるのだろうか。

高松平野の中央部は、横穴式石室墳の空白地帯である。もともと築造されなかつたのであろうか。先に記載した古墳は、御厩大塚古墳を除いていずれも山麓地帯に立地する。しかし、集落遺跡が発見されることは、墳墓が存在するはずである。

すべての集落が、横穴式石室墳を築造できる経済と政治力をもった階層が存在したとは限らないが、今後、平野部において横穴式石室墳もしくは、それに類似した墓制が発見されるであろう。平野中央部では、石室構築用の石材を得ることは不可能に近いなど、石材の運搬等工事としては、非常に大がかりで難しい。しかし、郷のまとまりが次の時代に成立し、中には現在の地区に繋がる例もあることを考えれば、郷域の紐帶はきわめて強いと考えたほうが妥当である。従って、郷域の外部に墳墓を造営する可能性は少ないのでないか。郷に墳墓が対応するしたら、平野部に横穴式石室が存在したことが、帰納的に推測できるのである⁽⁸³⁾。

古墳時代後期に増加傾向のある遺跡は、奈良時代に至っては、確実に増加する。中間西井坪遺跡⁽¹⁾（中間町）、薬王寺正箱遺跡⁽⁸⁴⁾（壇紙町）、上天神遺跡⁽¹⁷⁾（上天神町）、太田下須川遺跡⁽²⁶⁾（太田下町）、居石遺跡⁽¹⁰⁾（伏石町）、浴・長池Ⅱ遺跡⁽¹²⁾（林町）、浴・長池遺跡（林町）、旧空港跡地遺跡⁽³⁰⁾（林町）、前田東中村遺跡⁽⁸⁾（前田東町）、天満宮西遺跡⁽²⁸⁾（松縄町）、松縄下所遺跡⁽²⁹⁾（松縄町）等が、現在までの発掘調査によって知られている。さらに、下司廃寺⁽⁸⁵⁾（東植田町）、拝師廃寺⁽⁸⁶⁾（林町）、前田廃寺⁽⁸⁷⁾（前田東町）、山下廃寺⁽⁸⁸⁾（新田町）、坂田廃寺⁽⁸⁹⁾（西春日町）、勝賀廃寺⁽⁹⁰⁾（香西西町）、等の寺院遺跡が存在し⁽⁹¹⁾⁽⁹²⁾、なかでも、坂田廃寺は片山池古窯址群⁽⁹³⁾（西春日町）の存在もあって注視すべきである。また、日本書紀に天智6年（667）の築城記事が見える屋島城跡⁽⁹⁴⁾、弘福寺領讚岐国山田郡田団比定地遺跡⁽¹⁵⁾（林町）も注目されよう。

これらで特徴的なのは、遺跡そのものが、個性的になってくることである。例えば、薬王寺正箱遺跡では官舎もしくはそれに準ずるような掘立柱建物が検出された。南海道にも近く注目される遺跡である。また、松縄下所遺跡では、平安時代の初期に廃絶した道路状遺構が検出された。

特に、松縄下所遺跡で、検出された道路状遺構は、現在の条里地割に方位が一致することから、条里に関係があるものと解釈できる。松縄下所遺跡だけの特別な事情ではなかろう。さらに道を形成する溝が用水路として水田農耕と密接に関係があるならば、生産の場としての水田が確実に増えていったことの傍証にもなろう。

平安時代になると、顕著な変化は認められないようである。中間西井坪遺跡⁽¹⁾（中間町）、薬

王寺正箱遺跡⁽⁸⁴⁾（壇紙町）、太田下須川遺跡⁽²⁶⁾（太田下町）、蛙股遺跡⁽⁵⁾、居石遺跡⁽¹⁰⁾、井手東I遺跡⁽⁴⁾（伏石町）、浴・松ノ木遺跡⁽¹⁶⁾、林坊城遺跡⁽¹¹⁾、弘福寺領讃岐国山田郡田団比定地域⁽¹⁵⁾（林町）、前田東中村遺跡⁽⁸⁾（前田東町）等があげられ、大部分は前時代の継続のようである。

次に、中世前半になると中間西井坪遺跡⁽¹⁾（中間町）、薬王寺正箱遺跡⁽⁸⁴⁾（壇紙町）、上天神遺跡⁽¹⁷⁾（上天神町）、太田下須川遺跡⁽²⁶⁾（太田下町）、蛙股遺跡⁽⁵⁾、居石遺跡⁽¹⁰⁾、井手東I遺跡⁽⁴⁾（伏石町）、浴・長池遺跡、浴・松ノ木遺跡⁽¹⁶⁾（林町）、六条上所遺跡⁽²⁷⁾（六条町）、東山崎水田遺跡⁽⁹⁵⁾（東山崎町）、前田東中村遺跡⁽⁸⁾（前田東町）、松縄下所遺跡⁽²⁹⁾（松縄町）、凹原遺跡⁽¹⁸⁾（多肥下町）、旧空港跡地遺跡⁽³⁰⁾（林町）等があげられる。

ところが、中世後半になると第3の画期がみとめられる。すなわち、水田遺構の検出された弘福寺領讃岐国山田郡田団比定地遺跡⁽¹⁵⁾（林町）は別として、わずかに東山崎水田遺跡⁽⁸⁴⁾（東山崎町）の存在が知られるのみである。

弥生時代中期後半、古墳時代から中期に統いて中期後半も、現在までの発掘データでは、時間的な空白を認めることができる⁽⁹⁵⁾。

これらの理由を、ここで明らかにすることは不可能である。今後のいくつもの発掘調査例をまとめることによって、この傾向が正しいのか否かを検証する必要があろう。

ただ、一点だけ指摘しておきたい。弥生時代中期後半は高地性集落の登場する時代で、魏志倭人伝に記載のある倭国大乱にあてて考える説もあるように動乱の時代とされている。また、中世後半は、南北朝時代から戦国時代にいたる、これまた歴史上類を見ない動乱の時代である。とすれば、古墳時代前期から中期にかけても、高松平野では何らかの政治的な変動が起こっていたと考えられないだろうか。宋書倭国伝には記載されている倭国武の奏上文には、「昔より祖彌躬ら甲冑を環き、山川を跋渉して寧処に遑あらず・・・」とある。古墳時代前期は、日本が統一されるという大きな歴史的変動があったのではないかろうか。幾多の戦乱が、高松平野の遺跡の消長の一要素となっているとするのは、余りに飛躍であろうか。

今回、高松平野で蓄積されつつある発掘調査のデータを大雑把に、グローバルな視点で見ることを試みてみた。分析法に対する不統一さ、未経験等に問題があり、さらには、非合理的かつ自ままな解釈を行ってきたと思う。発掘された遺跡は、数多い遺跡の中の一つに過ぎず、全体を代表するものではない。遺跡一つ一つの分析も大切であるが、グローバルな視点で見る必要があることを、今後のいましめとしておきたい。

参考文献

- (1) 1989～1991 香川県教育委員会 発掘調査実施
「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成元年度」香川県教育委員会ほか 1990
「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成2年度」香川県教育委員会ほか 1991
「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成3年度」香川県教育委員会ほか 1992
- (2) 藤井雄三 「香川考古」創刊号, 香川考古刊行会 1983
- (3) 多量のチップ, フレークとともにナイフ形石器1点が、採集されている。
- (4) 1991 高松市教育委員会 発掘調査実施
山元敏裕 「讃岐国弘福寺領の報告 第三節」 高松市教育委員会 1992.3
- (5) 1992. 高松市教育委員会 発掘調査実施
- (6) 丹羽佑一 「香川県史1原始・古代 第三節」 香川県 1989
丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983
- (7) 丹羽佑一 「香川県史1原始・古代 第三節」 香川県 1989
- (8) 「香川県埋蔵文化財調査年報昭和63年度」 香川県教育委員会 1989
「香川県埋蔵文化財調査年報平成元年度」 香川県教育委員会 1990
「香川県埋蔵文化財調査年報平成2年度」 香川県教育委員会 1991
「いにしえの讃岐第3号」 (財)香川県埋蔵文化財調査センター 1992
- (9) 丹羽佑一 「香川県史1原始・古代 第三節」 香川県 1989
- (10) 1991 高松市教育委員会 発掘調査実施
山元敏裕 「讃岐国弘福寺領の調査 第三節」 高松市教育委員会
- (11) 1988 香川県教育委員会 発掘調査実施
「香川県埋蔵文化財調査年報昭和63年度」 香川県教育委員会 1989
- (12) 1990～1991 高松市教育委員会 発掘調査実施
山元敏裕 「讃岐国弘福寺領の調査 第三節」 高松市教育委員会 1992
- (13) 1991 高松市教育委員会 発掘調査実施
中西克也 「讃岐国弘福寺領の調査 第三節」 高松市教育委員会 1992
- (14) 弥生時代前期の遺跡として、後述する天満・宮西遺跡(福渕福太郎・六車恵一 「高松市天満弥生式遺跡 文化財協会報 特別号8」 香川県文化財保護協会 1967)、光専寺山遺跡(1982 高松市教育委員会 試掘調査実施、「新編 香川叢書 考古編」 香川県

教育委員会 1983)、大池遺跡（池底より木葉文の土器片採集）が、他に知られている。

- (15) 弘福寺領讃岐国山田郡田団調査委員会 「讃岐国弘福寺領の調査」高松市教育委員会
1992
高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査委員会 「高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査
概報」高松市教育委員会 1987
弘福寺領讃岐国山田郡田団調査委員会 「弘福寺領讃岐国山田郡田団比定地区発掘調査
概報Ⅰ」高松市教育委員会 1988
弘福寺領讃岐国山田郡田団調査委員会 「弘福寺領讃岐国山田郡田団比定地区発掘調査
概報Ⅱ」高松市教育委員会 1989
弘福寺領讃岐国山田郡田団調査委員会 「弘福寺領讃岐国山田郡田団比定地区発掘調査
概報Ⅲ」高松市教育委員会 1990
弘福寺領讃岐国山田郡田団調査委員会 「弘福寺領讃岐国山田郡田団比定地区発掘調査
概報Ⅳ」高松市教育委員会 1993
- (16) 1990 高松市教育委員会 発掘調査実施
山本英之 「讃岐国弘福寺領の調査 第三節」 高松市教育委員会 1992
- (17) 1987～1988、1992 香川県教育委員会 発掘調査実施
「香川県埋蔵文化財調査年表昭和59年度～昭和62年度」 香川県教育委員会 1988
「香川県埋蔵文化財調査年表昭和63年度」 香川県教育委員会 1989
- (18) 1990～1991 高松市教育委員会 発掘調査実施
川畑聰 「讃岐国弘福寺領の調査 第3節」 高松市教育委員会 1992
- (19) 「久米池南遺跡発掘調査報告書」 高松市教育委員会 1989
- (20) 1977～1978 香川県教育委員会 発掘調査実施
「新編 香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 1983
- (21) 1990 高松市教育委員会 発掘調査実施
川畑聰 「讃岐国弘福寺領の調査 第3節」 高松市教育委員会 1992
- (22) 「香川県史跡名勝天然記念物報告 第編」 香川県 19
- (23) 「石清尾山塊古墳群調査報告」 高松市教育委員会 1973
- (24) 「檀紙村誌」 檀紙村誌編集委員会 1987
- (25) 1992 高松市教育委員会 試掘調査実施
- (26) 1988～1990 香川県教育委員会 発掘調査実施
「香川県埋蔵文化財調査年表昭和63年度」 香川県教育委員会 1988
「香川県埋蔵文化財調査年表平成元年度」 香川県教育委員会 1989

- 「香川県埋蔵文化財調査年報昭和2年度」 香川県教育委員会 1990
- (27) 1988～1989 香川県教育委員会 発掘調査実施
「香川県埋蔵文化財調査年報昭和63年度」 香川県教育委員会 1988
- (28) 1989～1990 高松市教育委員会 発掘調査実施
川畠聰 「讃岐国弘福寺領の調査 第3節」 高松市教育委員会 1992
- (29) 1991～1992 高松市教育委員会 発掘調査実施
山本英之 「讃岐国弘福寺領の調査 第3節」 高松市教育委員会 1992
- (30) 19～現在 香川県教育委員会 発掘調査実施 現在継続中
廣瀬常雄ほか 「空港跡地発掘調査概報」 香川県教育委員会 1992
- (31) 「資料紹介葛谷遺跡出土の弥生土器 香川県埋蔵文化財調査年報昭和58年度」 香川県教育委員会 1984
- (32) 竹林徳 「高松市高松町すべり山出土弥生式遺物報告書」 1955
- (33) 大雨により、流失した土砂の中に大量の土器片が含まれていた。
小竹一郎 「古高松郷土誌」 古高松郷土誌編集委員会 1977
大久保徹也 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について 濑戸大橋建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ下川津遺跡」 香川県教育委員会 1990
- (34) 池底より、大量の土器片が採集された。
大久保徹也 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について 濑戸大橋建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ下川津遺跡」 香川県教育委員会 1990
- (35) 大雨により、流失した土砂の中に大量の土器片が含まれていた。
大久保徹也 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について 濑戸大橋建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ下川津遺跡」 香川県教育委員会 1990
- (36) 中世城館佐料城跡周辺から土器・土器片が採集されている。
大久保徹也 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について 濑戸大橋建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ下川津遺跡」 香川県教育委員会 1990
- (37) 六車恵一 「讃岐弥生式土器 成図録 文化財協会報特別号第1集」 香川県文化財保護協会 1956
- (38) これらの遺跡の他に弥生時代の遺跡として、下ノ山遺跡（広形銅鉢2本が出土、時代は不祥／松本敏三・岩橋孝 「讃岐青銅器図録」 濑戸内海歴史民俗資料館 1983）、田村神社御旅所遺跡（壺棺2点が出土、後期／「一宮村史」 一宮村史編集委員会 1965）、三谷三郎遺跡（「埋蔵文化財研究会第16回研究集会発表要旨 関連資料集1」 1984）によれば、弥生時代中期末から後期前半の遺物包含層より、土器片・石器とともに板状鉄斧が採

集されている。) 等があげられる。

- (39) 他に、川添浄水場遺跡（浄水場建設時に、庄内期に属する土器が出土）が知られる。
- (40) 梅原末治「讃岐高松石清尾山石塚の研究」 京都帝国大学文学部考古学研究報告第12冊
1933
「石清尾山塊古墳群調査報告」 高松市教育委員会 1973
渡部明夫・藤井雄三 「鶴尾神社4号墳調査報告書」 高松市教育委員会 1983
- (41) 1969 香川県教育委員会・高松市教育委員会 発掘調査実施
「高松市茶臼山古墳調査概報」 茶臼山古墳発掘調査団
「新編 香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 1983
「香川の前期古墳」 日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会 1983
- (42) 寒川知治 「横立山経塚古墳 香川県埋蔵文化財調査報告 昭和54年度」 香川県教育委員会 1984
- (43)
丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983
- (44) 高松市茶臼山古墳に先行して、北山古墳（岩田隆・西谷れい子 「高松市北山古墳発掘調査概報 文化財協会報特別号十一」 香川県文化財保護協会 1969）が、築造された。
- (45) 渡部明夫・藤井雄三 「鶴尾神社4号墳調査報告書」 高松市教育委員会 1983
- (46) 1989 高松市教育委員会 発掘調査実施
「香川県埋蔵文化財調査年報平成2年度」 香川県教育委員会 1991
- (47) この他、弥生時代終末から古墳時代初頭にかかる墳墓として、円養寺遺跡（松本豊胤「高松市円養寺遺跡調査概報」 円養寺遺跡発掘調査団 1971）が、知られている。
- (48) 廣瀬常雄 「香川町・船岡山古墳調査報告書」 香川県教育委員会 1983
- (49) 國木健司 「三谷石舟古墳測量調査報告書」 高松工芸高校郷土史研究会 1992.
- (50) 丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983
- (51) 「新編 香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 1983
- (52) 丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983
- (53) 1985 高松市教育委員会 発掘調査実施
丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983
- (54) 「新編 香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 1983
- (55) 森井正 「高松市女木島丸山古墳・香川県文化財調査報告 第8」 香川県教育委員会 1966
- (56) 丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983

- (57) 香川県史蹟名勝天然紀念物調査会 「今岡古墳 史蹟名勝天然紀念物調査報告第1編第5」 香川県 1922
讃岐古墳文化研究会・森下浩行 「高松市鬼無町今岡古墳とその組合式陶棺・香川考古創刊号」 香川考古刊行会 1983
- (58) 今岡古墳に先行して、かしが谷2号墳(藤井雄三 「かしが谷2号墳・3号墳発掘調査報告書」 高松市教育委員会 1986)が、築造された。
- (59) 高松市教育委員会・文化振興課 「相作牛塚 文化高松第6号」 高松市文化協会 1984
- (60) 「石清尾山塊古墳群調査報告」 高松市教育委員会 1973
- (61) 丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983
- (62) 上原準一 「特殊なる形式の甕棺を発見したる讃岐国円座村山崎の古墳に就いて 考古学雑誌第11号・第6号」 1921
- (63) 松浦正一 「下笠居村史」 下笠居村史編纂委員会 1956
- (64) 1984 香川大学 調査実施
丹羽佑一 「古宮權現神社古墳発掘調査速報 勝賀城跡保存会だより」 勝賀城保存会 1985
- (65) 1987 香川大学 調査実施
- (66) 「新編 香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 1983
- (67) 丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983
- (68) 丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983
- (69) 1975 香川県教育委員会・高松市教育委員会 発掘調査実施
松本敏三 「久本古墳・横穴式石室の一例 教育香川」 香川県教育委員会 1977
「新編 香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 1983
- (70) 大山真充 「高松市・山下古墳調査報告」 香川県教育委員会 1980
- (71) 小竹一郎 「古高松郷土誌」 古高松郷土誌編集委員会 1977
- (72) 1983 香川大学 調査実施 ただし、平木1号墳については、1989 高松市教育委員会が試掘調査を実施している。
香川大学教育学部歴史学研究会 「鬼無町平木古墳群 文化高松第6号」 高松市文化協会 1984
川畠聰 「平木1号墳試掘調査報告書」 高松市教育委員会 1990
- (73) 1986 高松市教育委員会 発掘調査実施
丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983

- (74) 1989～1992 高松市教育委員会 発掘調査実施
1989 時期不詳の箱式石棺検出
1990 前期もしくは中期と考えられる古墳の主体部検出
1991～1992 後期の横穴式石室を持つ群集墳を検出。確実なもの 9 基
- (75) 「石清尾山塊古墳群調査報告」 高松市教育委員会 1973
- (76) 藤井雄三ほか 「南山浦古墳群調査報告書」 高松市教育委員会 1985
- (77) 「石清尾山塊古墳群調査報告」 高松市教育委員会 1973
淨願寺山 8 号墳・10号墳については、1985 香川大学 調査実施
- (78) 「山田町史」 山田町史編集委員会 1968
- (79) 松本敏三・岩橋孝 「讃岐青銅器図録」 瀬戸内海歴史民俗資料館 1983 ほか
- (80) 小竹一郎 「古高松郷土誌」 古高松郷土誌編集委員会 1977
- (81) 1989 高松市教育委員会 発掘調査実施
- (82) これらの後期古墳の他に注目される存在が、香川県内で最も新しい積石塚古墳と考えられている横立山東麓 1 号墳（川畠聰 「横立山東麓 1 号墳 高松市文化財調査報告書」 高松市教育委員会 1991）である。
- (83) 本文中には触れていないが、須恵器窯として、三谷三郎池西岸窯跡（「香川県埋蔵文化財調査年報昭和58年度」 香川県教育委員会 1984／初期須恵器の窯跡）や、公淵池窯跡群（松本敏三・岩橋孝 「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ 瀬戸内海歴史民俗資料館紀要第 2 号」 瀬戸内海歴史民俗資料館 1985）等が、あげられる。
- (84) 1992 香川県教育委員会 発掘調査実施
「香川県埋蔵文化財調査年報平成 2 年度」 香川県教育委員会 1991
- (85) 「新編 香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 1983
- (86) 丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983
- (87) 丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983
- (88) 丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983
- (89) 丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983
- (90) 丹羽佑一・藤井雄三 「高松の古代文化」 高松市 1983
- (91) 古代寺院に関しては、
藤井直正 「讃岐国古代寺院跡の研究 古文化論叢（藤澤一夫先生古希記念論集）」 1983
溝渕茂樹 「仏教文化の繁栄 1 讃岐の歴史」 香川地方史研究会 講談社 1975
等を、参考にされたい。

- (92) これらの寺院の他に、多肥廃寺の存在もとかれている。(伊達伍・三木一夫 「多肥郷土史 後編」 多肥郷土史編集委員会 1981)
- (93) 香川県史蹟名勝天然紀念物調査会 「史蹟名勝天然紀念物調査報告第1編第5」 香川県 1922
- (94) 「屋島城跡」 高松市教育委員会 1981
- (95) 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 東山崎・水田遺跡」 香川県教育委員会ほか 1992
- (96) 横穴式石室の調査において、古代末から中世に属する遺物が出土することが多い。
なかでも、神高池北西古墳（鬼無町山口所在 1987 高松市教育委員会 発掘調査実施）は、古墳時代の属する遺物はほとんど無いが、中世に属する遺物は、コンテナにして10箱余りの異常とも思える大量の遺物を得た。その他、吉宮古墳、平木1号墳、南山浦9号墳、11号墳、平石上2号墳、久本古墳等からも、同時期の遺物を検出している。大型の横穴式石室を持つ古墳に、比較的事例が多いようである。

第 3 章

調査の結果

第1節 調査区の設定

調査箇所の設定に当たっては、本来であれば事前の試掘調査によって埋蔵文化財の有無、性格、密度等を勘案の上行うべきところである。しかし前述のとおり、調査着手の前提となる区画整理仮換地指定が7月となり、これを起点として正規の手順に沿っていると調査期間の確保が困難になることから、前年度（昭和63年度）までの周辺部での調査結果（国庫補助事業による太田第2土地区画整理事業地を対象とした試掘・分布調査）を判断材料として本調査に踏み切った。結果として大規模発掘調査、発掘工事発注に関わる設計事務、契約事務等これまで未知であった諸手続きにことのほか煩わされて肝心の調査の期間、精度等の点で著しい犠牲を強いられた形となった。ただし、仮換地指定後立ち入り可能な箇所については、調査着手直前の平成元年8月に、調査予定地も含めて事前の試掘調査を実施し、可能な限り円滑に調査が進行するよう努めた。

以上の経緯を経て平成元年度の調査地は林町 番地一帯とした。太田第2土地区画整理事業地の東を限る県道15号線（旧高松空港線）から西へ約200m入った地点から東西約200m、南北約40m、面積約7,500m²である。

調査杭は、道路幅員の南辺を基線として10mおきに打設した測量杭を利用して20mメッシュに設定し、西から順にNo.1～12、北から南へ向けてA～C列とした。調査杭に利用されなかつた中間の測量杭についても、必要に応じて調査杭±10mで採番し、グリッドは南東隅の杭No.を用いて“A4”的ように表した。

調査地内の区画については、調査地ほぼ中央を南北に通じる里道と、幅員のほぼセンターに近いB列を境として4区に分け、北西、北東、南西、南東の順で1～4区とし、この順に調査を進めていった。調査区を南北に分けたのは、平野部の地形が河川流路等によって南北に連続する傾向が強いために、前半段階での調査所見を参考にして後半の作業能率の向上がはかれる判断したことと、調査区外に排土置場が確保できなかったために、掘削土の仮置と埋め戻しの省力化を図ろうとしたことによる。

実際、調査着手前の推定では、調査区東半（2・4区）は長池から大池につながる旧河道の流路内、西半（1・3区）は微高地と考えられており、調査の結果も西半において弥生前期から中期にかけて埋没した旧河道（谷状地形）が潜在していたことを除けば事前の推定を大きく裏切るものはなかった。したがって後述の報告については、原則として西半（1・3区）、東半（2・4区）をそれぞれまとめて扱うこととする。

第2節 遺跡の概要と層序

1 遺跡の概要

前述のとおり調査区は東西 200mにわたる狭長なもので、平野の扇端部から沖積平野に移行する部分を横断しているため、地形的には旧河道と微高地が交互に展開する様相を呈する。そして、ここ浴・長池遺跡では、2・4区が下池から長池、大池（木太新池）と続く香東川の旧河道を分断していた。

旧河道は幅 150mにもおよび、東半部は隣接する浴・松ノ木遺跡にまでおよんでいる。旧河道最深部には弥生時代中期中葉を中心とする濃密な遺物包含層がみられたほか、以後、河道が埋没するにつれて平安時代から中世を経て近現代に至るまでの水田層が重層して確認された。このうち、面的に畦畔の検出を試みた平安から中世にかけての3面は、いずれも旧河道の凹地の起伏に応じて畦畔を設けた不定形で小面積の水田区画を施したもので、数カ所の水口と畦越しによって水配りをしていたと考えられた。

一方、西側の1・3調査区は河岸の微高地部分にあたり、現地表面から約40cm下層の砂礫質の遺構面に弥生時代中期前半の集落跡（竪穴住居跡、掘立柱建物跡、周溝墓）が確認された。

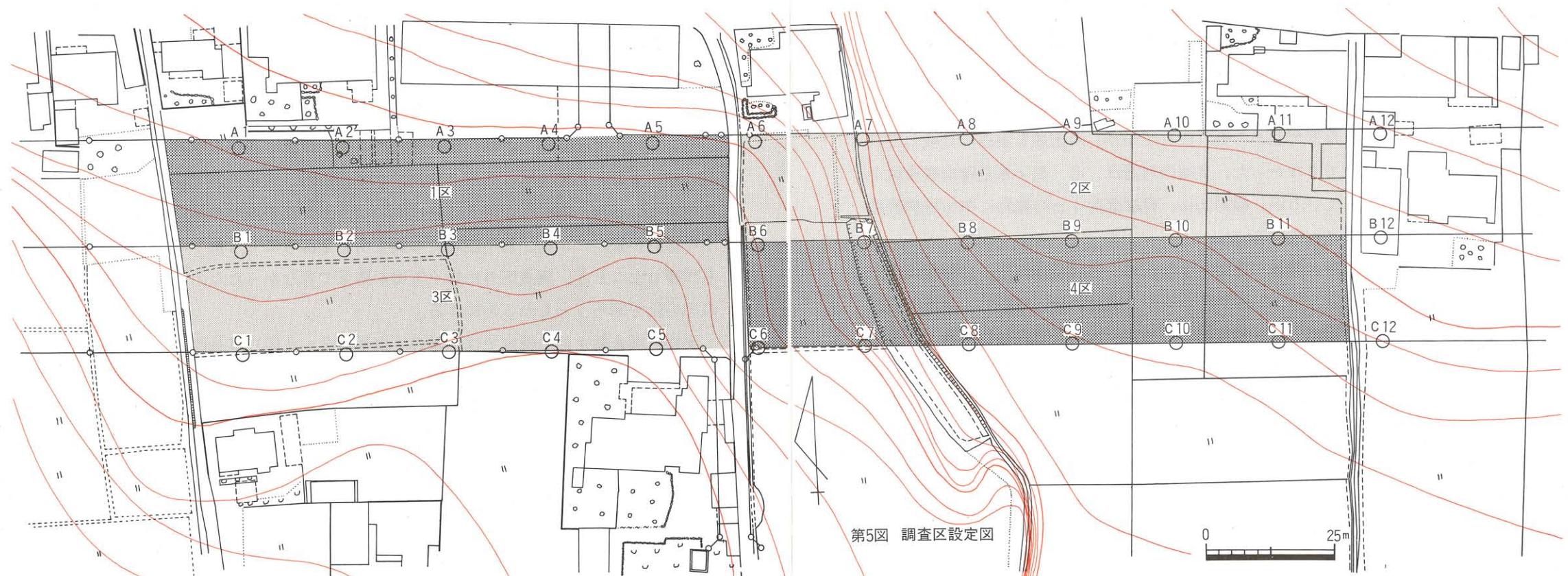
そして遺構面を構成する砂礫層の下層には1・3区を南西から北東に横切るかたちで幅約20mの河道状の凹地が存在し、底部付近には縄文晚期から弥生前期にかけての遺物包含層がみられた。凹地の埋土は黒色のシルトと細砂がラミナ状に互層に堆積しており、畦畔状の隆起も数カ所確認できたが、断面観察のみにとどまりプラントオパールも確認されなかった。

2 層 序

(1) 1・3区 (SR02)

調査区は、中央部を貫流する旧河道(SR02)とその両岸の微高地に大別できる。SR02は、調査区を南西から北東に向かってS字状に蛇行する。遺構検出面での川幅は約28~36m、最深部は現地表下約3mを測り、36層の堆積を確認した。すなわち、1a層現耕作土、1b層現耕作土床土、2a・2b層灰黄色シルト質極細砂、3a・3b層黄色シルト質極細砂、4a・4b層暗褐色砂礫、5b層灰黃褐色砂礫、6a層暗赤褐色細砂～砂礫、6b層灰色粘質シルト、7a～31a層黒色シルト、7b～31b層黒色～灰黑色細砂～シルト、32層黒色シルト、33層黒色シルト、34層黒灰色細砂、35層灰色粗砂礫、36層灰黃褐色砂質シルトである。

このうち、2・3層は近世頃の水田層、4a層暗褐色砂礫層は、層厚約10cmを測る6～7世紀の包含層である。5層灰黃褐色砂礫層は、最も厚い部分で層厚1mにも及ぶ洪水堆積層で、SR



02の形骸をかろうじてとどめる凹地を完全に平坦化している。上面は弥生時代前期末から中期後半期の遺構面となっている。7層以下は、黒色シルトの土壤層と洪水堆積層がラミナ状の互層となり、短期間に埋没していったものと考えられる。本書中ではSR—旧河道—として扱っているが、本来的には、いずれかの一時期に小河川として機能したことがあったにせよ、微高地上の谷状の地形が短期的な洪水によって埋没したものと考えたい。この傍証としては、堆積層中にかなり大規模な洪水によって一気に堆積したとみられる層位が何層かみられること、現地表面のレベルから復元した等高線図が、調査区内においては微妙な凹地状の地形を表しているが、南側の調査区外ではコンターラインが凹地状の湾入を示さず直線状に流れるようになる等の事実が指摘できる。

(2) 2・4区 (SR01)

2・4区の大部分は旧河道の氾濫原にあたる。当該旧河道は、現地形においては遺跡周辺部の分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池（消滅）といった溜池にその名残をとどめており、当時は現香東川の本流として高松平野の中央部を貫流していたものと思われる。

旧河道は、地図上では全幅 150m および、東接する浴・松ノ木遺跡にまで及んでいる。河床の平均的な深さは80cm前後で、河床域の東西両端部と中央部の3箇所に主流路が認められる。西端の流路は、今回の調査で弥生時代中期から後期にかけての大量の遺物の出土をみた河筋で、幅約13m、最深部は西際の河岸直下で現地表下約 2.5mである。中央部の河筋は、1区東端にあたり、一部調査区外に逃げるが、幅12m以上（推定約25m）、深さは 1.2mまでが確認できている。この河筋の西側に隣接して白色粘土層からなる中洲状の微高地が東西幅40m、南北長10mにわたって、ほぼ1区を遮るような形で北から張り出しており、河床域を東西に分岐している。微高地上には遺構遺物の確認はできなかった。東端の河筋は、浴・松ノ木遺跡に調査区が移るため、後日詳細に報告を予定しているが、幅約20m、最深部約 4 m の流路に弥生時代後期以降の遺物包含層、水田層等が検出されている。

浴・長池遺跡のSR01では26層の土層が確認できた。すなわち、1a層現耕作土、1b層現耕作土床土、2a層灰白色シルト質極細砂（5Y7/2）、2b層灰白色シルト質極細砂（5Y7/2）、3a層灰褐色シルト質極細砂（10YR6/1）、3b層灰褐色シルト質極細砂（10YR6/1）、4a層灰黄色シルト質極細砂（2.5Y7/1）、4b層灰黄褐色極細砂質シルト（10YR6/2）、5a層褐灰色極細砂質シルト（5YR5/1）、5b層褐灰色極細砂質シルト（2.5YR5/1）、6a層褐灰色極細砂質シルト（2.5YR5/1）、6b層褐灰色極細砂質シルト（2.5YR5/1）、7a層褐灰色極細砂質シルト（2.5YR5/1）、7b層褐灰色極細砂質シルト（7.5YR4/6）、8a層暗褐色極細砂質シルト（7.5YR3/4）、8b層暗褐色極細砂質シルト（7.5YR3/4）、9a層極暗褐色極細砂質シルト（7.5YR2/3）、9b層極暗褐色極細砂質シルト（7.5YR2/3）、10a層黒色極細砂質シルト（10YR1.7/1）、10a'層黒色シルト質中砂（10YR1.7/1）、10b層黒褐色シルト

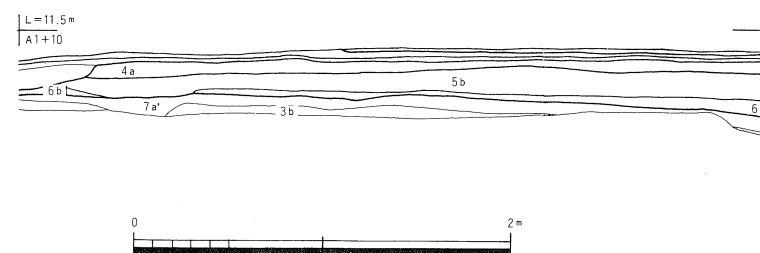
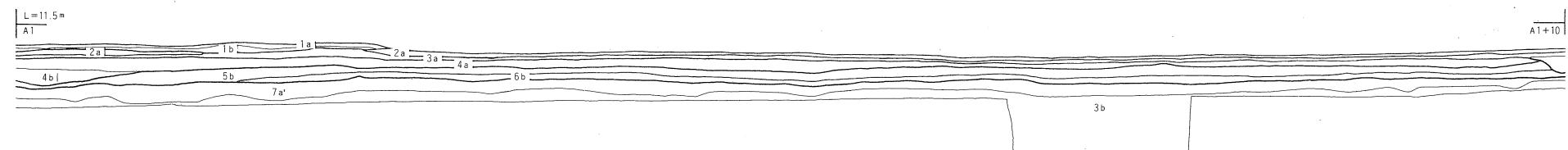
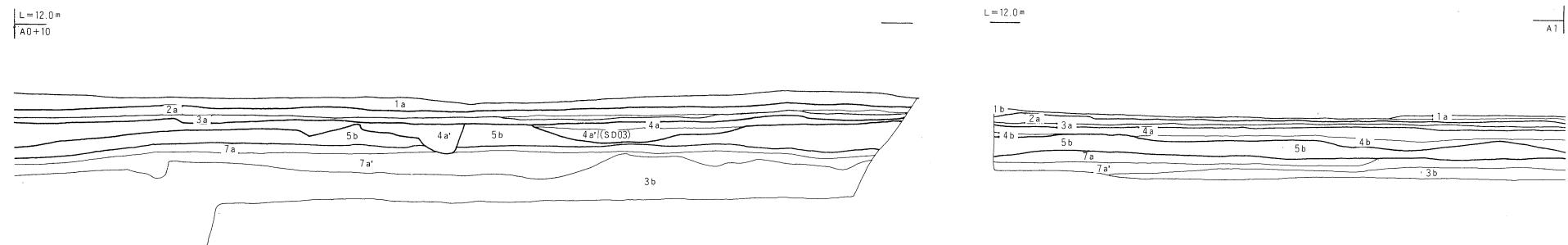
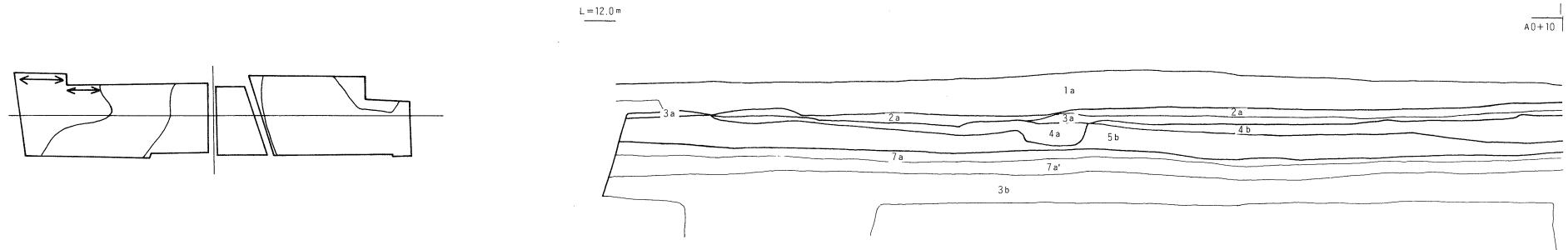
質極細砂（2.5Y3/1）、11a層黒褐色シルト質中砂（2.5Y3/1）、11b層黒褐色シルト質中砂（2.5Y3/1）、12層黒色極細砂質シルト（2.5GY2/1）、13層オリーブ黒色粗砂（7.5YR3/2）、14層灰色粘土（N6/1）である。

第1層は現耕作土である。常に耕作が及ぶa層と一時的な深耕によるb層に分かれる。第2～4層は近世の耕作土である。基本的には第1層と同様a,b2層に分かれるが、a層の深耕によりb層を失っているもの、上層の耕作が下位の土層下にまで達するものなど変化に富んでいる。5・6層は中世の水田層である。a層は水田耕土層で上面に畦畔の隆起が確認できる。b層は洪水堆積層で水田層の床土となっている。7・8層も水田層、7a層上面では上層からの削平等により畦畔は確認できなかった。8a層上面には畦畔の盛上りが見られる。奈良平安頃と見られる遺物が出土している。9層も7・8層と近似した層相であるが、旧河道の流路部分のみでの堆積で水田層とは認定できなかった。10層以下は旧河道晩年期の洪水堆積層で流路部分のせまい範囲にのみ堆積している。10層には泥炭化したa層がみられるが、他の層では砂礫質のb層しか見られない。11層は弥生前期末から後期初頭にわたる濃密な遺物包含層、13層は遺物の出土はないがクヌギ材の倒木が埋没していた。

(3) 2・4区（SR01西岸微高地上）

SR01西側の河岸上で、2・4区の西端20mの部分にあたる。東側はSR01に向かって急傾斜で落ち込み、現地形でも約50cmの高低差を確認できる。西側は微高地で、わずかずつ高くなっている。1・3区西端との高低差は約30cmを測る。現地表下70cmで微高地の基底部（最終遺構面）を形成する灰黄褐色粘土層に達する。この間に6層の土層が確認できた。現耕作土を除いて上層から1a層、2a層灰白色シルト質極細砂（2.5Y8/2）、3a層明黄褐色シルト質極細砂（2.5Y6/8）、4a層黒褐色シルト質細砂（2.5Y3/2）、4b層黃褐色細砂（2.5Y5/3）、5a層暗灰褐色シルト質細砂（2.5Y4/2）、6a層黒色粘土（2.5Y2/1）、6b・6c層灰黄～灰褐色粘土（2.5Y7/2～8/1）である。1～3層は近世以降の水田層、4a層は遺物の包含はないが、4b砂層上面で確認されている遺構の時期から弥生時代中後期頃の土壤層と考えられる。4b層は洪水砂層である。5a層はやや土壤化のすんだ地表層で、弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地の発掘調査では同様の層位に弥生時代後期前半頃の不定形小区画の水田が営まれていた。6a層は弥生前期の定形の水田面を形成する。

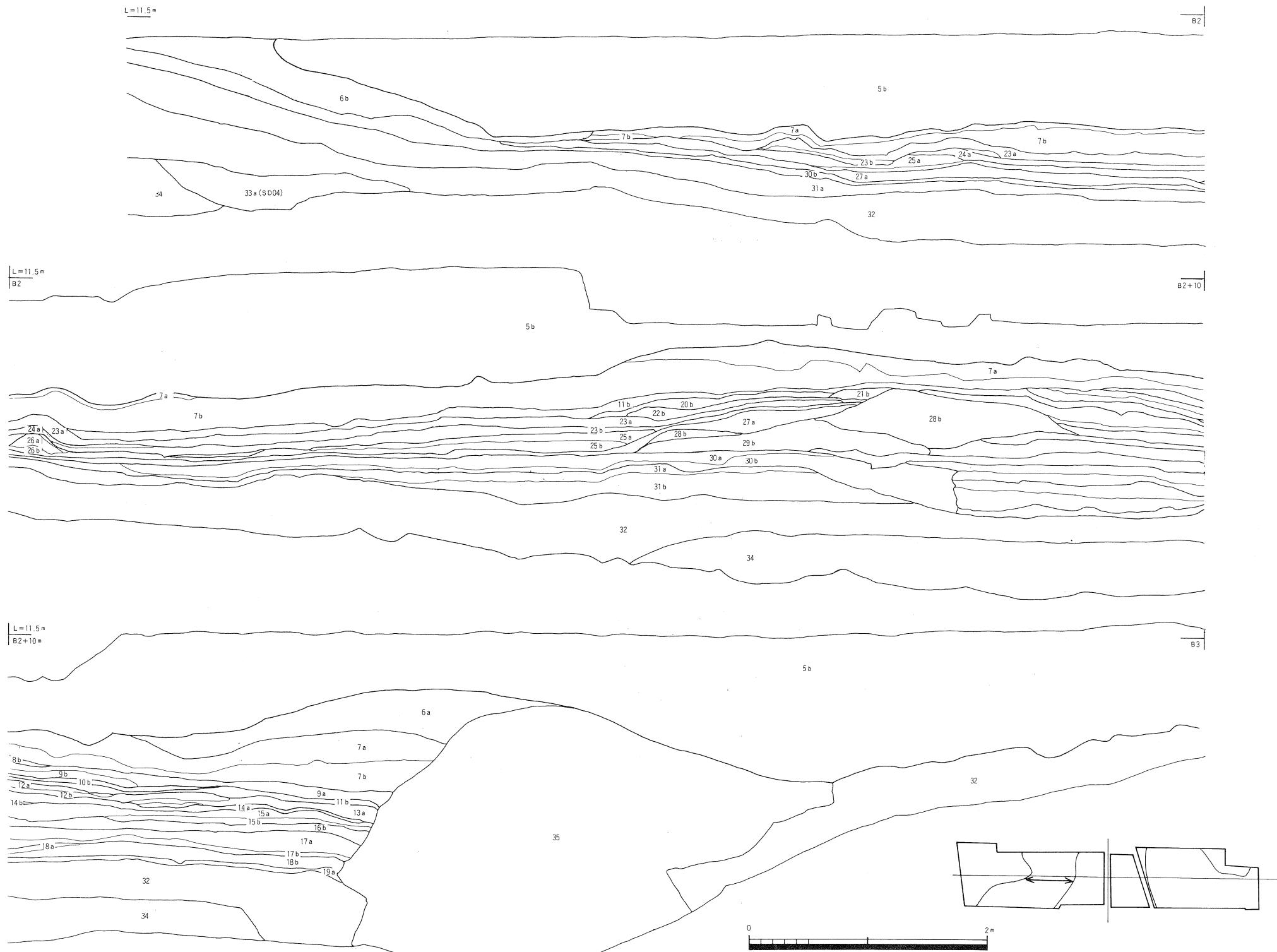
なお、土層の注記にあたっては、基本的には立命館大学 高橋 学氏のご指導によったが、一部に標準土色帳によらない、従来の土色注記で済ませた部分等もあって統一がとれていない。将来的には標準土色帳及びウェントワース粒径区分による土層注記で統一していくことが資料的な客観性を高める上でも適当と考えられ、現実、調査員も各個日々の調査業務の中でその方針に沿うべく研鑽中のところであり、暫時ご容赦戴きたい。



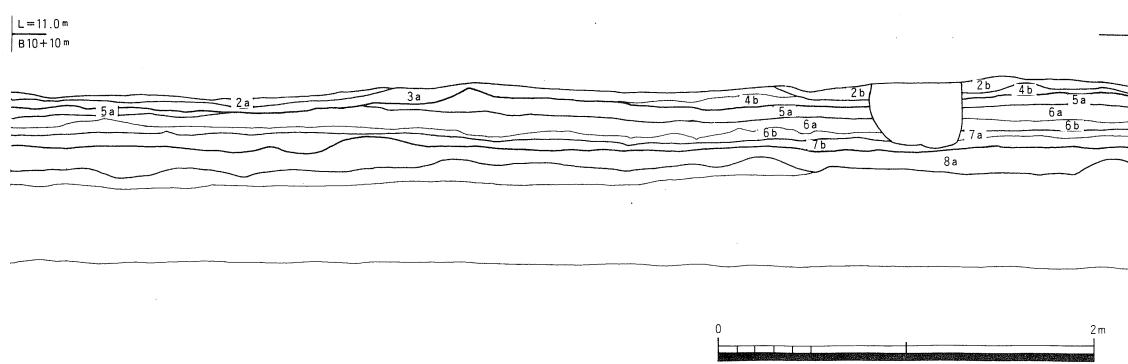
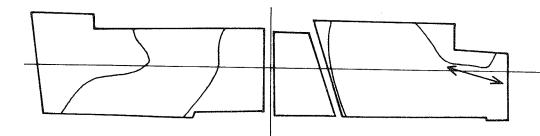
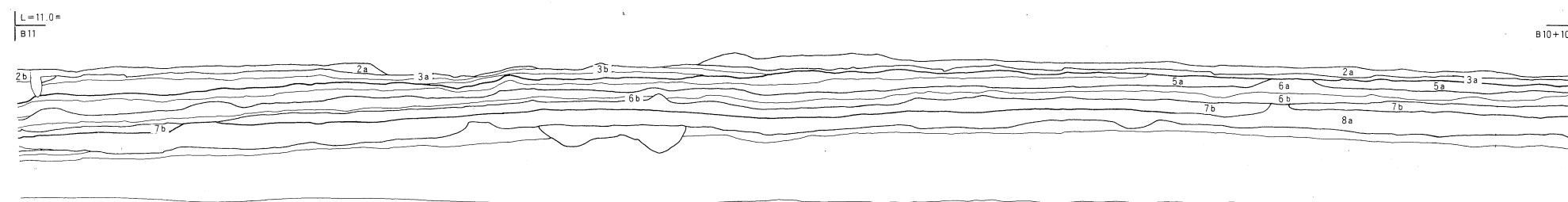
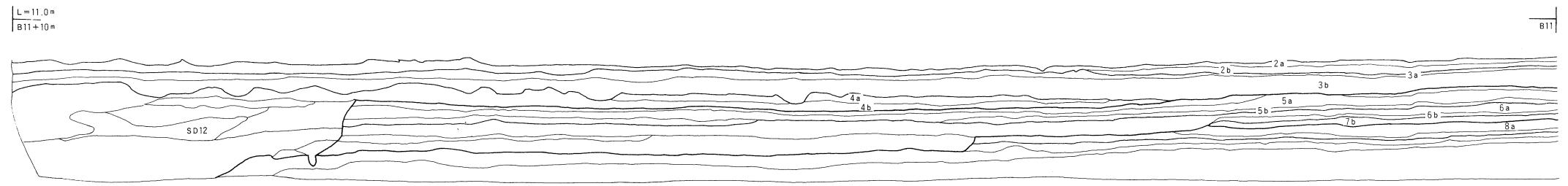
土層名(第6・7図)

- | | |
|------------------|---------------------|
| 1a 現耕作土 | 7a～31a' 7a' 黒色シルト |
| 1b 現耕作土床土 | 7b～31b 黒色～灰黒色細砂～シルト |
| 2a・2b 灰黄色シルト質極細砂 | 32 黒色シルト |
| 3a・3b 黄色シルト質極細砂 | 33 黒色シルト |
| 4a・4b・4a' 暗褐色砂礫 | 34 黒灰色細砂 |
| 5b 灰黄褐色砂 | 35 灰色粗砂礫 |
| 6a 暗赤褐色細砂～砂礫 | 36 灰黄褐色砂質シルト |
| 6b 灰色粘質シルト | |

第6図1・3区基本土層図(その1)



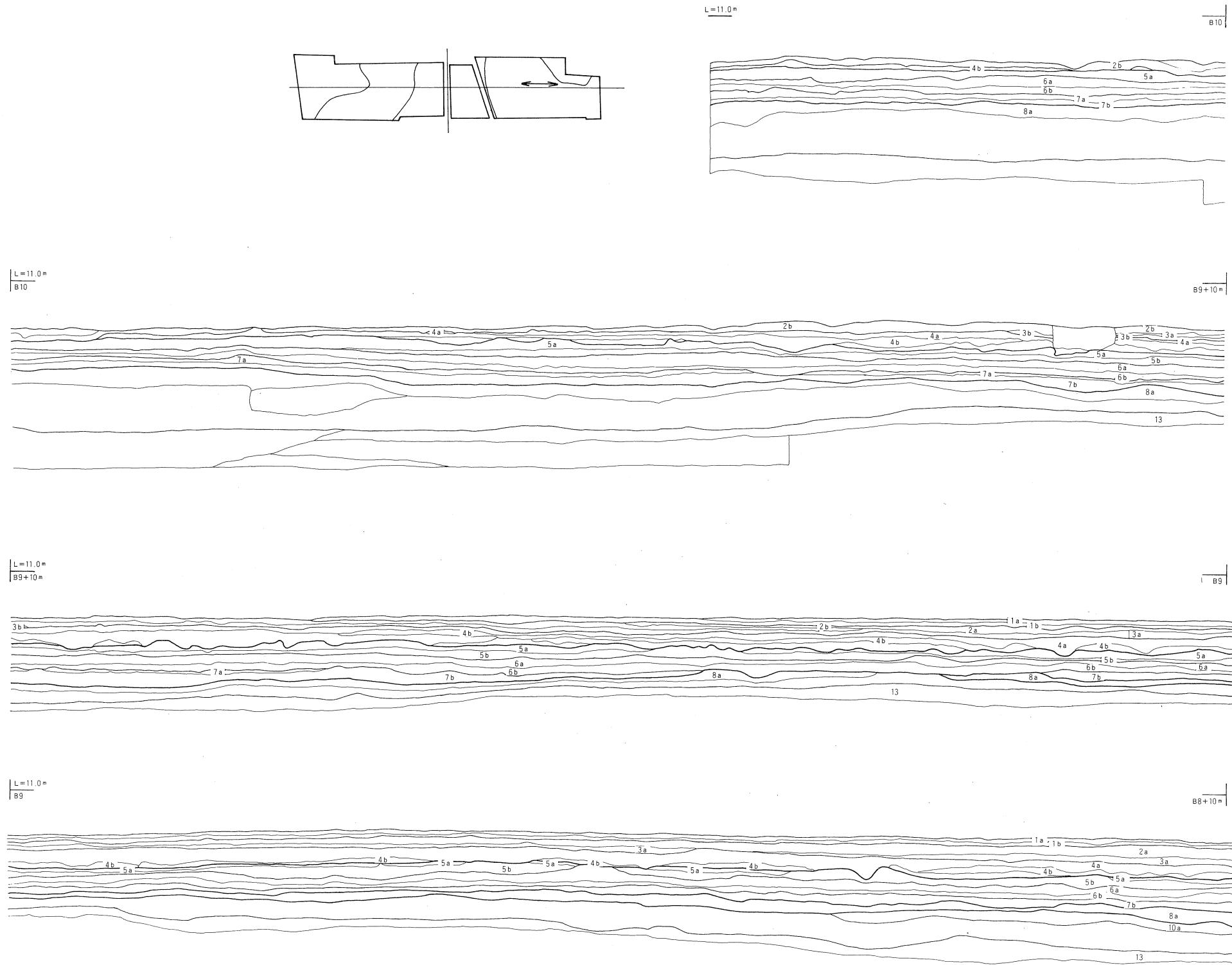
第7図 1・3区基本土層図(その2)



土層名(第8~10図)

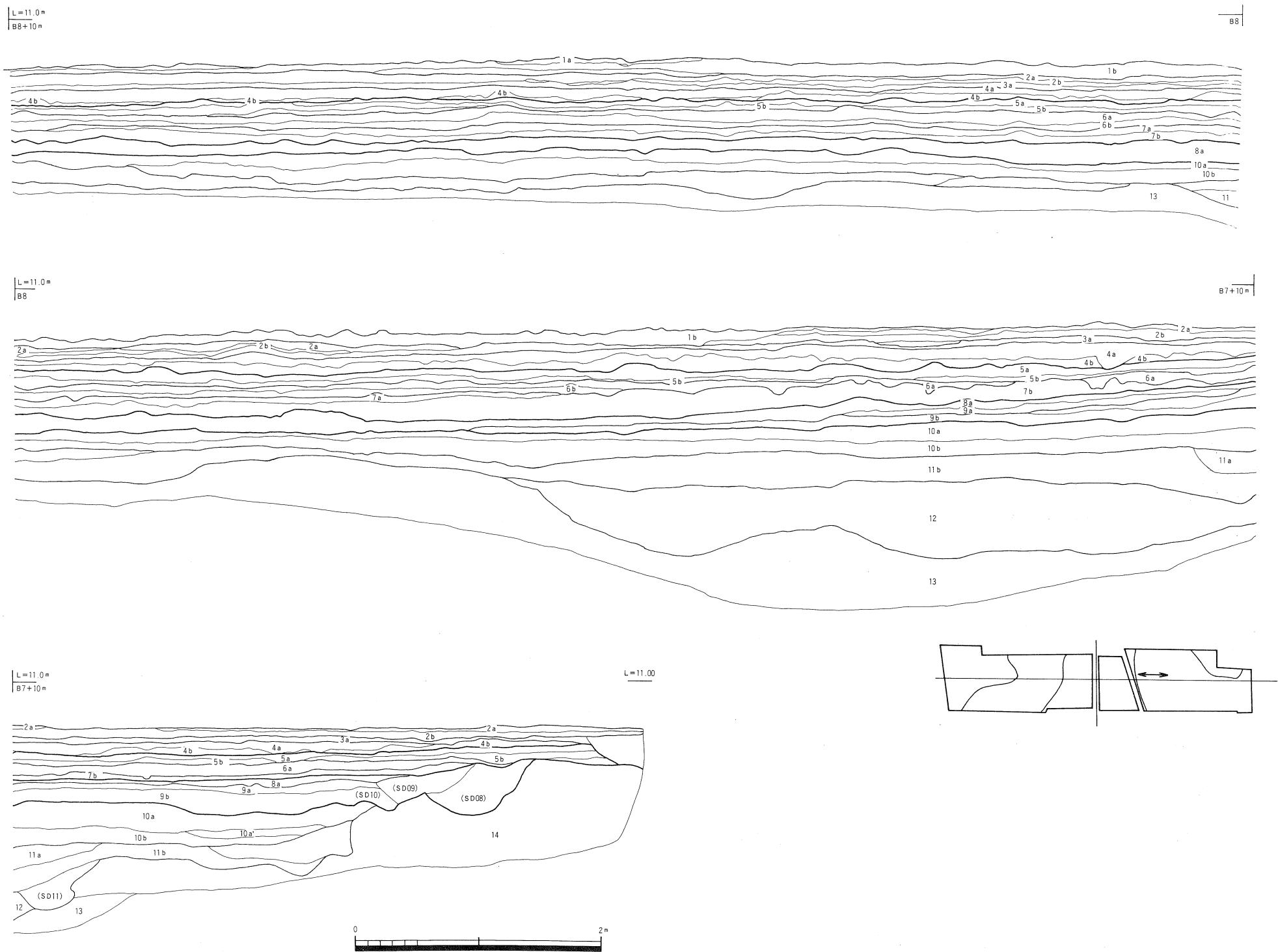
- | | |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 1 a 現耕作土 | 8 a・8 b 暗褐色極細砂質シルト (7.5YR3/4) |
| 1 b 現耕作土床土 | 9 a・9 b 極暗褐色極細砂質シルト (7.5YR2/3) |
| 2 a・2 b 灰白色シルト質極細砂 (5Y7/2) | 10 a 黒色極細砂質シルト (10YR1.7/1) |
| 3 a・3 b 灰褐色シルト質極細砂 (10YR6/1) | 10 a' 黒色シルト質中砂 (10YR1.7/1) |
| 4 a 灰黃色シルト質極細砂 (2.5Y7/1) | 10 b 黑褐色シルト質極細砂 (2.5Y3/1) |
| 4 b 灰黃褐色極細砂質シルト (10YR6/2) | 11 a・11 b 黑褐色シルト質中砂 (2.5Y3/1) |
| 5 a 褐灰色極細砂質シルト (5YR5/1) | 12 黒色極細砂質シルト (2.5GY2/1) |
| 5 b～7 a 褐灰色極細砂質シルト (2.5YR5/1) | 13 オリーブ黑色粗砂 (7.5YR3/2) |
| 7 b 褐色極細砂質シルト (7.5YR4/6) | 14 灰色粘土 (2.5GY2/1) |

第8図 2・4区基本土層図(その1)

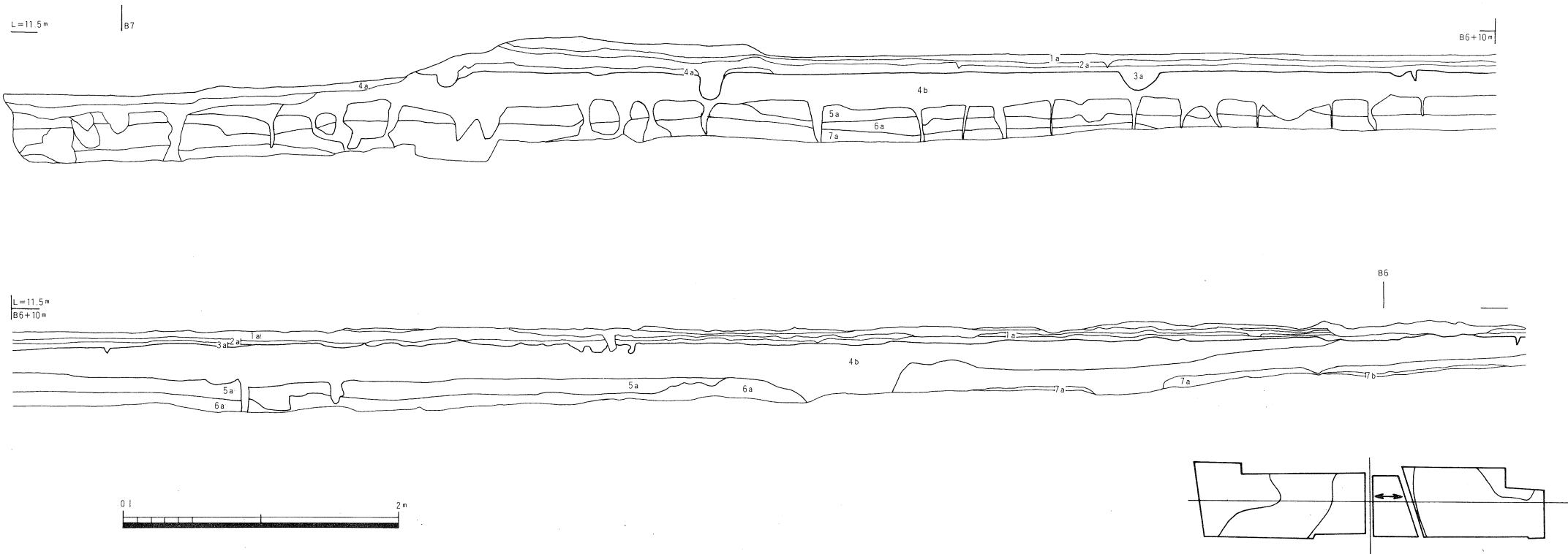


第9図2・4区基本土層図(その2)





第10図2・4区基本土層図(その3)



土層名(第11図)

- 1a 灰白色シルト質極細砂(2.5Y8/2)
- 2a 灰白色シルト質極細砂(2.5Y8/2)
- 3a 明黃褐色シルト質極細砂(2.5Y6/8)
- 4a 黒褐色シルト質細砂(2.5Y3/2)
- 4a 黄褐色細砂(2.5YR5/3)
- 5a 暗灰褐色シルト質細砂(2.5Y4/2)
- 6a 黑色粘土(2.5Y2/1)
- 6b・6c 灰黃色～灰白色粘土(2.5Y7/2～8/1)

第11図2・4区基本土層図(その4)

第3節 弥生時代前期以前の遺構と遺物

1 1・3区

(1) S R O 2 7a～35層

SR02の7a層以下の部分に相当する。黒色シルトの土壤層と灰黒色～黒色の細砂またはシルト質の非土壤層が細かい布状堆積をなしている。土壤層の随所に畦畔状の高まりが確認でき、土層の年代が縄文晚期から弥生時代前期末頃に想定されたため、細かく土層分層を行うとともにプラントオパールの有無についても確認をしたが、今のところ水田耕作の痕跡は認められていない。

SR02の西側の河底部付近の斜面には、河道に沿って溝状遺構SD04が掘削されている。幅2m深さ20cmを測り、人口的な用水施設と考えられるが、遺物の出土はない。この時期のSR02の遺物は、河道底部付近で縄文晚期から弥生前期初頭の土器、石器、木器が確認されている。

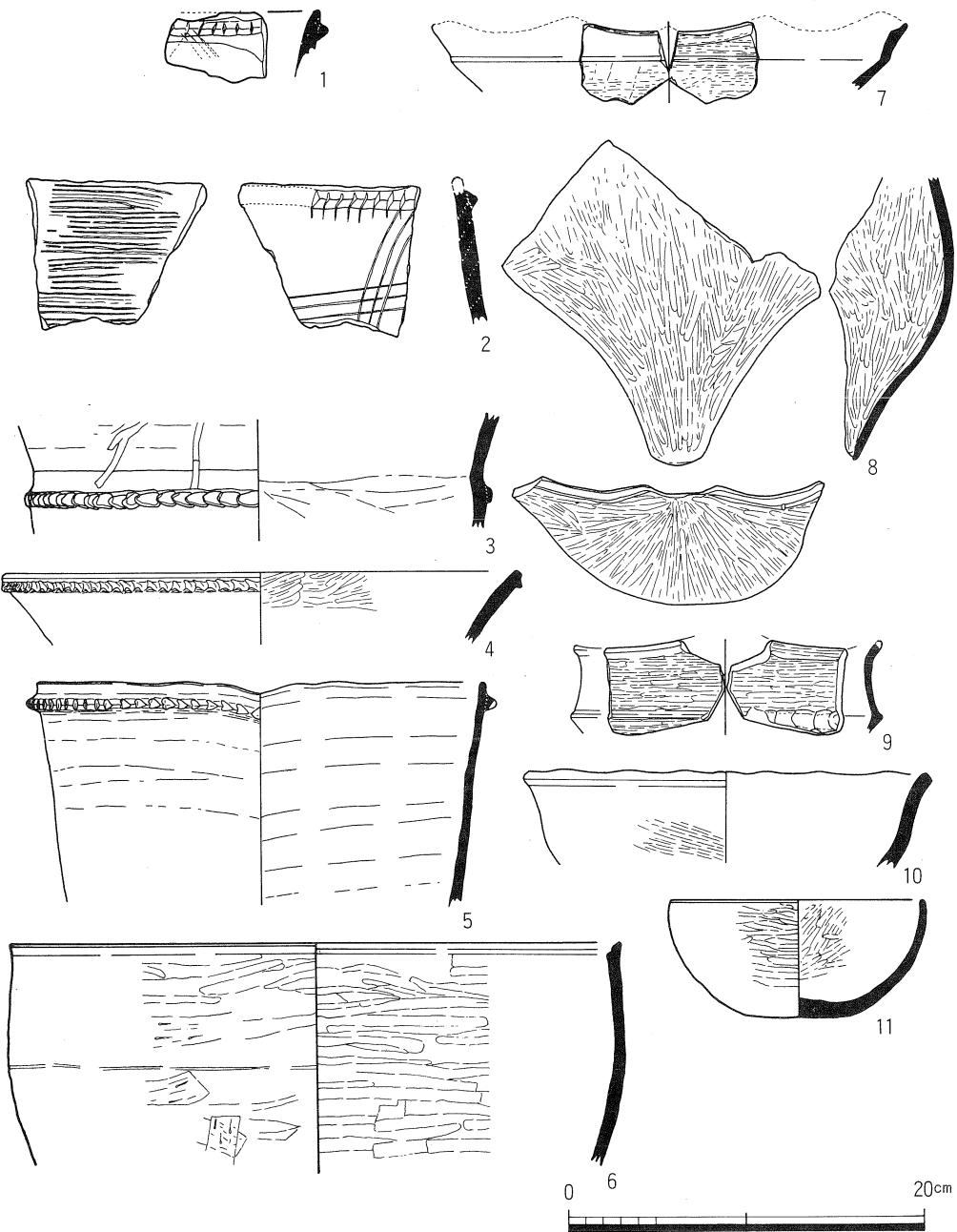
縄文時代晩期の出土遺物（第33図1～12）

深鉢 1～6

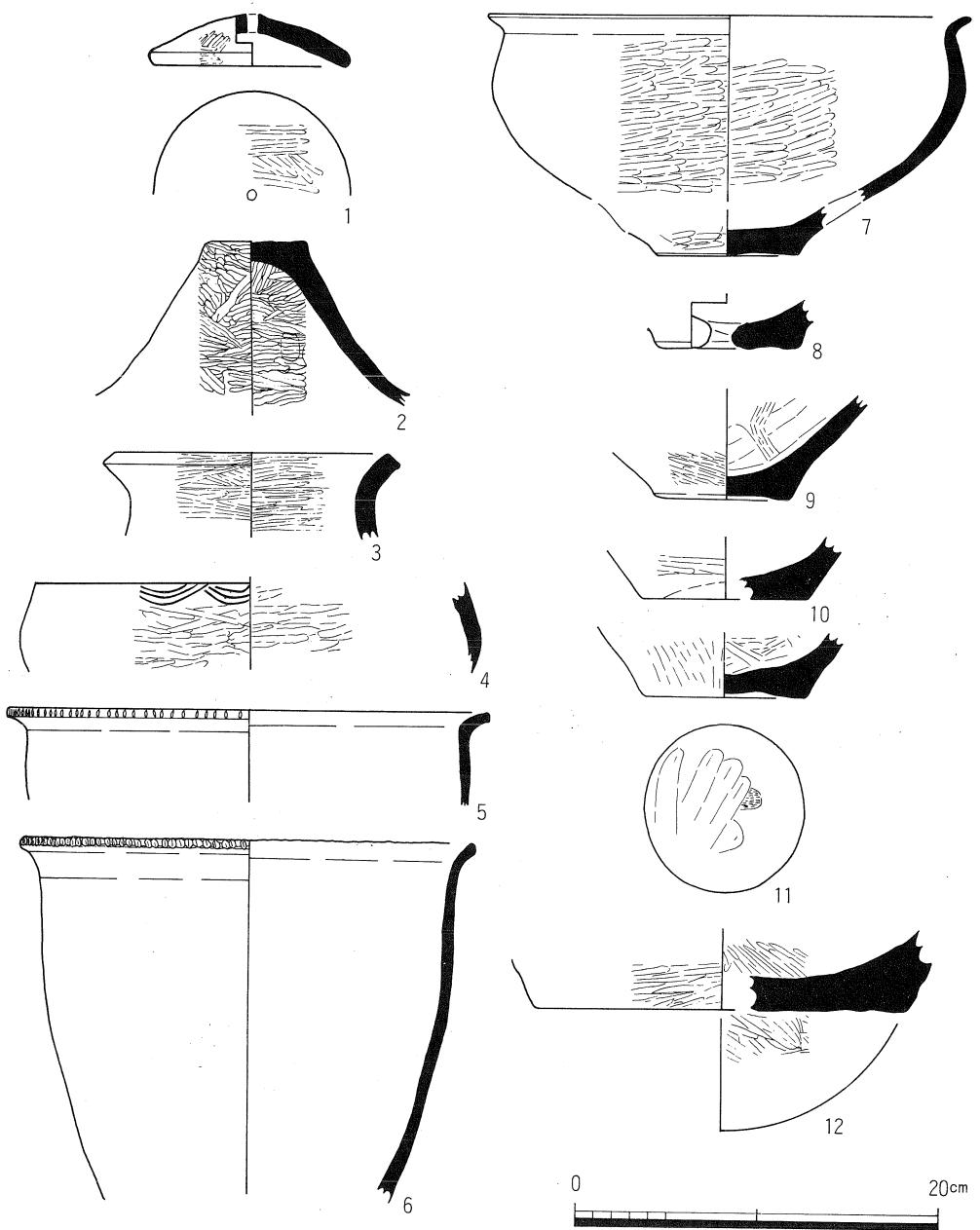
1は、刻目突帯文を施し、頸部に沈線を施す。調整は、内面に貝殻条痕を施す。2は、口唇部が欠損して不明であるが、口縁部に刻目突帯を施し、頸部に沈線を施す。調整は、内面に貝殻条痕を施す。3は、頸部から胴部にかけての破片である。胴部屈曲部に刻目突帯文を施し、その上に、箋描沈線を施す。調整は、内外面に貝殻条痕を施す。1、2に比べ、頸部の沈線が太い。4は、口唇部に平坦な面取りが確認でき、口縁部に刻目突帯文を施す。調整は、内外面に貝殻条痕を残す。5は、丸い口唇部から胴部にかけて徐々にすぼまる形態をもつ。口縁部に1条の刻目突帯文を施す。頸部から胴部にかけて粘土紐が残る。6は、突帯文を施さないもので、口唇部内面に沈線を施し、頸部から胴部に向かってやや張り、胴部からすぼまる。胴部には沈線状の段が施されている。内外面ともミガキ調整を施す。

浅鉢 7～12

頸部が外反し、波状口縁になるものと、胴部からやや内湾しながらたちあがる椀形のものがある。7は、短い頸部をもち、口縁部が外反するもので、内面に1条の沈線がめぐる。調整は、外面上部ナデ、下部貝殻条痕が残り、内面ミガキ調整を施す。8は、胴部から頸部の屈曲が弱く、口縁部が外反するものである。口縁部外面に1条の沈線を施し、沈線上に1箇所、円孔が認められる。波頂部は8箇所あるものと考えられ、平面形態は方形を呈する。調整は、内外面とも丁寧なミガキ調整を施す。9、10は、短い頸部をもち、口縁部が外反し、端部でさらに屈曲するものである。調整は、内外面とも丁寧なミガキを施す。11は、頸部から短く外反する口



第12図 SR02 7層以下出土土器実測図(I)



第13図 SR02 7層以下出土土器実測図(2)

縁部をもち、端部は波状を呈する。調整は、内外面ともミガキ調整を施す。12は、椀形を呈するもので、口唇部は方形を呈する。調整は内外面ともミガキ調整を施す。

弥生時代前期古段階の出土遺物 第32図 1～12

壺形土器 3、4

3は、短く外反する口縁部である。端部は若干肥厚する。調整は内外面ともミガキ調整を施す。4は、胴部片である。胴部外面に重弧文を施す。内外面ともに丁寧なミガキ調整を施す。

甕形土器 5、6

5、6は、如意状口縁をもつもので、胴部は張らずに底部へとすぼまる。口縁端部に刻目文を施す。

鉢形土器 7

7は、「く」の字状に短く外反する口縁部をもち、胴部はやや張り、しっかりした底部へとつづく。調整は、口縁部以外は内外面ともミガキ調整を施す。

蓋形土器 1、2

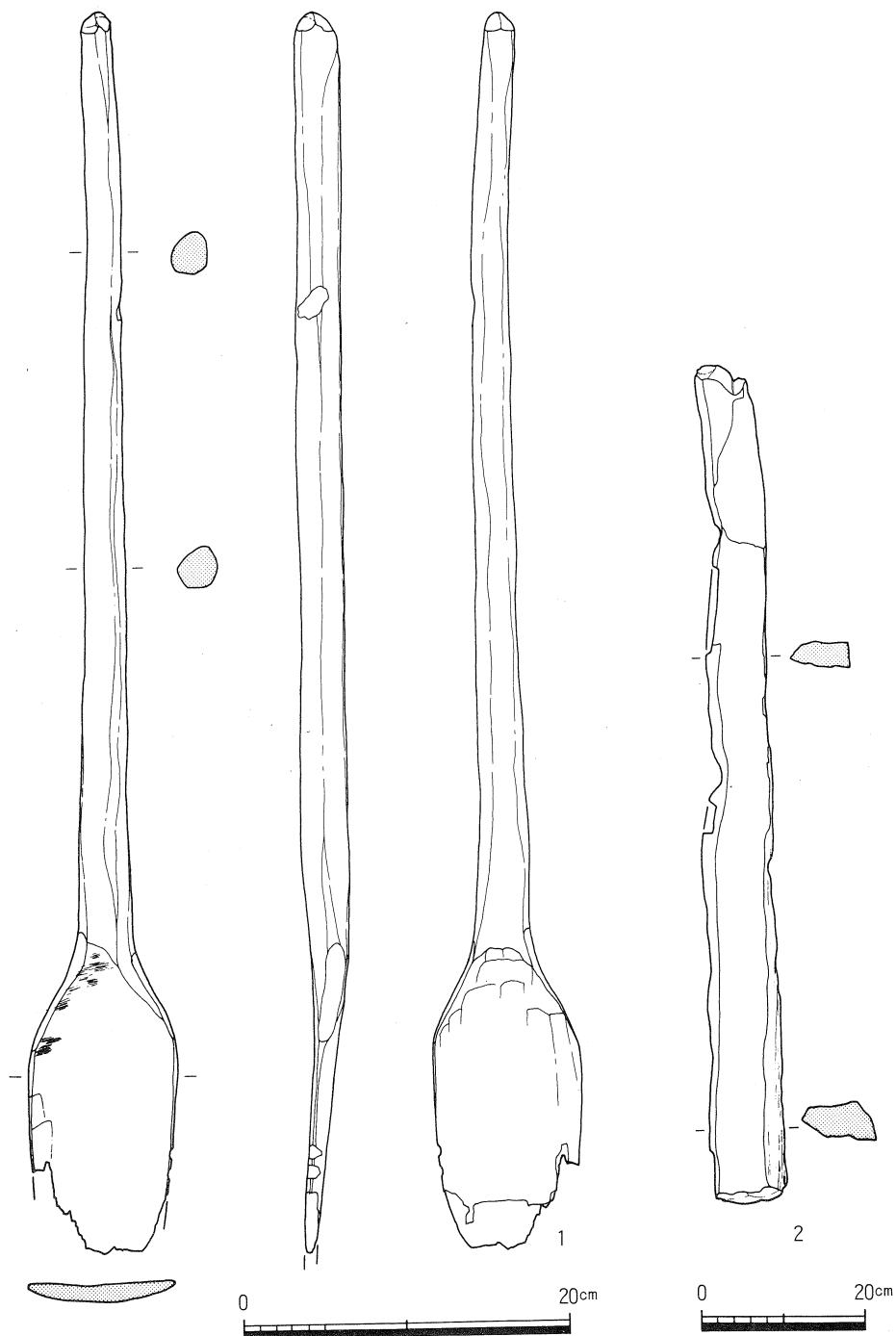
1は、壺形土器の蓋である。中央部に円孔を施すもので、内外面ともミガキ調整を施す。外面に赤色顔料が若干量残存していることにより、もとは赤色顔料による彩文が施されていたものと思われる。2は、甕形土器の蓋である。頂部に平坦面をもち、大きく開く裾部をもつものである。調整は、内外面ともミガキ調整を施す。

底部 8～12

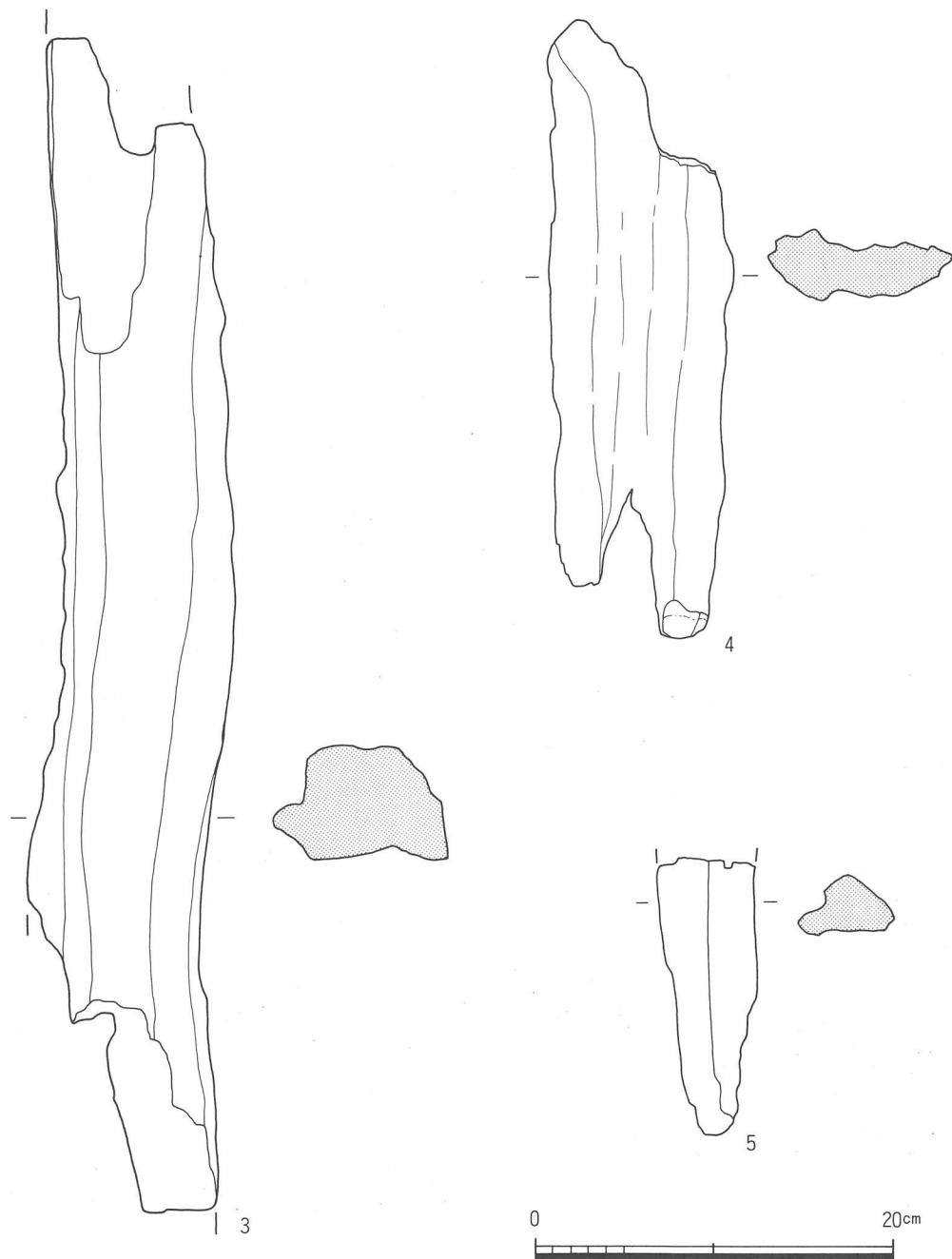
いずれも壺形土器の底部と考えられる。8は、底部に穿孔をもつ。9～11は、やや上げ底の底部からたちあがる形態をもつ。12は大形の壺の底部である。いずれの底部も内外面ミガキ調整を施す。

木製品

1～5はSR02の河床より多くの土器や植物遺体と共に出土した。包含層は6a層黒色粘質土である。共伴した土器の時期は縄文晩期～弥生前期初頭に比定されている。1は小型の鋤状木製品である。刃先を欠損し、現存長は76.2cmを測る。柄は長さ56.2cm、径2.5cmで、全面に縦方向の面取りが施され断面は三角形に近い円形を呈する。柄の上端は2方向の加工が行われている。刃部は幅9cm、厚1.2cmを測り、刃先になるにしたがって薄くなり反っている。刃部の内側は平坦であり、外側はやや丸くなっている。若干の加工痕が残っている。刃部の幅は先が僅かながら狭くなっている。柄と刃部の境はゆるやかに広がり丸くなっている。刃部の加工によってわずかな稜を持つ。2はミカン割りの割材である。長さは108.5cm、幅8.8cm、厚5.1cmを

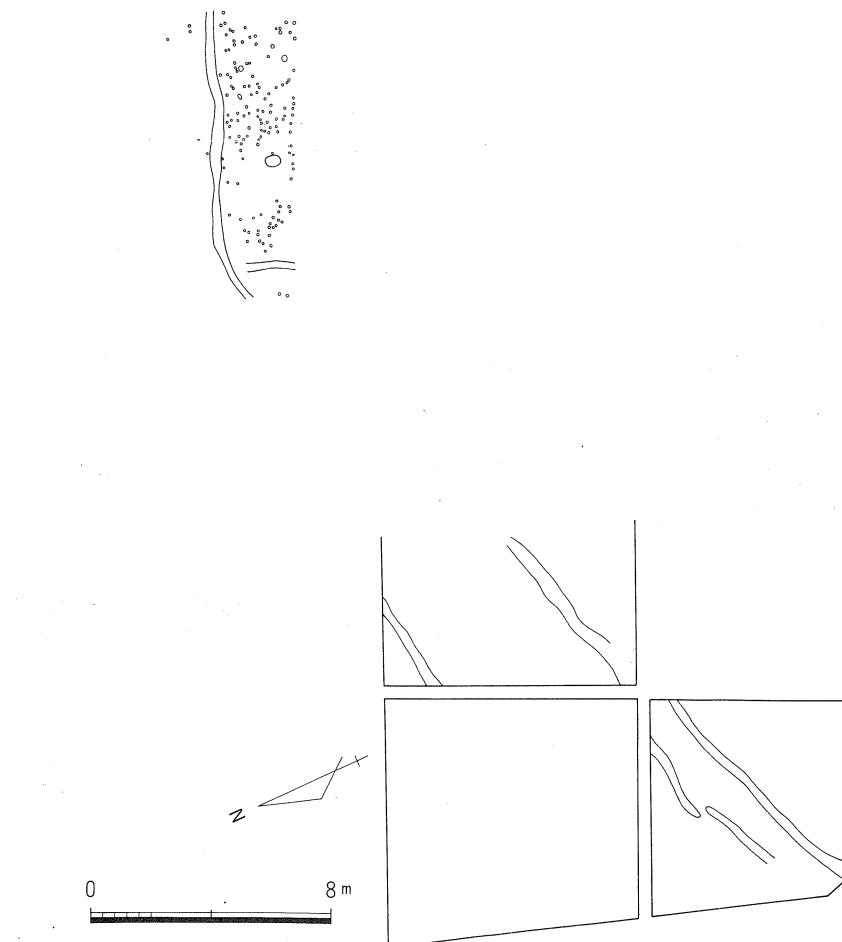


第14図 SR02 7層以下出土木製品実測図(その1)

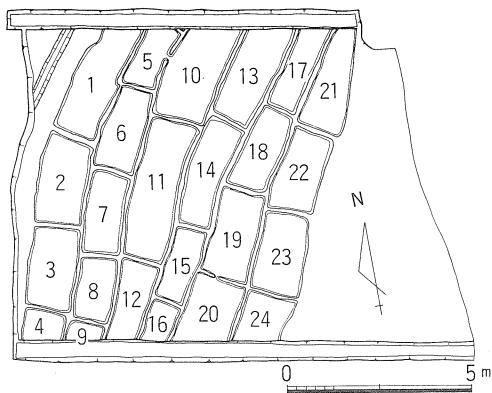


第15図 SR02 7層以下出土木製品実測図(その2)

測る。両端にはミカン割りする前の丸太材をつくるための切断痕がわずかに残る。3は柵目の板材である。現存長は67.5cm、幅9.6cm、厚6.5cmを測る。断面は不整な台形を呈する。4は端部に加工痕のある割材である。現存長は34.6cm、幅10.2cm、厚4cmである。板目材で、加工は1方向から打ち込まれており明瞭である。5はミカン割りの割材である。現存長は15.4cm、幅5.4cm、厚3.3cmである。断面は三角形で、芯はない。



第16図 SR02西岸微高地上水田遺構平面図



第17図 SR01西岸微高地上水田区画図

No.	面積(m ²)	平均標高(cm)
1	(13.55)	10.95
2	10.9	10.99
3	10.2	11.10
4	(3.1)	11.02
5	(5.5)	10.94
6	9	10.95
7	8.6	10.97
8	6.5	10.99
9	(1.5)	11.00
10	(14.4)	10.93
11	17.8	10.94
12	(7)	10.97
13	(12.3)	10.92
14	10.8	10.92
15	6	10.95
16	(2.8)	10.97
17	(6.6)	10.92
18	8.85	10.92
19	10.8	10.94
20	(9.5)	10.97
21	(9.25)	10.94
22	10.1	10.93
23	10	10.97
24	(5.8)	10.98
平均面積		9.96m ²
最大面積		10.9m ² (2)
最小面積		6.0m ² (15)

第3表 SR01西岸微高地上水田面積計測表

(2) SR02西岸微高地上水田畦畔

SR02西側微高地上で、36a 黒色砂質シルトの除去時に確認したもので、4本の畦畔状の痕跡の断片と溝状遺構、稻株痕跡がある。

畦畔状遺構は、3区南西隅から北東に向けてSR02の西側落ち肩と平行する向きで、2本平行の2組が南西—北東に縦列する形で計4本検出できた。SR02の落ち肩との距離は6~9mを測り、検出長は4~8m、畦幅約40cm、畦の立ち上がりは不明であった。4本中、中央が水口状に途切れる部分が1箇所、直交する畦との分岐部分が1箇所認められる。

溝状遺構と根株痕は、畦畔痕から河岸に沿って20mばかり北東へ下った部分で、ここでも東西方向と、旧河道にほぼ平行した位置関係になっている。溝幅約20cm、深さは5cm前後、検出長は約11mである。遺構は5b 洪水砂礫層によって充填されており、遺物の検出はない。根株痕は、溝状遺構の南側に幅3m、長さ5mの範囲で直径3~5cmのもの約130点が密集して確認できた。

2 2・4区

SR01西岸微高地上水田

4区西端のSR01西岸沿いに東西約20m、南北約16mの範囲にわたって確認できた。微高地を形成する第6b・c層灰黄~灰褐色粘土層の表層土壤化層である第6a 黒色粘土層が水田層として利用されており、水田面は第4b層黃褐色細砂及び5a層暗灰褐色シルト質細砂の洪水層によって被覆されている。地形的には、SR01西側の岸上がりの東西幅約20mの範囲が、南南西

から北北東の河筋に沿って東西に反りあがった浅い谷状を呈し、横断面方向での高低差は約10cm。縦断面方向は南から北へ向けて緩やかに下がり、18mで5cm前後の高低差を側る。水田面は、幅約20cm、高さ4～5cmの畦畔によって東西1.5～3m、南北4～7.5m、1筆あたり平均面積10.0m²の整然とした長方形に区画されている。畦畔は、まず谷状地形の等高線に沿って南北畦畔を平行に設けた後に東西畦畔で適宜区分をしたようで、全体としてはあみだくじのような形状を呈する。畦畔の規模自体も南北畔の方が東西のものより1～2cm高い。水口は確認されておらず、水配りは基本的には上流からの懸け流しによったものようである。隣接する水田相互の高低差は2cm前後で中央部北端（区画10）がいちばん低く東西両縁部南端（区画4、24）がいちばん高い。調査範囲全体での最大高低差は10cmを測る。水田層からの遺物の出土は確認されていないが、上層の洪水砂層に掘込む遺構の年代等から弥生時代前期末を下限とする時期に想定できる。

第4節 弥生時代中・後期の遺構と遺物

1 1・3区

(1) SH01 (第18、19図)

3区ほぼ中央部、C4グリッド西端で検出された。やや楕円形を呈し、長径5.46m、短径5.0mを側る。検出段階では、全面が黒色砂礫に覆われていたが、検出面下約5cmで建築材と思われる炭化材が放射状に確認された。炭化材は直径10cm前後、長さ30~60cmの柱材と板材と見られるものも数点見られたが、ほぼ完全に炭化しており樹皮の残存も見られなかつたため樹種の確認にまではいたらなかった。床面は検出面か5~10cm掘り下げた部分で、東半は褐色の川砂を人為的に敷きならし、西半は地面の砂礫を露出させている。床面はほぼ平坦だが、北東から南西に5cmほど傾斜している。東半周部の壁際には壁溝が残り、幅約15cm、深さは5cm足らずである。壁溝内には、数本の杭状の炭化材が東部を屋内に傾けて斜め方向に打ち込まれており、垂木材の名残であろうと思われる。柱穴は、住居平面形の長軸に沿った南西-北東方向に3穴ずつ2列と両列の中間線上の棟持ちに相当する部分各1箇所の計8本が確認された。柱穴はいずれも直径約15cm、深さは床面から20cm前後であった。中央ピットは8本の柱穴に囲まれた部分のほぼ中央に長径60cm(南西-北東)、短径45cm、深さ10cmである。

出土遺物 (第20図)

土器 甕

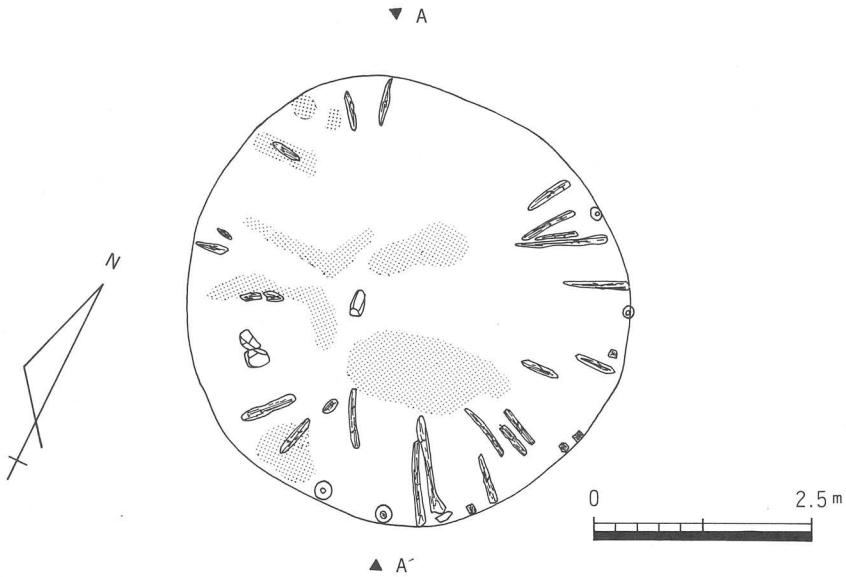
SH01からは、少量の弥生土器が出土し、その中でも図示できたのは1点のみである。甕は、胴部があまり張らない、「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、端部は丸く終わる。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ナデ調整を行う。

石器 石斧

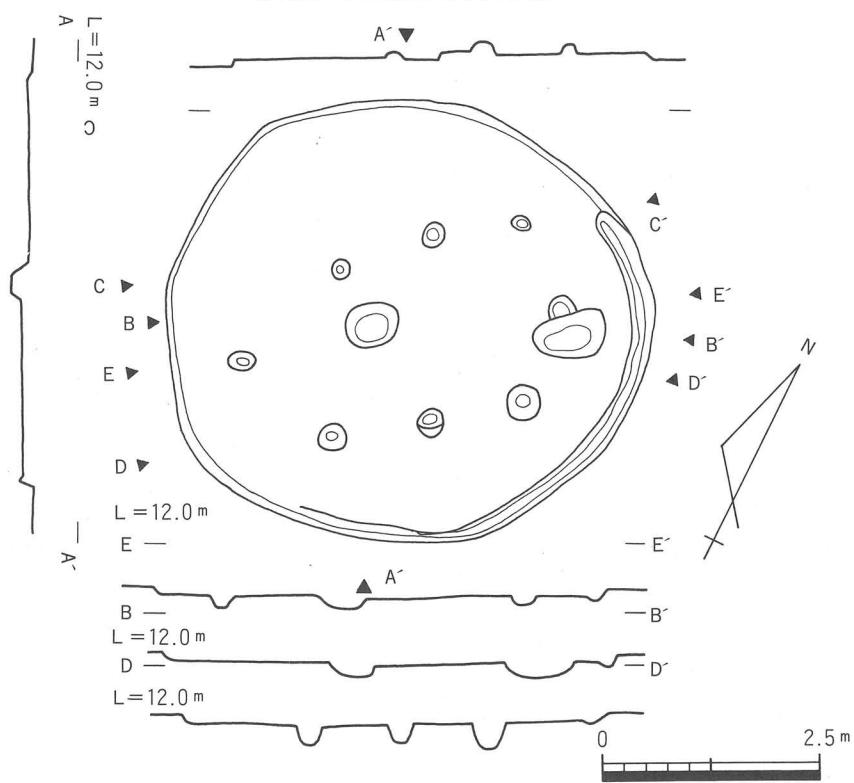
大半を欠損し、詳細は不明である。基部及び体部の一部を残すのみであるが、柱状片刃石斧か偏平片刃石斧になるものと思われる。残存部の表面は丁寧な磨きが施されている。

(2) SH02 (第21、22図)

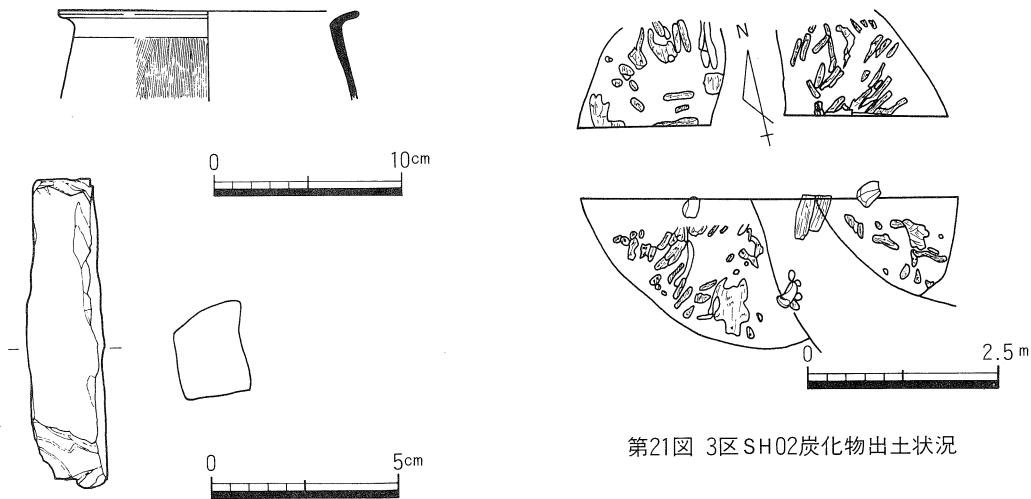
3区C4~5グリッドにまたがる北端に南半部のみを検出した。北半部は1・3区の側溝および土層セクションによって分断され、上からST02に切り込まれているために検出状況としては良好といえるものではない。径は東西方向で5.4m、南北の最大幅で4.3mとほぼ正円形を呈する。検出面から床面にかけては厚10~15cmの細礫まじりの黒褐色砂質シルトで埋まっており、SH01と同様に床上には一面に建築材と思われる炭化材が散乱していた。木材としての形状はSH01よりもさらに崩れており、中には藁などの植物繊維状のものも確認できた。柱穴は北東区に2穴、南西区に1穴が検出され、いずれも直径20cm、深さ10cm前後であったが、わずか3穴



第18図 SH01炭化物検出状況

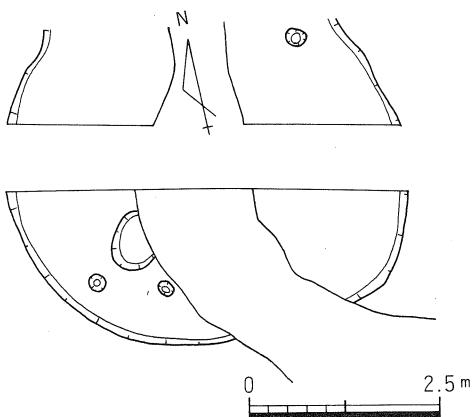


第19図 SH01完掘平・断面図



第20図 3区 SH01出土遺物実測図

第21図 3区 SH02炭化物出土状況

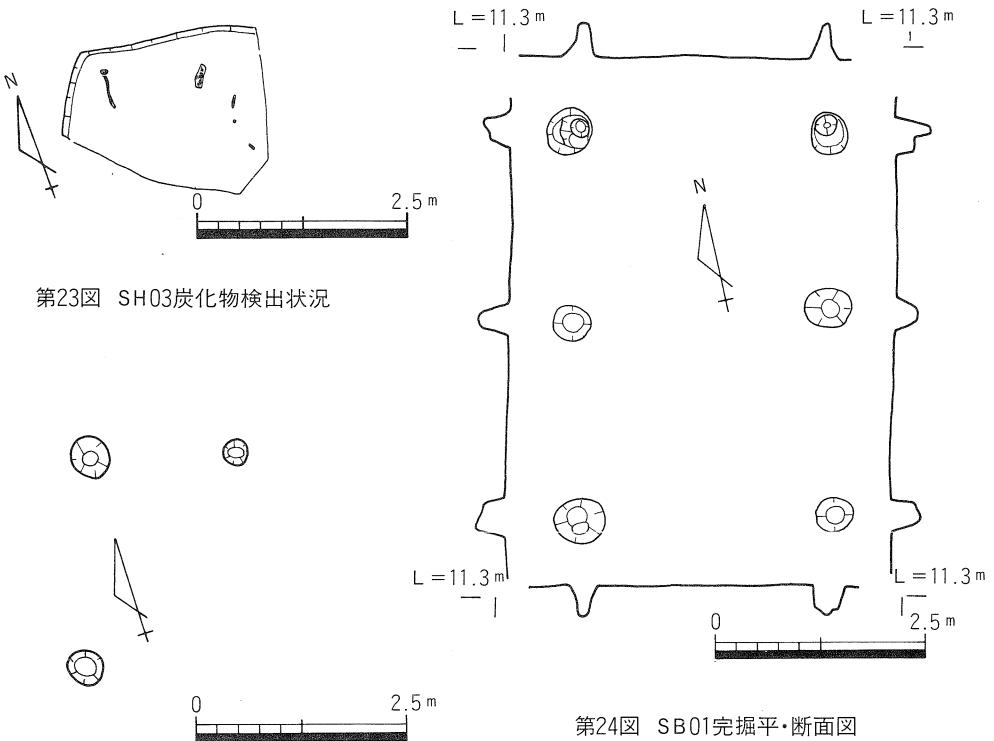


第22図 3区 SH02完掘平面図

で位置的にも片寄っているため柱の配置等の復原までにはいたっていない。中央ピットも位置が片寄るもの、南西区に南北方向の長径80cm、短径55cm、深さ10cmのものが確認されている。

(3) S H 0 3 (第23図)

1区ほぼ中央部のB 3 グリッド、SH01の北約20mの地点で検出された。砂礫上面の不明瞭な遺構面で当初は遺構として確認できず、SR02掘削途中に炭化材の集積として発見した。炭化材は10×25cm、2×40cmの棒状のものをはじめとして床面直上に多数散乱している。南東隅に一部残っていた落ち方で深さ10cm足らずの遺構と推定されるが、全体的な平面プランは未確定である。しかし周辺のSH01・02の状況等から竪穴住居と判断した。



第25図 SB02完掘平面図

(4) SB01 (第24図)

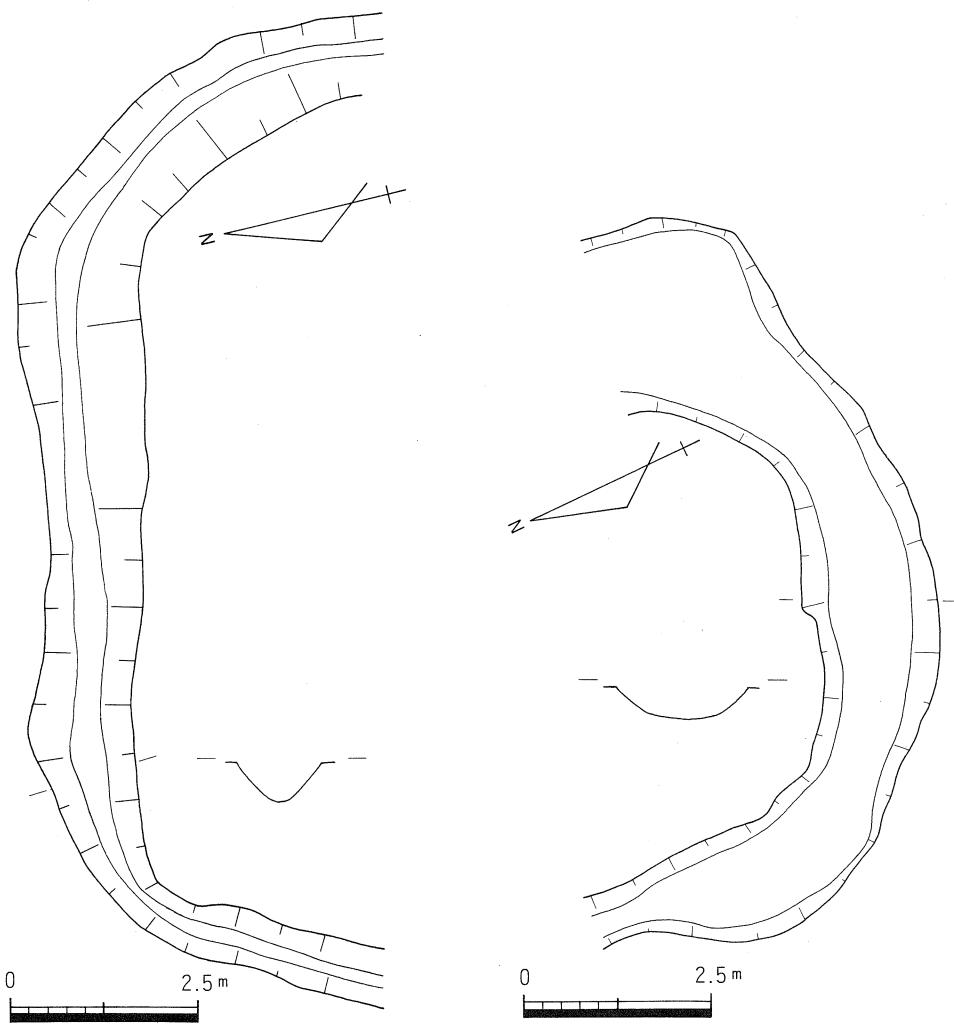
3区C 5～6グリッドにかけて検出された。グリッドラインより主軸を若干西に振る東西1間、南北2間の掘立柱建物である。黄褐色砂質シルト層上面を確認面とするが、実質的にはさらに上総の黒褐色砂質シルト層の上面が掘り込み面と考えられる。柱穴は直径40～50cmの円形、深さ20～40cmで3穴の底には柱の重量によると思われる窪みがみられる。柱受け、根固め等の石材は確認できなかった。弥生土器片を若干出土しているが、小片のため図化に至らなかった。

(5) SB02 (第25図)

1区東端、SX03の南側で検出された1×1間の掘立柱建物である。遺構確認面は微高地部の最終遺構面である黄灰色砂質シルト層上面で、ほぼ正方形に間口に向けるが、東南部の柱穴は近世の土坑による攪乱を受けている。東西の柱間1.8m、南北1.2mを測る。柱穴は直径40cm前後、検出面からの深さ、約35cmである。南東ピットから柱根の木質片が出土している他は遺物、根石等は確認されていない。

(6) ST 01 (第26図)

3区中央部 (C 4 グリッド) 南寄り、SH01の南西隣で検出された、東西13m、南北4.5m (現存長) の隅丸方形状の溝である。北半部のみが調査区内にかかっている。溝は、幅0.6~1.2m、深さ約50cmのV字状の断面を呈し、西にむかってあがり、暗褐色砂礫の埋土を充填する。埋葬主体は確認されていないが、溝底から供献土器と考えられる完形に近い壺形土器が2点出土したことにより、遺物の出土状況等から方形周溝墓と判断した。



第26図 ST 01 完掘平・断面図

第27図 ST 02 完掘平・断面図

出土遺物（第28図1、2）

壺形土器が2点出土している。1は、頸部から大きく外反し、端部を上方向につまみ上げる口縁部をもち、胴部は大きく張り肩部をつくる。外面はハケ調整を主体に施す。2は、短い頸部から屈曲して外反し、端部でわずかに肥厚させる。胴部は大きく張り肩部をつくる。口縁部外面に1条の弱い突帯文をめぐらす。調整は、外面上部ハケ、下部にミガキ調整を施す。

壺形土器の特徴より、凹線文出現以前の中期前半と考えられる。

（7）ST02（第27図）

3区中央部（C4～5グリッド）北端で検出された、円環状の溝である。SH02を切り込み、北半分は1、3区の側溝等によって滅損している。溝幅1.6m、深さ20～40cmの浅いU字状の断面形を呈し、規模は東西径9.5m、南北は3.5mが残存する。

出土遺物 第27図3～18

壺形土器 3～9

3、4は口縁部が少し外反し、端部に向かって徐々に肥厚していく広口壺である。口縁部外面に数条の刻目突帯文をめぐらす。5は、頸部から大きく外反する口縁をもち、端部を肥厚させる。端部外面に刻目文を施す。6、7は、頸部から大きく外反する口縁をもち、端部を上下方向に大きく拡張する。端部外面には凹線文を数条めぐらす。8は、頸部から直立してたちあがる直口壺である。9は少し外反しながらたちあがる長頸壺である。口縁部外面に凹線が数条めぐり、頸部に籠状工具による列点文を施す。

甕形土器 10～12

10、11は「く」の字状に屈曲し、口縁端部を上方にわずかにつまみ上げる口縁をもつ。胴部はあまり張らない。10には端部外面に刻目文を施す。12は「く」の字状に屈曲し、端部が肥厚する口縁部をもち、頸部から胴部はゆるやかに広がる。口縁端部外面に凹線文を2条めぐらす。

高杯形土器 13～16

13は、皿状の杯部から屈曲して内湾しながらたちあがる。14は、皿状の杯部から屈曲して外反しながらたちあがる。端部上面に凹状のくぼみが確認できる。15、16は脚部である。15は外反しながら広がり、脚端部が肥厚する。端部外面に凹線文をめぐらす。調整は、内面に籠ヶズリを施す。16は筒状の脚部をもち、端部で屈曲して外に開く。内外面ともナデ調整を施す。

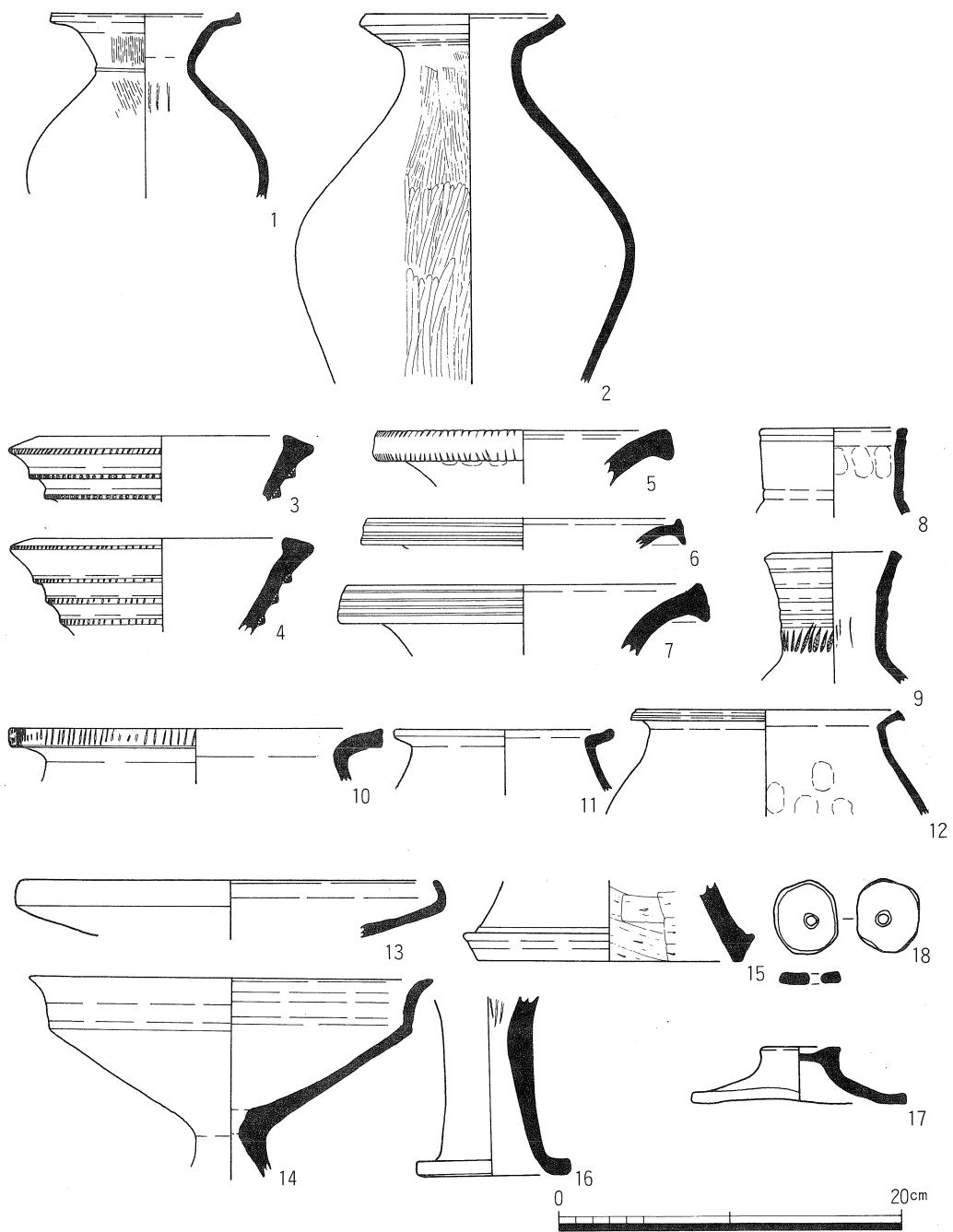
蓋形土器 17

器高が低く、頂部が平坦面をもち、外側に大きく開く形態のものである。

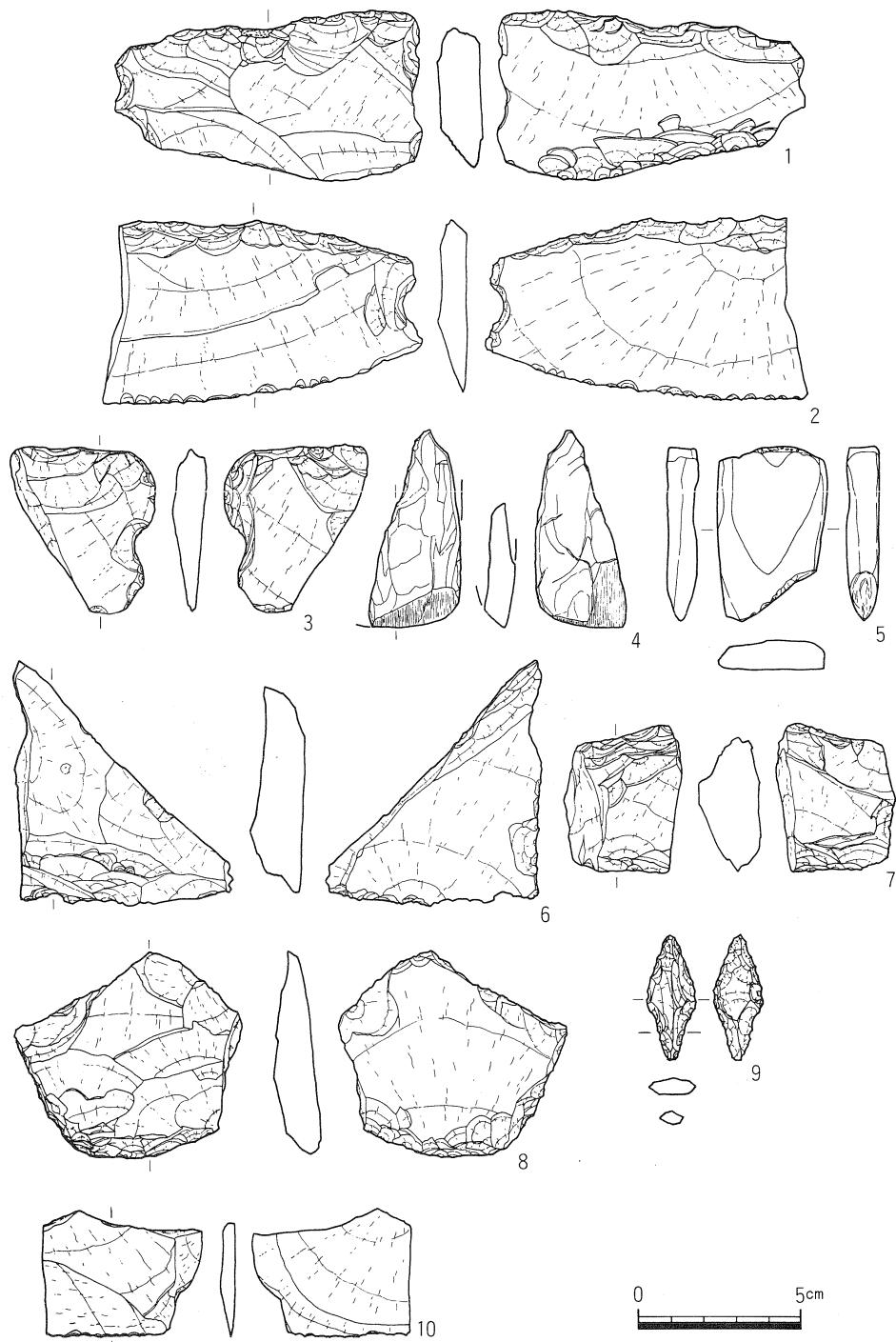
紡錘車 18

土器片を利用した紡錘車である。

石 器（第29図）



第28図 ST01・02出土土器実測図



第29図 ST02出土石器実測図

石庖丁 1～3

1はやや厚い素材を使うもので、刃部と考えられる下縁部は片面からの打ち欠きによって刃部をつくる。一方背部は両面からの打ち欠きの後、敲打によって背潰しを行う。左側縁部に抉りと考えられる打ち欠きがみられる。2は片側縁を欠損するもので、大剝離面をほとんど利用する。刃部は縁辺部を両面から丁寧に打ち欠く。一方背部は大きく打ち欠いた後、敲打による背潰しを行う。側縁部は大きな打ち欠きののち、敲打による刃潰しを行う。3は抉りをもつ石庖丁の破片である。刃部は大剝離面を利用し、縁辺部に両面から打ち欠きを行う。一方背部は敲打による背潰しを行う。側縁部は両面からの打ち欠きを行い抉りをつくる。

石斧 4、5

4は刃部のみの破片である。偏平片刃石斧になるものと考えられる。刃部は丁寧に研磨されている。5は刃部を欠損する破片である。偏平片刃石斧になるものと考えられる。全体に丁寧な研磨が行われている。

削器 6、10

6は、刃部のみに大きな打ち欠きを行う以外は調整を行わない。10は薄い剝片を利用したもので、下縁の縁辺部のみに両面から打ち欠きを行う。

楔形石器 7

厚い素材を利用するもので、上縁及び下縁に打撃による敲打痕及び階段状剝離が認められ、両側面は裁断面を残す。

石鎌 9

有茎式の石鎌である。両面から打ち欠きを行い調整を行う。

敲打痕のある石器 8

下縁部には打撃による階段状剝離及び敲打痕等が顕著に残るもので、その他の側縁には明瞭な調整は認められない。用途としては、ものを敲き潰したりするための使用が考えられる。

(8) SD 0 5

1・3区東寄りに検出された溝である。3区ではほぼ南北に伸び、南に開くY字状を呈するが、1区では北東に向きを変え、上層はSX03に被覆される。幅2m、深さ15cmの浅いU字形で埋土は黒褐色砂質シルト。遺物の出土はない。

(9) SX 0 1・0 2

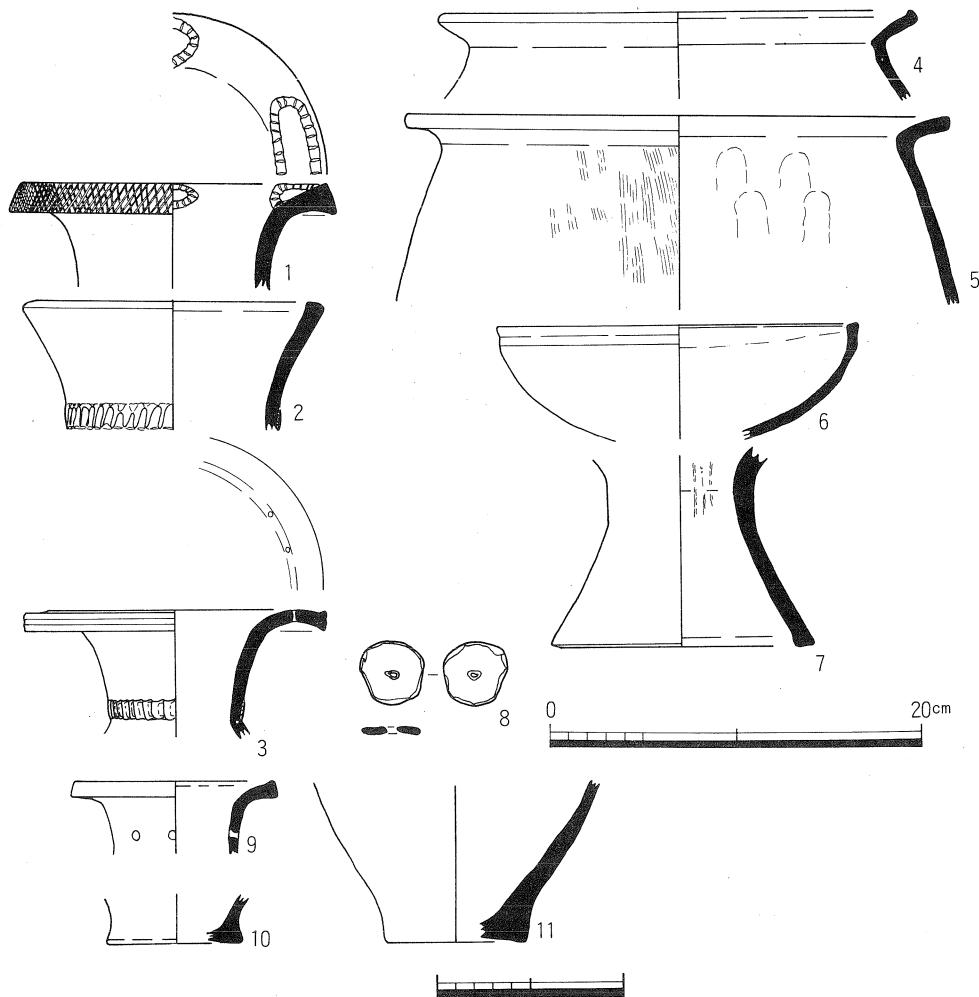
1区西端、B1～2グリッド及び3区C2～3グリッドで検出された、いずれも5層砂礫層に掘り込む不整円形の深い落ち込みである。SX01は、北辺を現耕作面の段差によって失っている。埋土は黒色の砂質シルト層で、細深部で14cmを測る。一見、旧地表土壤層の自然堆積と見られたが、中央部付近から土器の集積がみられたため、竪穴住居、焼成土坑等の可能性を

想定しつつ掘り進めたが、柱穴、焼土、炭化物等、先の想定を裏付けるようなものは確認できなかった。

出土遺物 第30図

壺形土器 1～3

1は、直立する頸部から大きく外反し、端部を上下に拡張させる。端部外面に斜格子文、口縁上面に刻目突帯文を施す。2は、頸部からわずかに外反する口縁部をもち、端部をわずかに肥厚させる。頸部に押圧突帯文を1条めぐらす。3は、頸部から大きく外反する口縁部をもち、端部を上下にわずかに肥厚させる。端部外面に凹線文を1条めぐらし、口縁部に2孔一対の円孔を施し、頸部外面に押圧突帯文を1条めぐらす。



第30図 SX01・02出土土器実測図

甕形土器 4、5

「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、端部をわずかに上方向につまみ上げる 4 もある。胴部は大きく張らない。

高杯形土器 6、7

6 は、椀形の杯部をもつもので、端部が若干肥厚する。7 は脚部である。外反しながら広がり、端部を若干肥厚させる。

8 は、土器片を利用した紡錘車である。

出土した遺物からは、明瞭な凹線文等は見られないことより中期中葉前半と考えられる。

(10) SX 0 3

1 区 B 5～6 グリッドで検出された。自然流路状の落ち込みである。5 b 砂礫層を掘り込む埋土は、粗砂粒混じりの黒褐色砂質シルトで、平面形は南西から北東へ流れる N 字状を呈する。

第31図 SX 03出土土器実測図

- 64 -

落ち込み内には濃密な弥生中期後半の土器の包含がみられたが、人為的な遺構としては把握できなかった。しかし、南に続く3区では同様な埋土で周溝墓や竪穴住居等が存在しており、調査の過密工程による精度の低下等の条件を考え合わせると、何らかの遺構の存在を見過ごした可能性も否めない。

出土遺物 第31図 1～14

壺形土器 1～7

1は、わずかに外反しながら直立ぎみにたちあがる口縁部である。2は直立してたちあがり、屈曲して端部を上下に拡張する。3、4は頸部から大きく外反し、端部に向かって徐々に肥厚させていく口縁部をもつものである。4は端部外面に斜格子文を施す。5～8は、頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部を上下方向に大きく拡張させ、端部外面には凹線文を数条めぐらす。

高杯形土器 8～14

8は、椀形の杯部から立ち上がり、端部が左右に拡張するものである。9は、皿状の杯部から屈曲して直立する口縁部もち、端部を左右に拡張させ、上面に凹線文を2条めぐらす。10、11は、椀状の杯部からゆるやかに屈曲し、内椀しながらたちあがり、端部を拡張させる。端部外面に凹線文をめぐらせる。12、13は高杯の脚部で、14は柱状部である。

これらの遺物は古い様相をもつものも見られるが、壺の口縁部の凹線文、高杯口縁部の凹線文より中期後葉前半と考えられる。

石器 第32図、第33図

石庖丁 1、2

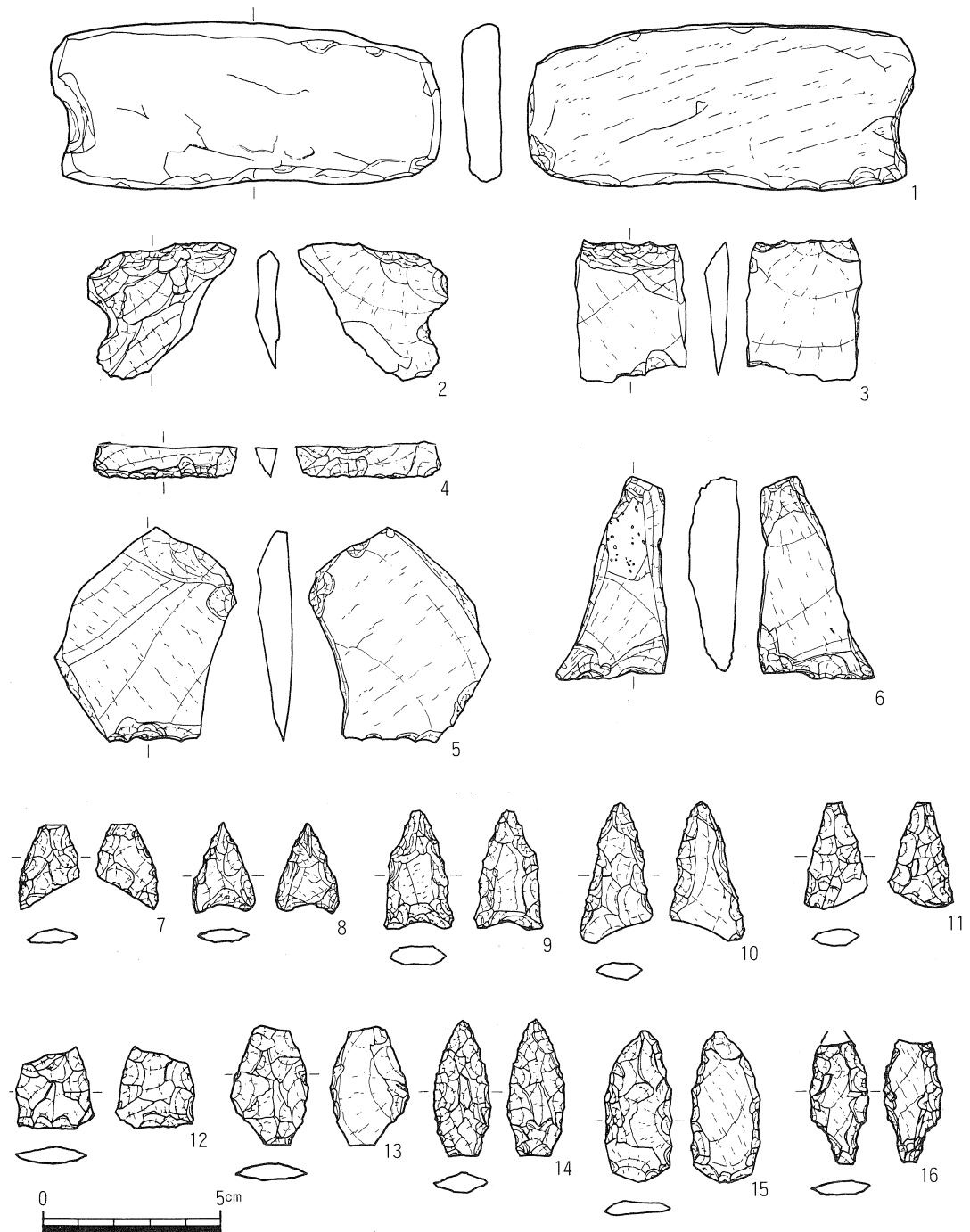
1は、柱状片刃石斧からの転用と考えられ、全体に研磨痕が残る。左側縁には抉りと考えられる打ち欠きが認められることにより石庖丁と考えられる。2は、左側縁に抉りをもつ破片である。抉りは片面からの打ち欠きによってつくられ、背部も同様のつくりである。

削 器 3～8

3は、上端、下端とも片面からの打ち欠きによってつくられたもので、両側縁は裁断面が残る。4は、刃部のみの破片であるため、全容は不明である。両面からの打ち欠きによって刃部を作り出す。5は、刃部のみに打ち欠きを行う。6は、幅がせまく厚い素材を利用したもので、両面からの粗い打ち欠きによって刃部をつくる。

石 鋸 7～16

形態により4種類に分類できる。7～10は凹基式の石鋸である。長さは2.5～3.9cmを測る。7、8は両面から細かい調整が行われ、9、10は両面からの粗い調整が行われている。11～13は平基式の石鋸である。いずれも先端部を欠損する。調整は大きな剝離によって行われている。

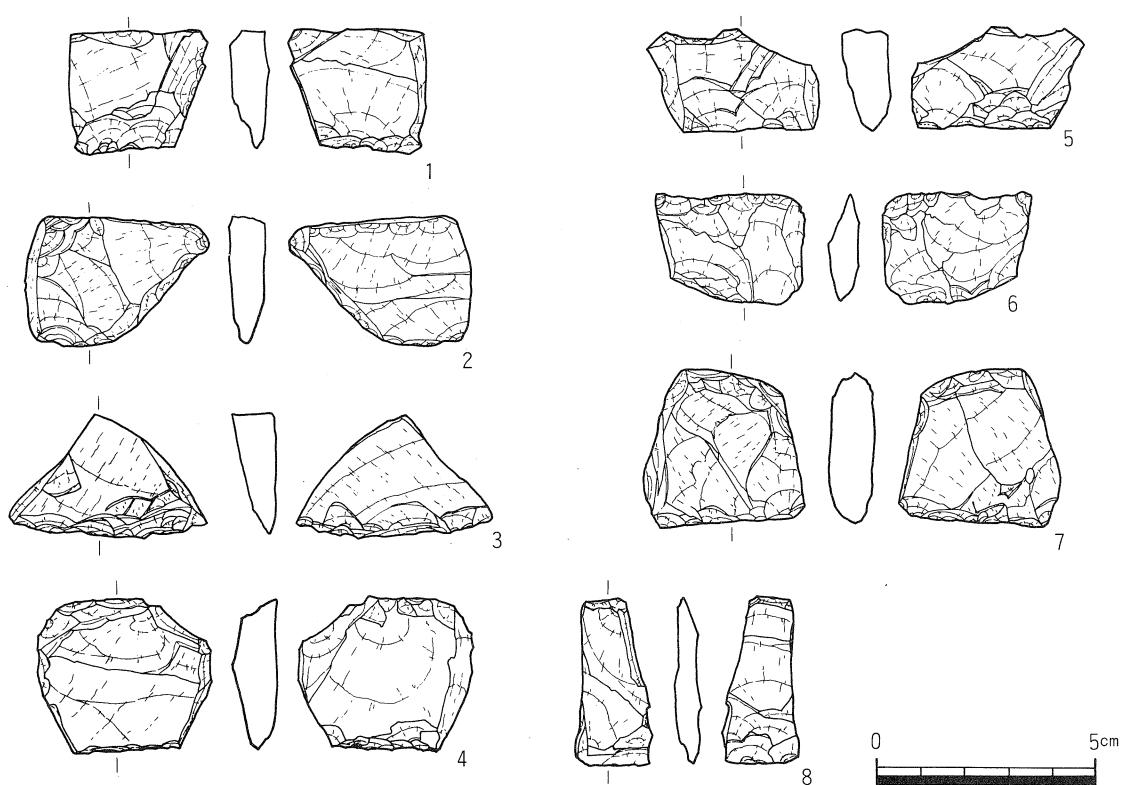


第32図 SX03出土石器実測図(その1)

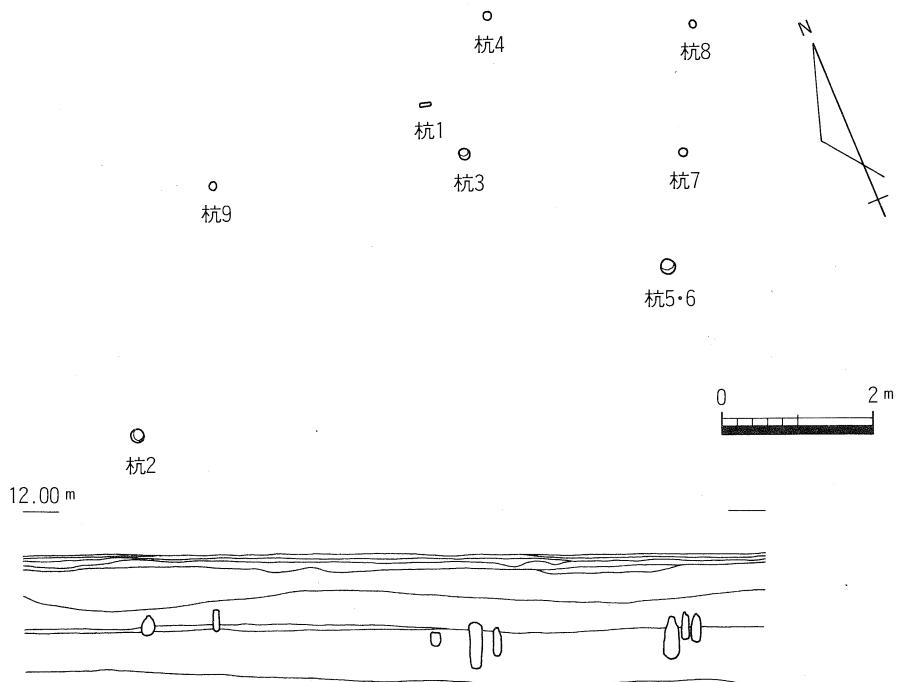
14、15は凸基式の石鎌である。幅狭の14に対し、15は幅が広く偏平である。14は両面からの丁寧な調整を施す。16は有茎式の石鎌である。先端部を欠損する。茎は長くつくられており、両面からの打ち欠きにより調整を行う。

楔形石器 第33図 1～8

平面形は台形を呈するものがほとんどで、三角形、長方形になるものもある。上端、下端とも刃潰れをおこしているものが多く。剝離は両極からの打撃により階段状剝離が認められるものが多い。一部打撃によるものか、上端部が欠損するものがある。



第33図 SX03出土石器完測図(その2)



第34図 1・3区5 b 砂層杭列位置図

(11) 1区SR02 5 b 砂層の杭列 第34図

1区B 4 グリッドの北寄りにおいて検出した。南西から北東方向に延びるSR02は調査区中央でやや北方向に流れを変える。SR02の幅は約40mであり、その中央部に杭列が東西方向すなわちSR02を横断するように打ち込まれていた。杭の総数は9本であり、2ないし3本の杭が一組となってほぼ等間隔に並んでいる。杭の上半部は全て欠損しているので、どの土層から打ち込まれたかは不明であるが現存する杭の上部は第5層暗赤褐色細砂～砂礫層中にあり、先端は第6層黒色粘土まで達している。杭は南方向からの洪水によって若干北側に傾いている。1・6は板材、2～5・7・8は丸木の杭である。

木杭（第35～37図）

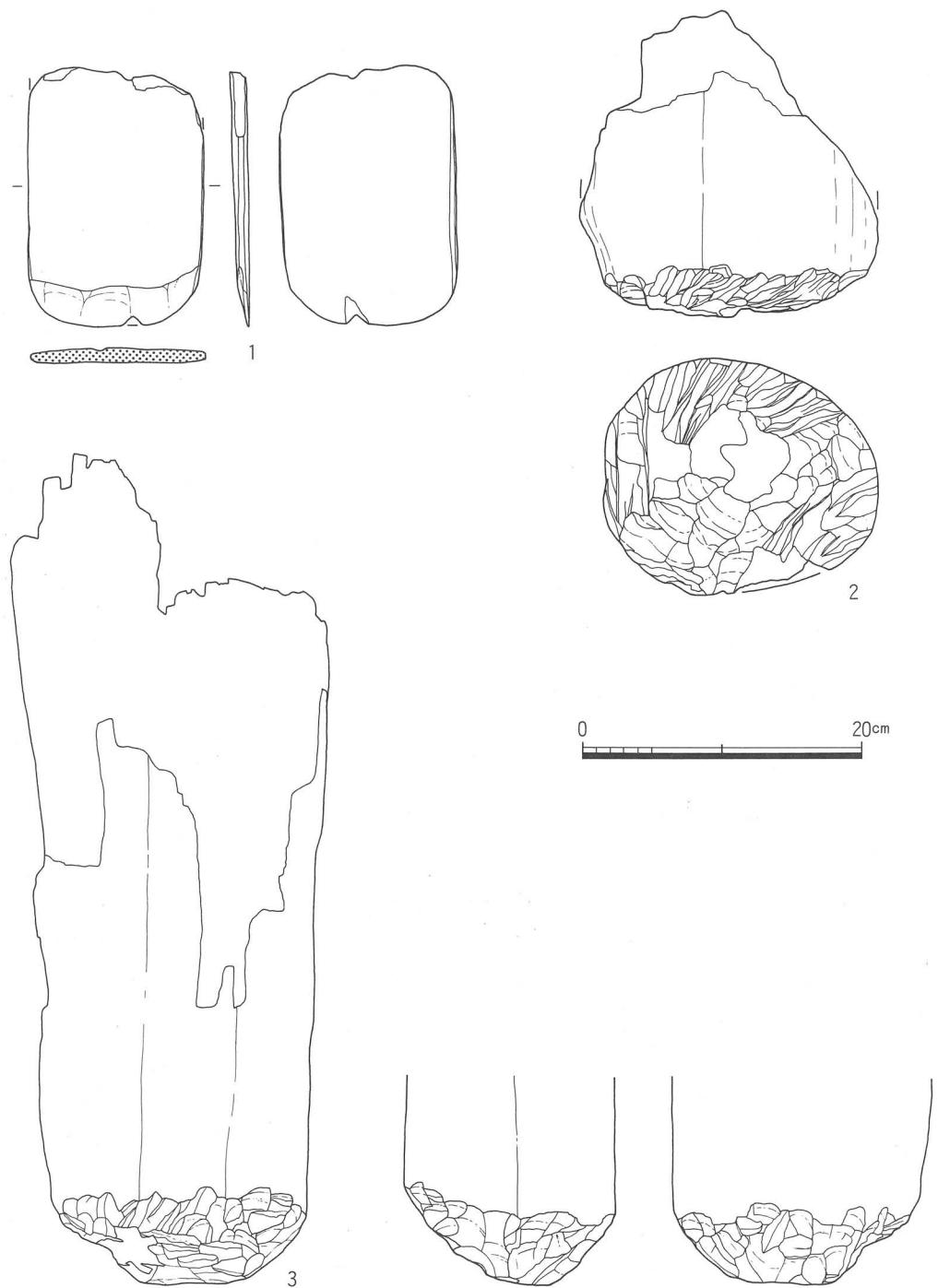
1は杭の根石の側板である。現存長は18.4cm、幅12.9cm、厚1.1cmである。柾目材を素材とし、側面は面取りを行っている。小口部は不明瞭な加工が施され、先端を尖らせてている。2は先端部付近のみ残存し、現存長22.5cm、径17.5×19.3cmを測る。先端部は全面に加工が施され丸くなっている。詳細に観察すると、斧の加撃角度の違いによって4方向の加工面がある。木

に対してほぼ垂直な角度で打ち込まれた加工痕を残す面と斜め方向からの加工痕を残す面がそれぞれ2面づつある。前者の加工が行われた後に後者が行われている。3は上部を欠損しており、現存長61cm、径19×15.3cmを測る。先端部は一部を除いて明瞭な加工が施されており、先端はやや尖っている。加工は4方向の加工面になっており、その一面は木に対してほぼ垂直な角度と斜め方向からの加工が行われているが、他の三面は斜め方向から加撃されている。4は上部を欠損し、現存長38.8cm、径16×15cmである。先端部は2方向から加工され、先端は鋭く尖っている。一面の加工は広い部分にまで及び、斧の刃が木の長軸に対して斜めの方向に入り、木にはほぼ垂直の加撃角度で打ち込まれている。その加工痕は3方向に分けられる。反対の面は木に対して斜めからの加工である。先端は杭を打ち込む際の圧力によりつぶされている。5は上部を欠損し、現存長58.5cm、径22.4×17cmである。先端部は切断した際の不明瞭な加工の残る部分が大半であり、一部に1方向からの加工が明瞭に見える。側面には先端部から斜め方向に打ち込まれた加工がある。6はミカン割りの割材を素材とした杭である。遺存状態は非常に悪く、現存長19.2cm、幅、11.6cm、厚5.3cmを測る。側面には面取りの際の加工が残り、先端部は1方向からの加工が施されている。7は上部になるにしたがって細くなっている。現存長39.5cm、先端部付近の径15.8×14cmである。先端部は2方向の加工面によって尖っている。加工は木に対して斜め方向から打ち込まれており、不明瞭である。側面に大きく面取りしている部分がある。8は上部を欠損し、次第に細くなっている。現存長は35.8cm、先端部付近の径15.7×12.6cmを測る。先端部には3方向の加工面があり、その加工は木に対して斜め角度から加撃されている。先端には加工痕がなく、丸くなっている。

(12) SR02-5 b 砂層

SR01の流路内において表層部の1m近くを覆っている分厚い洪水砂層である。分布域は1、3区のほぼ全域から2、4区西端のSR01西岸上にまで及び、流路からはずれた層厚の薄い部分でも10cm前後を測る。SR02流路中央部付近では直径3～5cmほどの中円礫を多く含み、相当規模の洪水の発生が想像されるが、流路から遠ざかるにつれて砂粒が細かくなってゆき、1、3区西端及び2、4区西端では粒子の揃った褐色の細砂層となる。

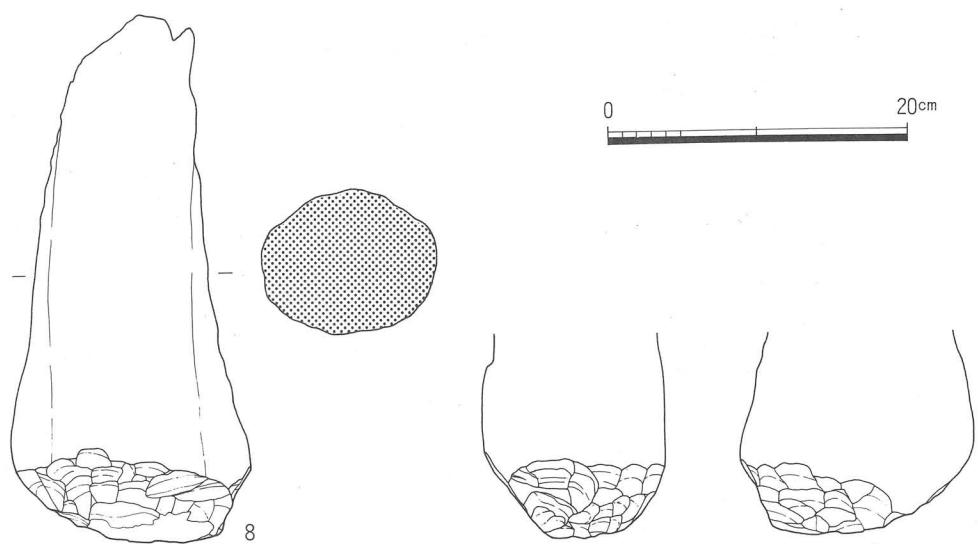
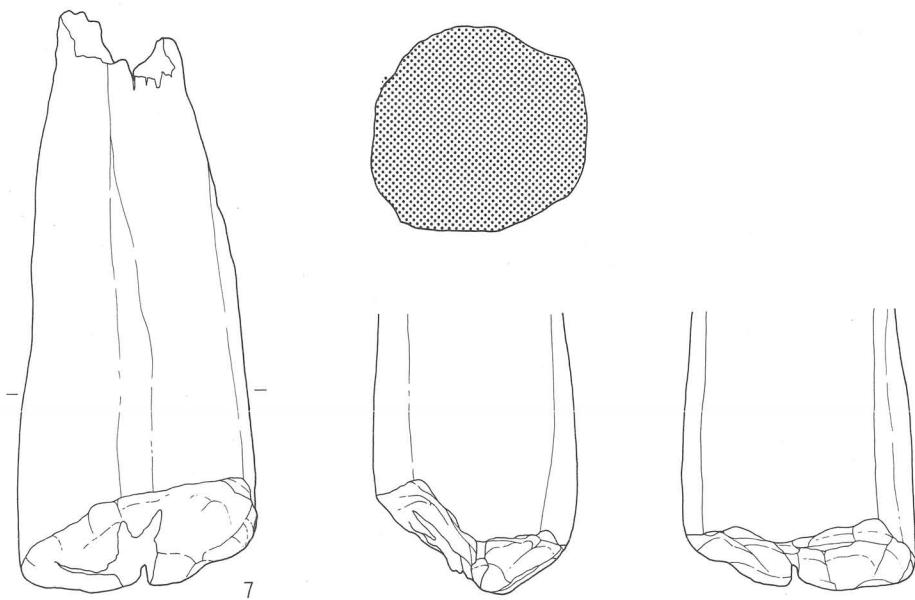
5 b 層上面は、弥生時代前期末から中期にかけての遺構面となっており、堅穴住居、周溝墓、掘立柱建物跡等が確認されている。遺物は、完形に近いものも含めて比較的密に包含され、遺構の存否に関わらず一様に分布しているように見受けられたため、調査時には砂礫層の堆積が形成された時点で上流の遺跡の遺物が混入したものと予想していた。しかし、遺物の分布が表層付近に限られ、中、下層には認められないことから、遺物は上面の遺構面に伴うもので、5 b 層自体は無遺物層と考えられる。



第35図 1・3区5b砂層杭実測図(その1)



第36図 1・3区5 b 砂層杭実測図(その2)



第37図 1・3区5 b砂層杭実測図(その3)

出土遺物

5 b 砂層中においても、SR01、11層出土遺物同様、時期幅をもった土器が多く出土している。ここでは器種ごとに分け説明を行う。

壺形土器 第38図、第39図

第38図1～5は、頸部が直立ぎみに立ち上がり、屈曲して大きく開き、端部を拡張させる広口壺である。口縁端部外面に刻目文、頸部外面に押圧突帯文をめぐらす。

第38図6～10は、頸部から口縁部にかけてわずかに外反し、端部を肥厚させる広口壺である。口縁部から頸部外面にかけて突帯文を数状めぐらせるものと（6、7）めぐらせないもの（8～10）に大別できる。

第38図11、13は、頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部を上下に拡張する11、端部を下方のみに拡張する13がある。11には端部外面に綾杉文、口縁部上面に2孔一対の円孔を施し、頸部に突帯文現存1条がめぐる。13には端部外面に綾杉文、その上に3個一対の円形浮文を施し、口縁部上面に斜格子文、2孔一対の円孔を施す。

第38図12、14は、頸部は直立し、口縁部が外反する。頸部には、押圧突帯文を巡らし、口縁端部及び、端部内面に、斜格子文を施す。

第38図15は頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部を上下に拡張させる。端部外面に凹線文、端部上面には斜格子文、その下に櫛状工具による刺突文、2孔一対の円孔を施す。15には、凹線文上に棒状浮文を施す。

第39図1、3は、頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部を上下に肥厚させる。端部外面に凹線文をめぐらす。1は頸部に刺突文を施す。

第39図2、5は、頸部から直線的に外反し、口縁部で屈曲して端部を上下に拡張する。頸部で屈曲し、胴部が大きく張る形態をもつものである。口縁端部外面に凹線文をめぐらし、口縁部上面に3個一対の円形浮文を、頸部に刺突文を施す。

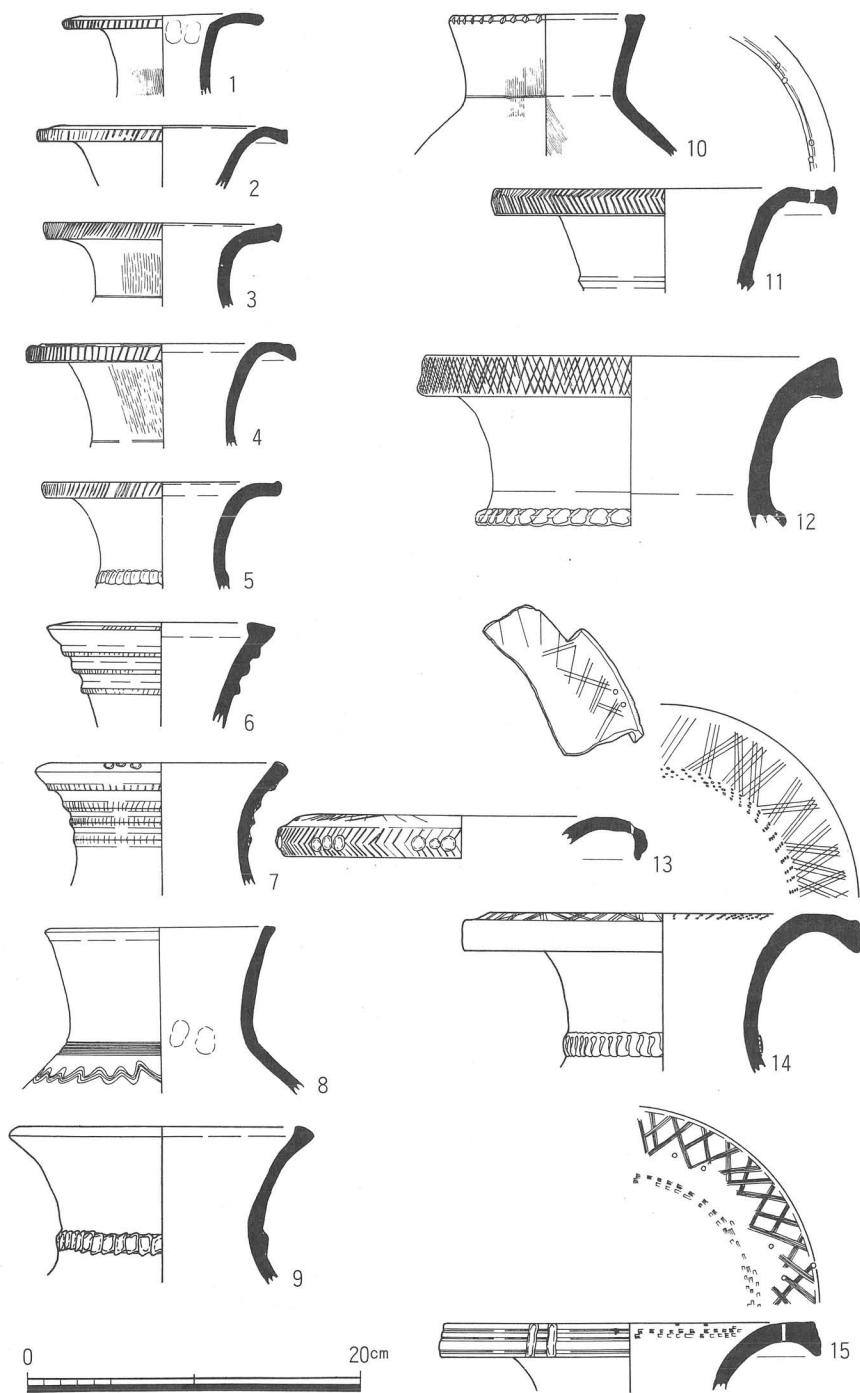
甕形土器 第40図1～11

1は、逆L字状の口縁をもち、端部に刻目文を施す。2～7は、「く」の字状の口縁部をもつもので、胴部が大きく張るものが多い。4には口縁端部外面に刻目文を施す。

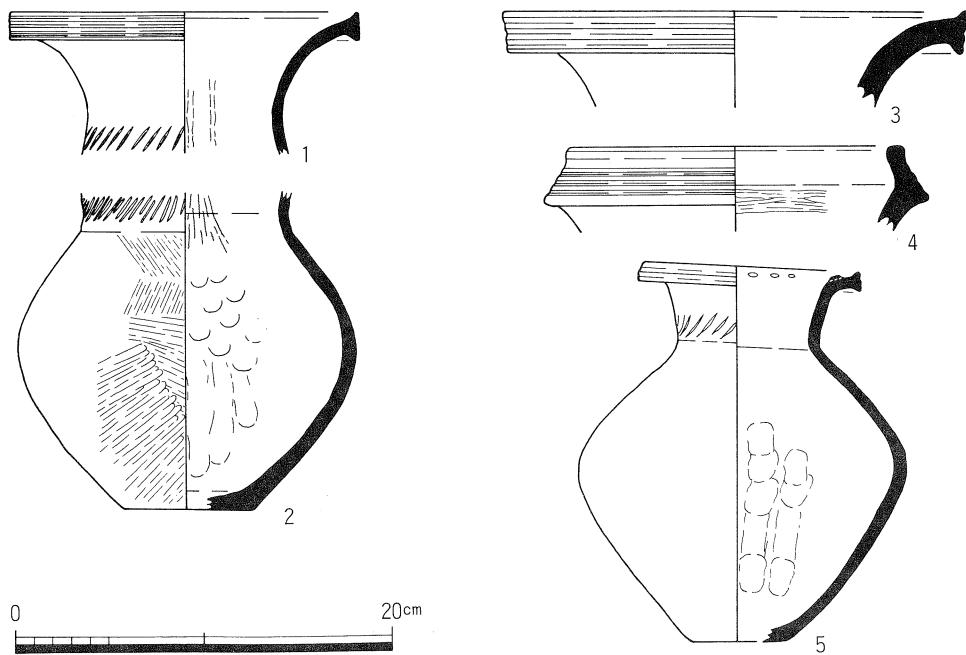
8、9は「く」の字状に屈曲し、端部を上下に拡張し、外部に凹線文をめぐらす。10、11は甕の底部である。10は、内面に箇ヶズリを施すことから11よりは新しくなる。

高杯形土器 第41図1、3、4

1は、皿状の杯部からゆるやかに屈曲してたちあがり、端部を左右に拡張するものである。口縁端部に刻目文を施す。3は、湾形の杯部から内湾しながらたちあがる口縁部をもち、長い脚部が付く。脚部下半に三角形の透し孔を施す。4は脚部である。脚端部外面に凹線文をめぐらす。



第38図 1・3区5b砂層出土土器実測図(その1)



第39図 1・3区5b砂層出土土器実測図(その2)

らす。

鉢形土器 第41図 2、 5

2は、深い椀形の杯部から内椀してたちあがる口縁部をもつもので、短い脚部が付くものと思われる。5は椀形の小型の鉢である。

石 器

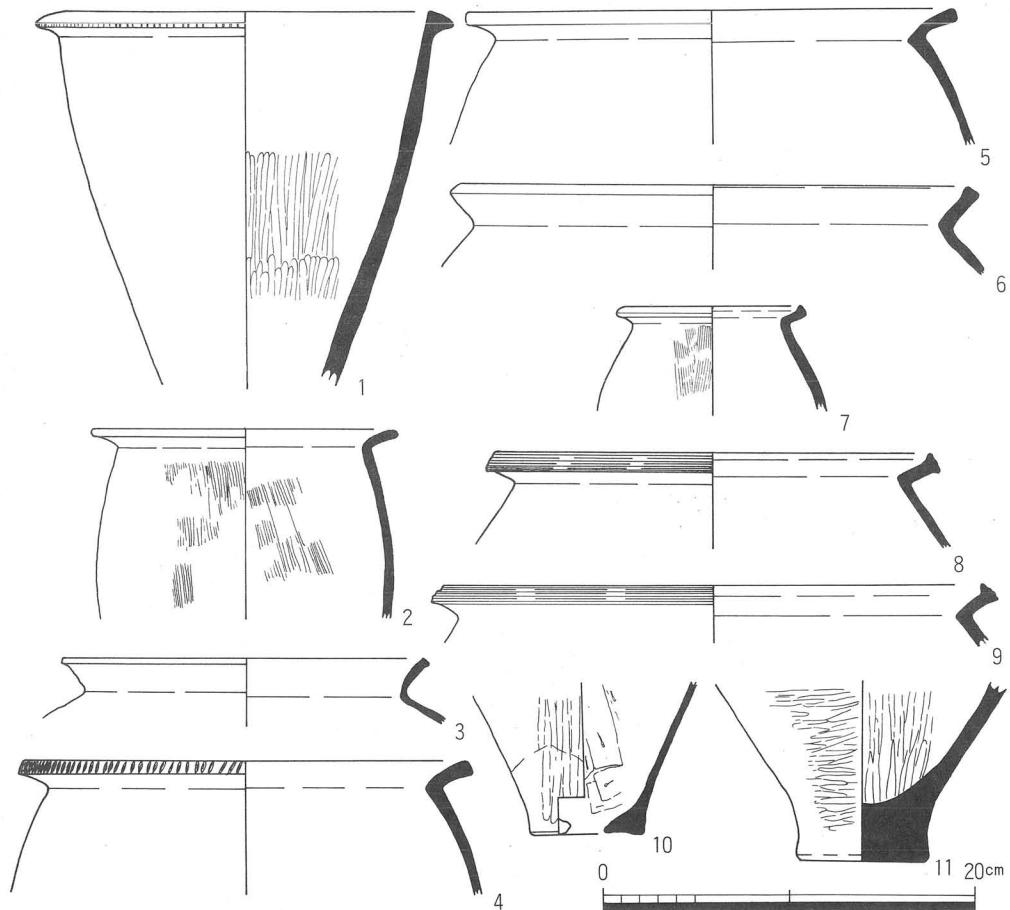
石庖丁 第42図 1～5、 7

1は、刃部及び背部が湾曲する形態のもので、抉りはみられない。刃部は両面からの打ち欠きによって整形する。一方背部は、大きな剝離が認められ、敲打による背つぶしが行われている。2は、平面形態が半月状を呈するもので、抉り等はみられない。刃部は直線的で、両面からの丁寧な打ち欠きを行い刃を整形する。一方背部は大きな打ち欠きを行い、その後敲打による背つぶしを行う。3は、右側縁を欠損する抉りをもつ石庖丁である。刃部は直線的で、両面からの打ち欠きによって鋭利な刃をつける。一方背部はやや湾曲し、両面からの大きな打ち欠きが認められ、敲打による背つぶしを行う。4は抉りをもつ石庖丁の破片である。平面形態は長方形になるものと思われる。抉り部は打ち欠きののち、敲打による整形がみられる。刃部は

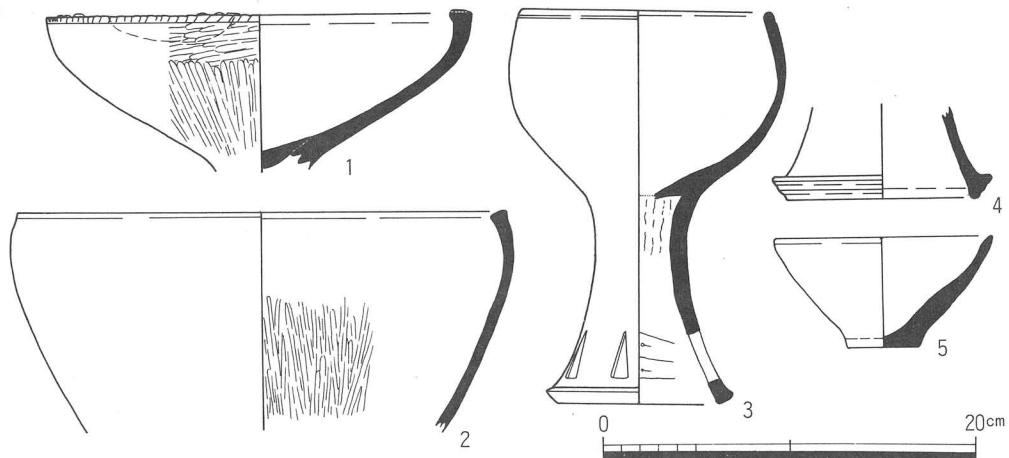
両面からの打ち欠きにより調整され、背部は敲打による背つぶしが認められる。7は平面形態が正方形を呈するもので、刃部は両面から打ち欠きにより整形され、背部は敲打による背つぶしがみられる。左側縁部には抉りが見られ、下縁部には両面からの粗い打ち欠きを行い、刃部をつくりだしているもので、刃部には使用によると思われる磨滅痕がみられる。

削器（刃器）第42図 6～11 第43図 4～9

6は、平面形態は台形を呈する。刃部は両面からの打ち欠きにより整形される。一方上縁部は整形を行っていない。右側縁部に打ち欠きを行い抉りと考えられる部分をつる。8は、湾曲



第40図 1・3区5b砂層出土土器実測図(その3)

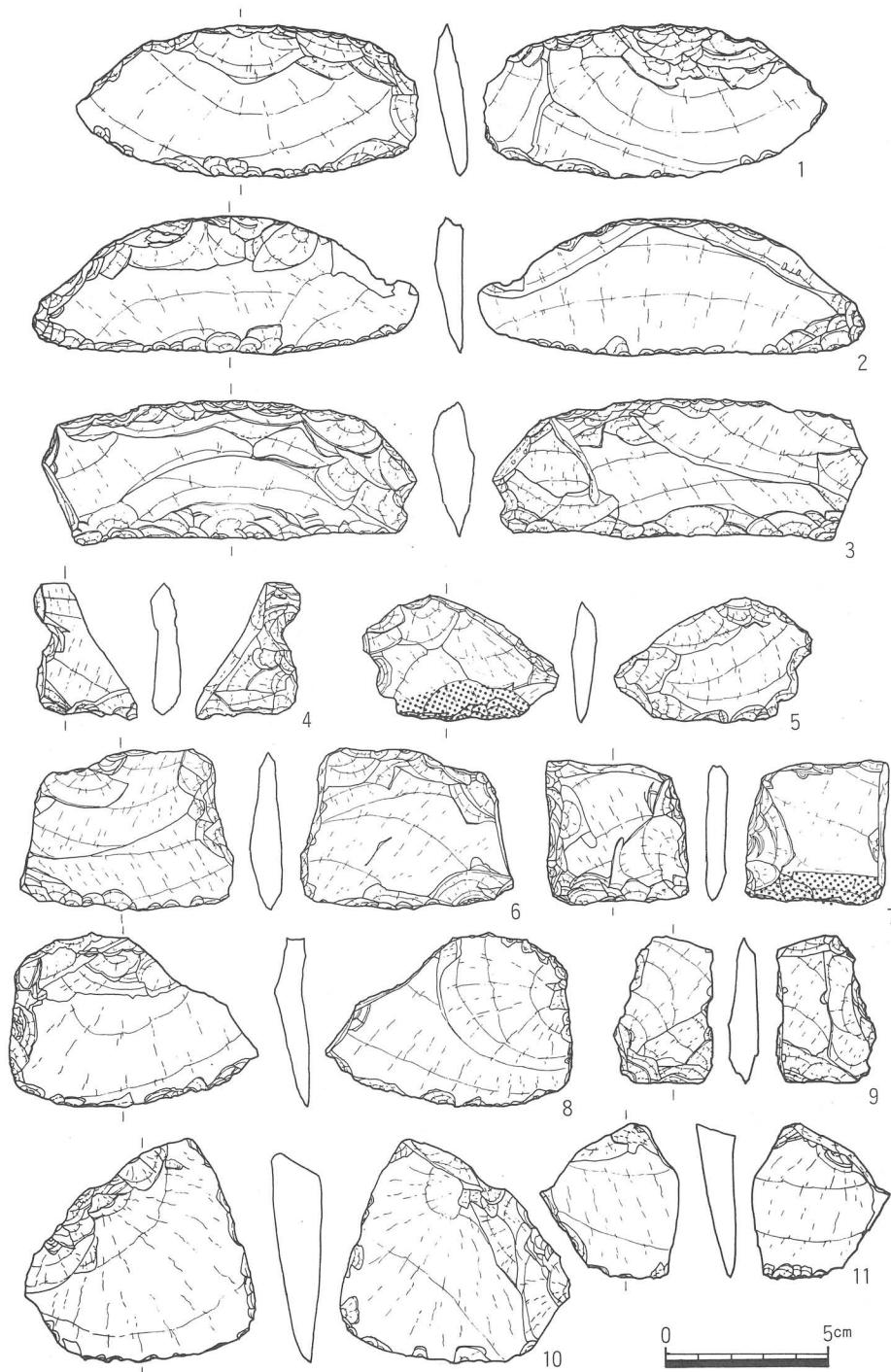


第41図 1・3区5b砂層出土土器実測図(その4)

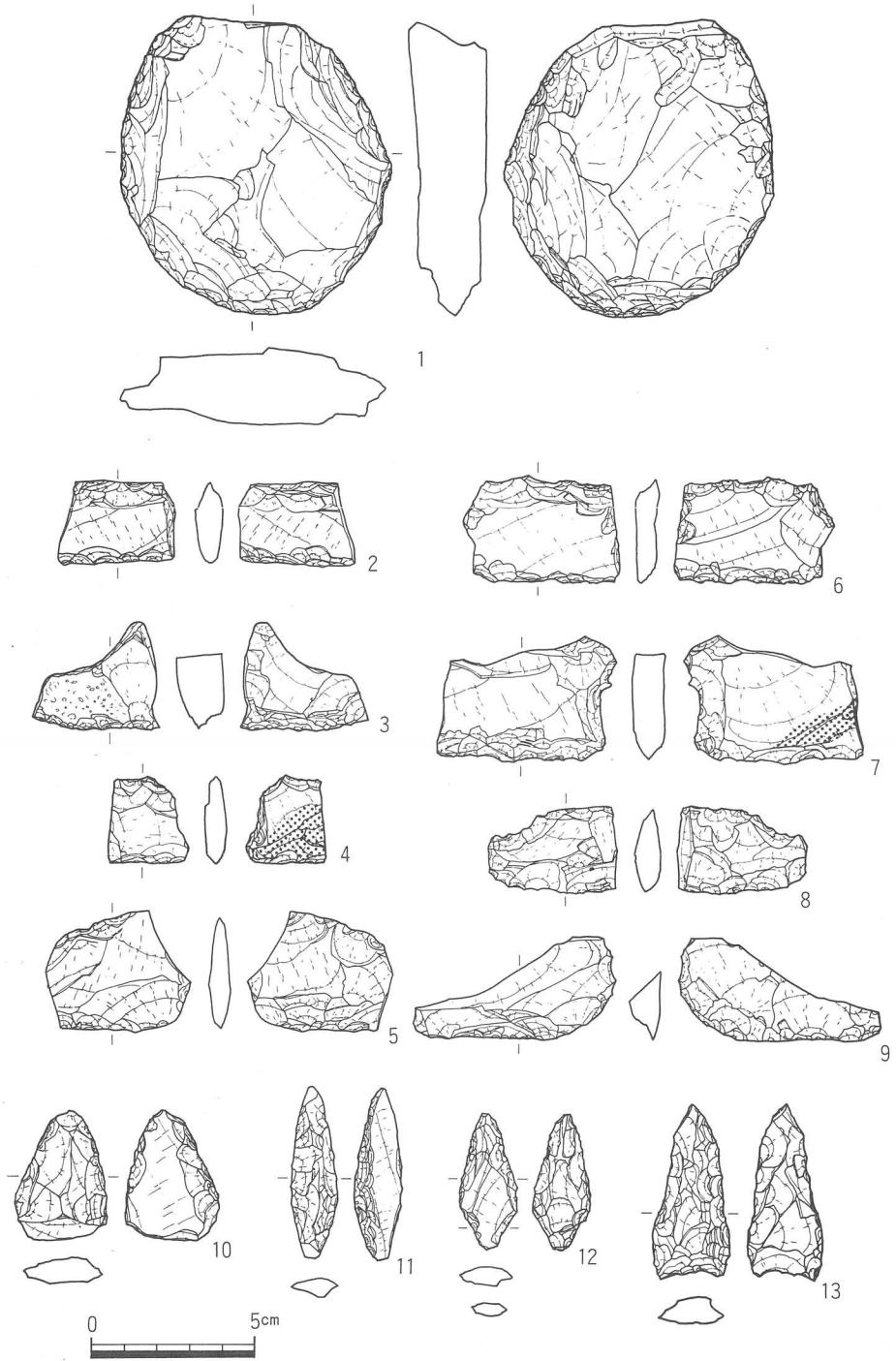
した下縁部に両面からの打ち欠きを行い、刃部を作り出す、上縁部は粗い打ち欠きが認められる。9は、下縁部に粗い打ち欠きが認められる。10は、下縁部及び右側縁部に両面からの打ち欠きが認められ鋭利な刃部をつくる。11は、下縁部に片方からの打ち欠きを施し刃部をつくる。4は、台形を呈する小型の削器である。下縁部は両面からの打ち欠きを行い、上縁部も同様に両面からの打ち欠きがみられ、側縁部においても片面からの抉り状の打ち欠きがみられる。体部中央に使用による磨滅が認められる。5は、上下縁部に両面からの打ち欠きがみられる。6は長方形を呈するもので、上下縁部に両面からの打ち欠きが認められる。7は、両面からの大いな打ち欠きによって鋭利な刃部をつくる。背部はほとんど欠損するが、敲打による背潰しがみられる。側縁部は両面から抉り状の打ち欠きを行う。体部中央には使用による磨滅痕が認められ、4と同様に石庖丁としての用途が考えられる。8は、下縁部において両面からの大いな打ち欠きを行い刃部をつくり、上縁部は両面からの打ち欠きのうち、敲打による背潰しがみられる。9は、側縁部に抉りをもつものである。下縁部に両面からの打ち欠きを行い、側縁部に両面からの打ち欠きを行い抉りをつくる。上縁部は欠損して不明であるが、4、7と同様石庖丁の可能性がある。

円盤状を呈する石器 第43図 1

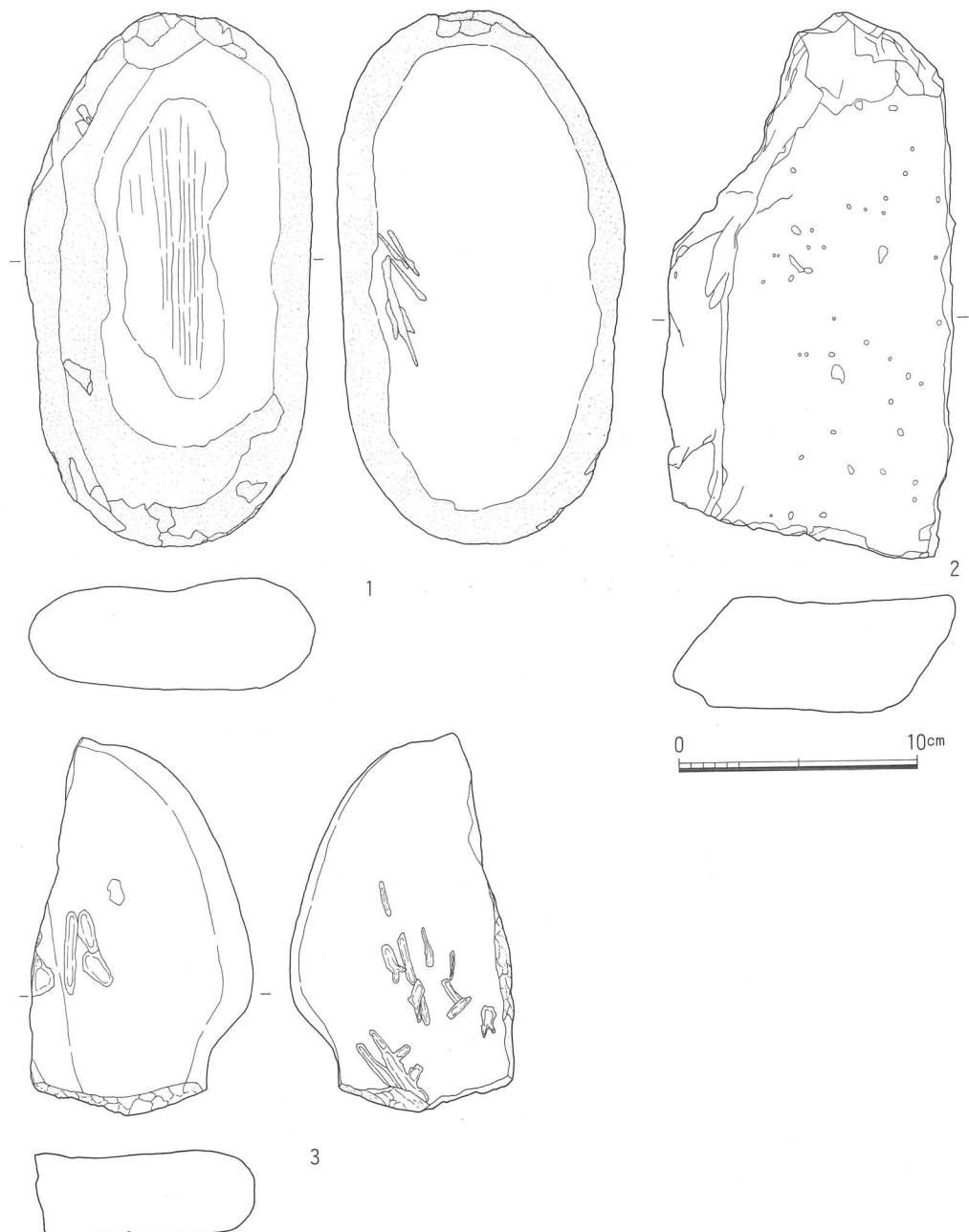
上縁部以外は両面から打ち欠きを行い縁辺部を整形する。長さ9.0cm、厚さ2.3cmを測り、縁辺部に敲打による刃潰れが認められ、階段状剥離が顕著に認められる。紫雲出山遺跡でも同様のものが出土している。



第42図 1・3区5b砂層出土石器実測図(その1)



第43図 1・3区5b砂層出土石器実測図(その2)



第44図 1・3区5b砂層出土石器実測図(その3)

楔形石器 第43図2、3

2は長方形を呈するもので、上縁、下縁ともに打撃による刃潰れ、階段状剥離が認められる。両側縁には裁断面が残る。3は、上縁部を欠損するもので、下縁部には打撃による刃潰れ、階段状剥離が認められる。片面には自然面が残る。両側縁には裁断面が残る。

石槍 第43図10

尖頭部のみの破片で基部を欠損する。両面からの大きな打ち欠きにより縁辺部を調整する。

石鎌 第43図11～13

11は凸基式の石鎌である。先端部及び基部を欠損する。右側縁部は両面からの丁寧な打ち欠きを行うが、一方左側縁部には打ち欠きがあまりみられず大剥離面を残す。12も凸基式の石鎌である。両面からの打ち欠きによって調整を行う。13は凹基式の大型の石鎌である。断面は三角形を呈し、両面からの大きな打ち欠きによって調整を行う。縁辺部は鋭利である。

砥石 第44図1～3

3点の砥石を確認している。1は、2面に使用痕が認められる砂岩製のもので、1面には使用によるくぼみがみられる。裏面は平らであるが、使用による磨耗により表面がなめらかである。2は安山岩製のもので、1面を使用する。表面は使用による磨耗でなめらかである。3は砂岩製のもので、2面に使用痕がみられる。1面には使用により表面に凹凸がみられ、裏面はなめらかである。

木製品（第45図）

1は先端加工の丸木である。残存長は26.9cm、径10.6×9cmである。先端部の加工は不明瞭である。芯持ちである。土坑より直立した状態で出土したことにより、柱材と考えられる。

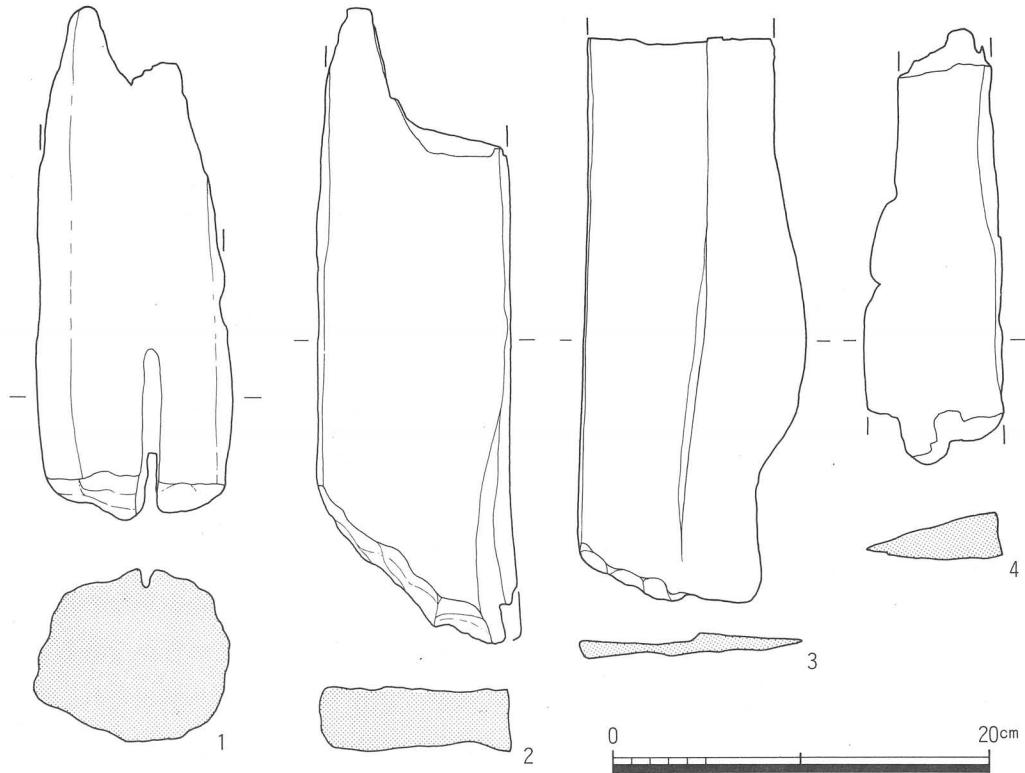
2～4はミカン割りの板材である。2は現存長26.9cm、幅10cm、厚3.6cmを測り、断面長方形を呈し厚い板材である。小口部にはミカン割りする前の切断痕がわずかに残る。3は現存長30.5cm、幅11.6cm、厚1cmを測り、小口部に不明瞭な加工がある。4は現存長23.8cm、幅7.2cm、厚2.4cmを測り、断面は三角形を呈する。柵目材である。

2 2・4区

SR01西岸微高地上遺構群

本遺跡の東半分を占める自然河川SR01の西岸自然堤防上に立地する。

当該地点の遺構面は、弥生時代前期頃の水田面とこれを被覆する黄褐色洪水砂層である。層厚30cmにおよぶ洪水砂層は短期間の数回の洪水によって堆積したようで、最低3面の遺構面が確認できた。すなわち、下層より水田層上面、暗灰色シルト質細砂層（土壤層）、黄褐色砂層の3面である。基本的には1、3区の5b層砂礫層上にみられる遺構群と一連のものと考えられ



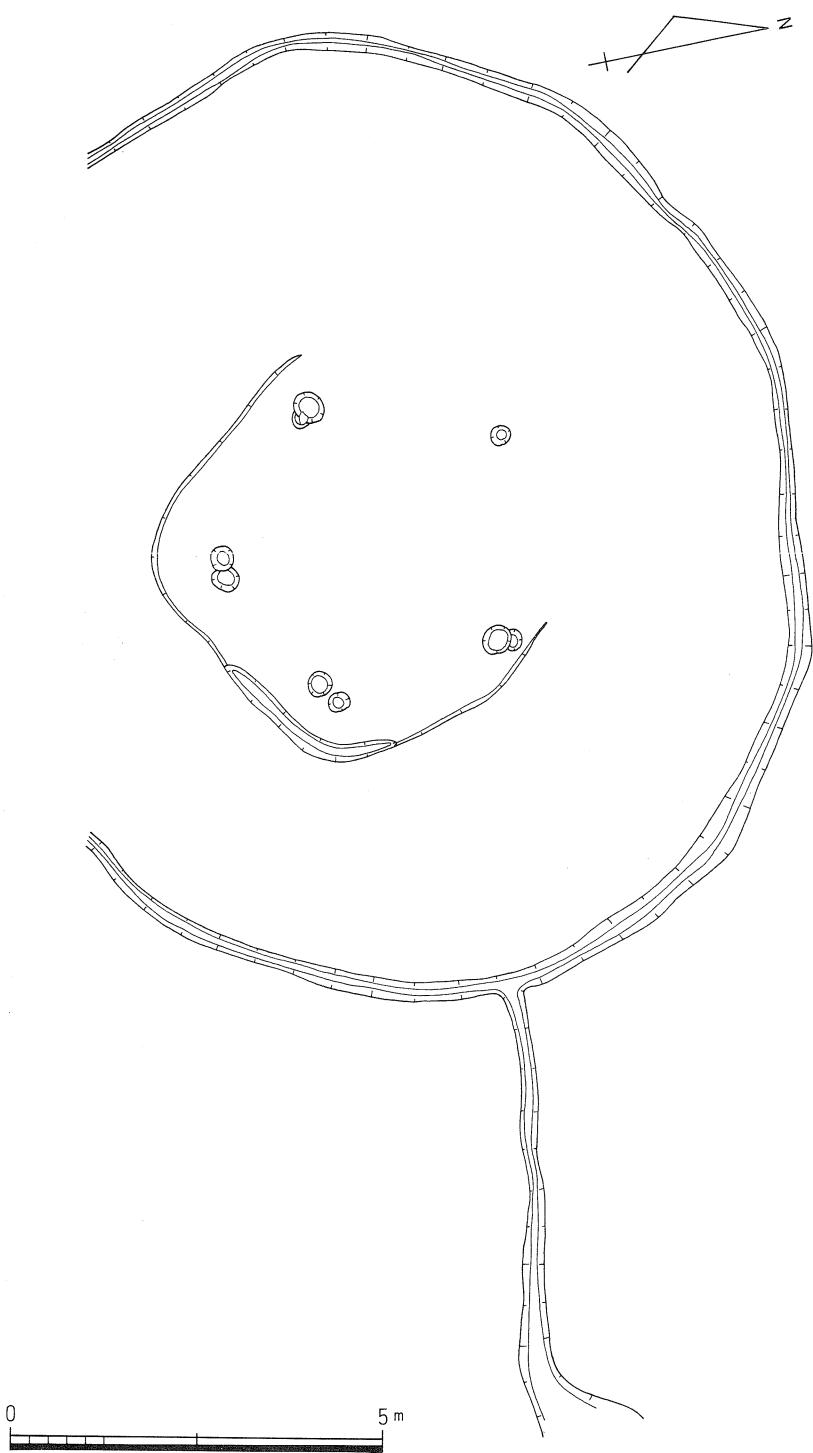
第45図 1・3区5b砂層出土木製品

る。

(1) SH04 (第46図)

SH04は、前期の洪水砂層のうち最上層を掘込み面とし、一辺約5mの不整形の隅丸方形を呈するが、平面プランの西北部三分の一ほどが削平により消滅している。柱穴は外形のすぐ内側にはほぼ正五角形に配置されており、このうちの4箇所は2穴が切り合うため、建て替えがあったものと考えられる。柱穴は直径30cm前後、深さ約20cmを測る。中央ピットは確認されていない。

SH04には、住居跡を中心として直径約12.5mの周溝がめぐっている。周溝は、幅20cm、深さ約5cmで、住居跡東側から真東に排水のための支線が掘削されている。支線は途中で消滅しているが、本来はSR01にまで達していたものと考えられる。



第46図 SH04完掘平面図

(2) SB03 (第47図)

SH04の北側からSH04に重なる位置にかけて、東西棟3棟が南北に並ぶうちの北側の建物跡である。東西3間、南北1間で遺構確認面は弥生前期頃の水田層上面であった。柱間は梁行約3.5m、桁行2mで、埋土は暗褐色シルト質細砂であった。柱穴は8穴中7穴が上層からのピットで切られているが、柱穴は平面の直径70cm～120cmの隅丸方形または楕円形、深さ20cm程度に復原できる。SB03を切る柱穴群については、位置関係からさらに1棟の掘立柱建物に復原できる可能性もなくはないが、この調査ではそこまでの確証が得られなかった。

(3) SB04 (第48図)

SB03の南側にはほぼ向きを同じくする南北1間、東西2間の掘立柱建物跡である。埋土はSB03と同様。梁間、桁間共に約3mを測る。柱穴は平面直径35～40cmの円形または楕円形。深さは20cm前後である。根石は確認されていない。

(4) SB05 (第49図)

SB04の南側に位置する東西棟で、1×2間の掘立柱建物跡である。梁間、桁間共に2.5m。埋土はSB03・04と同様であった。柱穴は平面円形で直径約50cm、深さは約40cmを測る。四隅の柱穴のうち3穴に根石が認められる。

(5) SB06 (第50図)

SB05の東側、SR01の河岸のすぐ脇に立地する、1×1間の掘立柱建物跡である。柱間は東西2.5m、南北3m、柱穴の平面直径約40cm、深さは25cmを測る。

(6) SA01

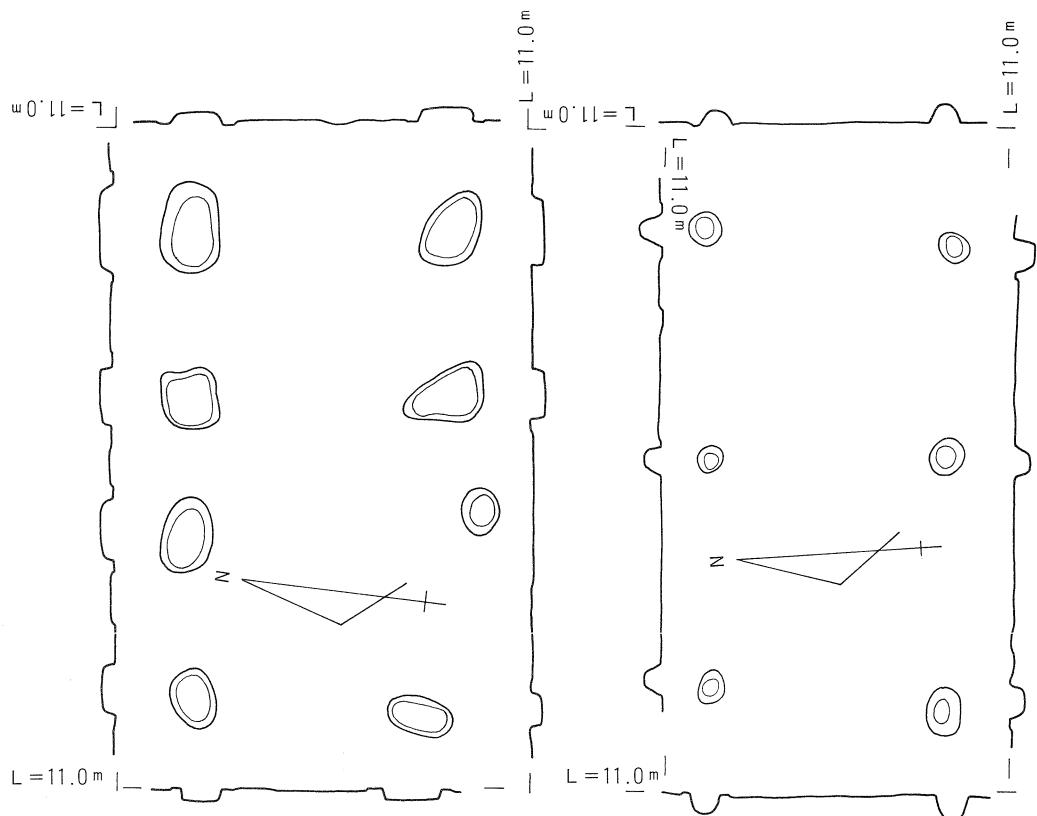
SH04の南東側、調査区の南端でほぼ東西列に3穴が並ぶ。ピットは直径40cm前後、深さ15～23cmを測る。柱穴の間隔は2.2cmでSR01の周溝と交錯する。遺物は確認されていない。

(7) SA02

SH01東側で、SR01の川筋に沿った南南東から北北西方向に3穴が並ぶ。柱穴の直径約40cm、深さ60～80cm、柱穴の間隔は2.2～2.5mを測る。中央の柱穴がSH04の周溝からSR01に伸びる排水溝を切っている。遺物の出土は確認できなかった。

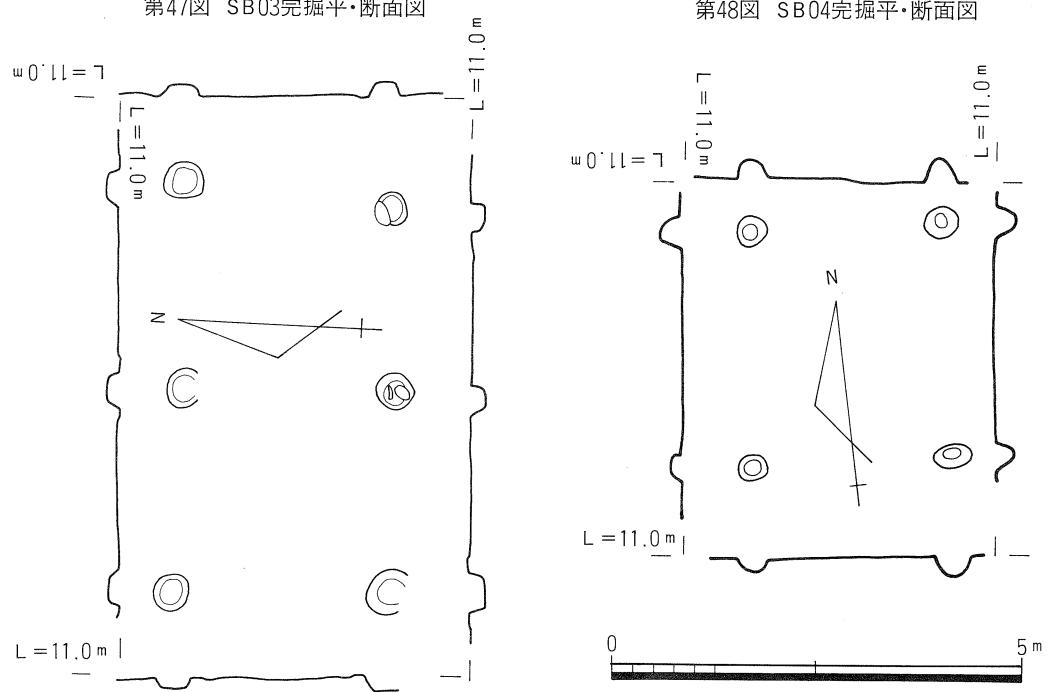
(8) SR01西岸微高地上ピット群 (第51図)

SR01西岸上でも2区の南端の南北2.5m東西8mの範囲に100個足らずが密集して存在している。密集の範囲は半径約5mの円軌跡を描くと思われる。南半分は3区外にはずれるが、畦をはさんで南側では検出されなかっただため、畦と側溝の範囲の内で収束しているものと考えられる。ピット群の確認面は、6a層黒色粘土層除去後の6b層灰黄色粘土層上面であるが、実際の掘込面は4a層黒褐色シルト質細砂層の上面と推定される。ピットは直径30cm前後、深さ10cm弱ほどの小規模なものが多く、拳大の川原石を根固めに利用しているものが目立つ。竪穴もしく



第47図 SB03完掘平・断面図

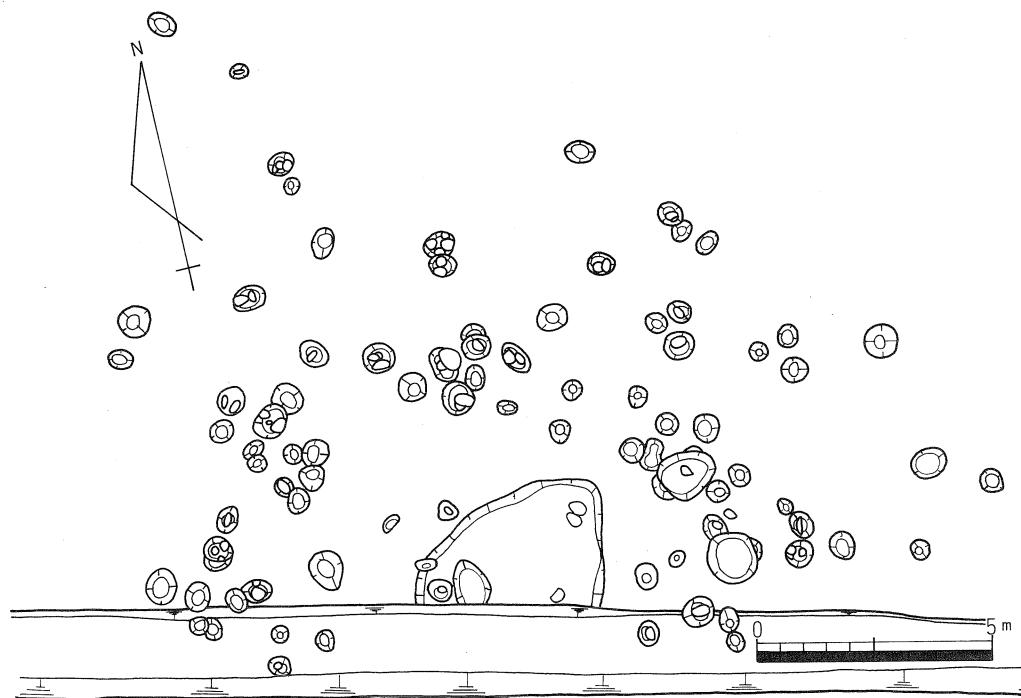
第48図 SB04完掘平・断面図



第49図 SB05完掘平・断面図

第50図 SB06完掘平・断面図

は平地式の住居の柱（乗木）跡と推定して2、3通りの立替か拡張の復元推定が可能であるが、ピットの対応関係を特定するまでにはいたらなかった。



第51図 SR01西岸ピット群平面図

(9) SD09

SR01の西傾斜面が河底部に移る傾斜変換点付近に川筋に沿って掘削された溝で、幅約30cm、深さ約15cmを測る。溝落方の河道側は立ち上がりずに川底に落ちるため、傾斜部に横方向に抉り込むような形になっている。埋土は11層と同様黒褐色シルト質中砂で、遺物も同時期のものが濃密に混入していた。

出土遺物 第52図1～24

SD09からは前期末から後期後半までの土器が出土している。

壺型土器 1～12

1～4と7は前期末と考えられる壺である。1、2は口縁部が大きく外反する広口壺である。7は口縁端部に装飾を施す広口壺である。端部上面に刻目突帯文及び三角形の刺突文を施し、外面に綾杉文及び押圧突帯文を施す。3、4は短頸壺である。大きく張った胴部をもち、調整は外面ミガキ、内面ナデ調整を施す。

5、6、8、9は中期前半の壺である。口縁部が少し外反し、端部が肥厚する口縁である。頸部に押圧突帯文、端部に刻目文を施す。

10は中期後半の壺である。口縁部が上下方向に拡張し、外面に凹線文を4条めぐらし、内面には櫛描波状文をめぐらす。

11、12は後期後半頃の壺である。筒条の頸部から屈曲し直線的に外反するもので、端部をつまみ上げる。内外面ともナデ調整を施す。

甕形土器13～21

13～17は、中期前半の如意状及び逆L字状の口縁をもつ甕である。無文のものと多条の櫛描直線文をめぐらすものがあり、調整は内面にミガキを施すもの他に、ハケメとナデ調整を施すものがみられる。

18、19は中期前半の「く」の字状に屈曲し、端部が若干肥厚するもので、調整は、18の体部外面にハケ調整がみられる。

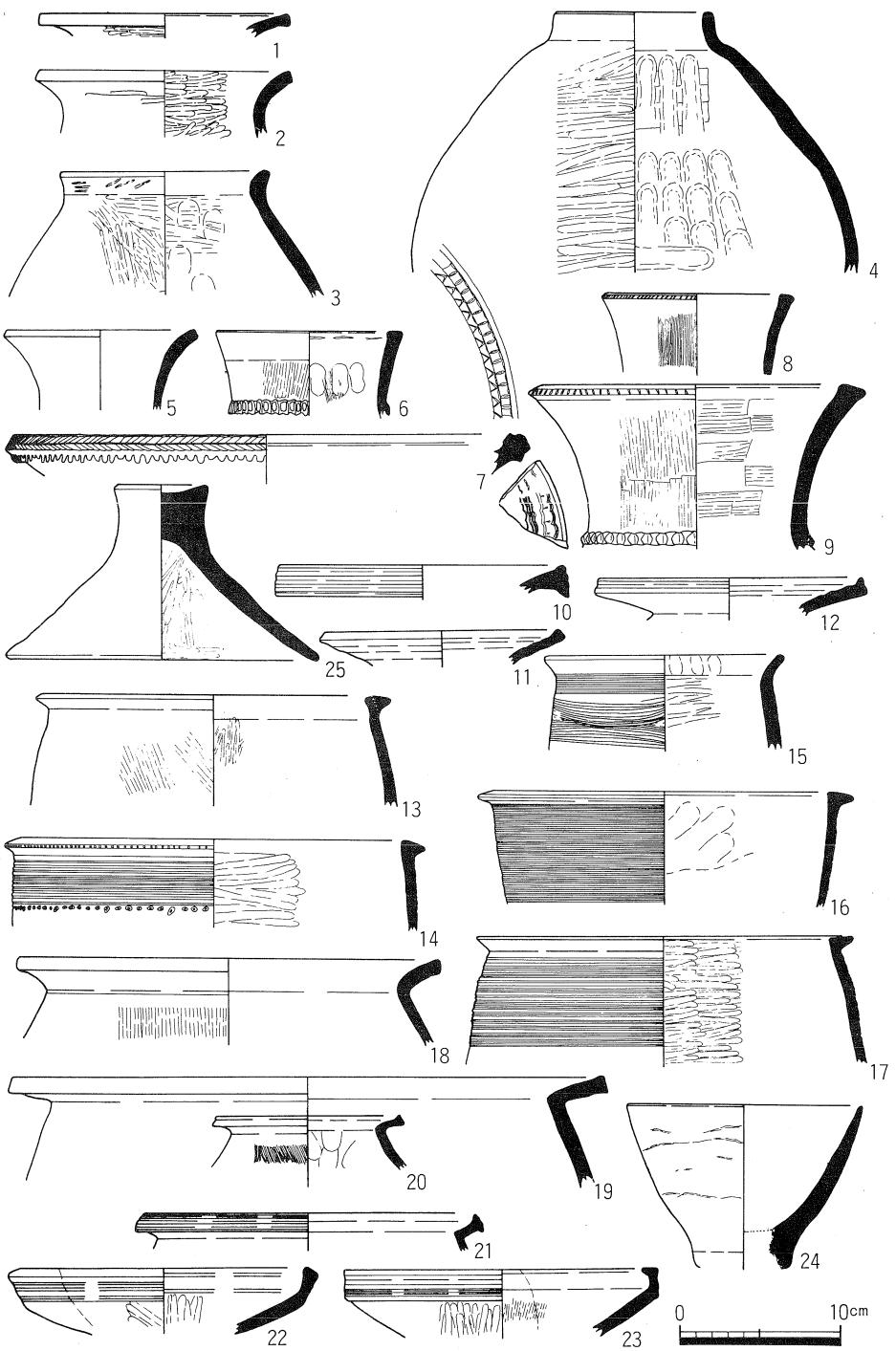
20、21は中期後半の「く」の字状に屈曲し、端部を肥厚させ、外面に凹線文をめぐらす。調整は外面ハケ、内面ナデを施す。

高杯形土器 22、23

皿条の杯部から屈曲し、直立してたちあがり、端部を肥厚させる口縁部をもつ。外面に凹線を3条めぐらす。調整は杯部内面にミガキを施す。22の杯部内面はハケメ、外面ミガキを施す。

鉢形土器 24

椀形に平底がつくもので、端部は細くなり丸く終わる。粗雑なつくりのもので接合痕が残る。調整は内外面ナデを施す。



第52図 2・4区 SD09出土土器

(10) その他の出土遺物

SP11 第56図

小型の壺形土器が1点のみ出土している。口縁部が短く外反し、胴部が大きく張る形態である。文様等は施さない。小型ではあるが前期末が考えられる。

SP13 第57図

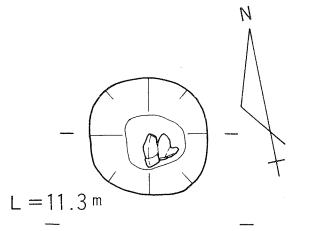
甕形土器のみが出土している。1、3～5は、逆L字状口縁をもつもので、端部の断面は三角形を呈する。胴部はほとんど張らない。文様は、5の口縁部に刻目文を施す以外は無文である。2は底部である。

これらの遺物から年代を考えると、無文の逆L字状口縁の甕が中期前葉前半まで残ることより、新しい方を探り中期前葉前半と考えておきたい。

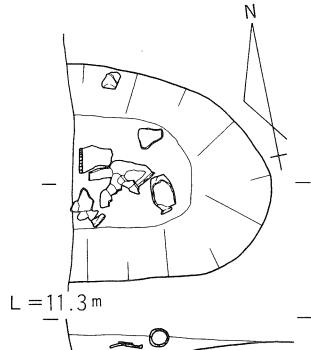
SK09 第58図

1は、壺形土器である。口縁部が短く外反し、端部が肥厚する。胴部が大きく張る形態になるものと思われる。2、3は「く」の字状に屈曲し、3は端部を上につまみ上げる。胴部は大きく張る。4、5は、甕の底部であり、6は壺の底部と考えられる。

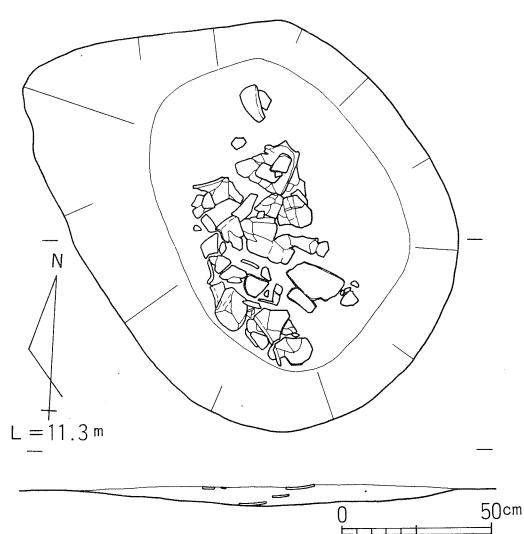
これらの遺物は、甕の胴部が大きく張る状況、凹線文がみられないことにより、中期中葉前半の時期が考えられる。



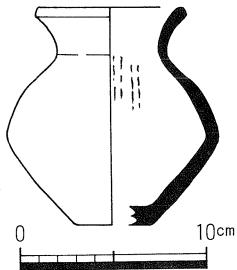
第53図 SP11遺物出土状況図



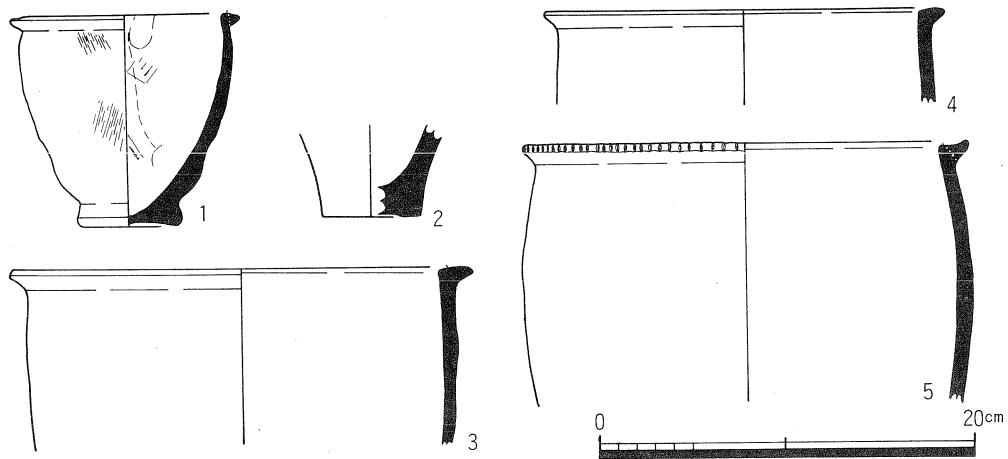
第54図 SP13遺物出土状況図



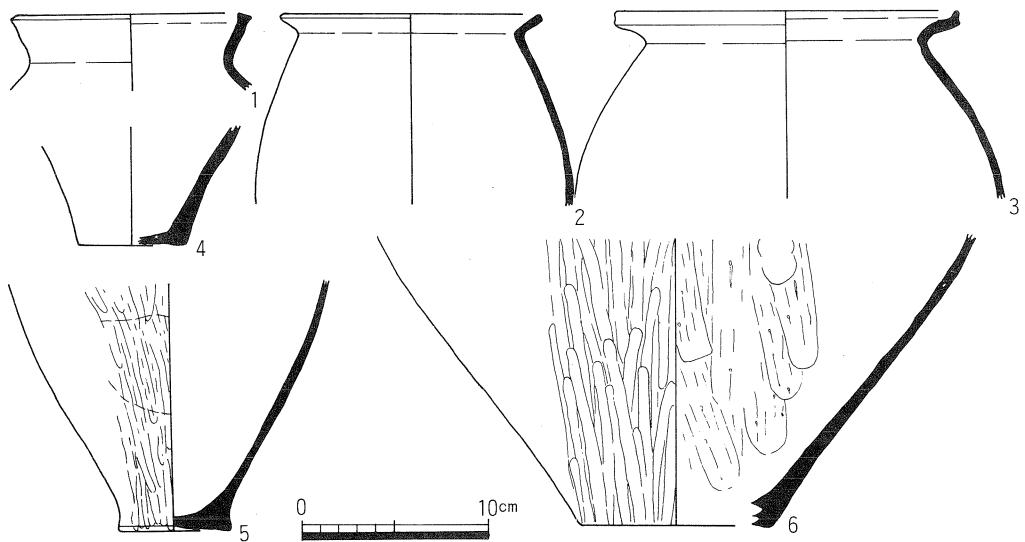
第55図 SK09遺物出土状況図



第56図 4区SP11出土土器



第57図 4区SP13出土土器



第58図 4区SK09出土土器

(11) S R 0 1 10、11層

SR01東端の流路部分の約13m幅のみに確認された層で、現地表下約2mを測る。10層は黒褐色～黒色のシルトまたはシルト質極細砂、11層は黒褐色シルト質中砂で、いずれも20～30cmの層厚を測り弥生前期末から後期後半までの遺物を濃密に包含していた。上層の8、9層は暗褐色の極細砂質シルト層で土壤化がよく進み、8a層上面には水田層が確認されていることか、10、11層の堆積時期はこの流路が河川として機能した最末期にあたるものと考えられる。この流路の埋没後、SR01内の水路は、東端の浴・松ノ木遺跡に移ったものと考えられる。

ア. 10～11層出土土器（第59図）

2区と4区の間に残した土層観察用畦から出土したもののうち、形態、文様等で特徴的なもののみを取り上げる。

1は、ほぼ直立してたちあがる口縁をもち、端部に向かって徐々に肥厚する。頸部から胴部にかけてゆるやかに広がる。文様は口縁部から頸部にかけて櫛描き波状文と直線文を交互にめぐらす。2は頸部から大きく外反する口縁をもち、端部は上下に肥厚する。文様は端部外面に刻目文、頸部に範記号を施す。3は頸部から大きく外反する口縁をもち、端部を肥厚させる。文様は端部外面に刻目文、頸部外面に突帯文を2条めぐらす。4は頸部から大きく外反する口縁をもち、端部を肥厚させる。文様は端部上部に刻目文、頸部に押圧突帯文、その下に櫛描直線文をめぐらす。5は上下に肥厚させた端部外面に凹線文3条をめぐらし、端部内面に櫛描直線文及び櫛描U字状文を施す。6は、上下に肥厚させた端部外面に斜格子文、端部内面に3条一対の櫛描波状文、頸部外面に刻目突帯文を2条めぐらす。7は上下に肥厚させた端部外面に斜格子文、内面に貼付突帯文を施す。8は、上下に肥厚させた端部外面に2条の凹線文をめぐらした後に刻目文、内面には斜格子文及び2孔一対の円孔を施す。

9は「く」の字状に屈曲し、端部を上につまみ上げ、胴部が大きく張る甕である。文様は口縁端部外面に刻目文、胴部上半に櫛描波状文をめぐらす。

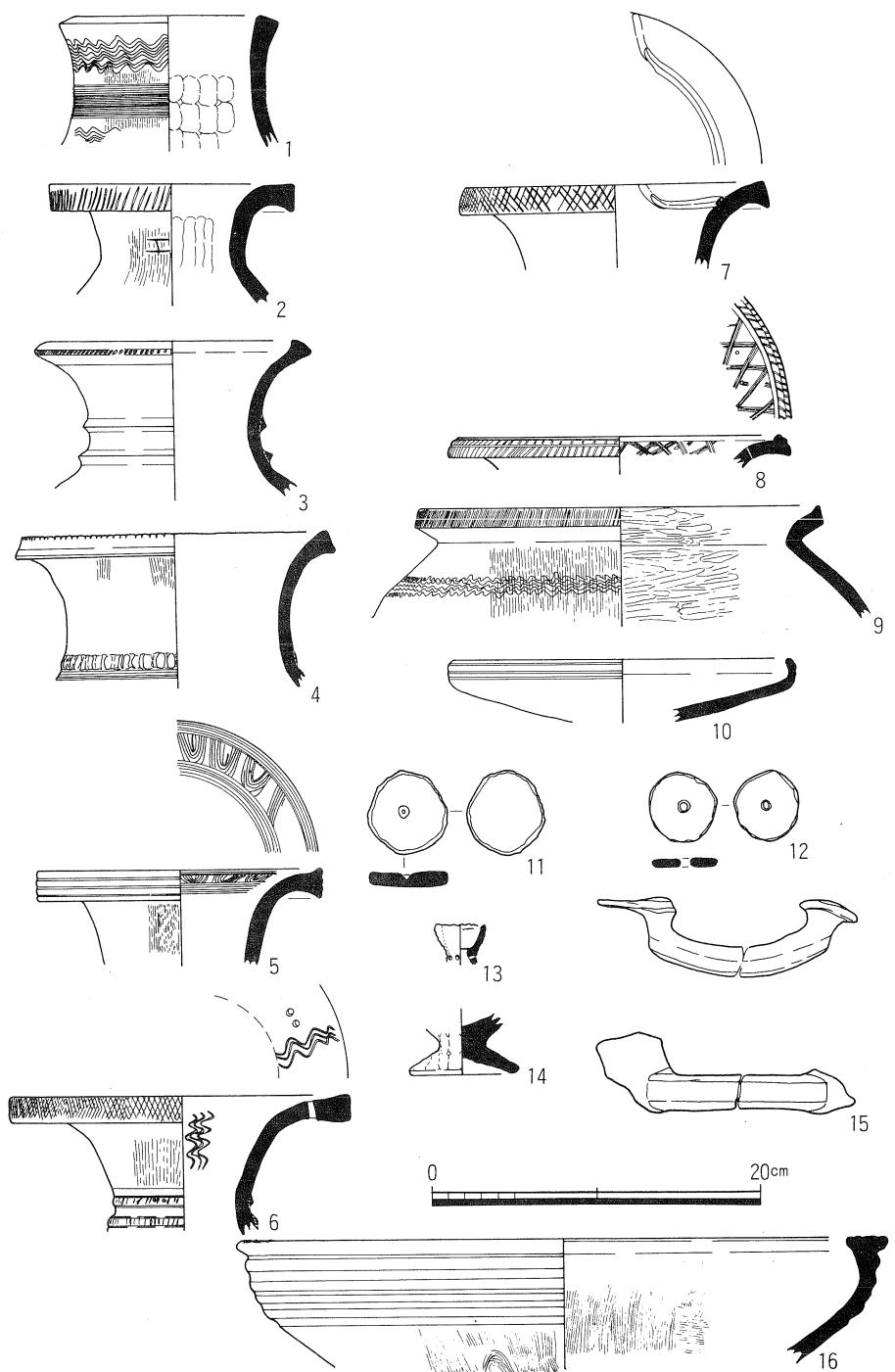
10は、皿状の杯部から内湾しながらたちあがる口縁部をもつ高杯形土器である。口縁部外面に凹線を3状めぐらす。

16は、皿状の杯部から屈曲して直立に立ち上がり、端部を左右に拡張する大型の鉢形土器である。端部上面及び外面に凹線文をめぐらす。

11、12は紡錘車である。いずれも土器片を利用したもので、打ち欠き痕がみられる。11は穿孔が貫通していない未製品である。

13は、ミニチュア土器である。鉢形土器であろうか。

14は脚部である。15は大型の鉢形土器の把手である。



第59図 2・4区 SR01 10~11層出土土器

イ. 11層出土遺物

11層からは、弥生時代前期末から後期後半にかけての多量の土器・石器が混在した状態で出土している。これらの土器群は、一括遺物としては扱えないものの、時期ごとの土器の形態変化の流れは追えそうであるため、周辺地域の土器変化を参考にしながら前期末の様相から眺めてみたい。

前期未段階

壺形土器 第60図1～6

広口壺になるものがほとんどである。頸部近くに篦描沈線文を施し、その下に三角形の刺突文を施す（1、6）ものと、文様をもたないものがある。調整は外面ヨコナデ、内面ヘラミガキを施す（1、2、4、6）ものと、内外面ヨコナデを施す（3）がある。

甕形土器 第61図1～8 第62図1～15

頸部直下に多条の篦描沈線文を施すものと無文のものに大別される。頸部直下に沈線文をもつものは、口縁部の形態よりさらに2タイプに分かれる。如意状口縁をもつもの（1、2）と、断面三角形状の逆L字状の口縁を有するもの（3～8）に分かれる。文様は頸部直下に多条の沈線、その下に三角形及び円形の刺突文を施す。口縁部に刻目、刺突文を施すものも見られる。調整は外面にハケメ調整を施すものとミガキ調整を施すものがある。内面はナデ調整を施すものが大半で、（3）のようにミガキ調整を施すものもある。

一方、文様をもたない甕においても口縁部の形態によって2タイプに分かれる。如意状口縁をもつもの（1～5）、断面逆L字状口縁のもの（6～15）がある。調整は、外面ハケ、内面ナデ調整（3、6、7）、内外面ヘラミガキ調整（1、8）、外面ハケ、内面ミガキ調整（4、5、15）、外面ナデ、内面ミガキ調整（14）、内外面ともナデ調整（2、9～13）を施す。

鉢形土器 第63図1～3

斜め上方向に開く口縁部をもち、端部はほとんど肥厚しない、器高が深くなる鉢形土器である。調整は内外面ミガキ調整（1、3）と、内面のみミガキ調整（2）がある。

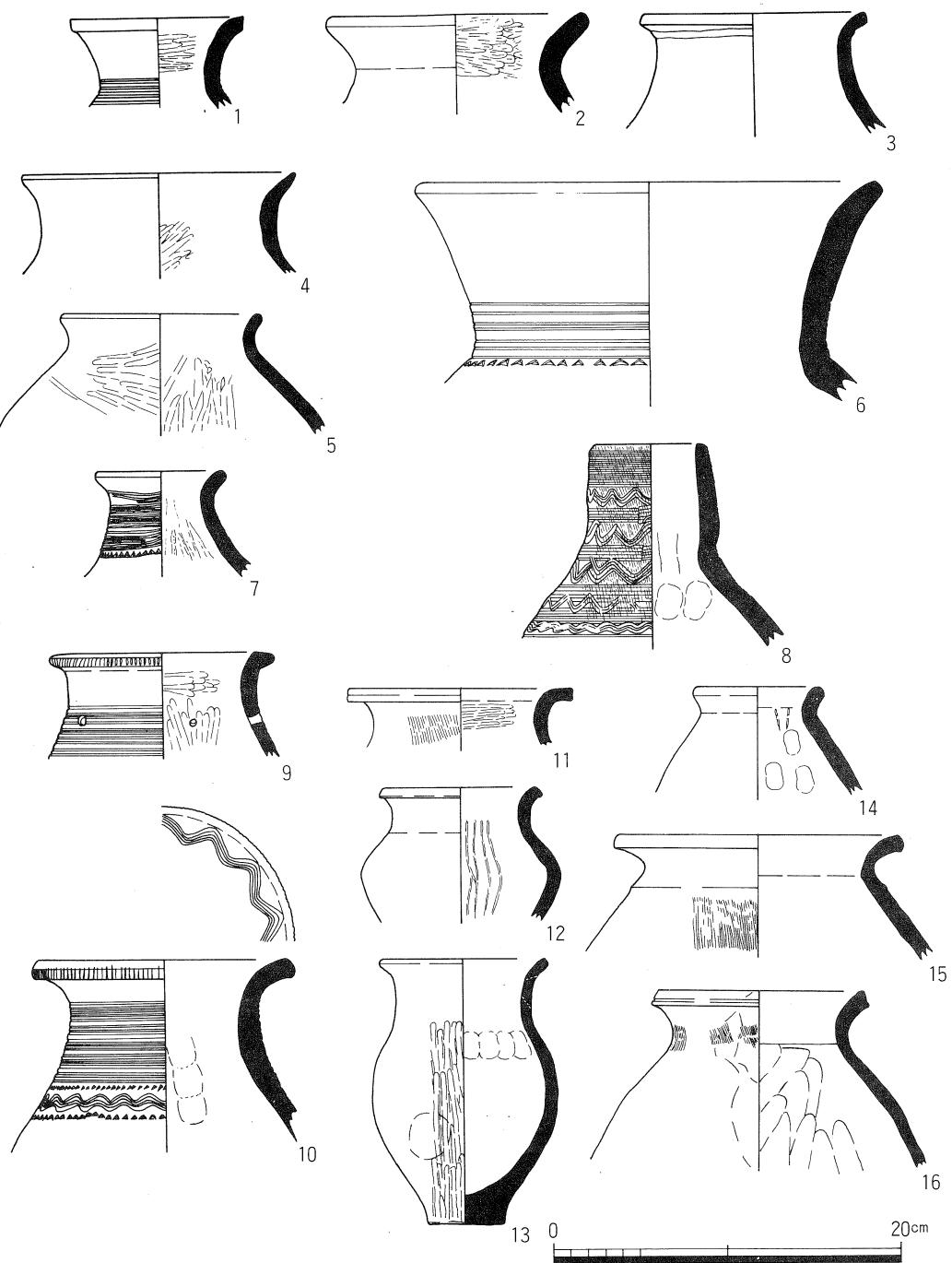
中期前葉前半（古層）

壺形土器 第60図7、8

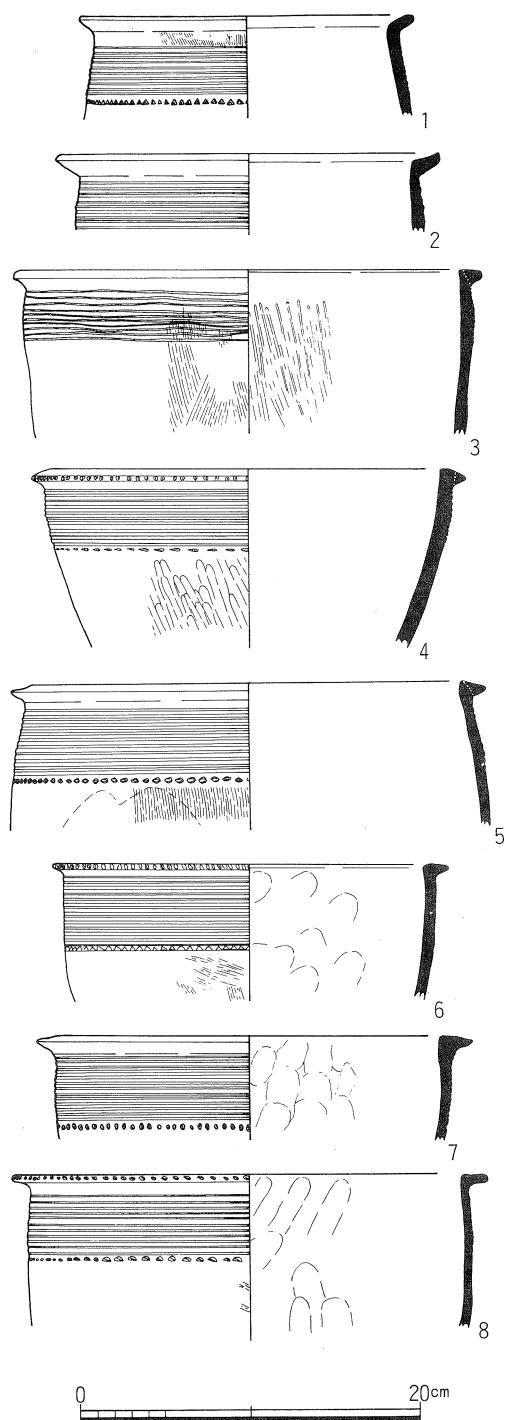
広口壺と細頸壺がある。7は前様式からつづく形態の広口壺である。文様等の施文も同様であるが、篦描きから櫛描きへと変化している。8は、胴部が大きく張ると考えられる長頸壺である。ハケメ調整の後、口縁部から胴部にかけて櫛描直線文と波状文を交互に配し施文を行う。胎土に砂粒を多く含み、他の土器とは異質である。

甕形土器 第64図1～14 第65図1～5

逆L字状の口縁をもつ古相の一群と、口縁部が「く」の字状に屈曲して胴部がやや張り、新



第60図 SR01 11層出土土器(その1)



第61図 SR01 11層出土土器(その2)

相を示す一群がある。逆L字状口縁をもつ一群（第3図1～14）は、断面三角形の口縁部をもち、胴部は張らない形態である。文様等の施工方法は前様式と同様で、口縁部直下から胴部にかけて多条の櫛描直線文を施す。その下に波状文を施すもの（1～5、13、14）、簾状文を施すもの（8）、三角形の刺突文を施すもの（12）、何も施さないもの等に分かれ、口縁端部に刻目を施すもの（12）もみられる。調整方法は外面上部をハケメ調整で行い、下半部を縦方向もしくは横方向のミガキ調整を行うものが大半で、内外面をナデ調整で行うもの（5、8、9）、内面をハケ調整で行うもの（2）も見られる。

一方、新相を示す、口縁部が「く」の字状に屈曲する一群（第4図1～4）は、胴部がやや張り、古相を呈するものより大型である。文様等の施工方法は古相を呈するものと同様で、多条の櫛描直線文、その下に刺突文を施すものと波状文を施すものがある。調整は、口縁部以外はミガキ調整を主体として施す。

中期前葉後半

壺形土器 第60図9～16

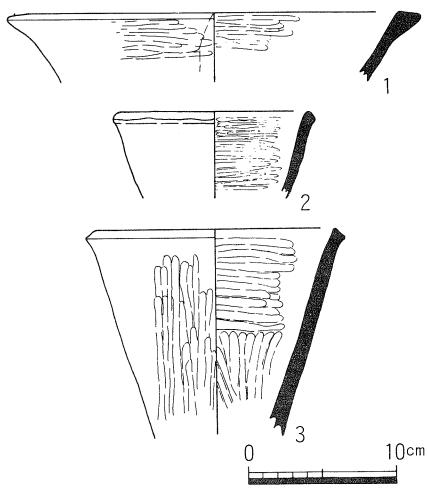
第66図1～15 第67図1～23

文様をもつ広口壺ともたないものがある。文様を有する広口壺（9、10）は、前様式のものに比べ、胴部があまり張らない形態になるものと考えられる。文様の施工方法は前様式と同様で頸部に施工する。一方、無文のもの（11～16）についても、形態的には文様を有するものと同様に胴部があまり張らないものと考えられる。

短頸広口壺と無頸壺が確認できる。短頸広口



第62図 SR01 11層出土土器(その3)



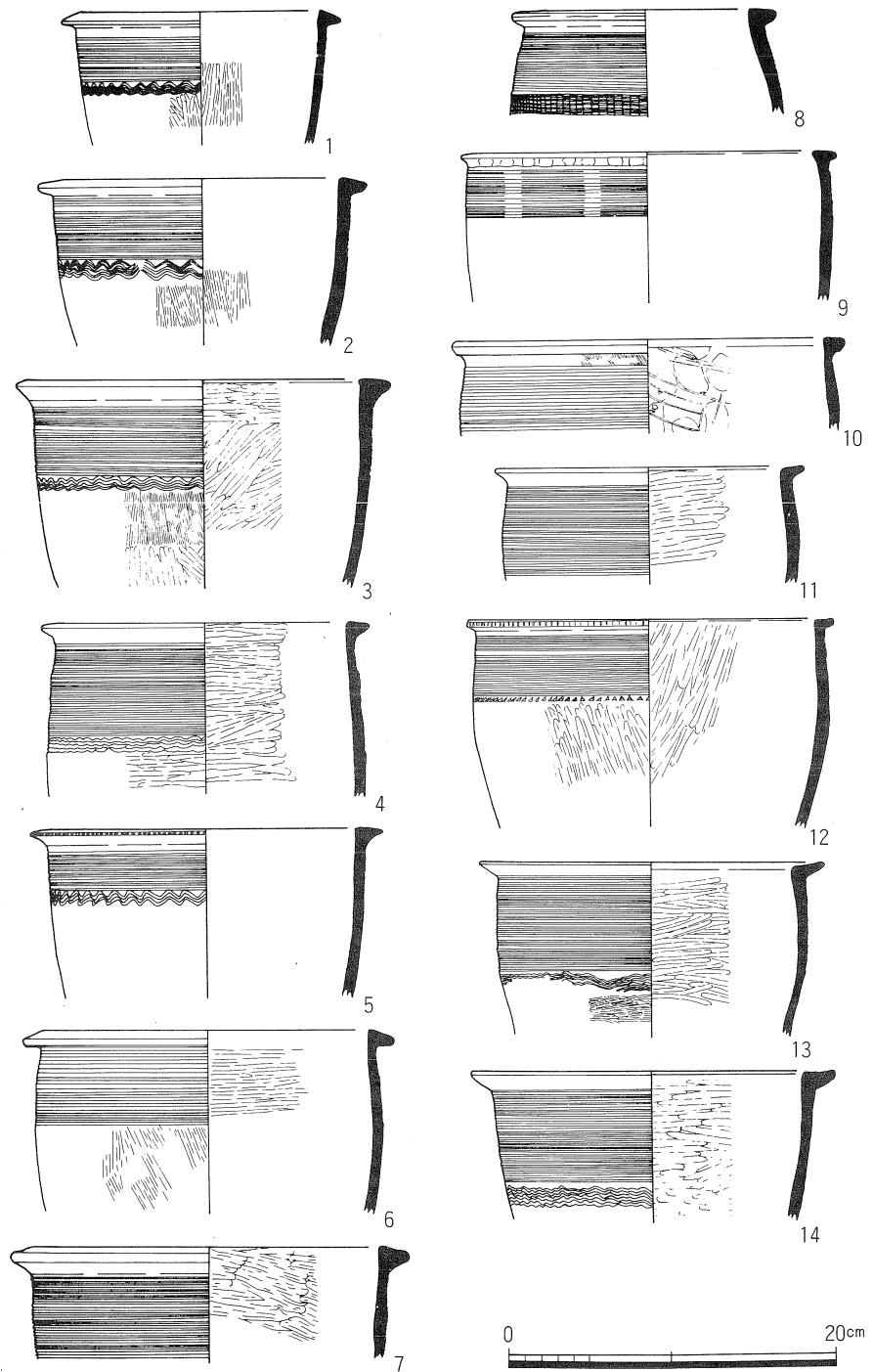
第63図 SR01 11層出土土器(その4)

壺は、形態的には大きく外反してそのまま終わるものと、大きく外反して下方に垂れるものがある。1～8は、大きく外反するものと、大きく外反して垂れるものがある。文様は、口縁部に刻目を施すもの（2、3、8）以外には文様等はみられない。9～11は、大きく開いた口縁部上面に突帯をめぐらす広口壺で、大きく張る胴部がつくものと思われる。9は、頸部に2条の刻目突帯文を施し、口縁部及び口縁部上面に数個の穿孔が確認できる。10は、9と同様で文様の施文は口縁部上面に刻目突帯文、2孔一対の穿孔があり、口縁部には刻目文を施す。頸部には櫛描列点文、その下に突帯2条及び櫛描直線文が3条確認できる。11は大きく開く口縁部上面に刻目突帯をめぐらせ、穿孔も3個確認できる。口縁端部には刻目を施す。12、13は大きく外反し下方に垂れる口縁部をもつ壺で、13は口縁部上面に櫛描の条線を施し、12は頸部に押圧突帯文を2条施す。14は口縁部に櫛描列点文、頸部に3条の突帯がめぐり、その下に櫛描沈線文6条が確認できる。15は口縁部の上下に刻目を施すもので、頸部に2条の櫛描沈線文が確認できる。第15図1～21は斜め上方に開く広口壺である。口縁部から頸部にかけての施文方法により大きく4つに分かれる。1、2は口縁部外面に押圧突帯文を3条めぐらせる。1はその下に櫛描直線文が数条確認でき、2は口縁端部に刻目文を施す。3～7は、口縁部外面に2～3条の刻目突帯文を施すものである。8～13は口縁端部に刻目文を施し、頸部以下に櫛描文を施すものである。外面の調整はハケ調整を行い、内面はナデ調整を行うものが大半である。14～22は口縁部は無文である。頸部以下に櫛描文を14のように施すものと考えられる。調整は外面ハケ、内面ナデ調整を行うものと、内外面をナデ調整するものがある。

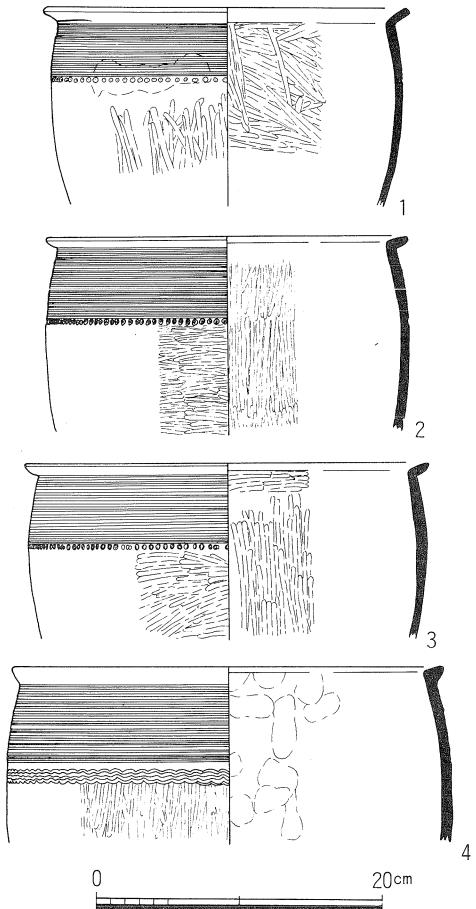
22は、無頸壺の口縁部である。口縁部外面に波状文、端部に刻目文を施す。端部近くに2孔一対の円孔が確認できる。

甕形土器 第68図1～17 第69図1～7

口径の法量より3つのサイズに分かれる。口径14cm全後のものを小、口径20cm前後のものを中、口径26～30cmのものを大とした。形態的には「く」の字状口縁をもつもので、口縁端部を上方につまみ上げるものも見られる。胴部最大径が口径より広くならず、全体にシャープな作りである。口径14cmのものの調整は外面上部ハケ、下部にミガキを施し内面ヘラミガキを施すものと、外面調整は同じで内面にナデ調整を行うものも見られる。



第64図 SR01 11層出土土器(その5)



第65図 SR01 11層出土土器(その6)

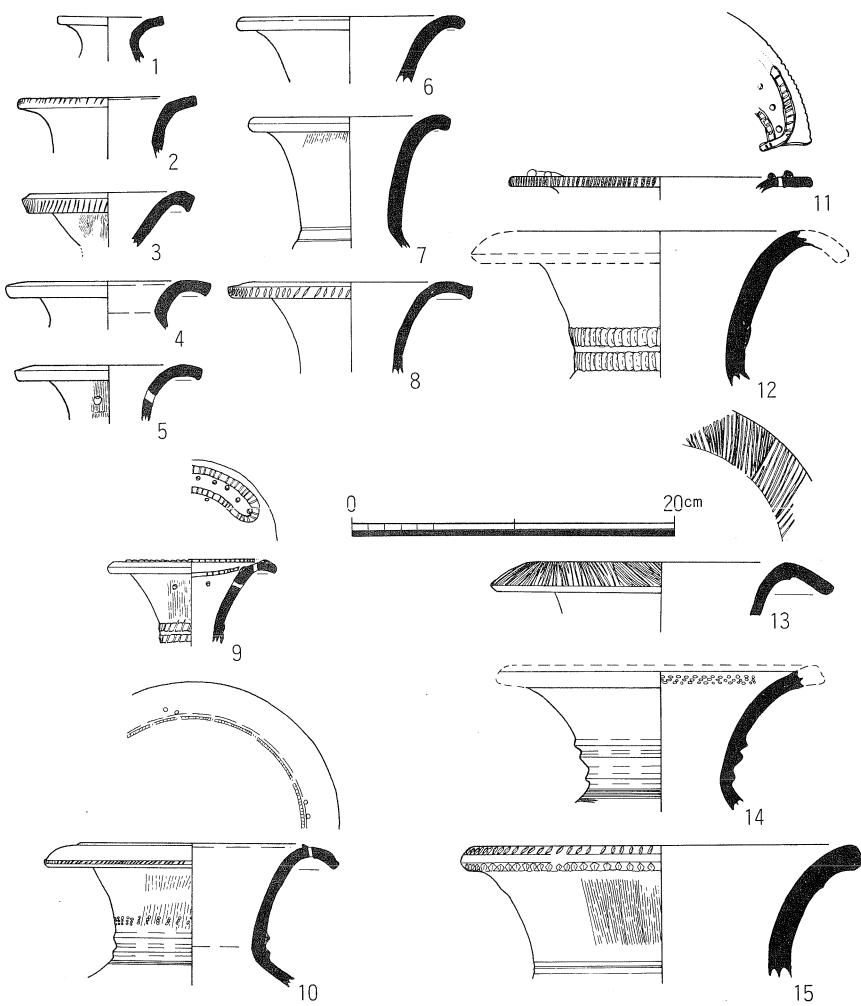
口径20cm前後のものの調整は外面上部ハケ、下部ミガキ、内面ミガキ調整を行うもの（9～14）と、外面ハケ、内面ナデ調整を行うもの（15～18）がある。16、17には胴部に竹管文、刺突文を施す。

口径26～30cmの大型のものは、器高の浅いものと深いものに分かれる。浅いもの（第6図1、2）の調整は内外面ともミガキ調整を主体とし、深いものは外面ハケ、内面ミガキ調整を行う。

高杯形土器 第70図1～7、8～13
形態により3種類に分けられる。

1～3は、椀形の杯部から屈曲し、水平に外に広がる口縁部をもつタイプで、杯部から口縁部の屈曲部及び脚部中央に2孔一対の円孔が確認できる。調整は内外面ともミガキを主体とする。4～7は皿状の杯部をもち、口縁端部が左右にやや肥厚するタイプで、やや低い脚部がつく。口縁端部外面に刻目を施す。調整は、4は内外面ミガキ、5は外面ナデ、内面ミガキ、6は外面ハケ、内面ナデ、7は外面ミガキ、内面ハケを施す。形状は同じであるが、口縁端部に刻目をもたない8もある。

9～13は、この時期の鉢形土器と高杯形土器の脚部が似ているため、一応今回は高杯として報告するタイプである。形態的には口縁部が内頸するタイプである。口縁部内面の施文方法により分かれる。9、10は口縁部外面に3条の刻目突帶文をめぐらし、その下に櫛状工具による列点文をめぐらす。調整は外面下半部にハケ、内面にミガキ調整を施す。11は無文のタイプである。12、13は口縁端部に

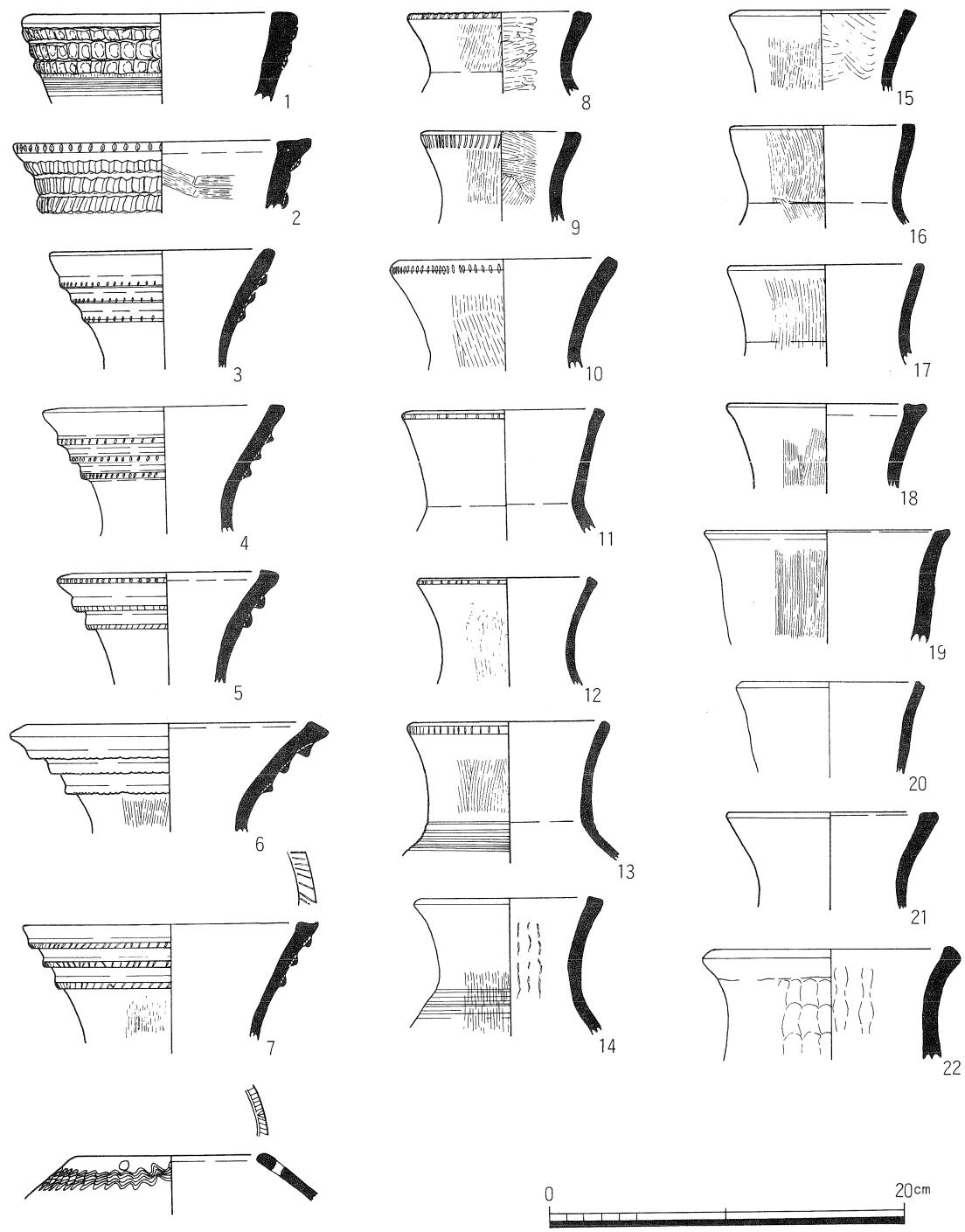


第66図 SR01 11層出土土器(その7)

刻目をもつタイプで、調整は、12は内外面ナデ、3は外面ハケ、内面ミガキ調整を施す。

鉢形土器 第70図14、15

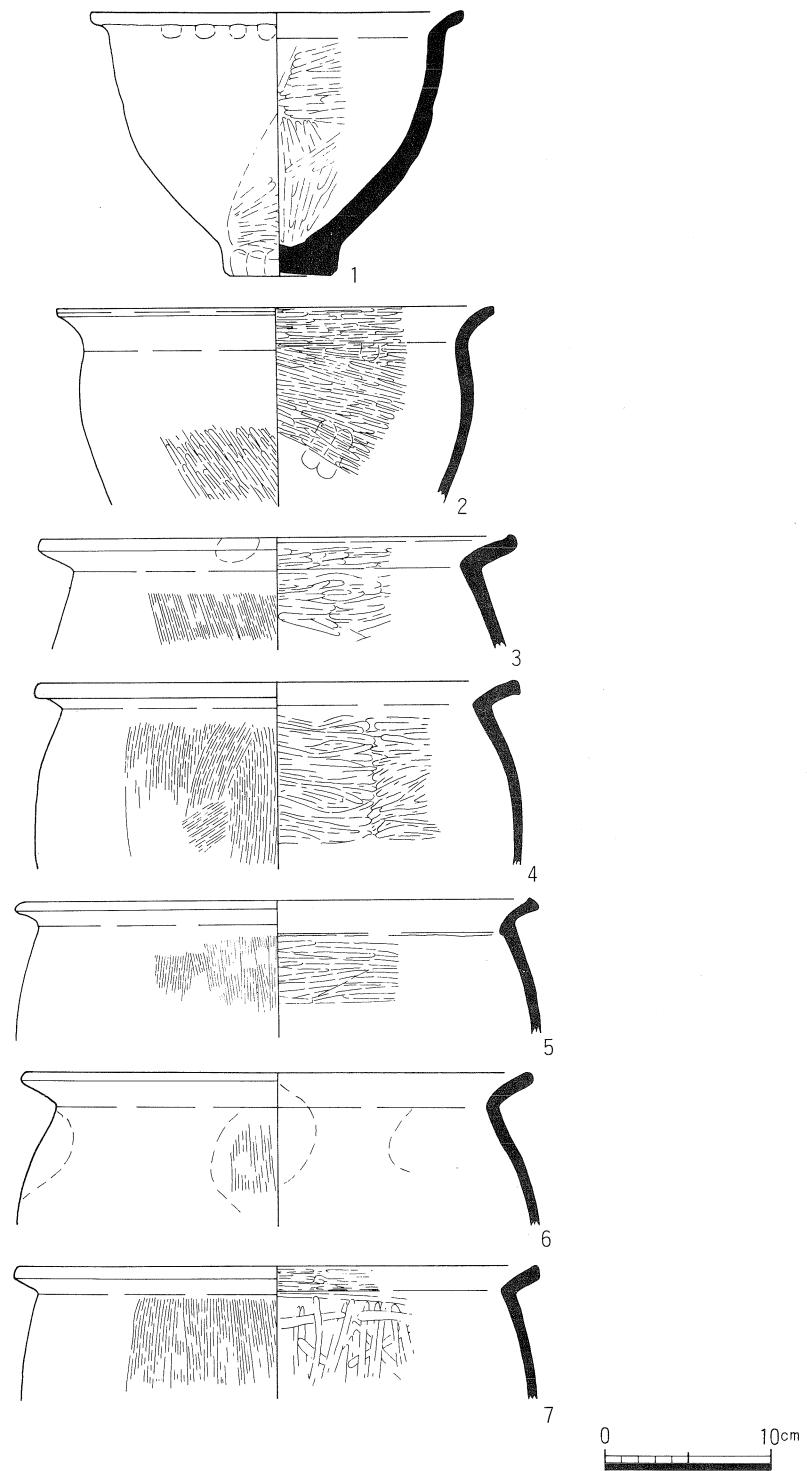
しっかりした平底をもち、胴部から口縁部にかけてやや外反しながら立ち上がる形態をもつものでバケツ形の鉢形土器と呼称しておきたい。文様の施文は、14が口縁部外面に櫛描波状文を3列めぐらした下に櫛描直線文が確認でき、口縁端部内面には刻目を施す。15は櫛描波状文と櫛描直線文を交互にめぐらす。口縁部と底部外面に2孔一対の円孔が確認できるが、底部近くの円孔は貫通していない。



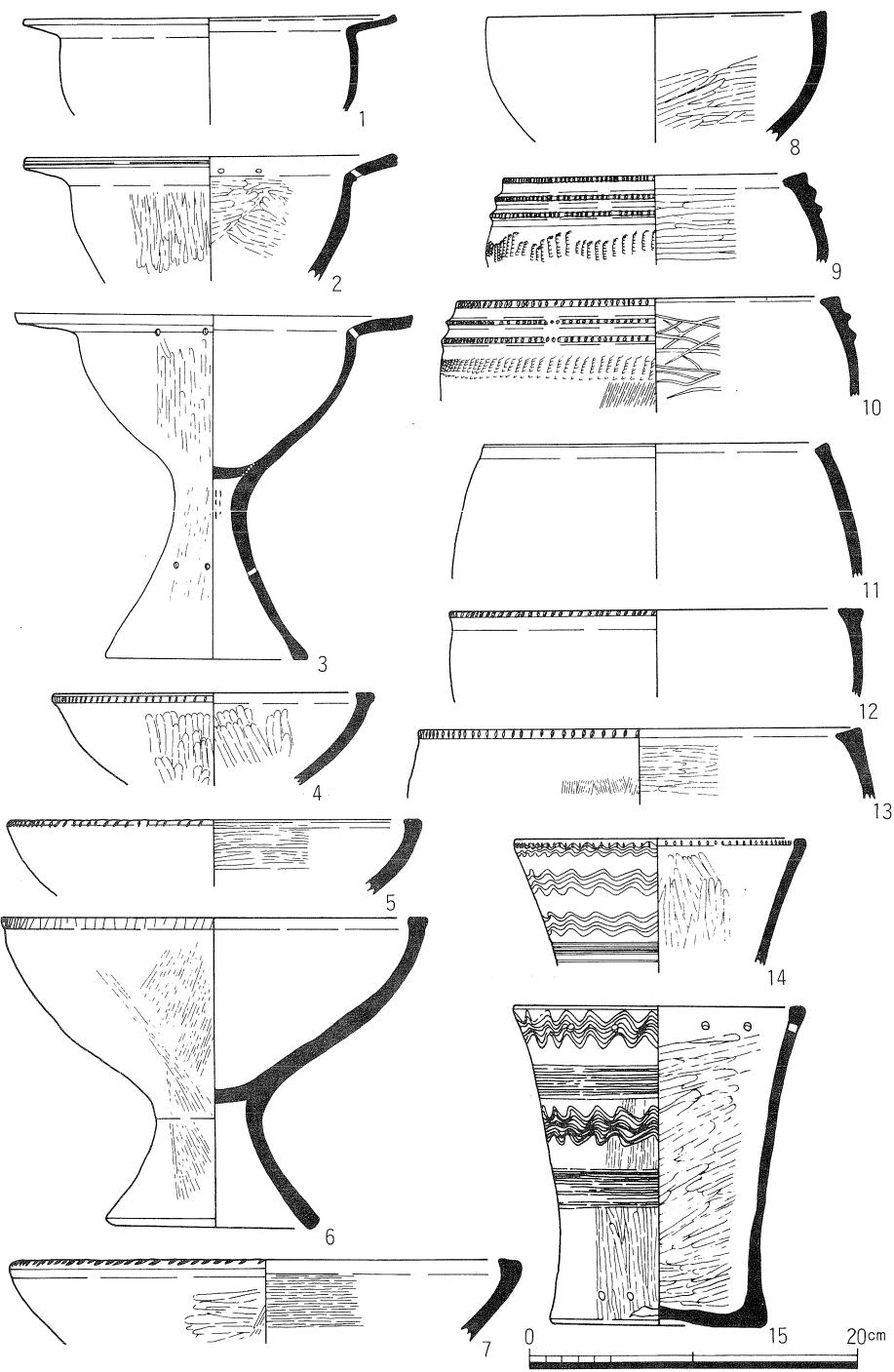
第67図 SR01 11層出土土器(その8)



第68図 SR01 11層出土土器(その9)



第69図 SR01 11層出土土器(その10)

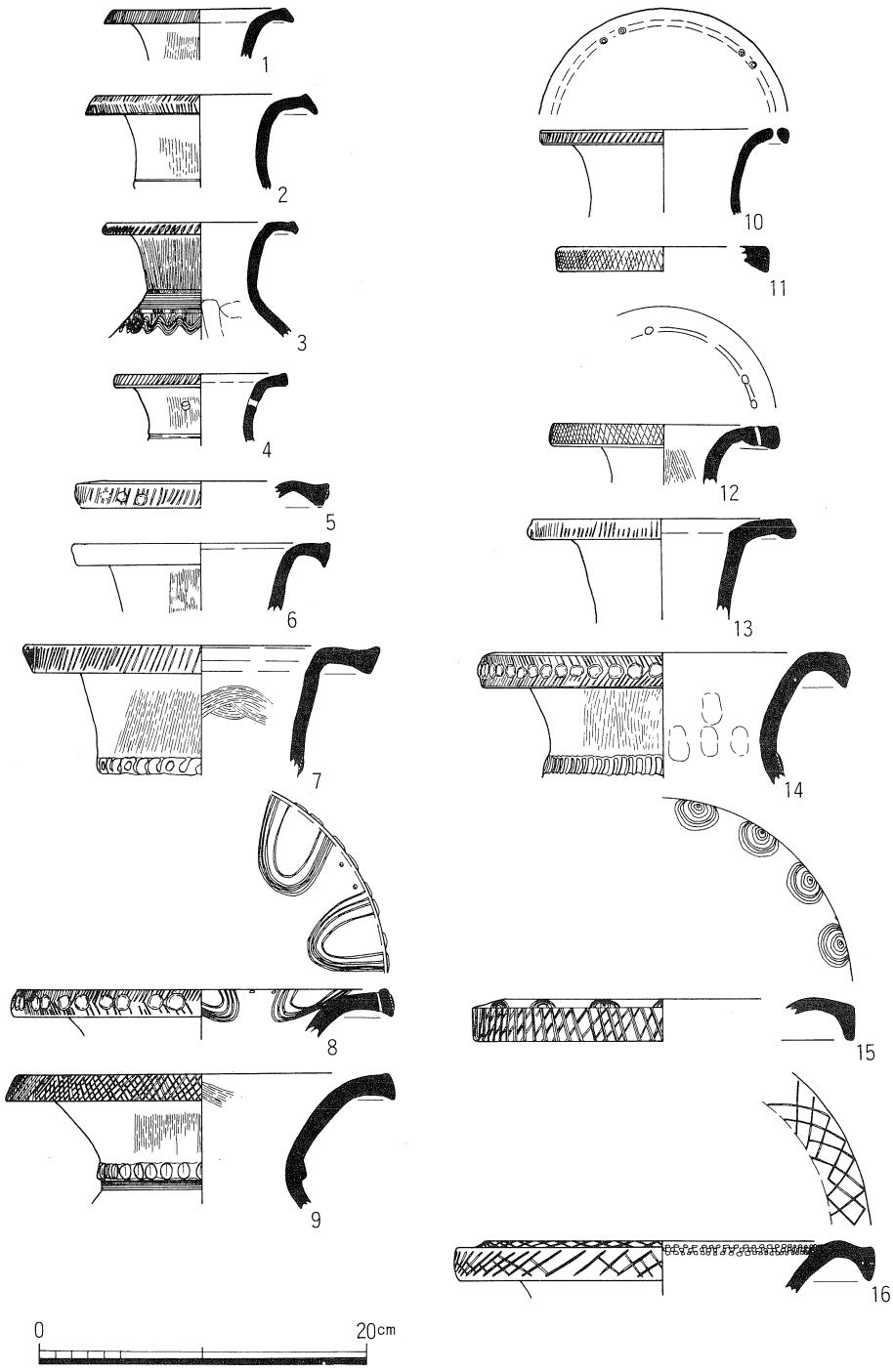


第70図 SR01 11層出土土器(その11)

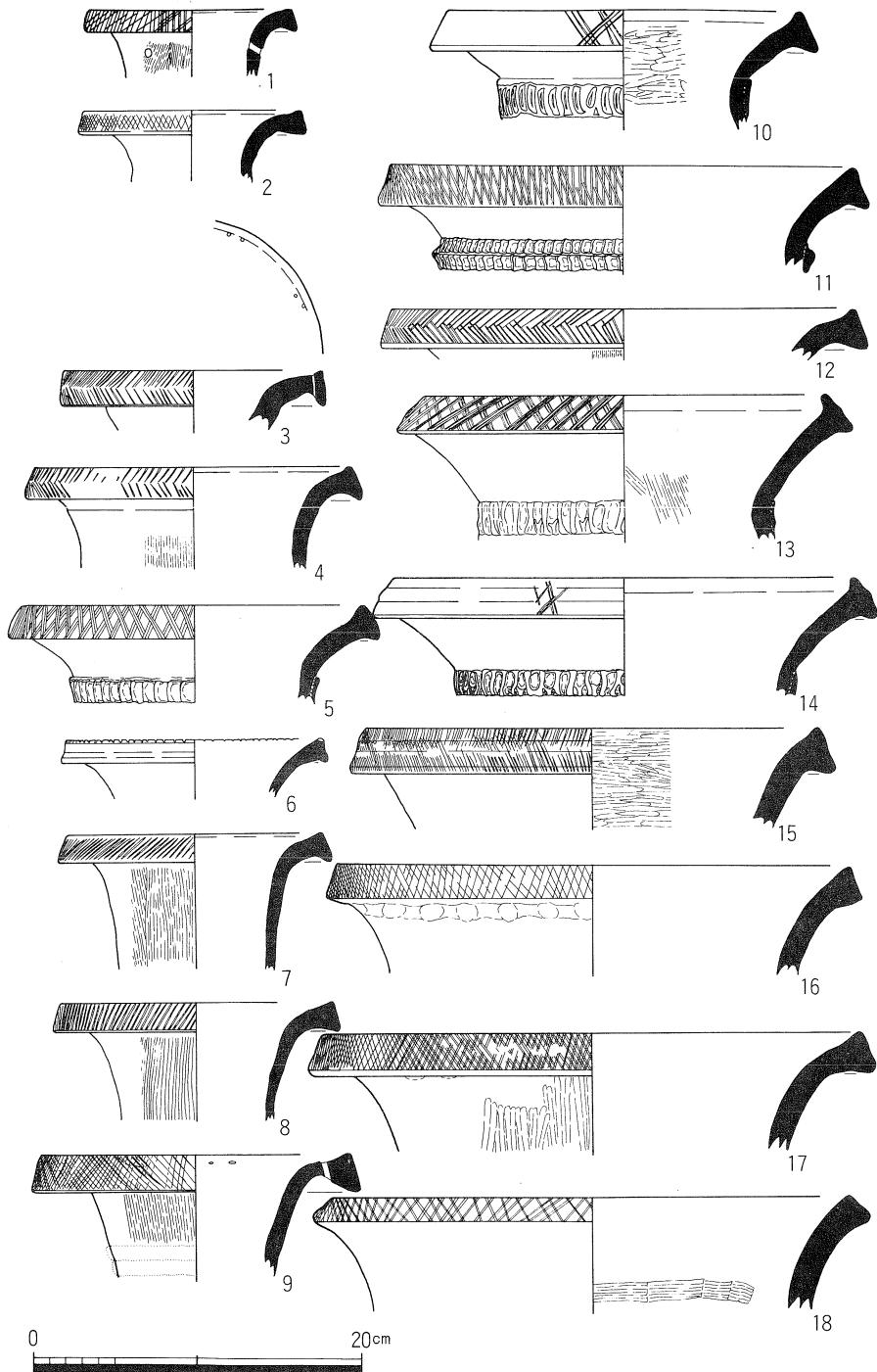
中期中葉前半

壺形土器 第71～74図

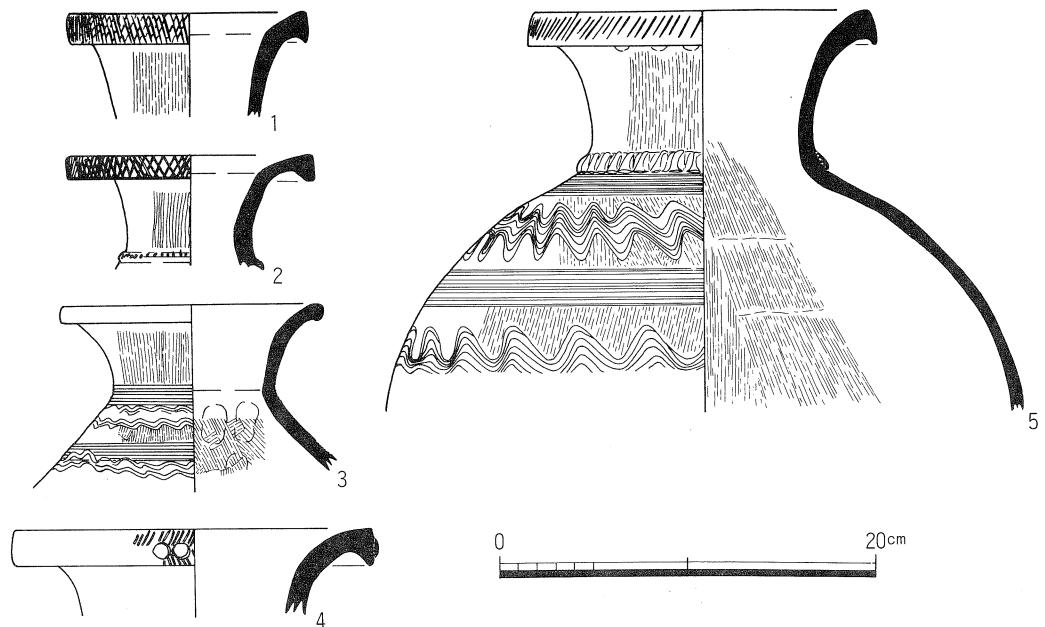
広口壺等の文様が多様化してくる時期である。前様式の壺の胴部に比べて大きく張り、球形に近くなる。第71図1～4は湾曲しながら外反し、斜め上下方向に拡張するタイプで、口縁端部外面に刻目を施すものと綾杉文を施すものがある。3は、頸部から胴部にかけて櫛描直線文と波状文が確認できる。第71図5～9は湾曲しながら外反し、口縁端部が上下に拡張するタイプである。口縁端部外面に刻目文、綾杉文、斜格子文を施し、その上に円形浮文を施すものである。頸部には押圧突帯文をめぐらすもの（7、9）もある。8の口縁部内面には4条一単位のU字形の文様が施されている。第71図10～13は湾曲しながら外反し、口縁端部が下方向に小さく拡張し、上面が面をなすタイプである。口縁端部外面には刻目文、斜格子文などを施す。10、12には口縁部上面に2孔一対の穿孔を入れる。第71図14～15は、湾曲しながら外反し、口縁端部を下方に大きく拡張するタイプである。14は、口縁端部外面に綾杉文をめぐらし、その上に円形浮文を連続してめぐらす。15、16は口縁端部及び口縁部上面に文様を施す。15は、口縁端部に斜格子文、口縁部上面に櫛描円形文を施し、16は口縁端部外面及び口縁部上面に斜格子文を施し、その内側に櫛描列点文をめぐらす。第72図1～4は、湾曲しながらたちあがり、口縁端部を上下方向に拡張する。口縁端部外面に1、2は斜格子文、3、4は綾杉文を施す。第72図5～10は、頸部から直線的に外反し、口縁端部が大きく上下方向に拡張するタイプで、概して底部は短い。8を除きこのタイプの壺に共通することは、口縁端部外面に斜格子文、頸部に押圧突帯文を1条もしくは2条めぐらす。第72図11～18は頸部から直線的に外反し、口縁部で屈曲して端部で上下方向に拡張する。口径より2種類に分かれ、口縁端部外面に斜格子文を中心とする文様を施し、14の状況からすれば、頸部に押圧突帯文をめぐらせるようであり、14のように口縁部上面に2孔一対の円孔を施すものもある。第73図1～5は頸部から直線的に外反し、口縁部で外に屈曲する。頸部は下方向にのみ拡張する。頸部から胴部にかけては球形に近い張りをもつ。文様の施文は、口縁端部外面に斜格子文、刻目文、綾杉文等を施し、頸部に押圧突帯文（5）、刻目突帯文（2）を施し、頸部から胴部上半に櫛描直線文と櫛描波状文を交互に施す。第74図1～23は、直線的に外反する口縁をもつタイプである。口縁端部の形態及び文様の施文位置より細かく分かれる。第74図1～6までは口縁部外面に突帯を施すもので、1～4のように突帯文に刻目をもつものと、（5、6）のように刻目をもたないものがある。第74図7～13は、口縁端部が両側に拡張するタイプである。口縁端部に刻目をもつ7、8、口縁端部の刻目に加えて頸部に押圧突帯文を2条めぐらすもの（9、10）、頸部に押圧突帯文のみをめぐらせるものに分かれる。9、10のように胴部の文様をもつタイプ以外は、胴部は無文のようである。第74図14～17は直線的に外反し、口縁端部に向かって肥厚する口縁部をもつタイプ



第71図 SR01 11層出土土器(その12)



第72図 SR01 11層出土土器(その13)

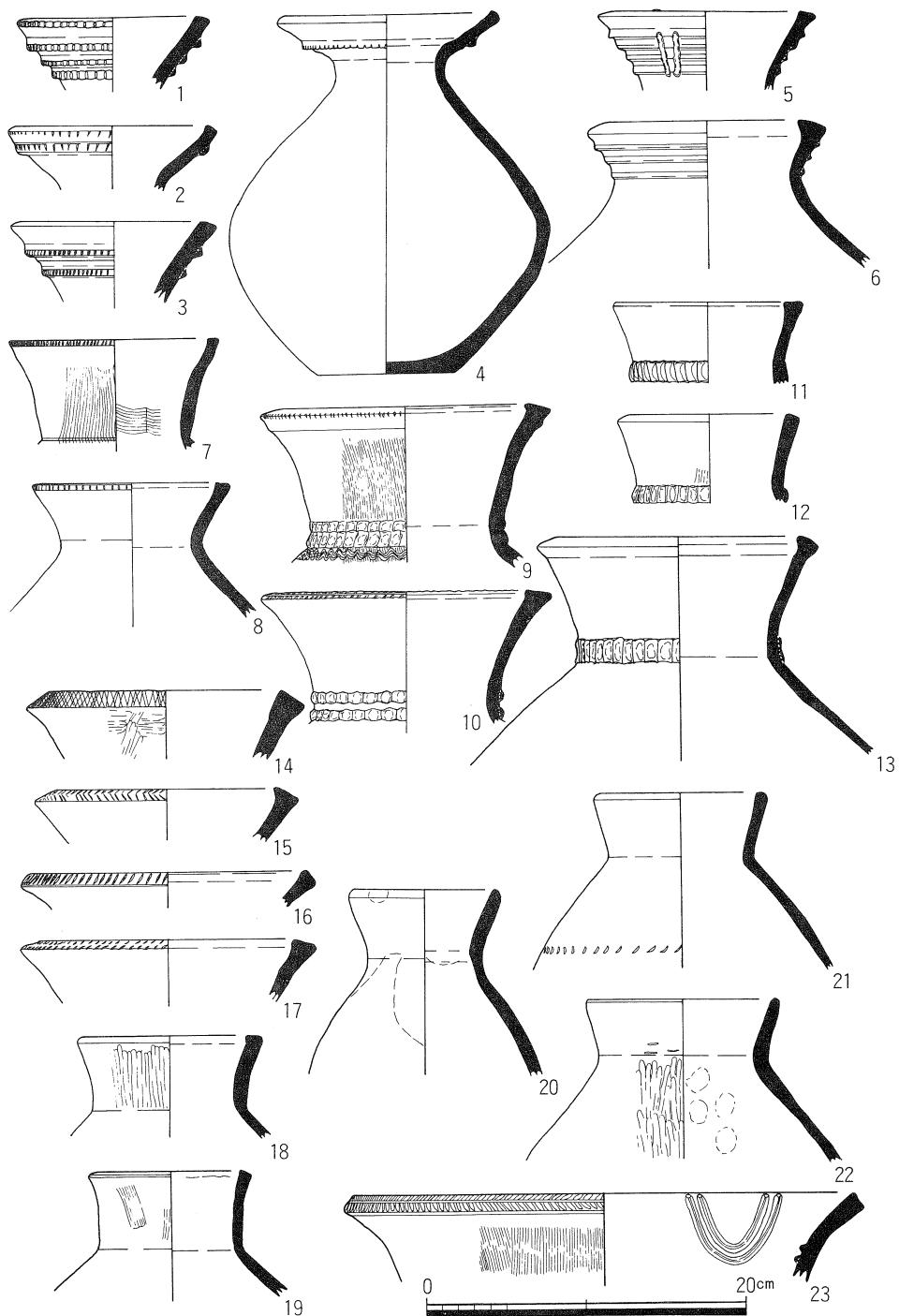


第73図 SR01 11層出土土器(その14)

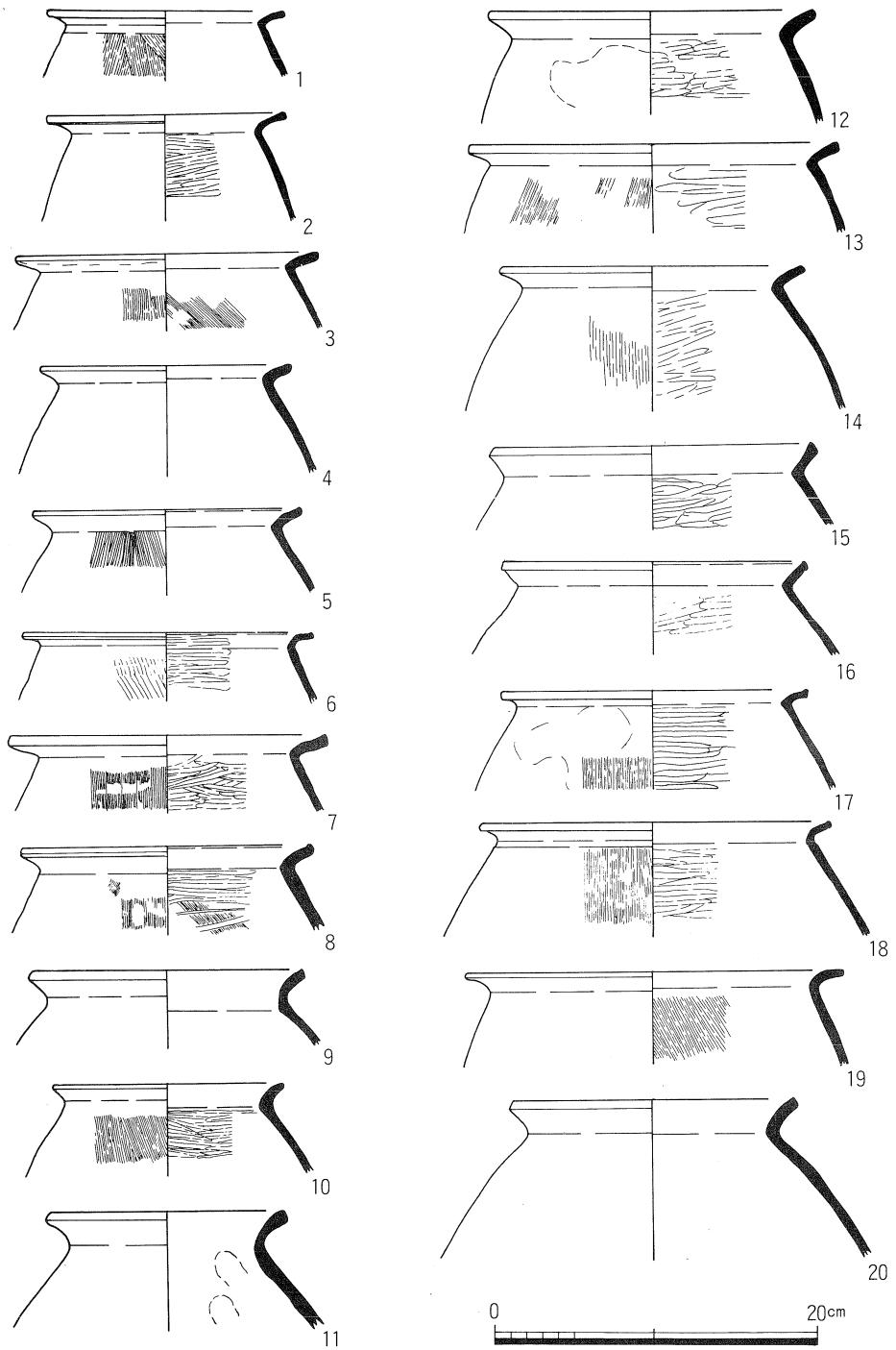
で、口縁端部外面に斜格子文、綾杉文、刻目文等を施す。第74図18～22は、直線的に外反し、端部は丸くおわる口縁のタイプで、21の胴部に箋による刺突文があぐる。第74図23は、直線的に外反し、途中で屈曲し、さらに外反する口縁をもつタイプで口縁端部外面に刻目文、内面にはU字の突帯が施されている。

甕形土器（第75図1～20、第76図1～7 第77図）

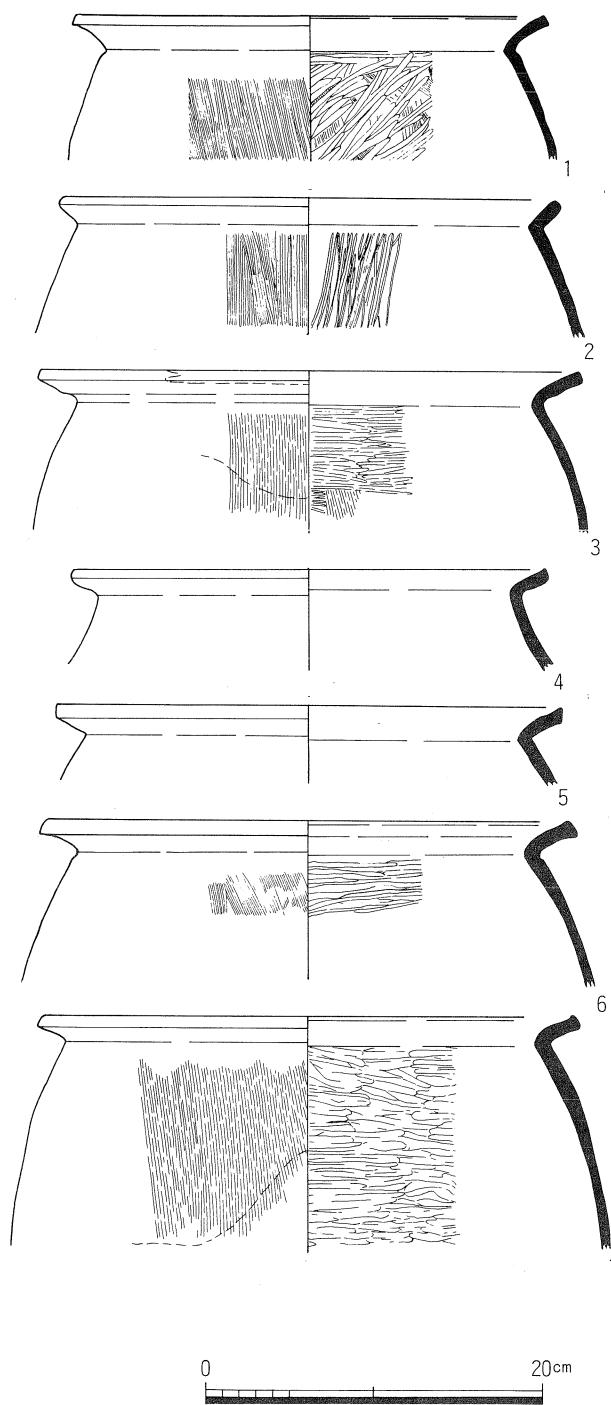
前様式の甕に比べて、胴部最大径が、口径に比べて大きくなる。前様式の甕と同様、口径により、大・中・小に分かれそうである。第75図（1～11）は小型の甕である。口縁端部を上方につまみ上げるものと、丸く終わるものがある。調整は、外面ハケ目、内面ミガキ調整を行うものと、内外面ナデ調整を行うものが大半である。第75図（12～20）は、口径20cm前後の中型の甕である。小型の甕と同様の形態をもつ。調整は、外面ハケ目、内面ミガキ調整を行うものが大半を占める。第76図（1～7）は、口径30cm前後の大型の甕である。形態、調整等は、小・中甕と同様である。これらの甕とは別に、口縁端部及び頸部に文様を施すものがある。（第77図1～17）胴部の張りの違いによって、1～7と8～17に分かれる。1、2は、「く」の字状の口縁をもつもので、端部を上方向につまみ上げる。1は、胴部に2段の列点文をめぐらし、2は、頸部に2孔一対の円孔が確認できる。3、4は、「く」の字状の口縁をもち、端部は肥厚せず、丸く終わる。口縁端部外面に、斜格子文、刻目文を施す。5～7は、「く」の字状口縁をもち、端部が肥厚する。頸部には押圧突帯文があぐる。6には、口縁端部外面に刻目文を施す。



第74図 SR01 11層出土土器(その15)



第75図 SR01 11層出土土器(その16)



第76図 SR01 11層出土土器(その17)

8～17は、口径に比べ、胴径が大きくなるタイプのもので、「く」の字状の口縁をもち、端部は肥厚する。口縁端部外面に斜格子文、刻目文を施すが、刻目文の施文の位置にはバリエーションがある。15のみ端部に文様を施さず、頸部に押圧突帯文を施す。

高杯形土器 第78図 1～3

皿状の杯部をもち、口縁端部が拡張する。調整は内外面ハケを行う1、内外面ナデ調整を行う2、外面ナデ、内面ミガキ調整を行う3がある。

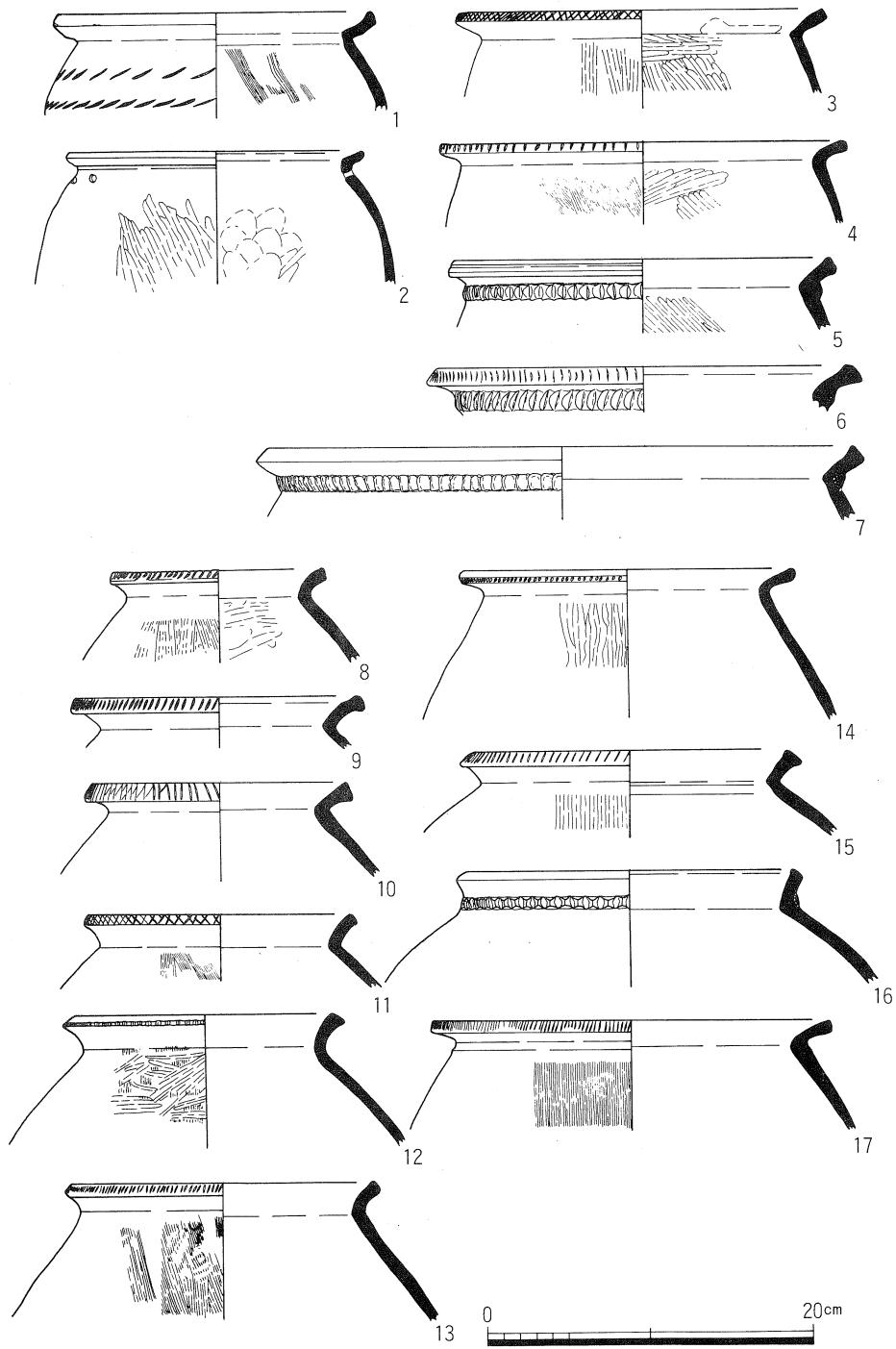
鉢形土器 第78図 4

前様式でみられたバケツ形の鉢である。筒形の胴部をもち、外反せずに直立した口縁をもつ。口縁部に穿孔が1個確認できる。もとは2孔一対の穿孔であろう。文様は、外面に櫛描直線文が施されている。

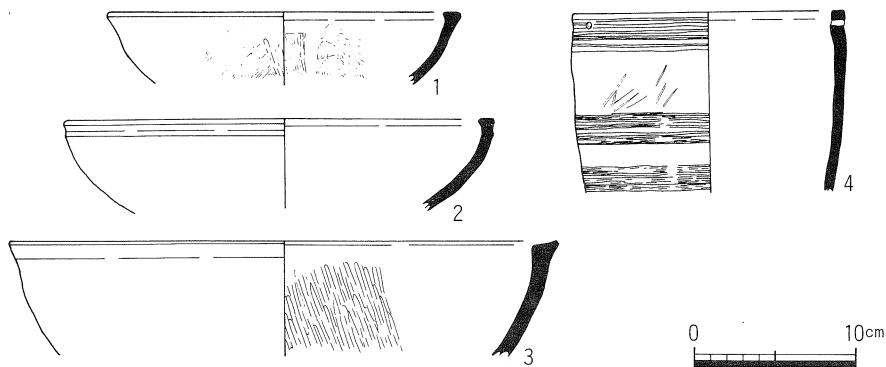
中期中葉後半

壺形土器 第79図 1～7

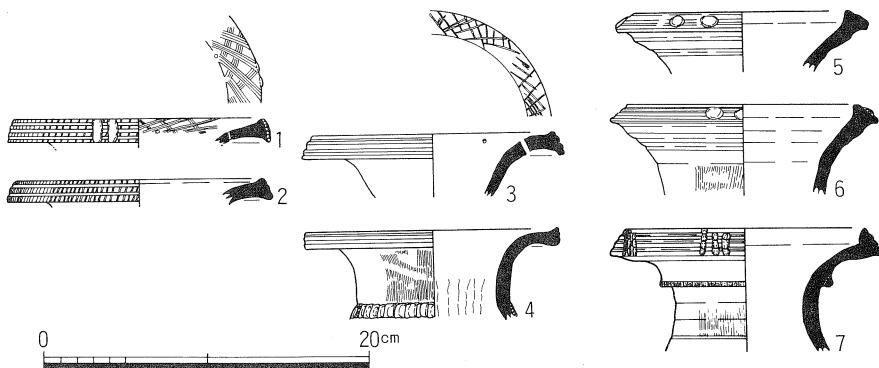
いずれも広口壺である。大きく外反し、端部が肥厚する口縁をもつタイプ(1～4)と、直線的に外反し、端部が肥厚する口縁をもつタイプ(5～7)がある。いずれも口縁端部外面に凹線文をめぐらす。1、2は肥厚した端部にめぐらせた凹線文の上に刻目を施す



第77図 SR01 11層出土土器(その18)



第78図 SR01 11層出土土器(その19)



第79図 SR01 11層出土土器(その20)

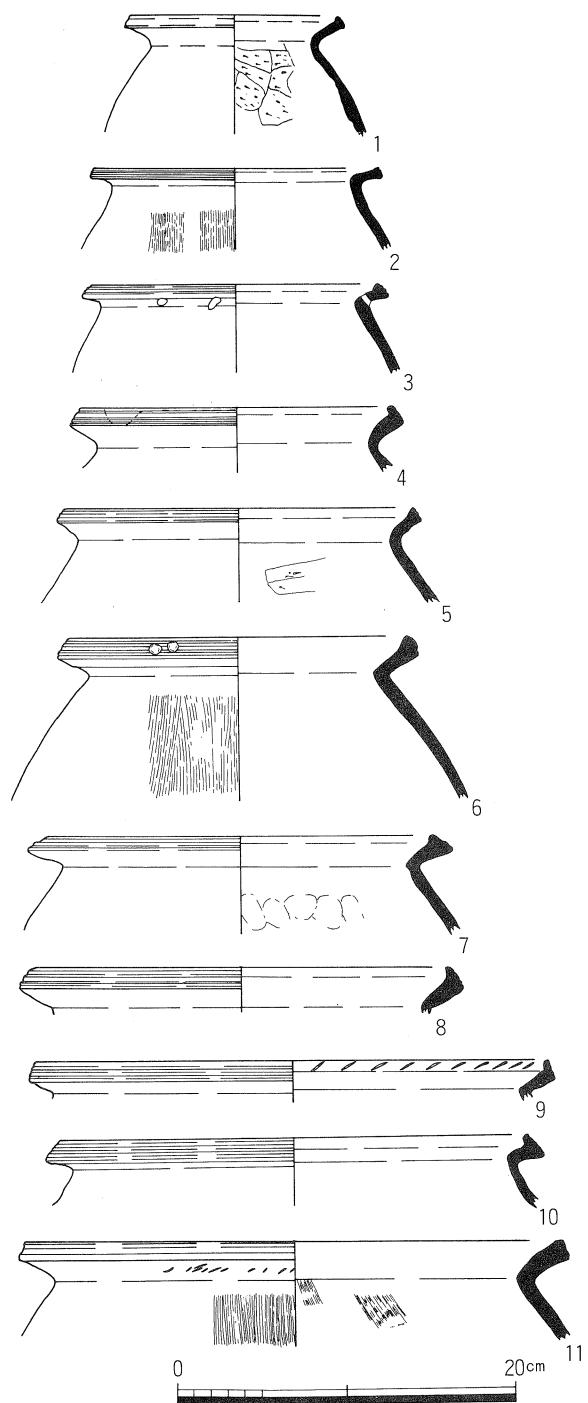
もので、1には棒状浮文も施す。1の口縁部上面には斜格子文を施す。3は口縁部上面に斜格子文を施し、4は頸部に押圧突帶文をめぐらす。一方、直線的に外反し、端部が肥厚する口縁をもつタイプは、凹線文上に、5、6は円形浮文、7は棒状浮文を施す。加えて7には口縁下に刻目突帶文を1条めぐらす。

甕形土器 第80図1～11

「く」の字状に屈曲し端部が肥厚する口縁で、外面に2～3条の凹線文をめぐらす。口径20cm前後のものと口径30cm前後のものがある。調整は外面ハケ、内面は小形のものに上半までヘラケズリを施すものがあるが、ハケもしくはナデ調整を行う。9のように端部内面に籠状工具による圧痕もみられる。

高杯形土器 第81図1～3

浅い皿状を呈するもので、口縁部が内湾するタイプ（1、2）と、やや深い杯部をもち、端部は両側に拡張するタイプ（3）がある。3は、拡張した端部上面に斜格子文、外面に刻目文を施す。調整は外面ハケ、内面ミガキ調整を施す。



第80図 SR01 11層出土土器(その21)

中期後葉前半

壺形土器 第82図 1～8、9、10

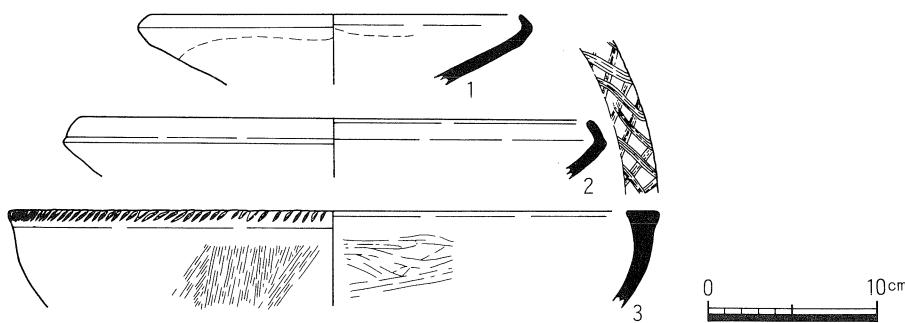
広口壺と無頸壺がある。2～8は大きく外反する口縁をもち、端部は上下方向に拡張する広口壺である。口縁端部外面に2～3条の凹線文をめぐらす。1、8には、頸部近くに籠状工具による列点文、櫛状工具による押圧文を施す。6には口縁部上面に櫛描波状文と直線文を施す。調整は外面ハケ、内面ナデ調整を施す。9、10は無頸壺である。体部が内傾してたちあがる口縁をもち、口縁部はわずかに拡張する。口縁部外面に3条の凹線文をめぐらす。9には凹線上に棒状浮文を施し、調整は内面ハケ調整を行う。

甕形土器 第83図 1～6

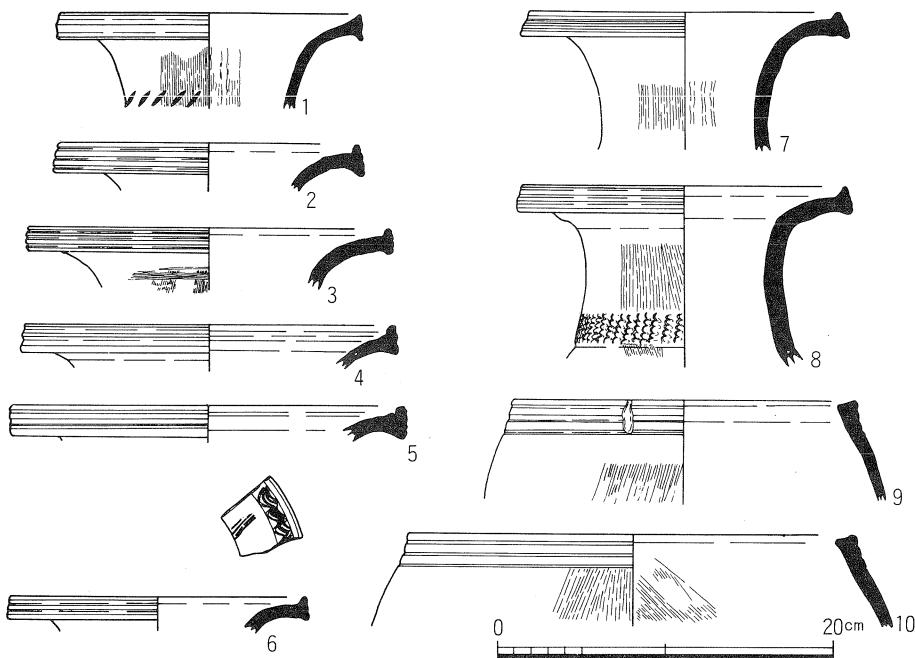
「く」の字状に屈曲し、端部が肥厚する口縁で、端部外面に凹線文をめぐらす。その他の文様は1及び3に認められる。1は凹線文上に刻目文、頸部に押圧突帯文をめぐらし、3は頸部に押圧突帯文をめぐらす。

高杯形土器 第84図 1～9

形態により大きく3タイプに分かれる。1、2は水平に広がる口縁をもち、内側に隆起帯を1条めぐらすタイプである。水平口縁端部は拡張し、凹線文をめぐらす。調整は内外面ミガキを施す。2～4、8は皿状の杯部をもち、口縁部で屈曲して端部が拡張するタイプである。拡張方向に差がある。外面には数条の凹線文をめぐらす。5～7、9は皿状の杯部をも



第81図 SR01 11層出土土器(その22)

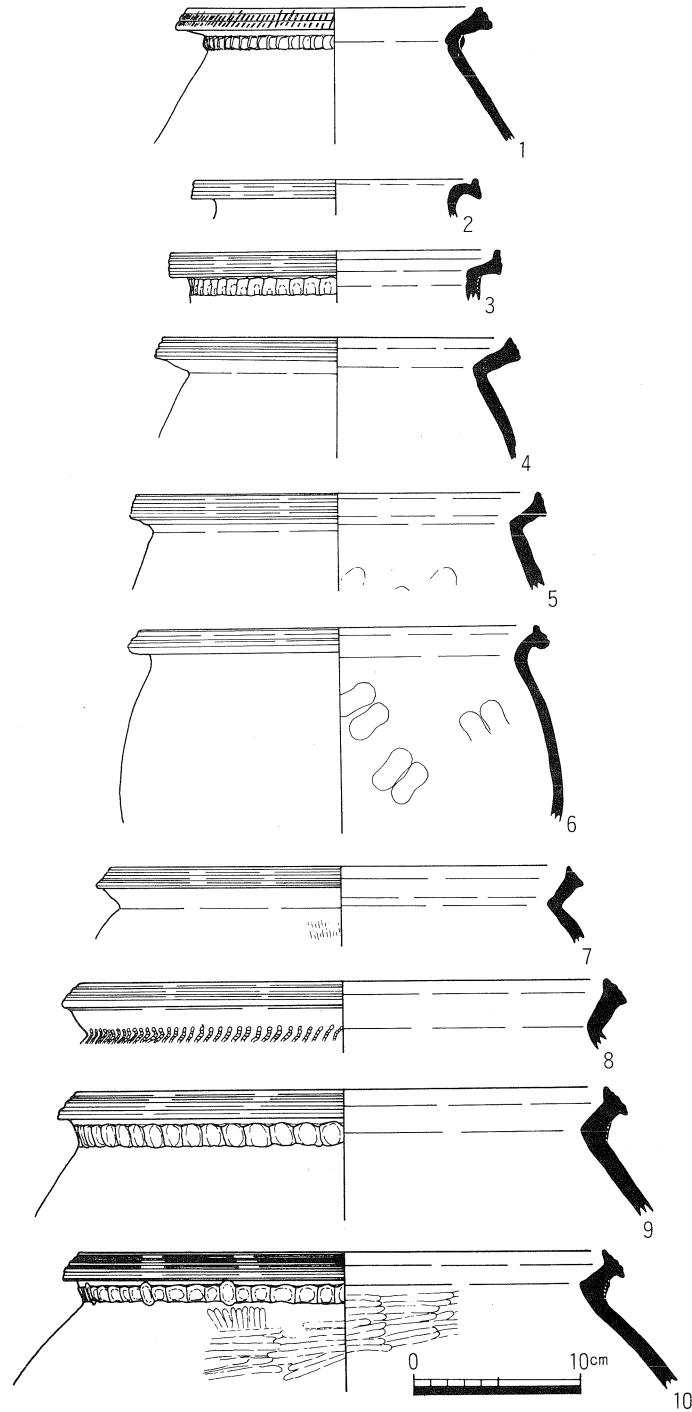


第82図 SR01 11層出土土器(その23)

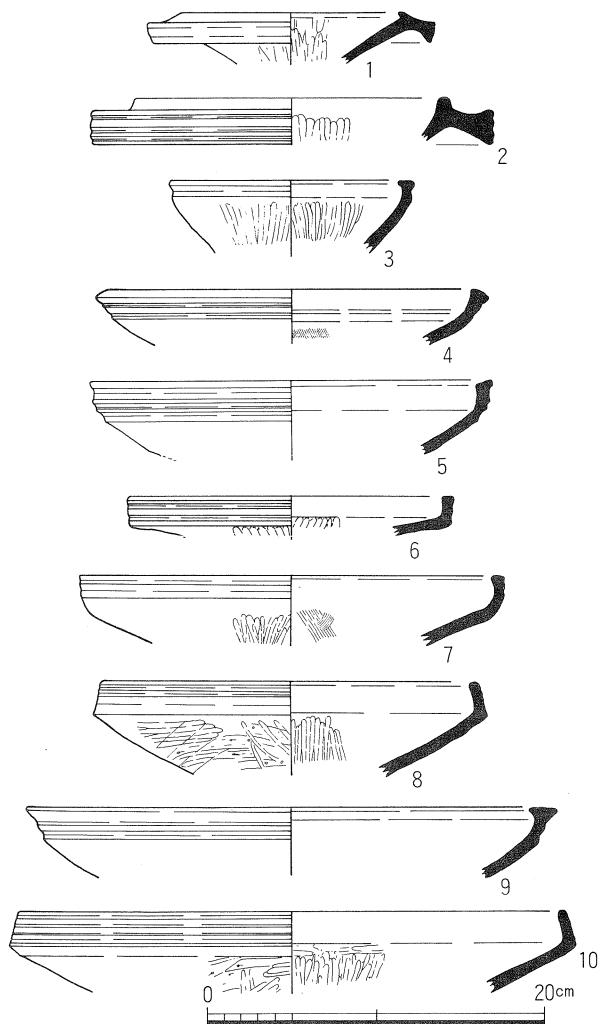
ち、口縁端部で屈曲して直立するものと内傾するものがあり、端部はほとんど肥厚しない。外面には数条の凹線文をめぐらす。調整は内外面ミガキを施す。

鉢形土器 第85図 1～7

楕形の深い体部から内傾する口縁部をもつタイプと、直立する口縁部をもつタイプがある。いずれも口縁端部が肥厚し、上面及び外面に凹線文をめぐらす。調整は口縁部内外ともナデ調整、体部外面ハケ、ミガキ調整を施す3、4、体部内面にハケ調整を施す1、2以外はナデ調整が主体である。



第83図 SR01 11層出土土器(その24)



第84図 SR01 11層出土土器(その25)

中期後葉後半

壺形土器 第86図 1～12

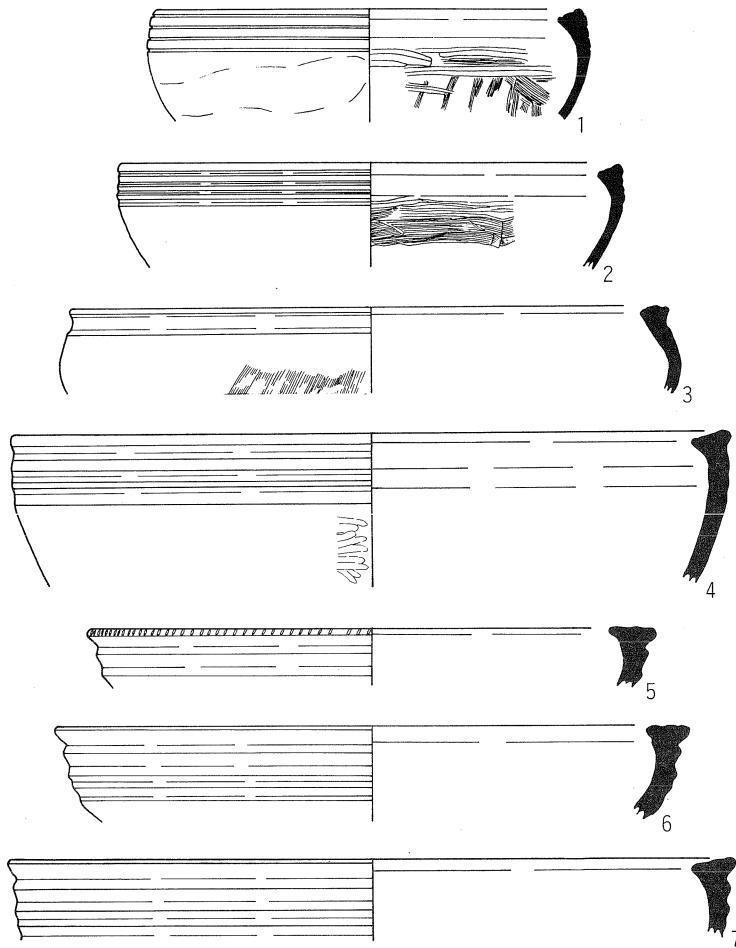
広口壺、細頸壺、直口壺、無頸壺などがある。1～6は短頸広口壺である。短い頸部から「く」の字状に外反し、口縁端部が上下方向に大きく拡張し、外面に凹線文を数条めぐらす。凹線上に竹管文を施す1、2がある。7～10は細頸壺である。全容がわかるのは10のみであるが、しっかりとした底部をもち、胴部はやや張り、細い頸から外反しながらたちあがり、屈曲してほぼ直立した口縁部をもつ。口縁部外面に数条の凹線文をめぐらす。頸部に櫛状工具による列点文を施す8もみられる。調整は頸部外面にハケ調整、胴部から底部外面、上半はタテミガキ、下半はヨコミガキ、内面はナデ調整を施す。11はやや外に開く直口壺である。口縁から頸部にかけて凹線文を数条めぐらす。2は無頸壺である。直線的に内傾する口縁部をもち、端部は肥厚する。口縁端部上面及び口縁部外面に凹線文をめぐらす。

甕形土器 第83図 7～10

肩の張った胴部をもち「く」の字状に屈曲し、口縁端部が大きく拡張した上面に4条ほどの凹線文をめぐらす。その他の文様は頸部に施され、8には櫛状工具による列点文、9、10には押圧突帯文をめぐらす。

高杯形土器 第87図 1～5

皿状の杯部から屈曲してほぼ直立してたちあがる口縁をもち、端部を拡張させる。口縁部外面に数条の凹線文をめぐらすほか、一部では端部上面に凹線文をめぐらすものも見られる。調整は内外面とも丁寧な磨きを施し、1の外面のように斜格子状にミガキ施すものも見られる。



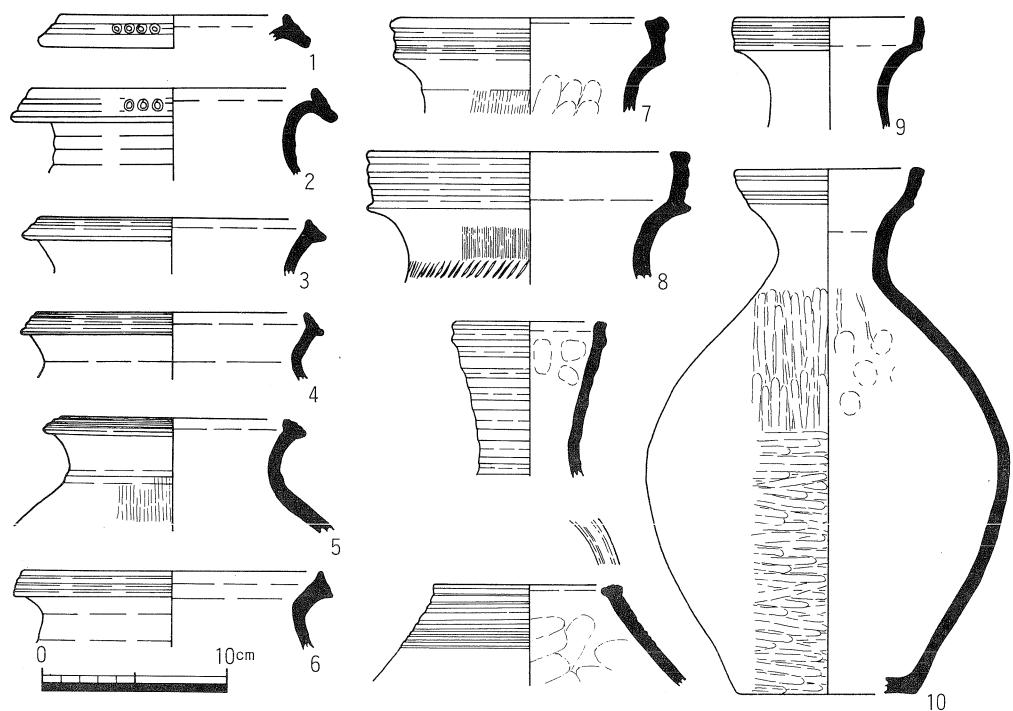
第85図 SR01 11層出土土器(その26)

後期

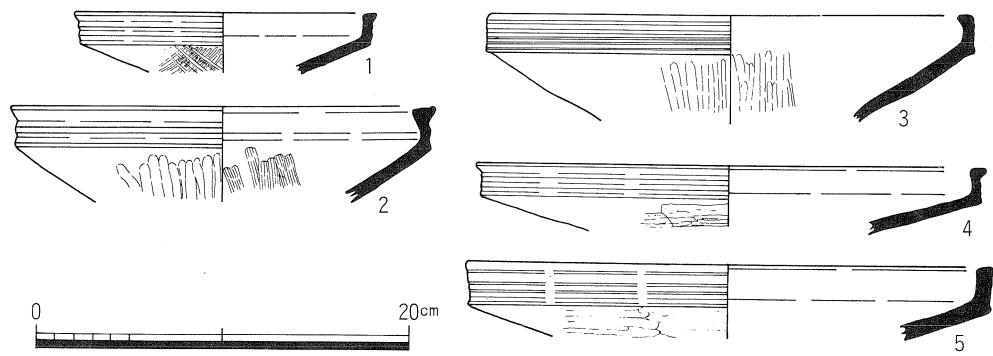
後期に属する遺物は量的に少なく、これまでの土器群との連續性はみられず、ある程度の空白期間が考えられる。

壺形土器 第88図 1～4

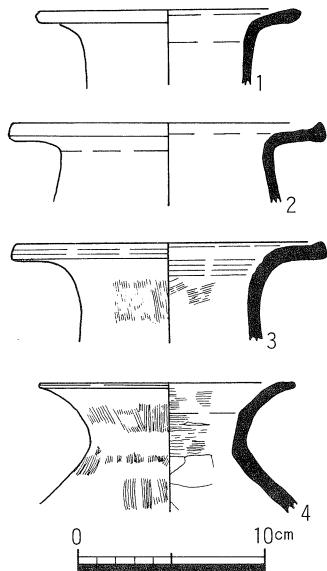
広口壺のみが確認できる。1～3は直立する頸部をもち、屈曲して水平に外反し、端部を上方向につまみ上げる口縁をもつタイプである。調整は口縁部をナデ調整、頸部はハケ調整を施す。4は、丸い胴部から屈曲して大きく外反する口縁部をもつタイプである。調整は内外ハケ調整を行う。



第86図 SR01 11層出土土器(その27)



第87図 SR01 11層出土土器(その28)



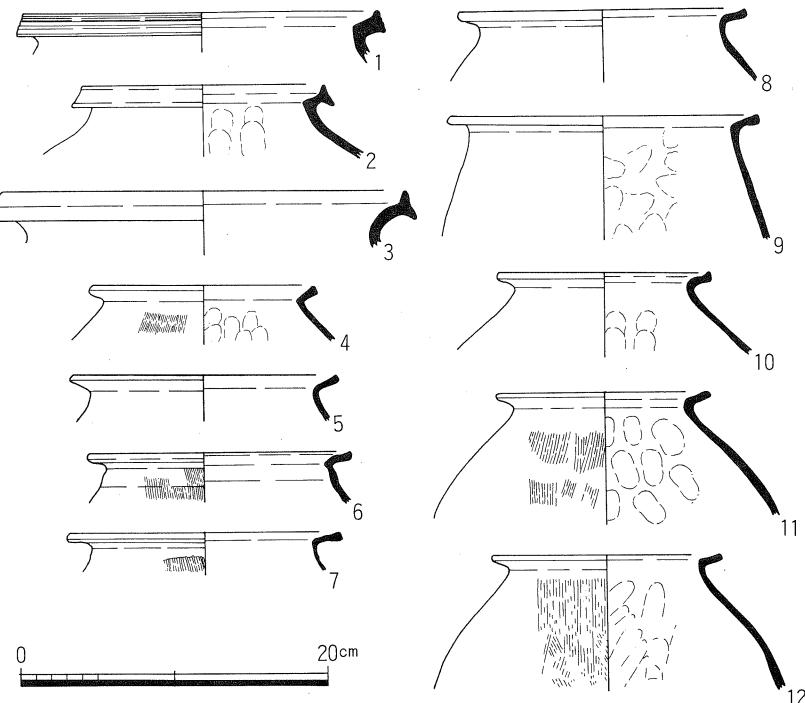
第88図 SR01 11層出土土器(その29)

甕形土器 第89図 1～12

口縁部の形態より3タイプに分かれる。1は「く」の字状に屈曲し、端部の肥厚させる。口縁端部外面に箆状工具による渢線状の凹線をめぐらす。後期前半頃と考えられる。2、3は肩の張る体部から「く」の字状に屈曲し、端部を上下方向に拡張させるが、凹線文はめぐらせず、強くナデしているだけである。4～12は肩の張った胴部から「く」の字状に屈曲し、端部を上方に向こみ上げる。全体につくりが丁寧であり、器壁が薄い。調整は外面頸部以下をハケ調整、内面指ナデ調整を行う。後期後半から後期末頃の所産と考えられる。

高杯形土器 第90図 1～8

皿状の杯部から屈曲し、斜め上方向へ湾曲しながらちあがるタイプである。口縁部内面にはヨコナデにより凹線状のくぼみがめぐる。調整は杯部上半外面及び内面はミガキ調整、杯部



第89図 SR01 11層出土土器(その30)

下半はヘラケズリののちミガキ調整を施す。脚部は外側に開くしっかりとしたもので、調整は外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ調整を施す。

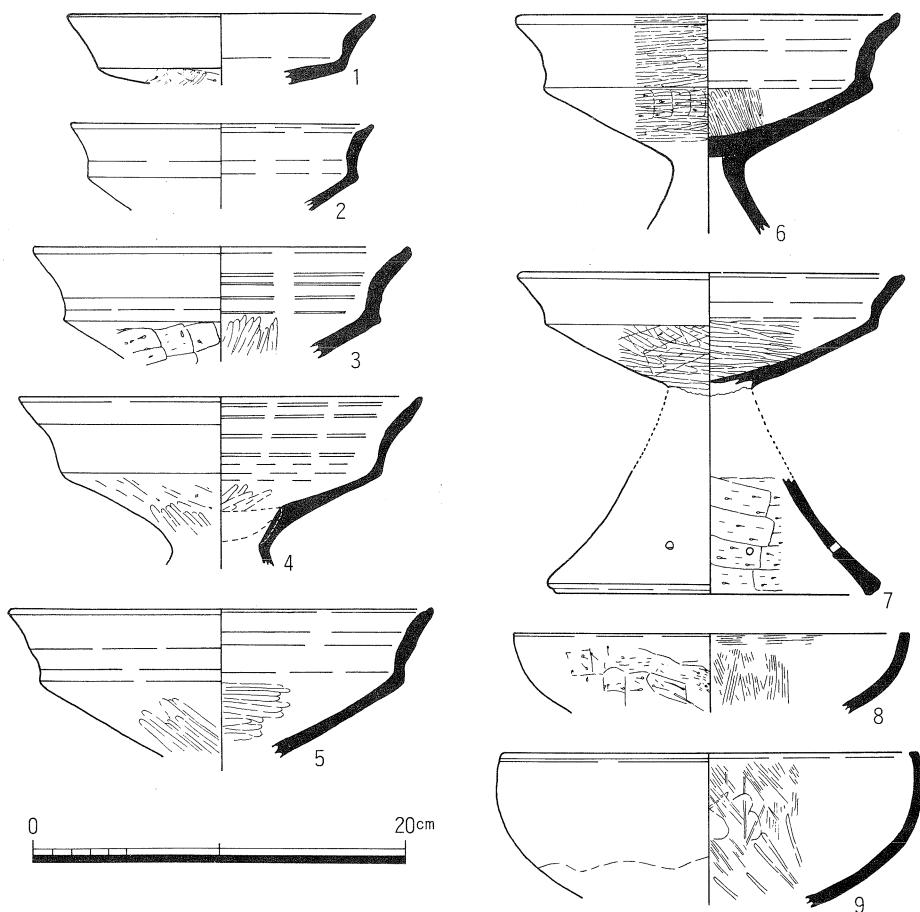
鉢形土器 第90図 9、10

楕形の形態をもち、口縁端部を平にカットする。底部は丸底になると思われる。調整は外面をナデ、内面ハケ調整を施す9、外面をナデ、内面をハケ後粗いミガキを施す10がある。

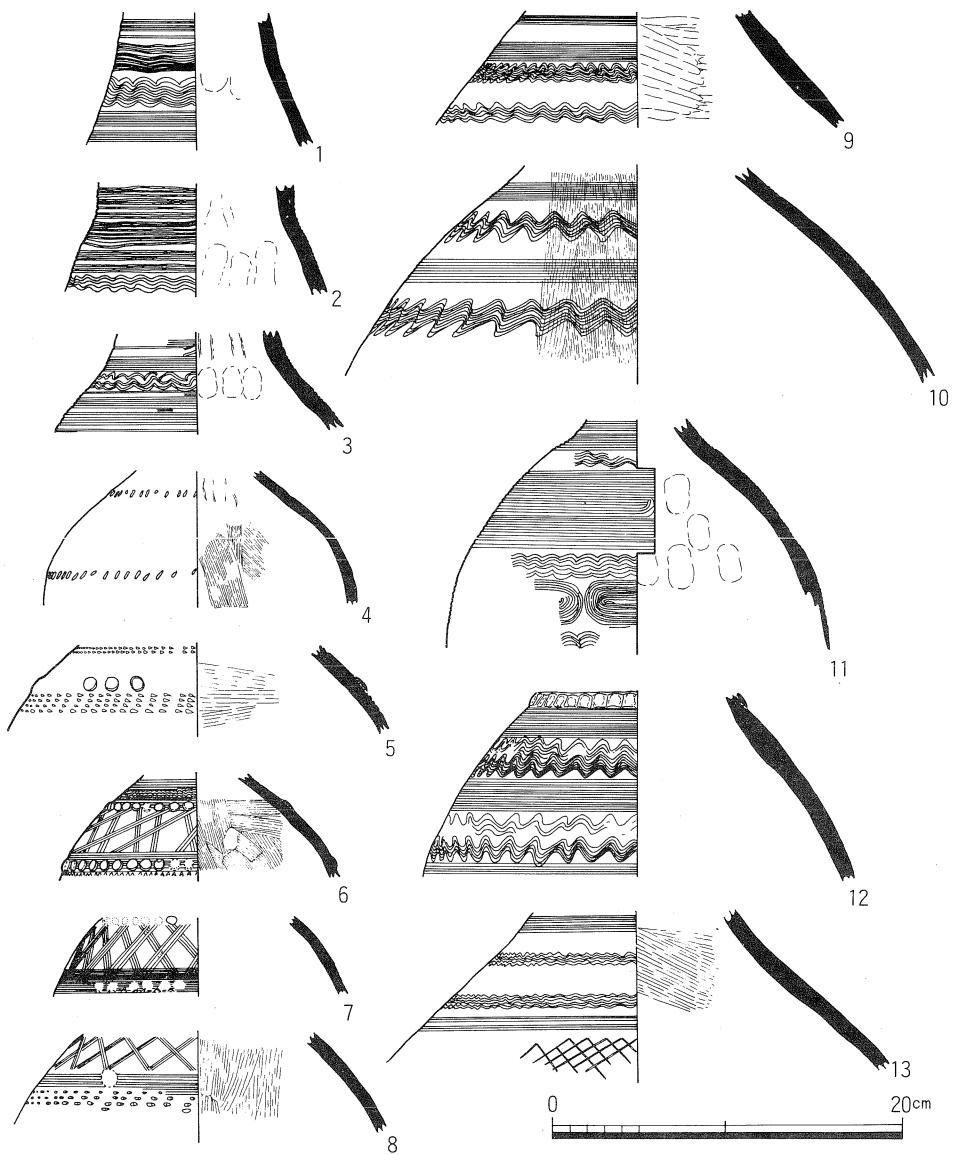
壺形土器 体部 第91図 1～13

中期前葉後半と考えられる一群（1～3、11、12）は、形態的にはあまり張らない体部をもち、頸部にかけてゆるやかにすぼまる。文様は櫛描直線文を主体とし、部分的に櫛描波状文を施す。11のように波状文と波状文の間に流水文を施すものも見られる。流水文をもつ破片は、同一個体と思われるものがもう一点出土している。

中期中葉前半と考えられる一群（4、5、9、10）は、体部の張りが大きくなるが、体部か



第90図 SR01 11層出土土器(その31)



第91図 SR01 11層出土土器(その32)

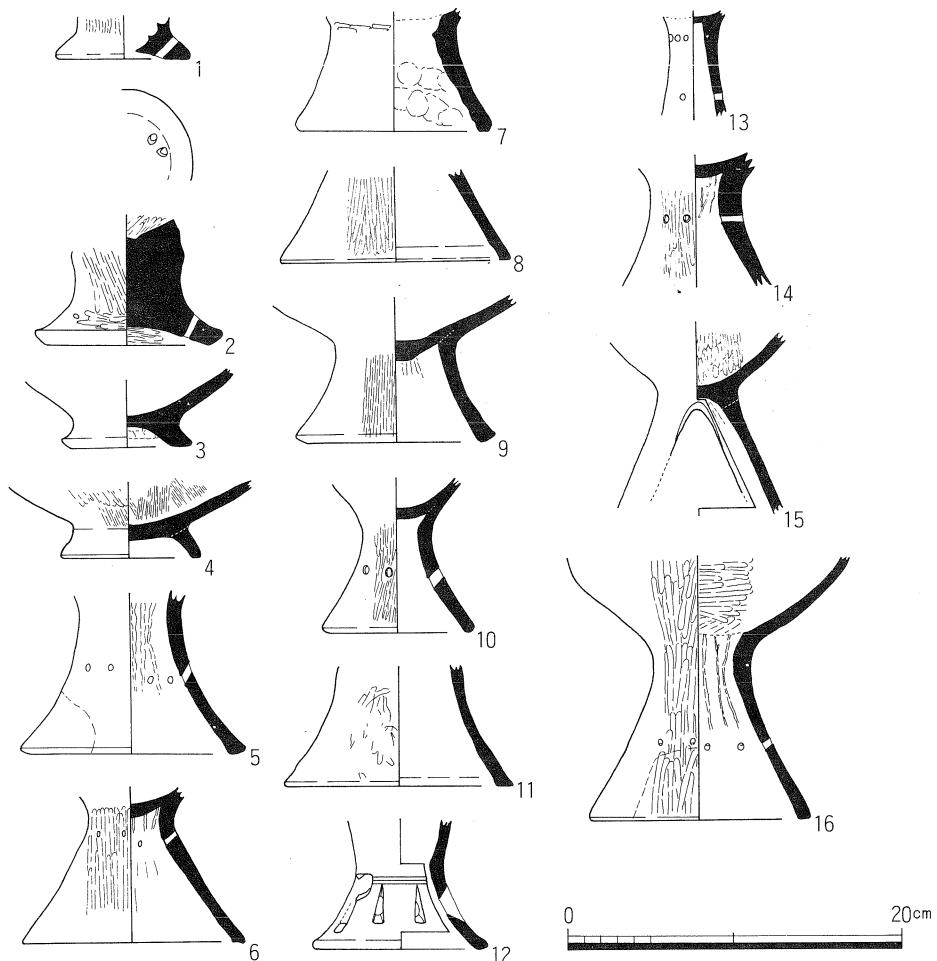
ら頸部への変化が直線的である一群である。文様は籠状工具による刺突文及び櫛描列点文などを施す簡素な一群（4、5）と、櫛描直線文と波状文を交互にめぐらすもの（9、10）がある。

中期中葉後半と考えられる一群（6～8、13）は、体部が大きくなるものと球形に近い形になるものがある。文様は、体部に櫛描波状文、斜格子文、刺突文、円形浮文などを施し、装飾性豊かな体部をもつ。

高杯脚部 第92図 1～16 第93図 1～21

高杯の脚部には、前期末から中期後葉後半までのものがあり、形態、調整等に変化がある。前期末と考えられるものは、第34図1、2である。粘土塊を柱状にして外側に脚部を広げた形態のもので、2孔一対の穿孔がみられる。調整は全体にミガキ調整を施す。

中期前葉前半から中期中葉前半と考えられるものは、第92図5～16である。高い脚部をもつもの、低い脚部をもつものがある。形態的には外反しながら開くしっかりとした脚部をもち、端部が内側に肥厚する。脚部中央に2孔一対の穿孔がみられるものが多い。また、12、15のように透かし孔をもつものも見られる。調整は外面ミガキ、杯部内面ミガキ、脚部内面ナデ調整を施し、接合部近くにしづり目がみられる。

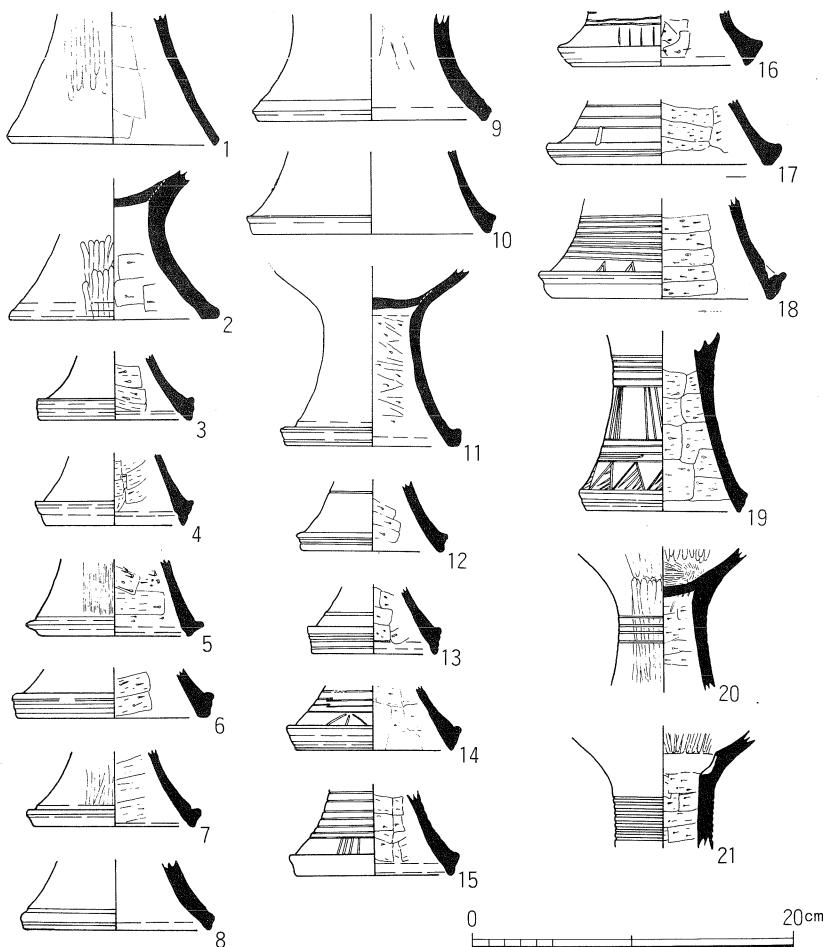


第92図 SR01 11層出土土器(その33)

中期中葉後半から中期後葉後半と考えられるものは、第93図1～21である。形態的には外反しながら開くしっかりした脚部をもち、端部は上下方向に肥厚する。端部外面に凹線文を2～3条めぐらす。その他の文様は、数条の沈線文、鋸歯文、透かし孔をもつもの（14～21）などがある。調整は、外面ミガキ、内面ヘラケズリをほどこす。

蓋形土器 第94図1～7

前期末と考えられるものに1～5がある。大きく外反し、端部近くで屈曲する。つまみは長くつまみ上げる。調整は、1、2の外面に籠状工具によるナデのあとが残り、内面はナデと細いハケ調整を施す。3は内外面ナデ調整、4は外面ミガキ、内面ナデ調整、5は外面ナデ、内面ミガキ調整を施す。



第93図 SR01 11層出土土器(その34)

中期前葉後半と考えられるもの 6 は、4つの突起をもつつまみをもつもので、中央に円孔をもつ。文様は櫛描直線文と波状文を交互にめぐらす。調整は、内外面ともナデ調整を施す。

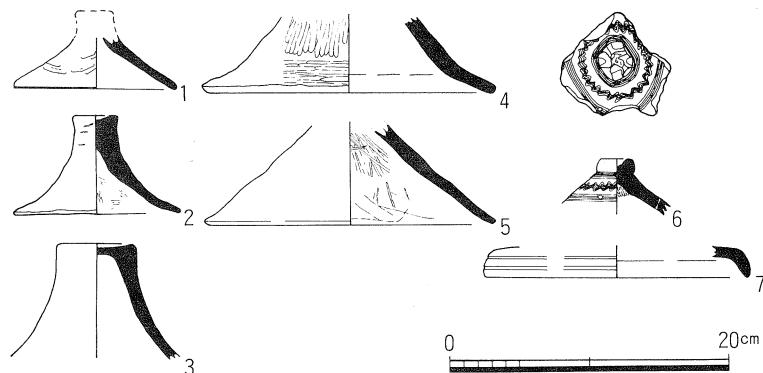
中期中葉後半と考えられるものに 7 がある。水平に広がり屈曲して下方に下がる。外面には四線文を 2 条めぐらす。調整は内外面ともナデ調整を施す。

紡錘車、ミニチュア土器 第95図 1～13

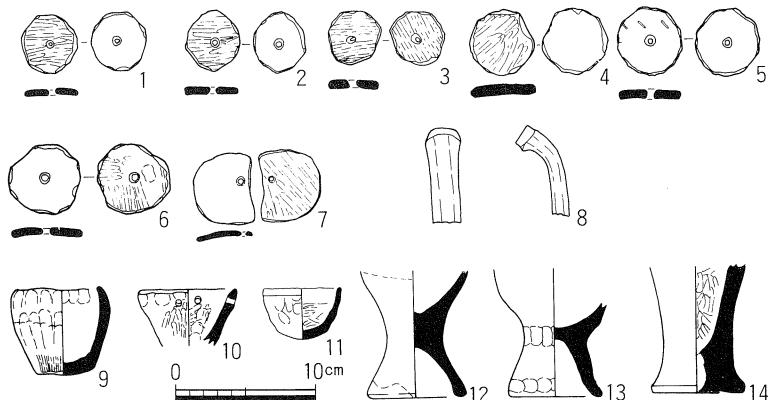
1～7 は紡錘車である。直径 4 cm 前後の土器片を利用して製作したものである。中央に円孔を開けるが、4 は未製品である。

8 は壺の把手である。

9～13 はミニチュア土器である。鉢形になる 9、10 と脚台付きの壺形土器になると思われる 11、12 がある。丁寧な調整を施す 9、10 と、ナデ調整のみを施す 11、12 がある。



第94図 SR01 11層出土土器(その35)



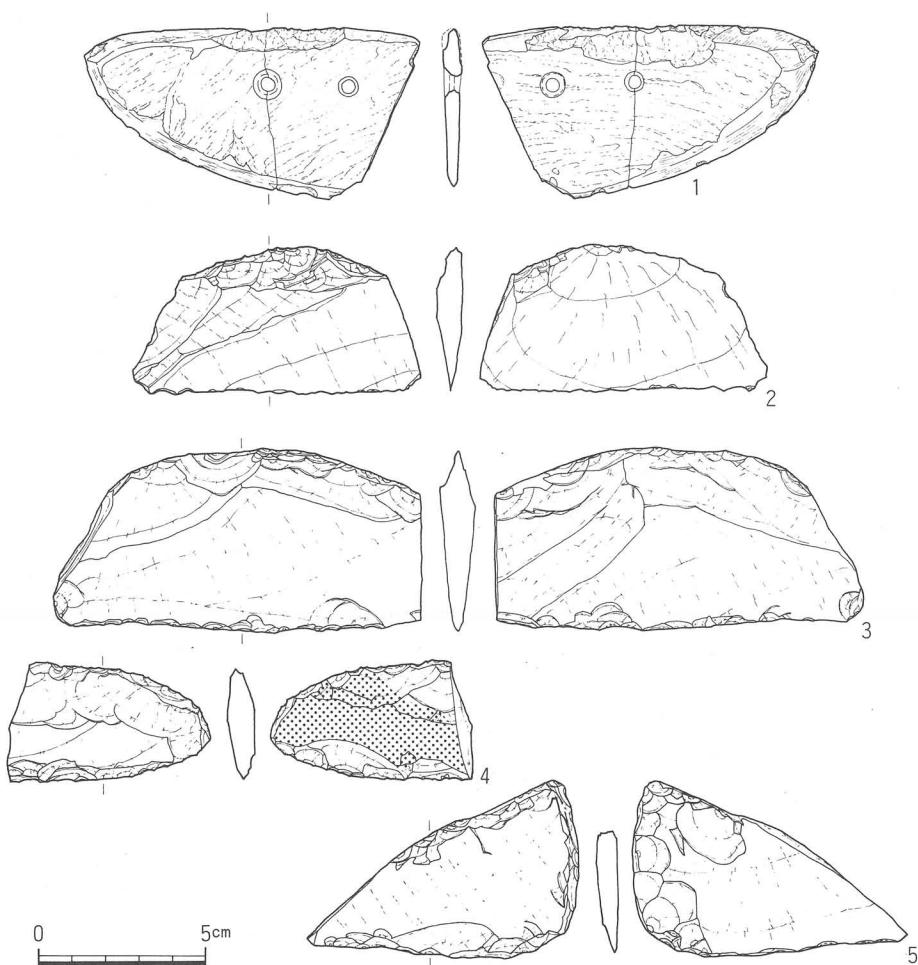
第95図 SR01 11層出土土器(その36)

石器

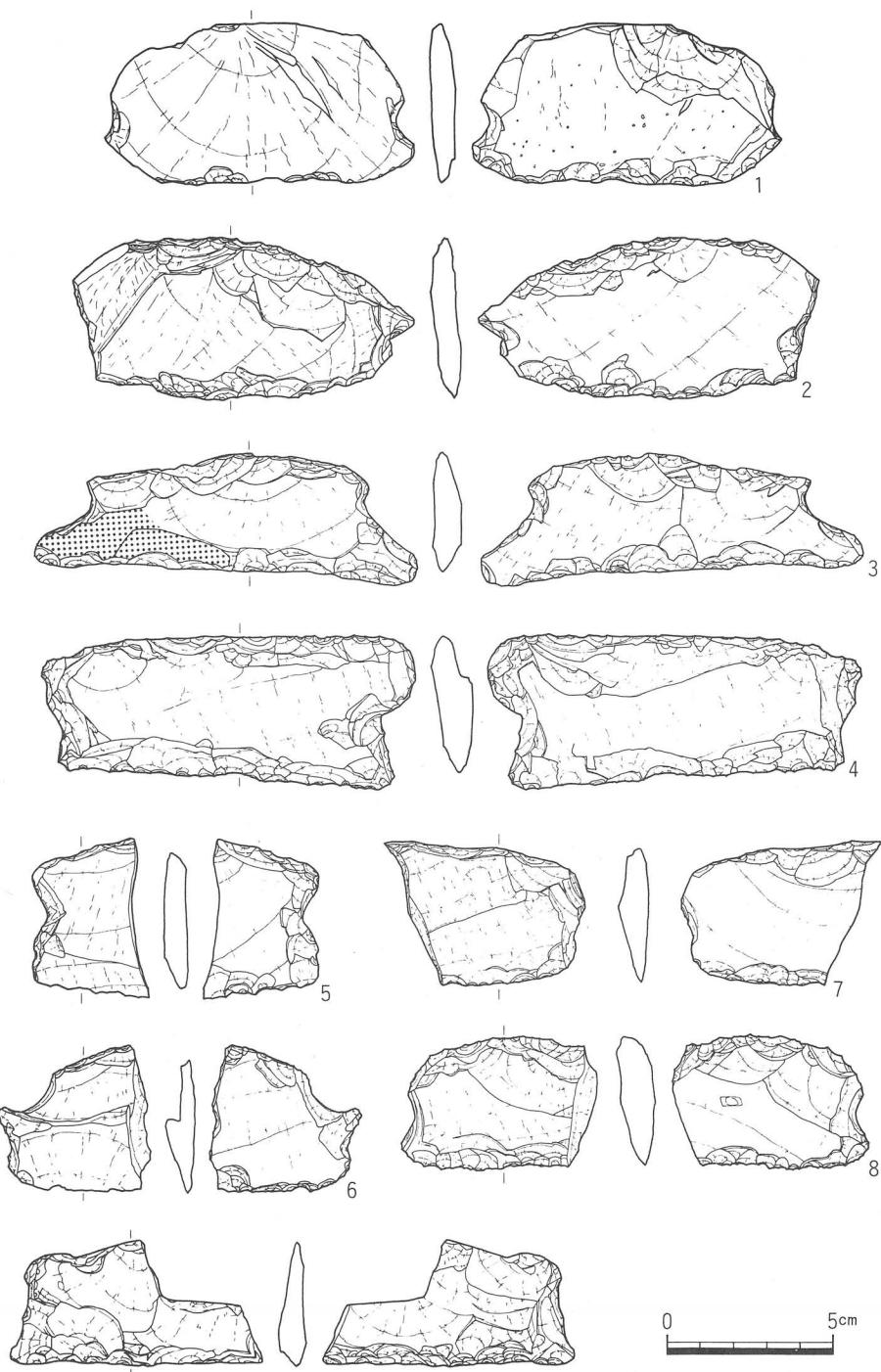
11層から多量の土器と同様に石器も出土している。これらの石器は、出土した土器の年代より弥生時代前期末から弥生時代後期に属すると考えられる。各時期の土器の出土量からすれば、後期のものは若干量であるため、前期から中期に属する可能性が非常に高い。出土した石器を器種ごとに説明を加える。

石庖丁 第97図1～9 第96図1～5

形態より大きく3つに分かれる。打製によるもので、両端に抉りをもつもの、同形態で抉りをもたないもの、半月状を呈し、石庖丁の体部中に双孔が穿たれるものがある。1は片面は自



第96図 SR01 11層出土石器(その1)



第97図 SR01 11層出土石器(その2)

然面を利用し、もう一方の面は剥離した面を利用し、両端に抉りを入れる。刃部は両面から打ち欠いてつくりだしている。刃部、中央部に使用により磨滅痕がみられる。2は片面に抉りをもつもので、両面から打ち欠き刃部を作り出し、背部は敲打によって背潰しを行う。一部自然面が残る。3は、背部に比べ刃部が長い形態のもので、両端に抉りをもち、抉り部は敲打を行い、丸く仕上げられている。刃部は両面から打ち欠いて刃をつけ、背部は敲打により背潰しを行う。A面左側の刃部から抉りにかけて、使用によると思われる磨滅痕が顕著に残る。4は両端に抉りをもち、刃部に比べ背部が長くなる形態のもので、刃部は両面からの打ち欠きにより刃をつける。背部は敲打による背潰しが行われ、抉り部も敲打によって丸くつくられている。5～9は、いずれも抉りをもつ石庖丁の破片である。5以外は刃部を両側からの打ち欠きによってつくりだし、背部は敲打により背潰しを行う。

両端に抉りをもたないものに第96図2～5がある。2、3は平面的には台形を呈するもので、刃部の方が背部よりも長い。刃部は両面からの打ち欠きにより刃を整形し、背部は敲打による背潰しを行う。4は橢円形を呈する形態をもつもので約半分を欠損する。刃部は両面からの打ち欠きによって刃をつくり、背部は敲打による背潰しを行う。片面体部には使用によると思われる磨滅痕がみられる。5は刃部から体部にかけての破片である。刃部は両面からの打ち欠きによって刃をつくる。側縁部には自然面も残る。第96図1は半月形を呈する石庖丁である。全体に磨きを行わず部分的に磨きを施す。体部に2孔の紐穴をもつ。刃部は縁辺のみに横方向の磨きを施す。背部においても縁辺のみに横方向の磨きを施した後、敲打による背潰しを行う。

石斧 第98図1、2 第99図1～8 第100図

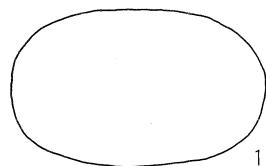
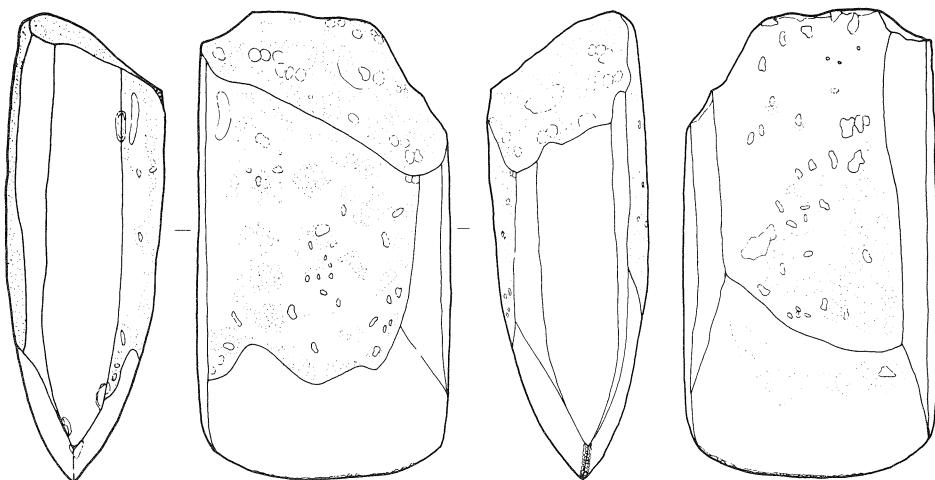
磨製石斧では、大型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、偏平片刃石斧等が出土している。

大型蛤刃石斧 第98図1、2 第99図 第100図1、2

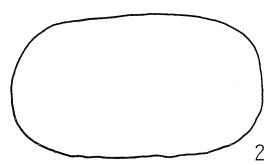
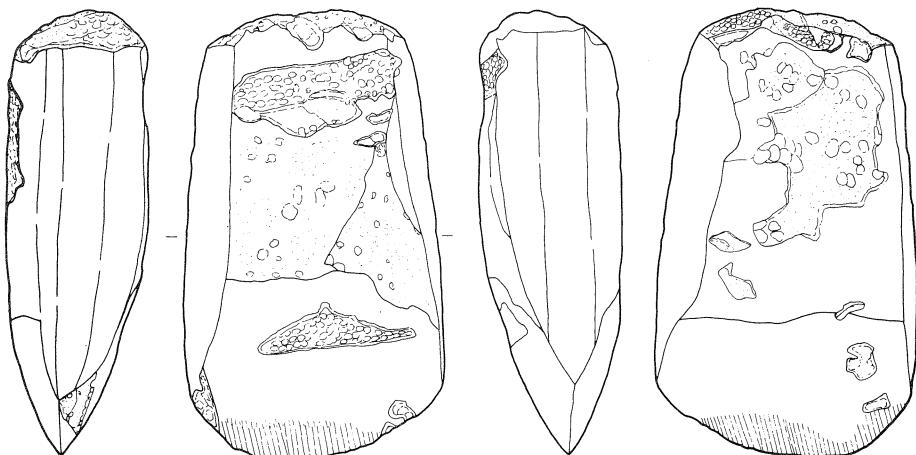
蛤刃石斧は合計4点出土している。第99図2のみ小型である。第98図1は、基部を欠損するもので、側縁は並行するものである。刃部及び側縁部は丁寧に研磨している。刃縁には使用による刃こぼれがみられる。第98図2は、側縁は基端に向かってすぼまる形態のもので、断面形が1に比べ偏平である。刃部及び側縁部は丁寧に研磨している。刃縁は、使用による刃こぼれ及び粗い擦痕がみられる。第99図1は刃部及び基端部を欠損するものである。断面形は橢円形を呈する。全体に丁寧な研磨を行う。第99図2は粗雑なつくりの小型品である。刃部及び体部に部分的な研磨を行う。

柱状片刃石斧 第99図3～6

いずれも破片での出土であり、全体の形態がうかがえるものはない。3は、基部中央に抉りをもつもので、大半を欠損している。全体に丁寧な研磨を行う。破損した面についても研磨を行っていることより、転用を意図して研磨を行った可能性がある。4は、刃部及び側面の表面



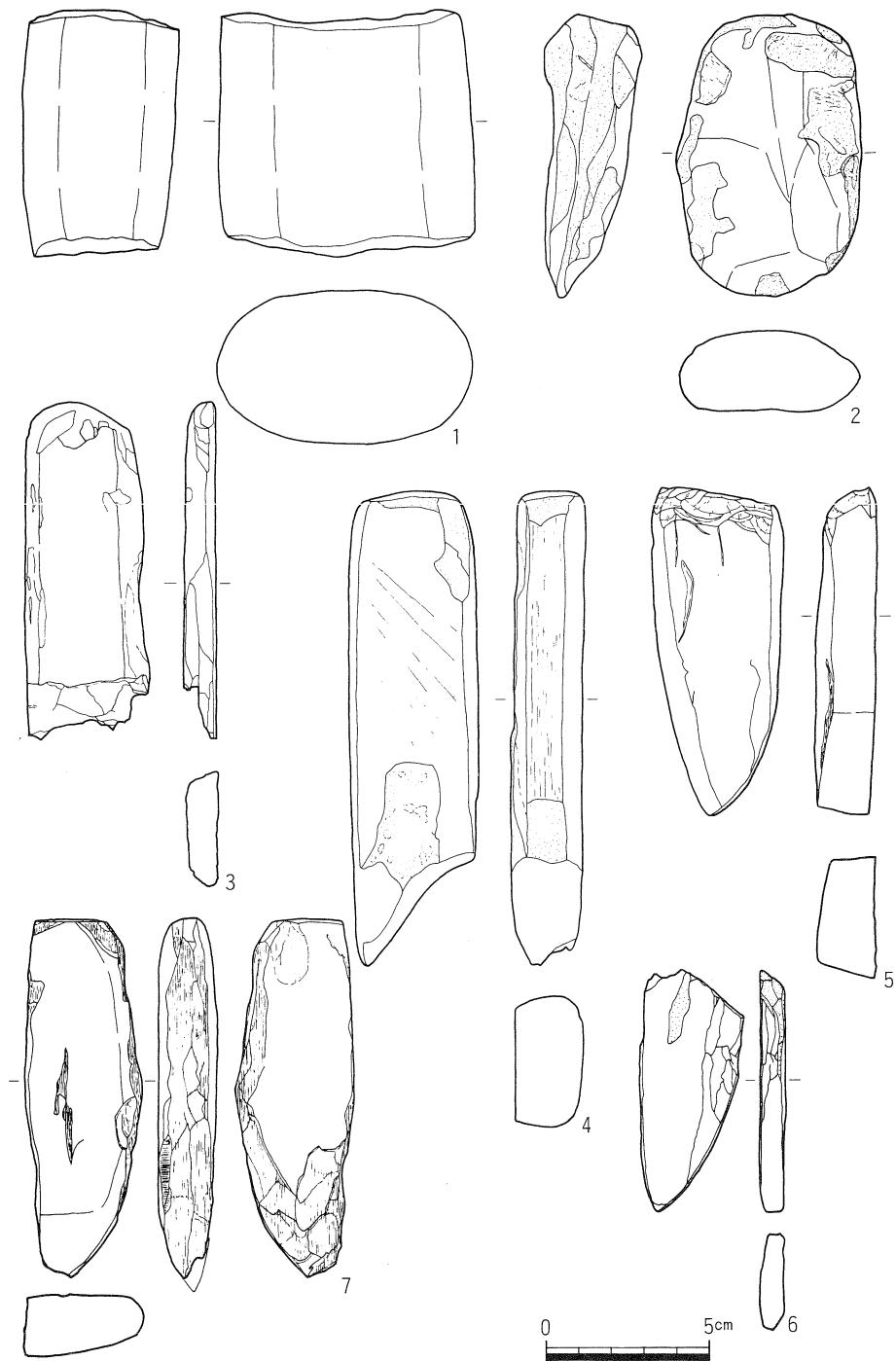
1



2



第98図 SR01 11層出土石器(その3)



第99図 SR01 11層出土石器(その4)

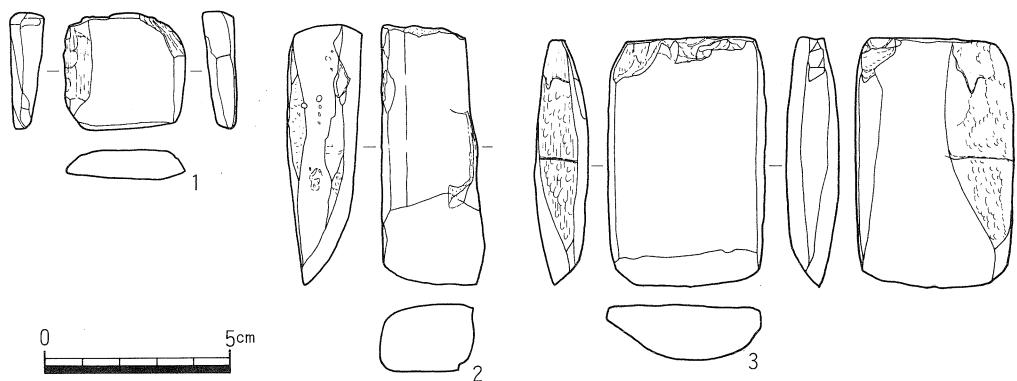
部を欠損するもので、全体に丁寧な研磨を行っている。5は、基部及び右側面を欠損しているもので、全体に丁寧な研磨を行う。6は、刃部のみの破片である。全体に丁寧な研磨を行う。

偏平片刃石斧 第99図7、第100図1～3

7は大型の石斧である。刃部及び右側面部を欠損する。長さ、幅を復元すると、長さは12cm、幅6cm程度になる。全体に丁寧な研磨が行われている。2は、基部及び右側縁部を欠損する大型になると考えられるもので、全体に丁寧な研磨が行われている。刃部には使用によるものと考えられる刃こぼれが一部にみられる。3は、中型の完形の石斧である。刃部は丁寧なつくりがなされ、鋭い刃がつく。断面は蒲鉾状を呈する。全体に丁寧な研磨を行っている。1は小型の石斧である。鋭い刃はつけないものの、丁寧なつくりである。平面形は正方形を呈し、断面形は台形を呈する。全体に丁寧な研磨を行っている。

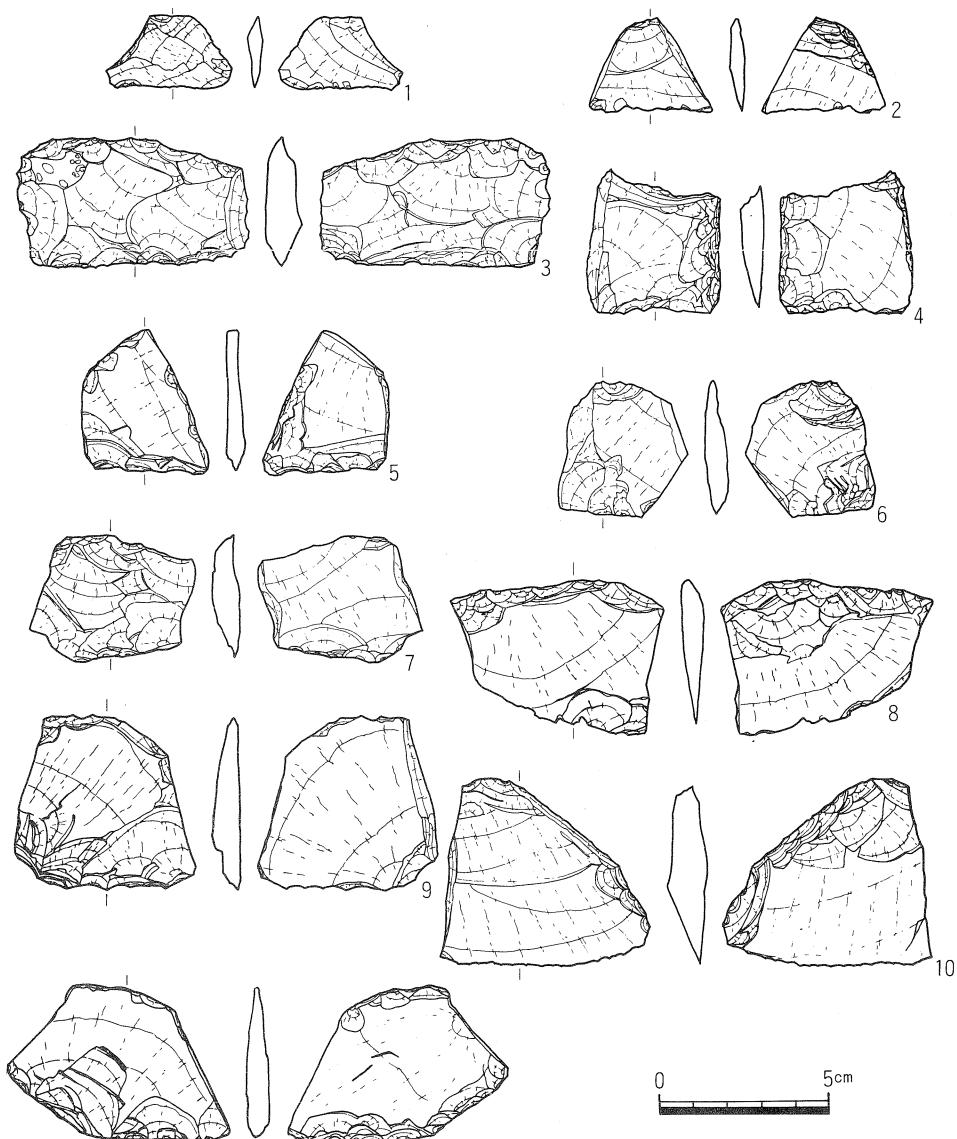
削器（刃器） 第101図1～11

1、2は両側縁に截断面をもち、両面からの少ない打ち欠きによって鋭利な刃部をつくる。3は刃部及び背部に打ち欠きによる調整を行うもので、背部には敲打による背潰しがみられ、刃部中央部には、使用によるものか、摩滅痕が認められる。石庖丁と同様な使用方法を考えられる。4は、刃部と考えられる辺と右側縁に、打ち欠きによる調整が施されているが、他の縁は調整は施されない。5は、4と同様調整が施される縁と施されない縁があり、刃部と考えられる縁は粗い打ち欠きによって刃部をつくる。6は、4、5と同様刃部と考えられる縁と限られた縁を調整し、その他の縁は最初の剥離面を残す。7は、両面からの打ち欠きにより鋭利な刃部をつくる。8は、刃部と考えられる縁は、剥片を取る段階でできた鋭利な部分を利用し、背部にのみ両面からの打ち欠き及び、敲打により背潰しを行っている。9は両側縁に截断面を

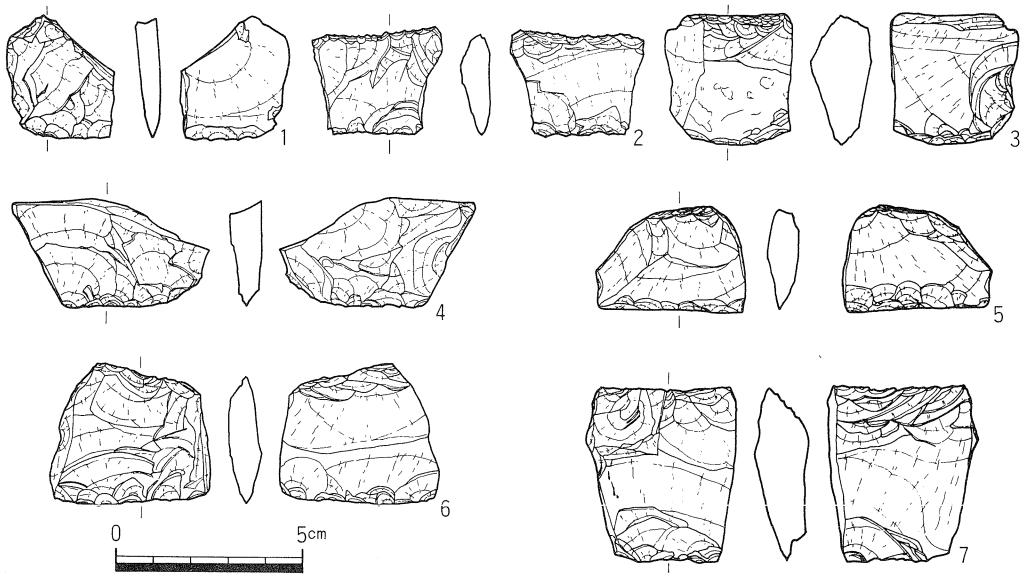


第100図 SR01 11層出土石器(その5)

もつもので、刃部は片面からのみの打ち欠きによって調整を施す。10は、大きな剥離によってできた鋭利な縁を、さらに細く縁辺を打ち欠いて刃部をつくる。左側縁には截断面が残る。11は両面からの打ち欠きにより刃部をつくる。背部と考えられる縁は敲打によって背潰しを行う。両側縁には截断面が残る。



第101図 SR01 11層出土石器削器(刃器)



第102図 SR01 11層出土石器(その7)

楔形石器 第102図 1～7

楔形石器と考えられるものが7点出土している。平面形態は台形もしくは正方形に近いものが多く、小型のものから大型のものまである。いずれの石器についても両側縁に截断面を残す。上下端ともに刃潰れをおこしているものが多く。階段状剝離が認められることながら両極からの打撃によってこれらが形成されたものと思われる。

砥石 第103図 1、2

1は、砂岩製の大型の砥石で、中央部がくぼむ形態である。中央部に擦痕が顕著に残る。

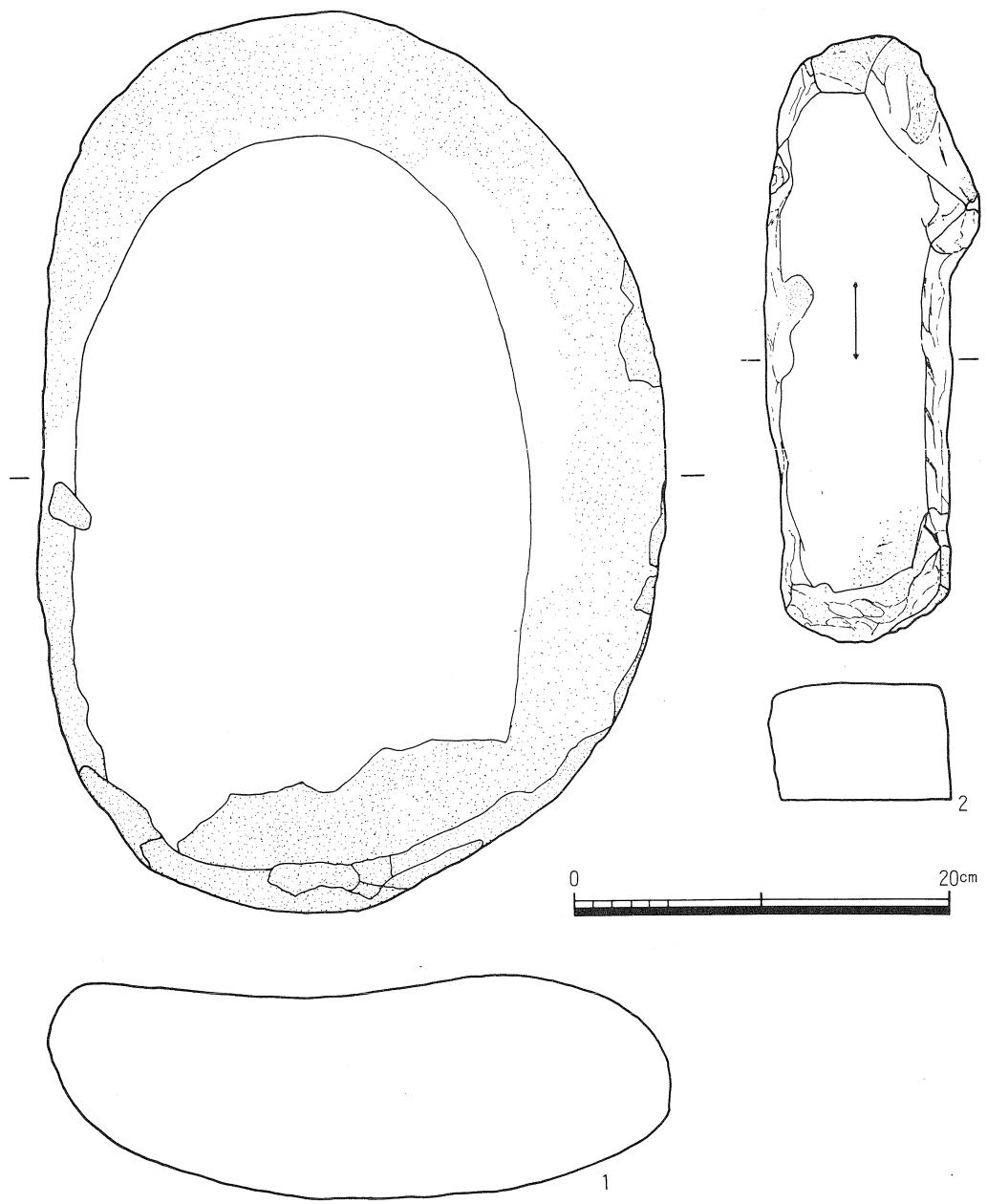
2は、安山岩製で、1に比べ小型のものである。一面のみを利用しており、使用による磨滅で、面はなめらかである。

石鎌 第104図 1～5

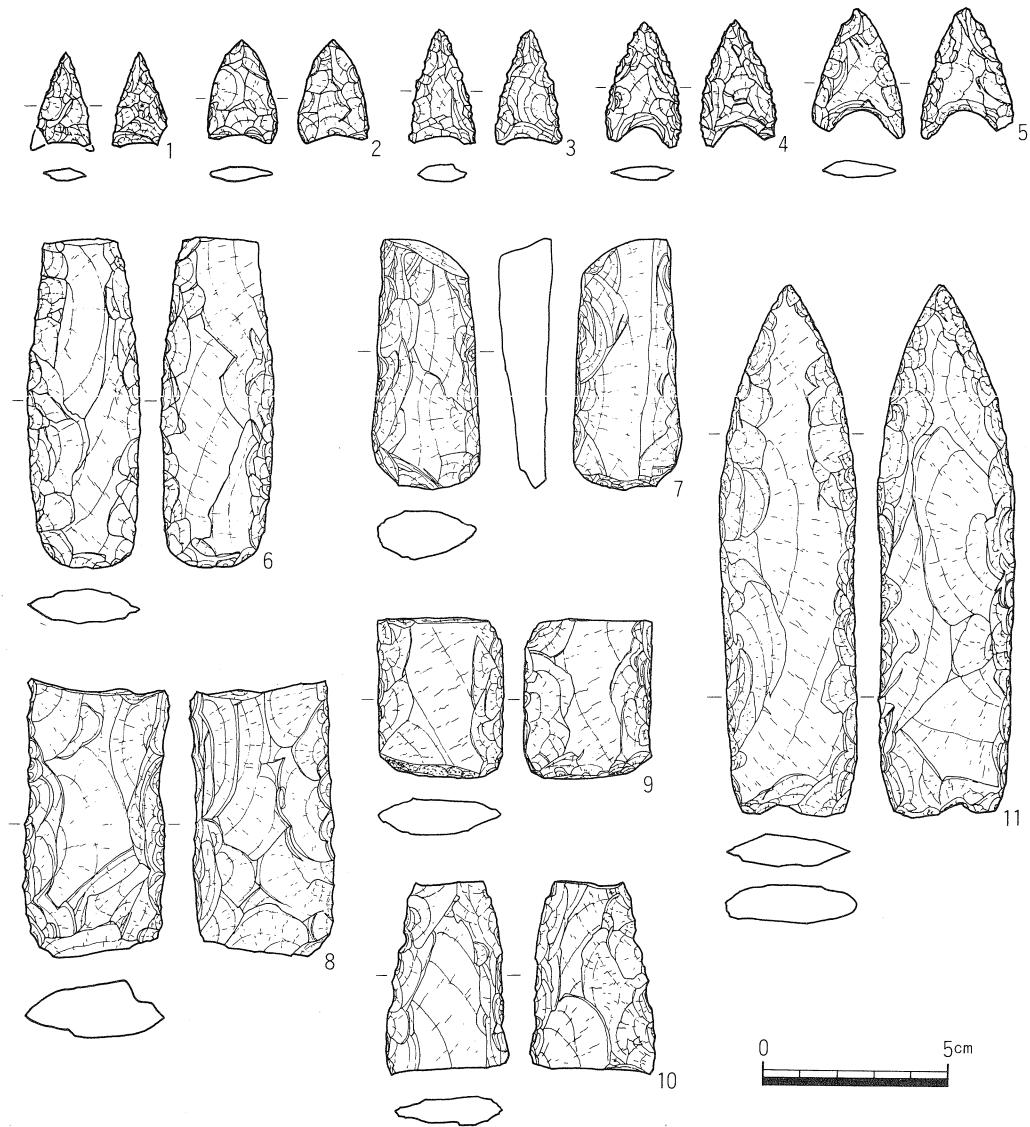
いずれも凹基式と呼ばれる石鎌である。両面からの打ち欠きによって成形される。石鎌の規模は、長さが2.75～3.5cm、幅1.9～2.5cmであり、比較的大型のものが多い。

石槍（石剣をふくむ） 第104図 6～11

6は尖頭部を欠損するもので、側縁はほぼ並行で、尖頭部に向かってすぼまる形態のものである。両面からの打ち欠きによって側縁から尖頭部に向かって刃をつける。7は基部から尖頭部に向かって幅が狭まるもので、尖頭部を欠損する。幅のわりに断面の厚さが厚い。基部両側



第103図 SR01 11層出土石器(その8)



第104図 SR01 11層出土石器(その9)

縁は敲打による刃潰しが行われている。8、9は尖頭部を欠損するもので、両側縁が平行で、両側縁には敲打による刃潰しが行われている。10は、尖頭部及び基部を欠損する。尖頭部に向かってすぼまる形態で、左右のすぼまりかたが一様ではないが、両側縁とも両面からの打ち欠きによって刃が付けられていることより石槍と考える。11は完形のもので、両側縁が並行になり、尖頭部ですぼまる形態である。尖頭部は両面からの打ち欠きによって鋭利な刃をつくり、基部は敲打による刃潰しを行っている。これらの石槍のうち、8、9、11は、形態及び成形方法より石剣の可能性がある。

木製品

2区S R 0 1 (第105図)

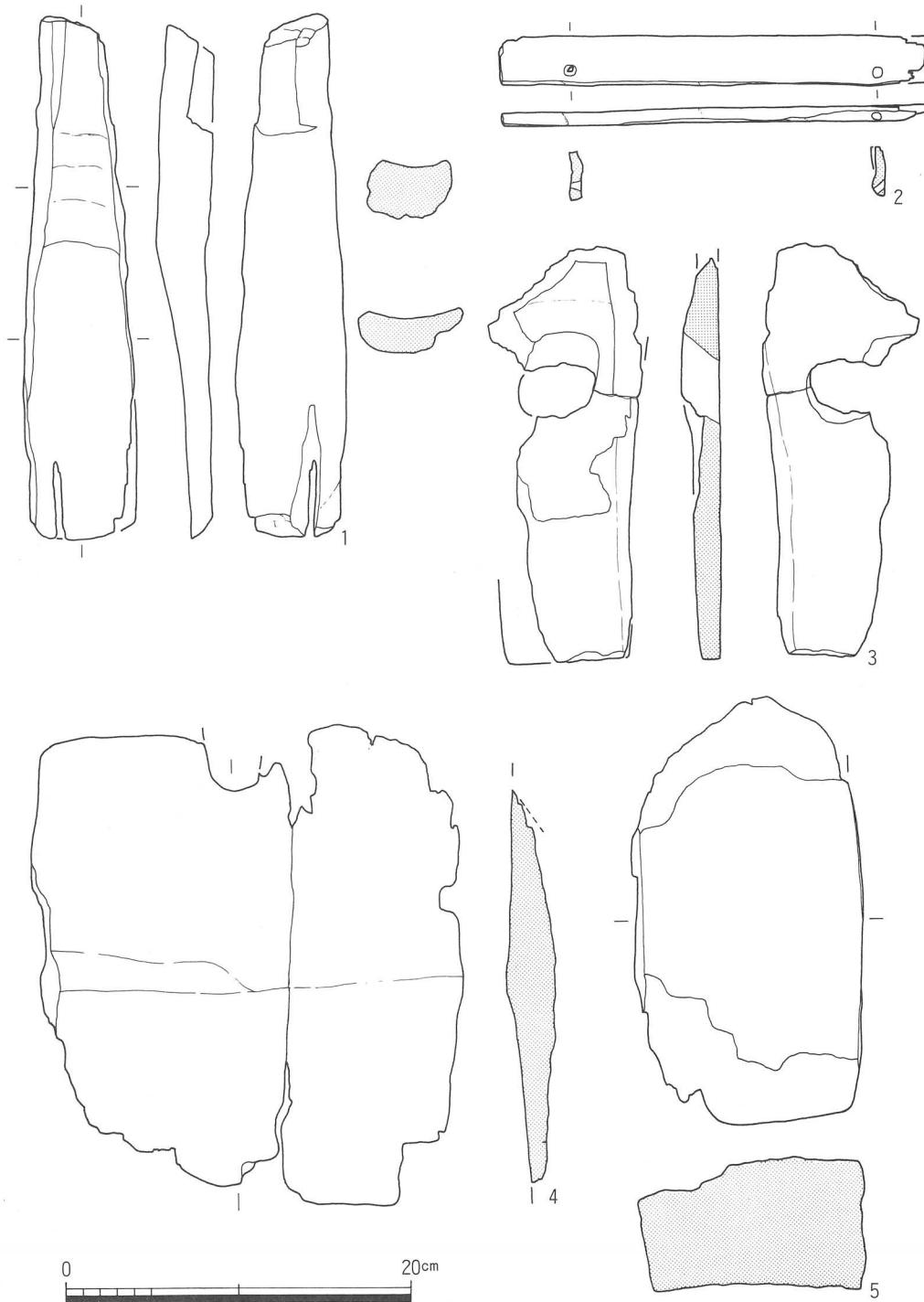
1は割材であり、両端部に加工がみられる。全長は31.1cm、最大幅6.3cm、厚3cmを測る。内面は凹んでおり、中央より先端部にかけてだいに薄くなっている。加工は不明瞭で、板目材を用いる。用途は不明。

2は柾目の板材である。残存長は25.4cm、幅2.9cm、厚0.7cmである。面取りされ、側面には加工痕が残る。垂直方向と斜め方向の2個の穿孔が施される。

3は狭鍬である。第11層より出土した。依存状態は非常に悪く、傷みが著しい。現存長は24.7cm、現存幅8.5cm、厚1.5~2cmである。内側には明確な着柄隆起を持たず、平坦な身に約50度の角度で着柄する。孔の径は約5cmである。

4は鍬の破片である。第11層より出土した。依存状態は非常に悪く、一面のみ原形を保っている。現存長は24.7cm、現存幅8.5cm、厚1.5~2.0cmである。中央にわずかな隆起がある。着柄孔の一部が残存しているがその形や着柄角度は不明である。柾目材を素材とする。

5は板目の割材である。第11層より出土した。現存長は24.4cm、幅7.3cm、厚7.3cmを測る。断面は長方形を呈し、全面が平坦である。作業台である可能性も考えられる。



第105図 SR01 11層出土木製品

第5節 古代の遺構と遺物

1・3区

SD01・02 (第106図)

3区西端において4a黒褐色砂質シルト層除去後に確認された南北方向の2本の平行溝である。溝幅約20cm、深さ5cm前後、溝間の幅は約6.2mを測る。遺構掘込面を掘削中に確認されたため、断片的な検出にとどまり、1区においても延伸部は検出されていない。遺構内からの遺物の検出もないが、4a層の包含遺物から7～9世紀頃の時期が考えられる。

調査区の西を画する南北の里道は条里坪界線と推定されており、遺構はこれと隔たることわずか6mと近接した距離に位置していることから、条里地割に関係する遺構であると考えられる。

SD03

1区B2グリッドで検出された、ほぼグリッドラインに沿って南北に直流する溝である。幅1.8m、深さ10cmを測る。B列から北へ5.5mの地点で東へ直行する分岐点があるが、現耕作面

の段差のために4mまでしか残存しない。3区においても同様な理由によって南への延伸部は確認できなかった。遺物の出土がないため時期の確定ができないが、古墳時代後期から末にかけての須恵器片を包含する4c層を切り込むことから、古代から新しくとも中世までのものと推定される。

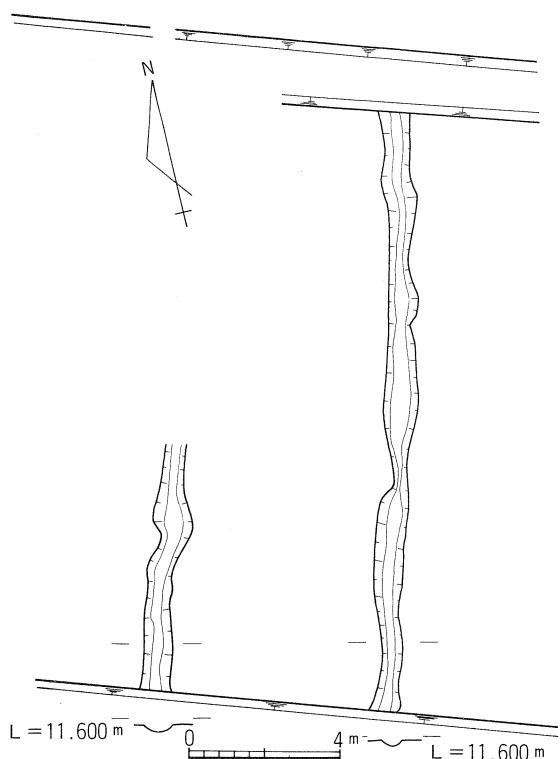
4a包含層出土の遺物 (第107図)

4a層の時期は、古代から新しく考えても中世までの時期が与えられる。ここでは、4a層から出土した土器のうち古代に属すると考えられる須恵器についてのみ記述したい。これらの土器の所属時期は、概ね7～9世紀に属すると考えられるものである。

以下器種ごとに、特徴を述べる。

杯蓋 1～4

1は、宝株のつまみである。2は、やや器高の高い杯蓋である。3、4は、端部が屈曲するもので、器高は低い。



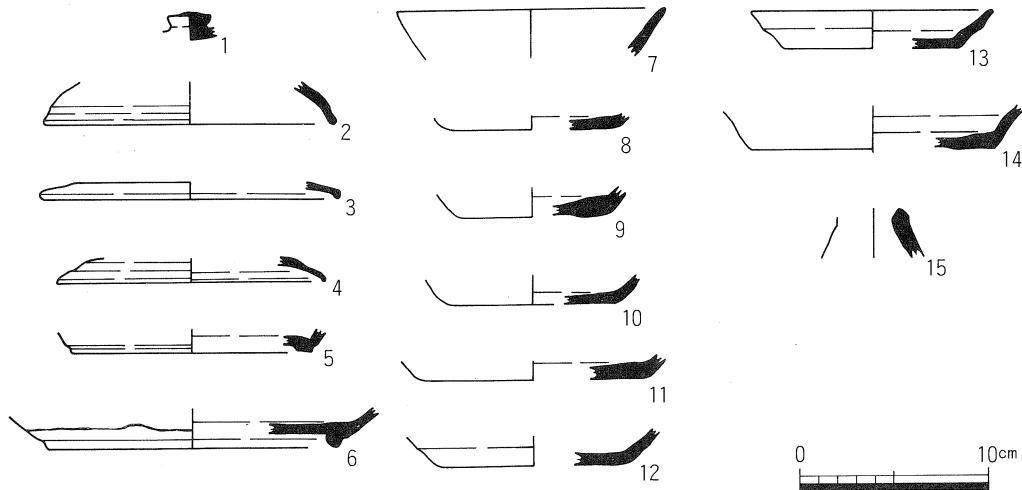
第106図 SD01・02完掘平面図

杯身 5、6

いずれも杯身の高台付近である。5の高台は、あまり高くない。6は、器高が低くなり、底径が大きなことより、皿の可能性もある。

皿 7~14

13以外全容がわかるものはない。底径により、9cm前後のものと、12cmを越えるものがある。いずれの底部もヘラ切りが行われる。口縁部は、内外面ともヨコナデを行う。焼成は良好なものが多く、砂粒あまり含まず、精良なものが多い。



第107図 1・3区4a層出土土器

2・4区

8a水田層

2、4区SD01内の8a層上面、現地表下約90cmで確認されたもので、旧河道の埋没過程の中で水田として利用したものである。水田は河道内の西寄りの部分に東西幅約25mの帯状に河筋に沿って分布しているものと考えられる。SR01は、水田分布範囲からはずれた東側に河床の砂礫層の上昇がみられるため、保水性の問題から自ずと範囲が限られたものであろう。

水田面は、東西がやや反りあがった浅い凹地が南から北に向けて緩い傾斜で下がるような地形をし、川筋に横断する方向の高低差は約9cm、縦断方向では15mにつき約11cmを測る。畦畔は幅20~40cm、高さ約3cmを測り、水田区画は、基本的には地形の傾斜に応じて不整形につくられているが、部分的には形がほぼ整った方形区画を呈する箇所もある。1筆あたりの面積は7~22m²、平均値は9.4m²を測る。隣接する区画どうしの高低差は2cm前後であるが、隣どうしでほとんど高低差のない区画もあって、SR01西岸の前期の水田面のように均等な高低差で規則的な造成はなされていない。4箇所で水口が確認されているが、本格的な施設ではなく、あくまで一時的なもののように、基本的な配水は畦越しの掛け流しによったものであろう。

水田域の東、SR01の肩部付近にはほぼコンターラインに沿った2本の用水路が重複するように掘削されている。岸側のSD07（幅80cm、深さ40cm）が先行して掘削され、この埋没後に河道側のSD08（幅75cm、深さ20cm）が再掘削されている。埋土は8、9層と同様の暗褐色～極暗褐色極細砂質シルトで、これらの層の形成時期と相前後するものと考えられる。しかし、土層の観察によって、8a層がSD08、を一部被覆していることが確認できているので、水田面との直接的な並存関係は明確でない。遺物は確認されていない。

出土遺物（第112図3~21）

蓋形土器 3~7

3は、宝株のつまみをもつものである。端部の形態より4、7と5、6に分かれる。

皿形土器 8、9

平底の底部から屈曲して短く外反するものである。

底部 10~18、19~21

杯及び皿の底部がある。また、高台をもつ底部がある。

脚部 12

高杯の脚部と考えられる。

8a~9b層の出土遺物（第109図34~37）

8a層上面水田を確認した後、10層までを掘り下げた時点で出土したものである。

杯身 34、35

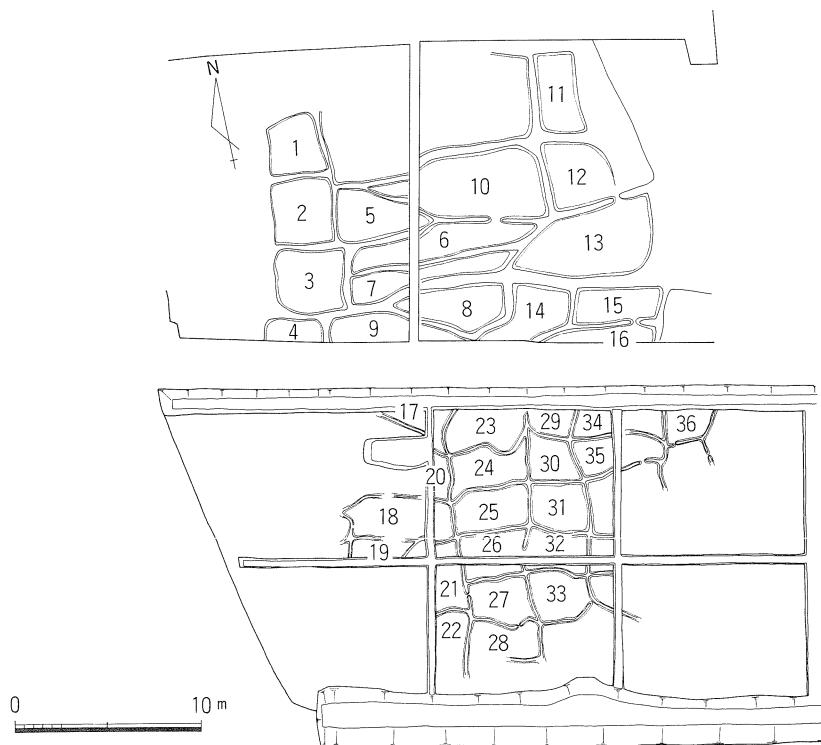
直線的にたちあがる口縁部をもつもので、口径は大きくない。

杯蓋 37

丸い天井部からつづき、内面に弱いかえりをもつものと思われる。

壺 36

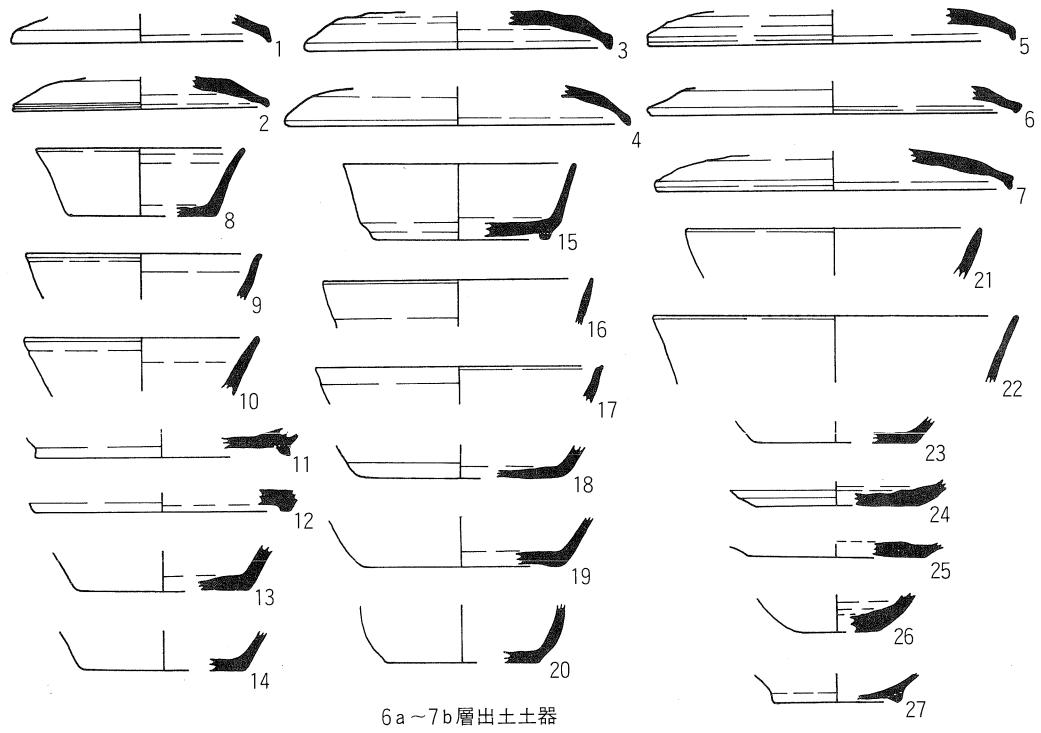
壺の体部である。



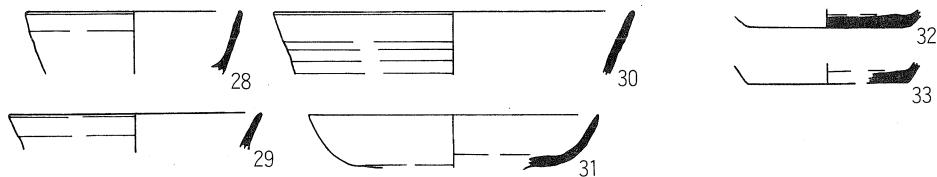
第108図 2・4区 8a水田区画図

No.	面積(m ²)	平均標高(cm)	No.	面積(m ²)	平均標高(cm)	No.	面積(m ²)	平均標高(cm)
1	7	10.205	14	(8.4)	10.165	27	6.7	10.060
2	10	10.245	15	8	10.185	28	(6.1)	10.090
3	11.5	10.225	16	(4)	10.185	29	(3.1)	10.030
4	(3.2)	10.240	17	(3.7)	9.990	30	5.3	10.010
5	9.3	10.145	18	12.2	10.120	31	6.9	10.020
6	11.5	10.120	19	(3.2)	10.120	32	6.2	10.060
7	9	10.130	20	(1.8)	10.060	33	7.1	10.060
8	10.8	10.170	21	(3.4)	10.070	34	(5.9)	10.040
9	(8.9)	10.185	22	(6.8)	10.060	35	7.2	10.050
10	22.7	10.140	23	(8.2)	10.060	36	(3.5)	10.080
11	1.6	10.170	24	7.7	10.000	平均面積		9.37m ²
12	9.6	10.195	25	8.1	10.030	最大面積		22.7m ² (10)
13	20.5	10.180	26	7.3	10.080	最小面積		1.6m ² (11)

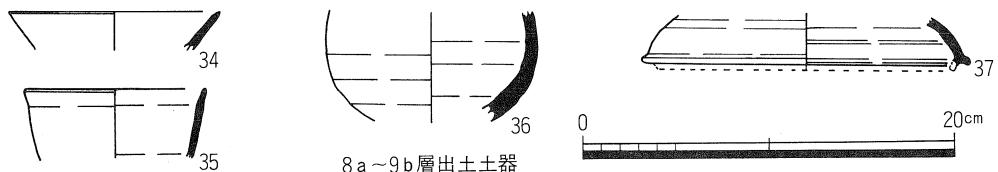
第4表 2・4区8a水田面積集計表



6a~7b層出土土器



7b層出土土器



8a~9b層出土土器

第109図 2・4区 SR01 6a~9b層出土土器

第6節 中世以降の遺構と遺物

5 a 水田層

SR01の河床域ほぼ全域にわたって存在する水田層である。褐灰色極細砂質シルト質の耕土で上面に畦畔の隆起がみられる。しかし、2、4区東半と4区南半の部分では上層4a層による削平のために畦畔の存在が不明瞭または全く平坦化している。調査では2区西半の範囲でこの水田面の面的検出を行った。

水田面の地形は、横断方向ではSR01西肩から20m付近が最も低く、東西両方向に向かってわずかずつ上がって行く、浅い谷状を呈し、20mで約10cmの比高差を測る。南北方向では南から北へレベルを減じて行き、15mで8～10cmほどの比高差である。

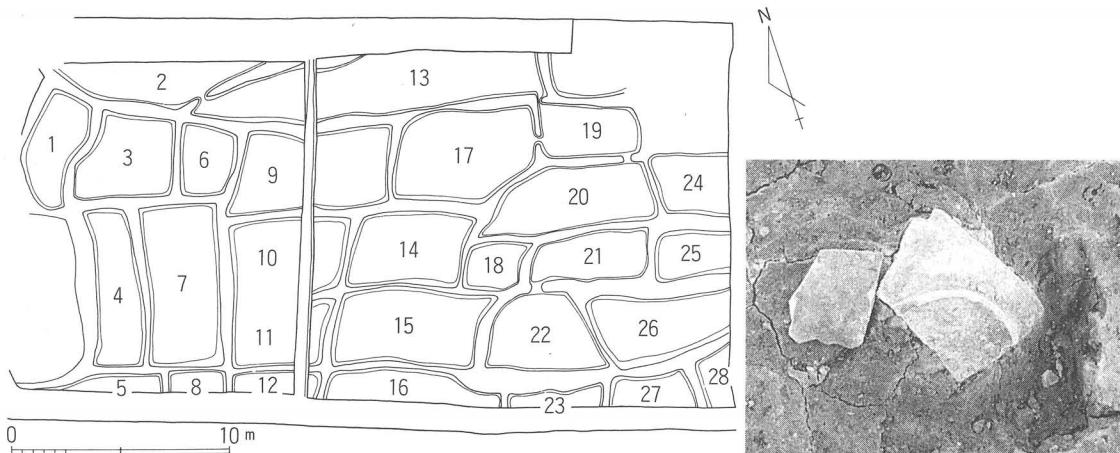
5 a 水田面は幅20～50cm、高さ4～6cmの畦畔によって、規則性に乏しい長方形から橢円形様の不整な平面形を呈する。地形（傾斜）に応じて造成したものと考えられるが、等高線に沿うような法則性をもった畦畔の通りはみられない。SR01西肩付近の緩傾斜部では南北方向、谷底付近から東では東西方向の畦畔が優先している。隣接する水田区画相互の高低差は不規則で全体的な地形の傾斜とは対応しない。

出土遺物（第112図1）

1は、瓦器の椀である。断面三角形の貼り付け高台をもち、器高はあまり深くならないものと考えられる。内面見込みに平行の暗文を施す。12世紀後半ごろと考えられる。

6 a 水田層

断面観察において2、4区のSR01内のほぼ全域にわたって分布する。土質は5 a 層と同様、

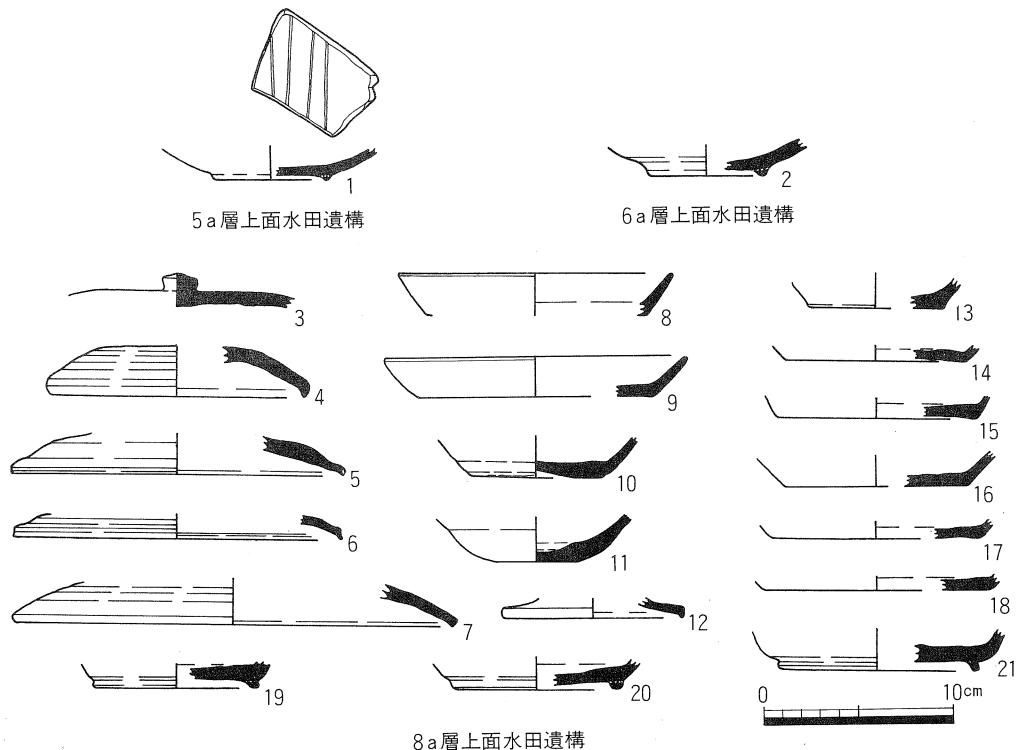


第110図 2区5a水田区画図

第111図 5a層上面水田土器出土状況

No.	面積(m ²)	平均標高(cm)	No.	面積(m ²)	平均標高(cm)
1	10		17	24	
2	(11.5)		18	5.1	
3	14		19	10.1	
4	14.7		20	19.3	
5	(2.5)		21	10.4	
6	7		22	14.5	
7	24.9		23	(2.8)	
8	(2.6)		24	(9)	
9	23.5		25	(6.9)	
10	18.8		26	(16.8)	
11	11.1		27	(5.2)	
12	(2.8)		28	(3.4)	
13	(33.8)		平均面積		15.34m ²
14	15.7		最大面積		24.9m ² (7)
15	22.4		最小面積		5.1m ² (18)
16	(10)				

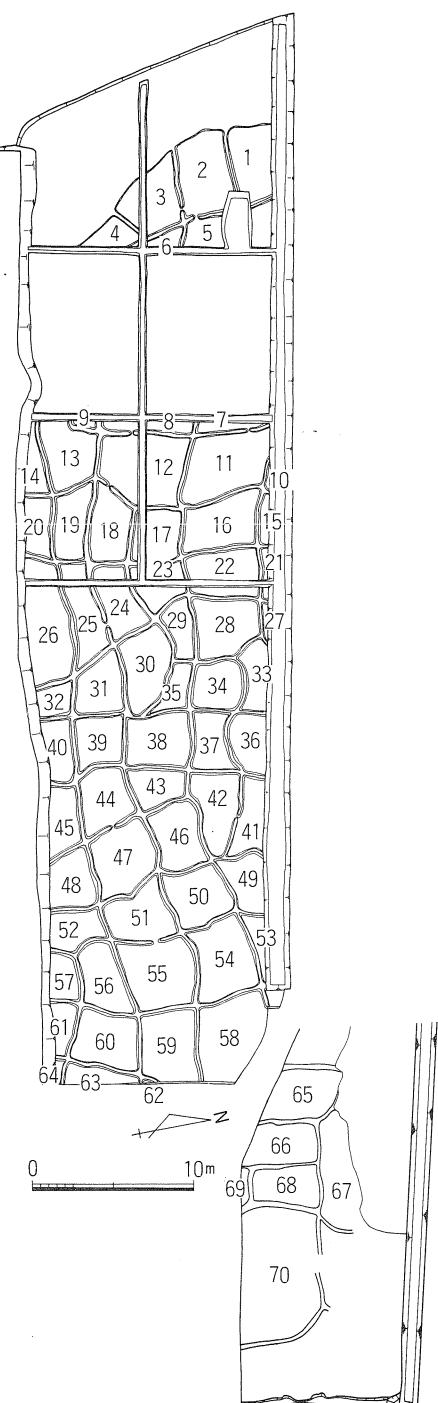
第5表 2区5a水田面積集計表



第112図 2・4区SR01内水田遺構出土遺物

褐色灰色極細砂質シルト層で、
5 a層との間に層厚5cm前後の5 b褐色極細砂質シルト層を挟んで重なっている。洪水をはさんで近接した時間差で営まれた、ほぼ同時代の水田層と考えられる。4区の全域と2区の東端の2箇所で平面的な検出を行った。

4区での調査結果によると、
6 a水田面の地形は、全体としてはほぼ水平に近いが、細かく眺めると24から32の区画が南北に尾根状にやや高く、そのすぐ東はごく浅い谷状にいったん下がった後わずかずつ東へあがる。南北では相対に南より北の方が若干高い傾向を見せるのが特徴的である。畦畔は幅20~30cm、高さ2~4cmを測り、地形に応じて緩やかに蛇行しながらも、東西、南北ともほぼ碁盤状に貫通している。したがって水田区画は不整の方形または台形を呈する。ただし、レベル的に若干高かった24から32区画は、若干の区画の乱れが観察できる。区画の面積は、4.1m²から20.5m²にわたり、平均値は11.0m²を測る。



第113図 2・4区6a水田区画図

No.	面積(m ²)	平均標高(cm)	No.	面積(m ²)	平均標高(cm)
1	(10.6)	10.30	35	4.1	10.27
2	14.4	10.28	36	(7.6)	10.30
3	12.3	10.27	37	7.75	10.28
4	(4.4)	10.32	38	12.5	10.26
5	(11.2)	10.24	39	8.1	10.25
6	(1.5)	10.30	40	(6.3)	10.26
7	(2)		41	(7.5)	10.31
8	(3.2)	10.26	42	11	10.31
9	(0.4)		43	6.9	10.29
10	(0.4)		44	10.6	10.26
11	18	10.25	45	(7)	10.26
12	20.5	10.27	46	10.8	10.31
13	(10)	10.26	47	13.9	10.27
14	(4)	10.26	48	(8.8)	10.23
15	(1.75)	10.28	49	(6.8)	10.33
16	12.8	10.26	50	11.4	10.30
17	9	10.28	51	10.4	10.29
18	10	10.25	52	(6.8)	10.26
19	8.2	10.26	53	(2.5)	10.31
20	(5.75)	10.24	54	14.9	10.30
21	(1.7)	10.29	55	16	10.29
22	12.25	10.27	56	9.6	10.24
23	7.6	10.29	57	(4.7)	10.20
24	9.45	10.28	58	(7)	10.26
25	10.3	10.29	59	(13.5)	10.27
26	(17.8)	10.26	60	11.6	10.28
27	(0.8)	10.29	61	(3.8)	10.22
28	13.0	10.30	62	(0.2)	
29	5.25	10.28	63	(4.1)	10.23
30	12.1	10.30	64	(0.6)	
31	9.1	10.28	平均面積		11.00m ²
32	(3.9)	10.27	最大面積		20.5m ² (12)
33	(5.5)	10.29	最小面積		4.1m ² (35)
34	8.5	10.29			

第6表 2・4区6a水田面積計測表

出土遺物（第112図2）

2は、黒色土器B類の碗である。断面台形の貼り付け高台をもち、器高はあまり深くならないものと考えられる。磨耗が著しいことより調整等は不明である。

6a～7b層の出土遺物

（第109図1～27）

6a層上面水田を検出した後、8a層上面水田を検出するまでの間に出土したものである。27の黒色土器A類を除いてすべて須恵器である。

杯蓋 1～7

天井部が平坦面をもち、なだらかに続き、端部で下方に屈曲させる口縁部をもつものである。

杯身 1～23

大きな高台をもつものと、もたないものに分けられる。口縁部が直線的に外反するものと外反しながらたちあがるものがある。

皿 24、25

皿の底部である。

壺 26

壺の底部と考えられるもので丸底の底部である。内面にロクロ痕が残る。

黒色土器A類碗 27

黒色土器の底部である。断面三角形の高台をもつ。内面に黒色処理を行う。

7b層の出土遺物（第109図28～33）

8a層上面水田畦畔を削り出す間に出土したものである。いずれも須恵器

である。

杯身28~30、33

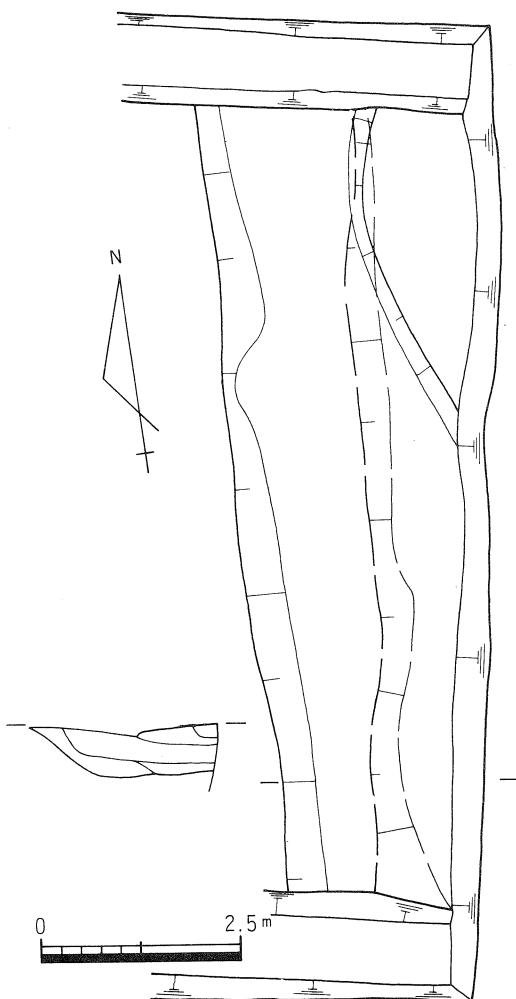
口縁部の破片と底部の破片の出土であり、全体の形態がわかるものはない。

皿 32

底部の破片である。たちあがりの角度より皿の底部と考えられる。

高杯 31

高杯の杯部と考えられ、脚部との接合部分のカーブが確認できることより高杯の杯部と考えられる。



S D 12 (第114図)

2区の最東端の検出された南北溝である。東側が調査区外に逃げるため、幅は最大部分で3.4m、深さは約25cmを測る。断面から5回にわたる堆積(再掘削)が観察できる。埋土は上層から灰白色シルト層、黄褐色砂礫層、黄褐色シルト層、灰色細砂層、灰色粘質シルト層の5層である。1、2層は調査区東辺にほぼ平行して南北に流れが、3、4層は北をやや西へ向ける。遺物はみられないが、埋土等の状況から近世以降、現代に近い時期までのものと推定してよからう。ただ、条里坪界線想定線とほぼ重なっているので、もう少し前の時期から存続したものと考えて、条里遺構との関係にも注意しておきたい。

第114図 SD12平断面図

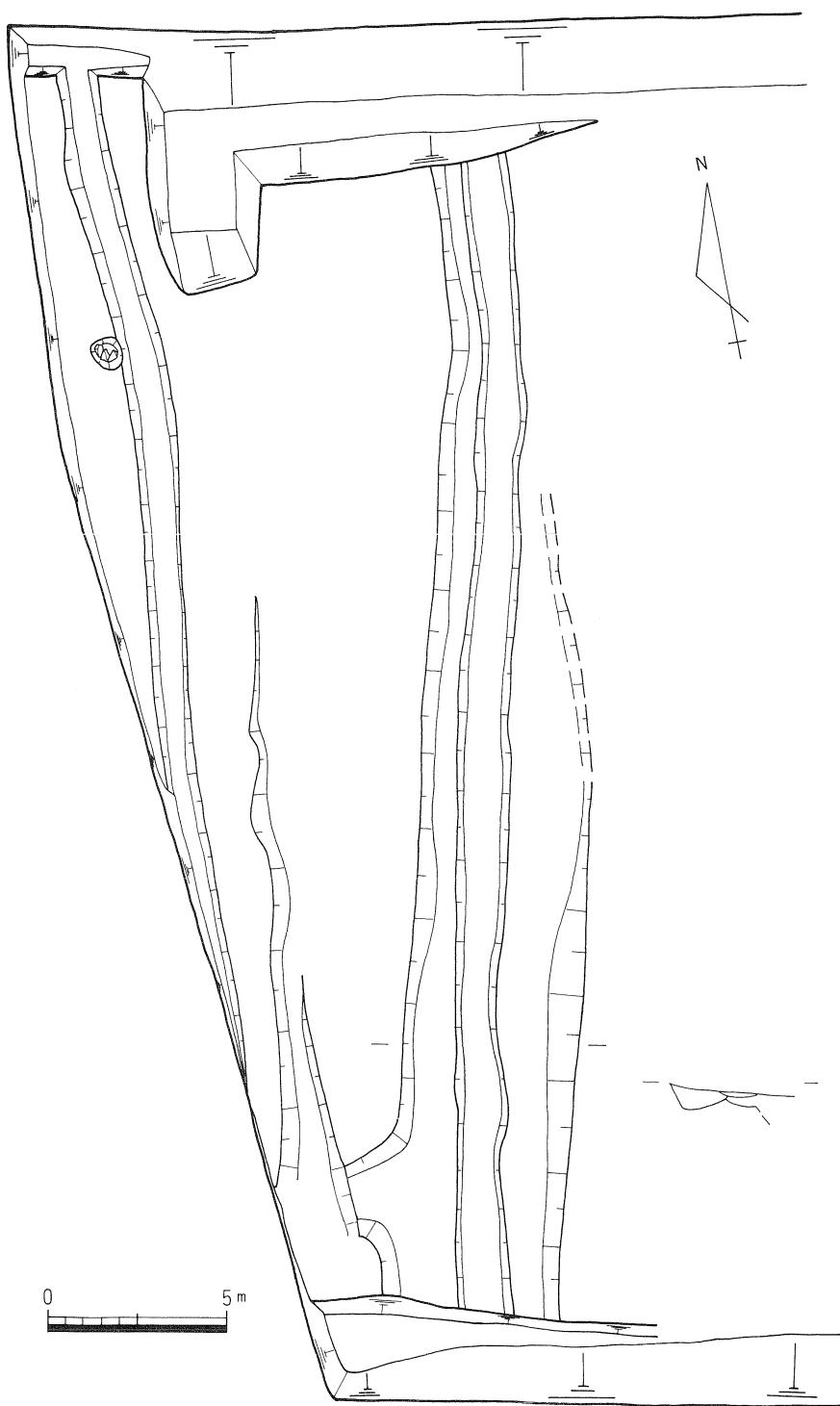
第7節 時期不詳の遺構と遺物

S R 0 1 西肩部の溝状遺構（第115図）

SR01の西肩斜面を這うように6本の溝状遺構が重層して確認された。また、これらとは別に1本が断面観察によって確認されている。遺構は河川の埋積に伴う埋没と再掘削を繰り返しながら次第に高所へ移動したような状況を呈している。遺構平面図は、これらの平面的な位置関係が良好に残る2区のものを図示した。南側の4区では河道が北北東から北に向かって緩やかに方向を変えるカーブの部分にあたるため、旧河道の肩部の傾斜が急峻となっており、溝状遺構群は1箇所で完全な上下関係をもって重複しているか、さらに微高地側に拡張して、結果的には現代の水路によって破壊されたものと考えられ、良好な確認作業ができなかった。遺構には西側の上層のものから順に番号を付し、規模はそれぞれSD06が幅60cm、深さ約10cm、SD07が幅75cm、深さ9cm（最深部、SD07は北へ向かうにつれて次第に浅くなり、途中で消滅する）、SD08が幅80cm、深さ40cm、SD09は幅75cm、深さ20cm、SD10が幅1m以上、深さ2～3cm（途中で消滅）、SD11が幅30cm、深さ15cmを測る。

包含遺物によって遺構の時期が確定できるものは、このうちSD11のみで、弥生中期から後期後半の遺物を包含する第11層と同時期の遺物がみられ、埋土も似かよっていることから弥生後期初頭の埋没になるものと推定できる。また、遺物の出土はないものの、旧河道内に営まれた数面の水田層との層位的な上下関係から判断して、SD08、09が8a水田層を僅かに遡る古代頃と推定できるが、これ以外については、土層との明確な対応関係がつかめないため、SD08、09、11を基準として、SD10が弥生後期後半から古代の間、SD06、07が古代より新しい時期のものと判断できるにとどまる。

これらの遺構は、前述のように旧河道の埋没による水位の上昇につれて、次第に高位に付け替えられた用水路的な施設と考えられ、その目的はやはり河床内で継続的に営まれてきた水田耕作のための給排水路であろう。調査では水路部分の確認のみにとどまったが、想像をたくましくしてさらに周辺部に視野を広げれば、上流では、水路の延長上に河道本流から用水を分岐する取水施設が、下流には、さらに下手の水田に配水をするための給水施設があろうことは容易に推定でき、ひいてはようやく埋没を終えようとする旧河道の河床内において、それぞれの時代でかなりの規模で水田農耕が行われていたことが考えられる。



第115図 SD6~11完掘平面図

1、3区出土の石器

石庖丁 第116図1～5

1、2は、3区の北側トレンチより出土したものである。1は、上縁部及び下縁部が大きく湾曲し、上縁部に比べ、下縁部が長い形態をもつ。両側縁には両面からの打ち欠きにより抉りをつくる。刃部は両面からの打ち欠きによって、鋭利な刃部をつくる。背部は敲打による打撃によって背潰しを行い、敲打による階段状剥離が顕著である。2は、平面形が長方形を呈するもので抉りをもたない形態である。直線的な刃部は縁辺部に両面からの打ち欠きを施し、背部は敲打により背潰しを行う。3は、1区西半の7層より出土したものである。刃部が湾曲するもので、半分を欠損する。刃部は両面からの打ち欠きで、刃部をつくる。背部は一部大剥離面の平坦部を利用しながら敲打による背潰しを行う。刃部には使用による磨滅が認められる。4は、平面形態は台形を呈するもので、刃部は両面からの打ち欠きによって鋭利な刃部をつくる。背部は敲打による背潰しを行う。右側縁には両面からの打ち欠きを行い調整する。5は両側縁に抉りをもつものである。刃部は大きな打ち欠きによって粗くつくられている。一方背部は敲打による背潰しを行う。抉り部は両側縁に敲打による刃潰しを行い、丸く仕上げる。

円板状を呈する石器 第116図6

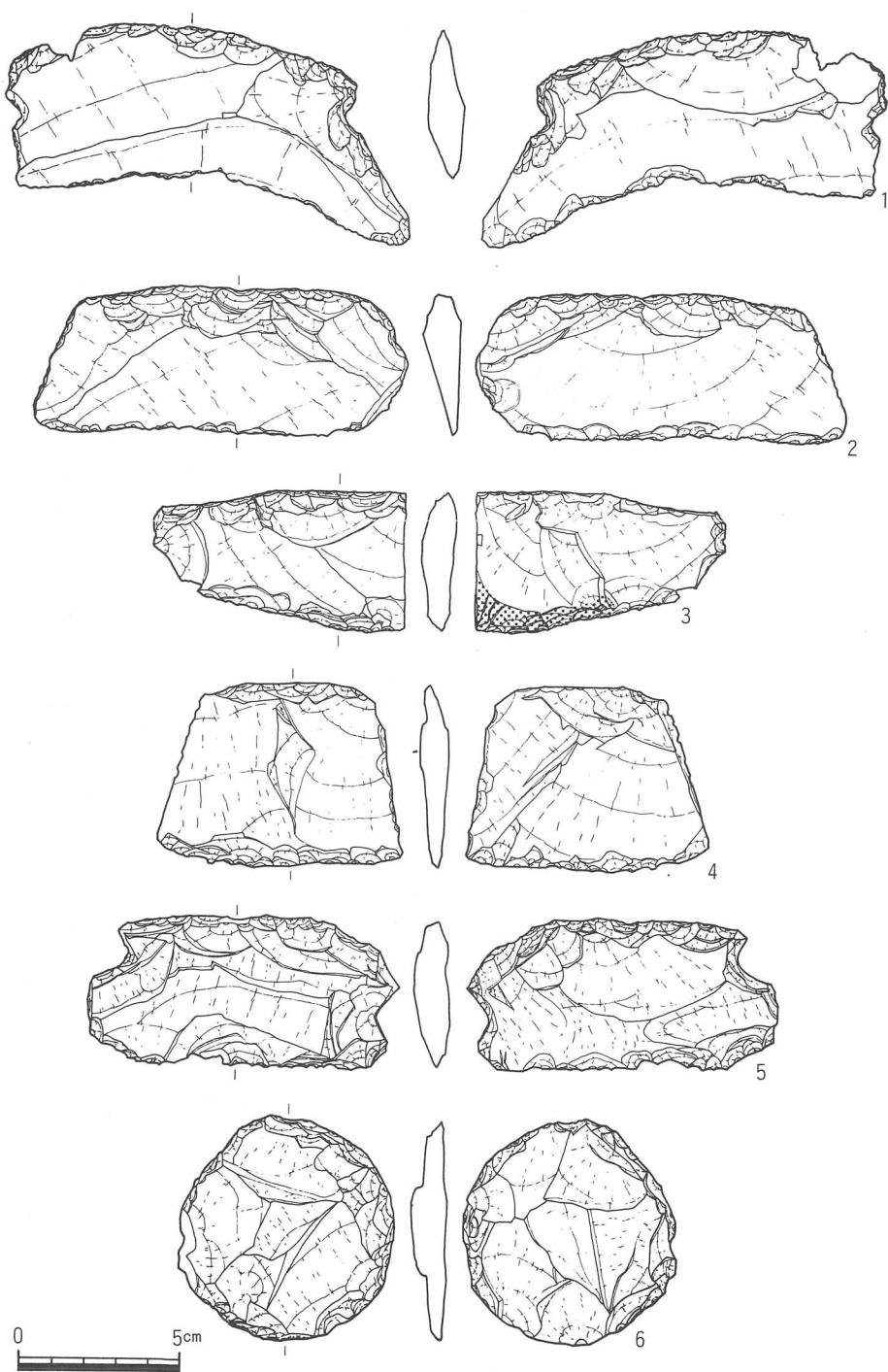
床土から出土したもので、平面形は円板状を呈し、縁辺部を敲打によって丸く仕上げる特異な石器である。直径6.7cm、厚さ1.0cmを測る。やや大きめのものがSX03からも出土している。

SR01 11層以外より出土の遺物及びSR01西肩微高地上出土石器（第117図1～15）

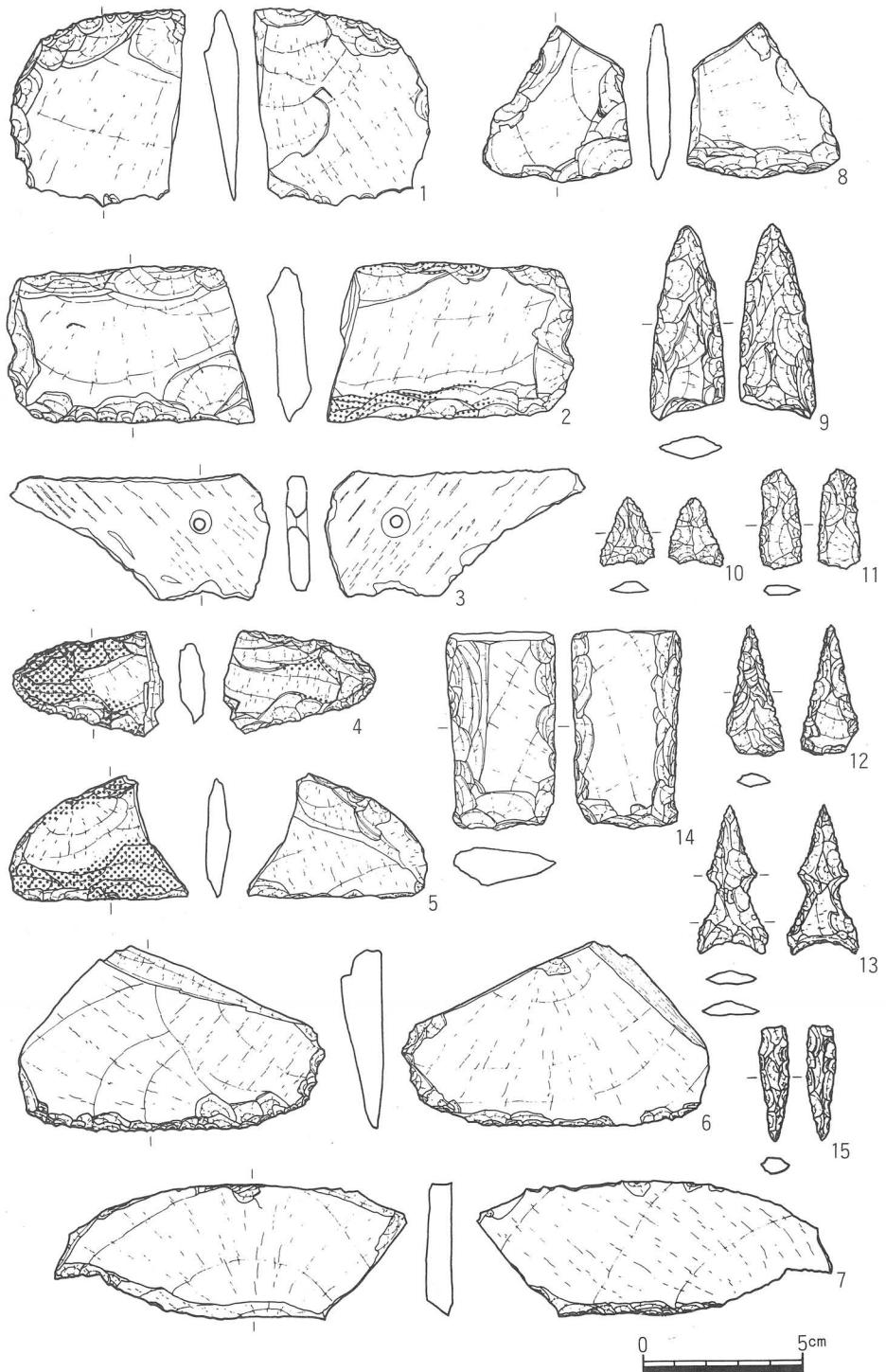
SR01 11層以外から多くの石器が出土しているが、時期を特定できない。ここでは形態的に特徴があるもの、代表的なもののみを取り上げた。

石庖丁 1～5

1は右半分を欠損するもので、抉りはみられない。刃部は鋭利な大剥離面をほぼ利用し、細部はあまり調整しない。背部は敲打による背潰しを行う。2はやや厚めの素材を利用する。刃部は両面からの打ち欠きを行い調整する。背部は敲打による背潰しを行う。左側縁部に敲打によって抉りをつくる。刃部には使用による磨滅痕がみられる。3は、紐孔をもつもので刃部はすべて欠損し、全容は不明である。2孔一対の紐孔をもつもので、一孔を欠損する。紐孔は両面から穿たれたもので、表面は風化による縞模様がみられる。4、5は半月状を呈するもので、刃部は両面からの打ち欠ちによって鋭利な刃部をつくり、背部は敲打による背潰しを行う。いずれも、刃部に使用による磨滅痕が顕著に残る。6～8は削器（刃器）である。6は刃部のみを整形するものである。背部は自然面、大剥離面をそのまま利用し、刃部は縁辺部に両面からの丁寧な打ち欠きを行い、鋭利な刃部をつくる。7は、刃部以外、大剥離面、自然面をそのまま利用する。刃部は鋭利な大剥離面に片面からの打ち欠きを行い、刃部を調整する。8は、下



第116図 1・3区出土石器



第117図 2・4区出土石器

縁部及び左側縁部に調整を行うものである。下縁部は両面からの打ち欠きによって刃部をつくる。

石鎌 9～13

9、10は、凹基式の石鎌である。9は、大型のもので、全長が6.1cmを測る。縁辺部は両面からの打ち欠きによって整形する。10は、全長2.2cmを測る。縁辺部は両面からの打ち欠きによって整形する。11、12は平基式の石鎌である。平面形態は11が五角形状、12が二等辺三角形状を呈する。12は、縁辺部を両面からの打ち欠きによって鋭利な尖頭部をつくる。全長は、11が3.1cm、12が4.1cmを測る。13は凹基式の変形である。鎌中央部で両側縁に抉りをもつものである。全体に丁寧な調整を施す。

石槍 14

14は、石槍の尖頭部を欠損するもので、両側縁は敲打による刃潰しを行う。

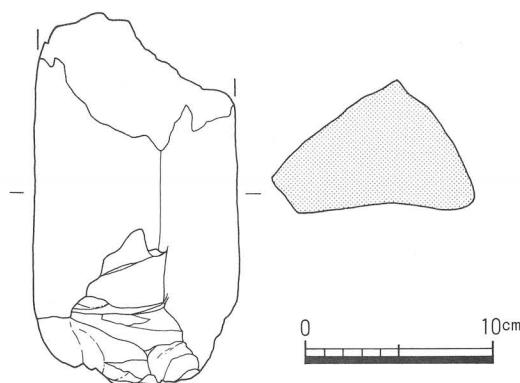
石錐 15

15は完形の石錐である。両側縁は両面からの打ち欠きにより刃部をつくる。表面は風化が著しい。全長3.6cmを測る。

木製品

試掘調査（第118図）

1はミカン割りの割材で先端部に加工がある。現存長は14.4cm、幅11.1cm、厚7.4cmである。先端部は2方向からの加工がみられ、先端は鋭角に尖っている。加工痕は割材に対してほぼ垂直に打ち込まれたものと斜め方向の加工があり、共に明確に残っている。



第118図 4区出土木製品



第 4 章

調査のまとめ

第1節 浴・長池遺跡周辺の地形と遺構の変遷

浴・長池遺跡では、縄文時代晚期・弥生時代前期から中近世にかけての多様な遺構が確認されており、その時代変遷は概ね次のような6時期が設定できる。すなわち、縄文時代晚期から弥生時代前期、弥生時代中期前半、弥生時代中期後半、平安時代前半期、鎌倉時代前半、近世の6時期である。このうち縄文晚期から弥生前期では、自然堤防上に営まれた水田跡と川底からの若干の出土遺物が確認されている。つづく弥生時代中期には集落が営まれるが、後期を待たずに廃絶し、これ以降は埋没した旧河道内で水田が営まれるばかりの生産域へと変化する。

ここでは、浴・長池遺跡の遺構の変遷の状況を集落と水田の面から時期を追ってまとめた。

1 集落の変遷

(1) 縄文時代晚期・弥生時代前期

1・3区では、調査区の中央部にSR02が南西から東南に向かって蛇行しながら横切っている。2・4区のSR01は、出土遺物としては弥生時代前期末が最古であるが、この時期においても旧河道として機能していたと考えるのが妥当と思われ、加えてSR01でもいちばん西寄りの流路が主要な川筋であったと推定できる。

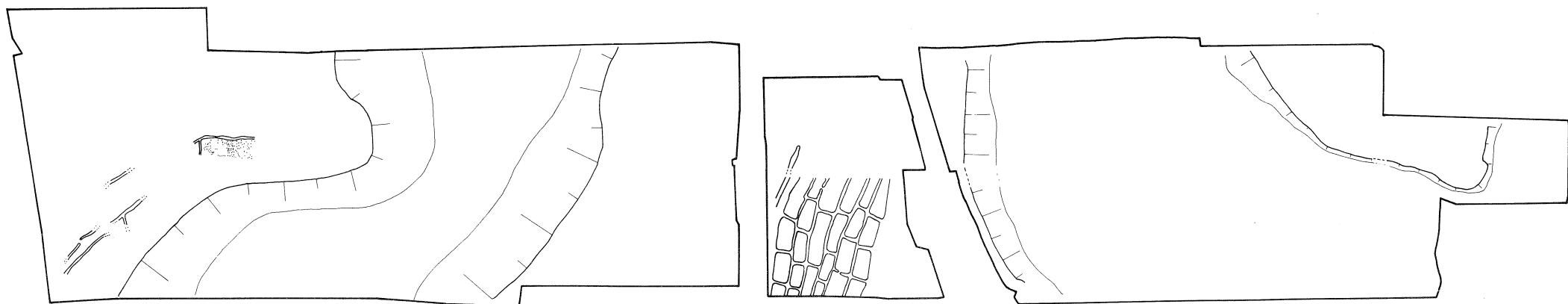
SR01およびSR02の西岸の微高地上には水田跡が確認されており、SR02の西岸斜面中腹にも水路状の溝状遺構が見られたことから、用水の供給には2本の旧河道を利用し、上流で本流より分岐した用水路によって川下の微高地上に配水していたと推定される。また、SR02内的一角には9本の杭が2m前後の間隔で2ないし3列に打ち込まれており、いずれもが頭部を北に傾けていた形状から、5b洪水砂礫の襲来以前に打設されたものが、洪水によって頭部を下流側に押し倒されて埋没したと見られる。この杭列の用途については想像の範囲を出るものではないが、SR02を横断する橋梁的なものであれ、農業用水のための堰堤的なものであれ、のことからSR02両岸の水田遺構が期を一にして営まれていたことが指摘できる。

この時期の遺構は、後に5b砂層をもたらした洪水によって一気に埋没してしまうが、SR01もこの時期と相前後して、弥生時代中期の土器を濃密に包含しながら徐々に埋没し、西側の浴・松ノ木遺跡に主流路を移していくようである。

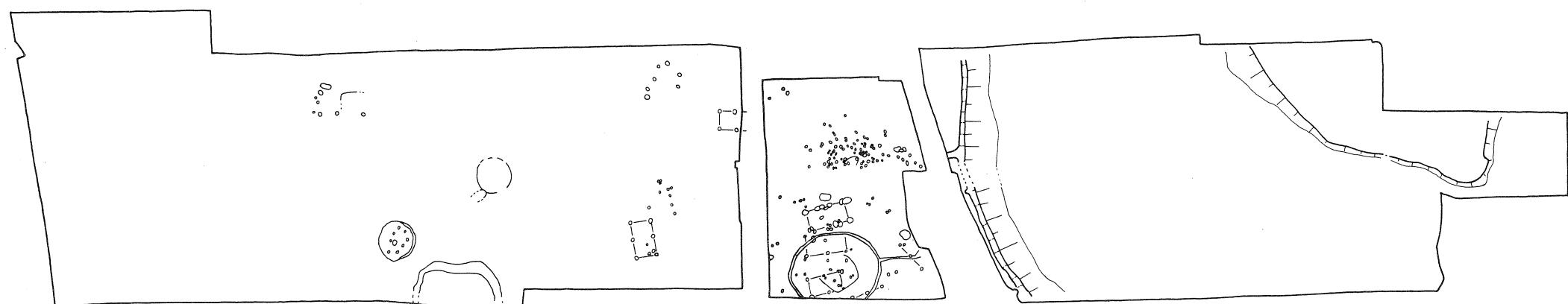
当該期では住居跡等の集落遺構は確認されていないが、SR02河底部より縄文晚期の山形口縁の浅鉢や弥生前期の壺形土器の蓋および農耕具と考えられる鋤状木製品等が出土していることからそれほど遠くない上流部に集落跡の存在が推定できる。

(2) 弥生時代中期前半

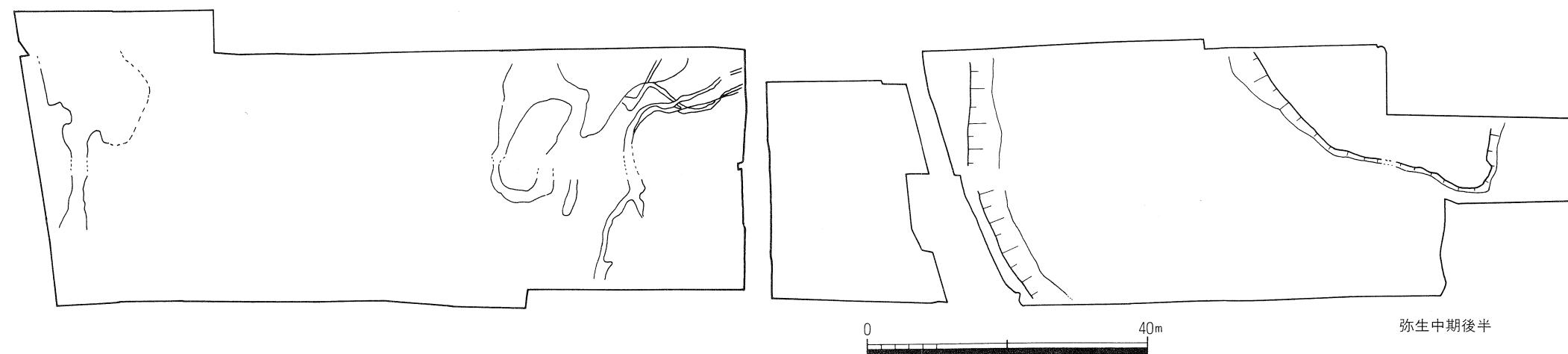
SR02およびその周辺一帯を被覆した5b砂層上面に、集落遺構が営まれるようになる。遺構



縄文晚期～弥生前期

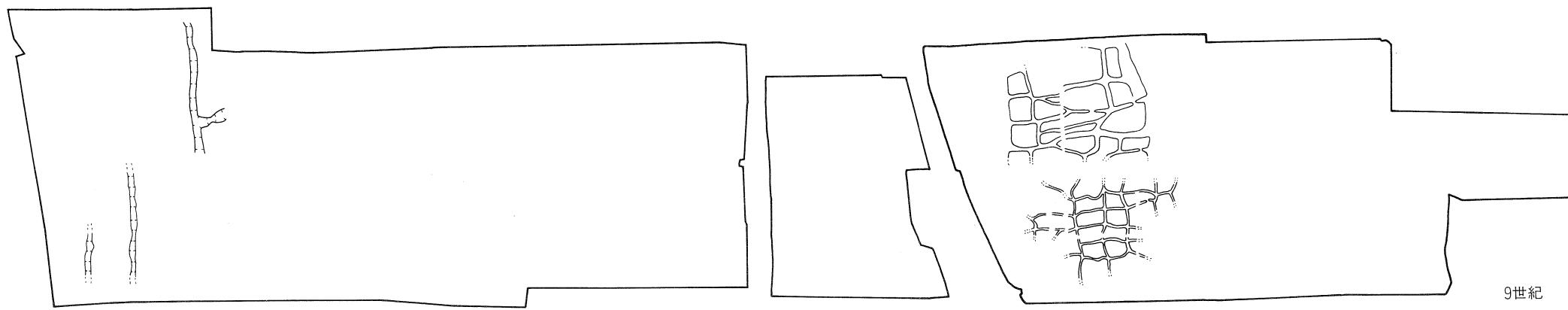


弥生中期前半

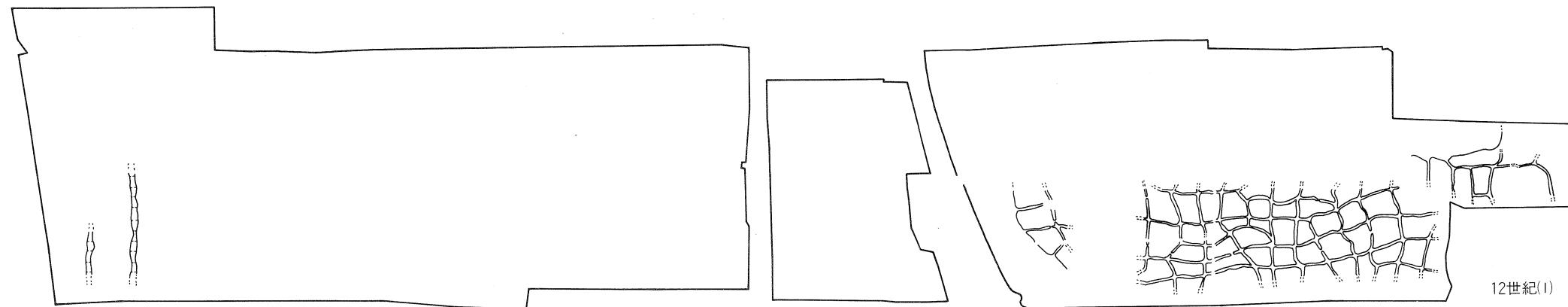


弥生中期後半

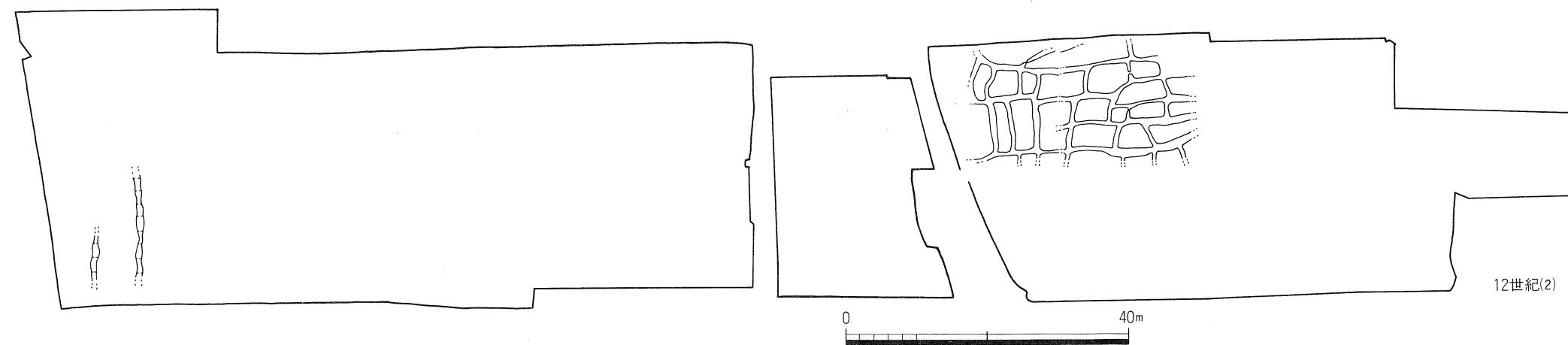
第119図 浴・長池遺跡遺構変遷図(1)



9世紀



12世紀(1)



12世紀(2)

0 40m

第120図 沐・長池遺跡遺構変遷図(2)



第121図 浴・長池遺跡遺構変遷図(3)

現在の地割

は1・3区東半からSR01西岸にかけて分布し、竪穴住居跡4棟(SH01～04)、掘立柱建物跡6棟(SB01～06)、竪穴または平地式とみられる住居跡1棟、方形周溝墓1基(ST01)が確認されている。

このうちSH01～03は、SD02のほぼ流路上、5b洪水層の砂礫が最も粗い部分に當まれ、床面には細かい砂質の貼床が施されている。いずれも土器の出土が乏しい反面、炭火材が多く出土していることから、廃棄時の人為的な焼却等の可能性も想定する必要があろう。一方、SH04は、遺構面自体が洪水堆積になる肌理の揃った細砂層であるためか貼床的な施設はみられなかつたが、周囲に円形に排水溝を巡らせSR02に流下させている。

住居跡としては、これ以外にもSH04の北側に孔径20cm前後のピットが直径6m前後のほぼ円状に密集している箇所があり、竪穴住居または平地式住居の床面と推定できる。これらの住居跡は、同時並存時間的関係をひとまず差し置くと、SB01を中心として半径25～30mの位置関係で円形に配置されていることが注目される。今回高松市が担当した区画整理事業地内の発掘調査では、旧河道内遺物や水田跡の検出量に比して集落跡が貧困であることが注目されていたが、結果的には、SR01西岸の微高地がかろうじて集落跡の一部となるようである。

一方、この時期の遺物としては、隣接するSR01の河底から夥しい量の土器群が出土しており、その量は前述の数棟の住居で消費し得る量をはるかに凌駕していると思われる。このことからも集落跡がさらに周辺部に広がって存在する可能性を考えておかなければならぬ。

また、高松平野全体について眺めると、これまで弥生時代中期前半は遺物の面でも、遺構の面においても量的に希薄な時期であったが、今回の成果によって弥生時代を通じての弥生人の足跡がおぼろげながらもたどれる可能性をつかむことができた。

(3) 弥生時代中期後半

前代の集落が廃絶した後に円形周溝墓(ST02)が築造される他は性格不明の溜まり状のSX01～03がみられるのみである。この時期からSR01の埋没が急速化すると考えられるため、これを契機として(住環境の悪化、農業用水の不足等が想像できる)集落の移転を余儀なくされたものであろう。

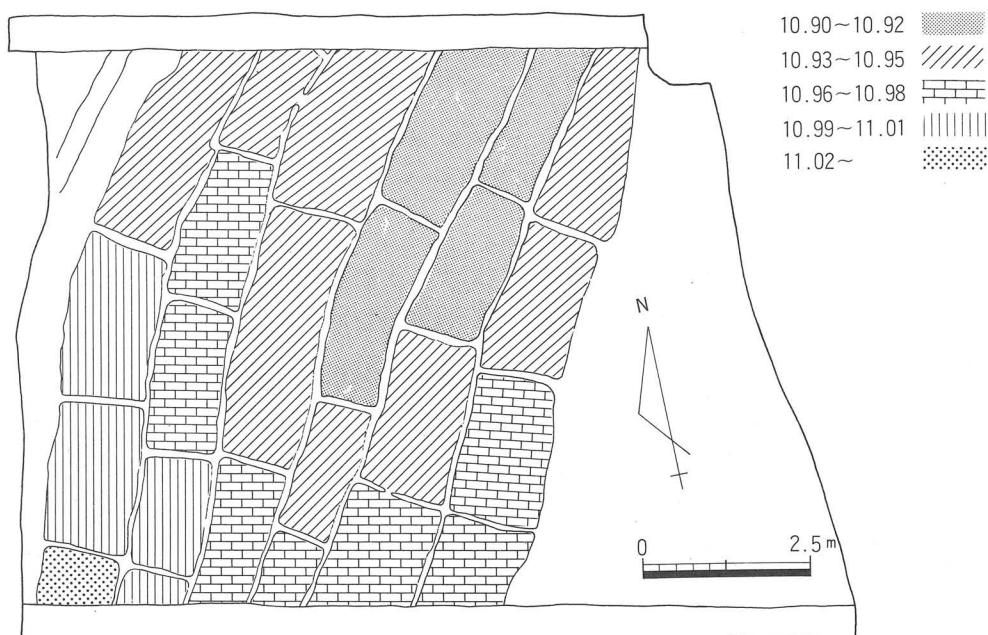
この後の集落は、対岸の浴・松ノ木遺跡に旧河道の主流路とともに移動していったものと考えられ、浴・長池遺跡ではこれ以降、埋没した旧河道内に水田が現代に至までは継続して営まれている。

2 水田遺構の変遷と特徴

浴・長池遺跡では弥生時代前期から13世紀にかけて、3時期4面の水田遺構について面的な調査を実施した。

弥生時代前期の水田跡は、SR01西側の川岸付近に、川筋に沿って幅約20mの帯状に分布する。この他、SR02西側の微高地上にも数本の水田畦畔が断片的に確認されている。立地環境、時期とともに同様な性格を有するが、遺跡のまとまりとしては西に隣接する浴・長池Ⅱ遺跡につながっていくものと判断されるため、ここでは触れない。

SR01西岸微高地上の水田の地形は、東西が反りあがった、船底形の谷状の凹地が北に向かって緩やかに傾斜している。畦畔は、まず等高線に沿って南北方向を設定した後に、適宜東西方向に区切っていったようである。これは、南北畦畔よりも東西畦畔の方が立ち上がりが低く、基本的には東西畦畔が南北畦畔を貫通して直行することはないことからも想像できる。地形が比較的単調な地形のために、水田の区画は南北長の長方形が集合したあみだくじのようである。水田区画の高低差も南から北へ2cm前後の段差で規則的に低くなり、同レベルの水田区画が北に開く馬蹄形状に配列されている。畦畔の数ヶ所が水口状に途切れるが、基本的な配水は上手からの畦越しの懸け流しによっていると見られる。



第122図 SR01西岸微高地上の水田区画の標高分布

再三繰り返すが、SR01西岸微高地上水田の立地は河岸の自然堤防上に位置している。しかし周辺部の類例に目を向けると、このことは必ずしも時期的な特徴とはとらえがたい。浴・長池遺跡から北へ約400mの地点で発掘調査を実施した弘福寺領山田郡田団関係遺跡発掘調査によって確認された同時期の水田は、2×4m前後の矩形の水田区画が規則的に並んでいるが、立地は微高地から旧河道に向かって下がる、微高地裾部の緩斜面にあたる。また、西へ200m寄った浴・長池Ⅱ遺跡の水田跡はSR01西岸微高地上水田と同様な水田区画を有しながら、その立地は河岸から隔たった後背湿地である。したがって弥生時代前期の水田は、水田耕作の歴史としては開始期にあたるもの、比較的地形環境にとらわれることなく区画性をもった定形的な水田造成ができるだけの土木技術をすでに有していたことがうかがえるのである。

ところが、SR02および旧河道岸の水田が弥生時代前期末の大洪水によって一気に埋没した後にこの一帯で営まれた水田（SR01-5a、6a、8a水田）は、もっぱら旧河道が埋没して形成された浅い谷地の中に限られる。畦畔は幅約20cm、高さ3cm前後と規模的には弥生前期と大差ないが、縦横の水田畦畔には規模的な優劣関係はみられなくなり、水田区画の形状もかろうじて方形の区画を基本としていることはうかがえるものの、地形まかせの、かなり場当たり的な区画をとっているとの感は否めない。用水施設は、川岸斜面の中腹に溝状遺構が繰り返し掘削されていることから、川伝いの水路によって上流から導水したものと想像されるが、河川からの取水および水田への給水のための具体的な施設については明確ではない。ただ、圃場内の水配りに関しては畦越しの懸け流しが基本となっていたようである。

SR01旧河道の5a、6a層およびそれ以降の水田は、河床のほぼ全域にわたって、小規模な洪水と復旧を繰り返しながら継続的に営まれている。しかし8a水田面では、旧河道の中でも西よりの一部のみにしか分布が見られない。その理由は、8a水田が営まれなかったSR01河床域の大部分は洪水性の砂礫層がベースとなっており、水田耕作に際しての保水性が極めて悪い地盤のためであろう。このことは、自然堤防（微高地）上の弥生前期水田が洪水で埋もれた後にもはや水田域として復旧されなかった事実と関係している。すなわち、水田の選地にあたって必要な条件として、給水が容易な地形的条件より漏水がより少ない土壤的条件の方が重要視されていたことが考えられる。翻って、これまで見てきた水田跡のベースは微高地上では砂質シルト層、旧河道内でもシルト質極細砂層の部分を選んでいる。このことは言い替えれば、土壤を改良してより漏水の少ない土地作りを行う方が、土地を開削して高所に用水を引く土木技術に比べてより高度な技術と長い年月を要したことであろうか。

浴・長池遺跡の発掘調査は、高松市教育委員会が水田面の検出をめざした調査として初めて経験したものであったが、不手際も数多くあった反面少なからずの成果を見ることができた。そのひとつは、この調査を契機として周辺部でも続々と水田遺構が発見されつつあり、水田遺

構の時期ごとの特徴や分布が次第に明らかになってきたことである。そしてもう一点は、条里制と水田遺構の関係である。たとえばSR01旧河道内の8a水田は、調査当初は8世紀前後という年代を念頭において調査を進めたが、整理作業の結果さらに下った9世紀頃との結果を得た。いずれにしても条里制施行の渦中にあたる時代であり、条理プランと水田区画の関係、当時の地形と土地利用の関係等を考える上で重要な手かがとなろう。

これらについては、調査自体が著についたばかりの段階であり、今後のデータの蓄積に待つところが大きい。しかし、今までの調査の中で今後の問題点の所在もはっきりしつつある。今後ともこれらの検討に耐え得る質の高い資料の蓄積を心がけていきたい。 (山 本)

第2節 SR01 11層出土土器の編年的位置づけ

11層からは、多量の弥生土器が出土していることは前述のとおりである。出土した土器群には、時間幅があり、編年作業を行うだけの一括性がない。しかし、高松平野において、当遺跡のように、前期末から中期末まで継続される遺跡は、皆無に等しい状況がある。これらの状況を考えれば、混在した状況で出土しているにせよ、周辺地域の編年を参考にして、一つの物差しをつくるのは、当遺跡で確認された遺構の所属時期を決定する上でも有効であると考えられ、第123～125図の変遷図を作製した。ただし、これらの変遷は、文様及び形態の特徴から並べたもので、かならずしもあっているとは考えていない。いずれ、一括遺物等が確認されていく過程で、修正していくと考えている。当変遷図は、前期末、中期を、前葉～後葉の3期に分け、それを前半、後半に分け、後期以降の8期に分けた。

前期末

壺については、頸部から短く屈曲する広口壺が存在し、頸部から肩部にかけて篦描沈線文等を巡らす。甕については、断面三角形の貼付突帯の逆L字状口縁と、如意状口縁が存在する。体部には、多条化した篦描沈線文を巡らす。鉢は、逆台形状を呈するものがある。

中期前葉前半

前葉式のものからつづく形態のものが多く、形態は同様で、篦描文から櫛描文へと変化する。器種のバリエーションも少なく、遺物量も少ないとより、前期から中期への過渡期の土器と考えられる。一部、対岸の岡山側からの搬入品と考えられる細頸壺もみられる。

中期前葉後半

壺は、あまり外反せずに立ち上がる口縁部をもつものと、大きく外反し下方に垂れるものがある。前者は、外面に押圧突帯文を巡らせるものと、巡らせないものがあり、後者は、口縁部端面から内面に、刻目突帯文を巡らす。甕は、体部から櫛描直線文が消滅し、櫛描直線文下にみられた刺突文のみが残り、口縁は、「く」の字状に屈曲するものになる。前期末でみられた器高の低いものもみられる。高杯は、椀形の杯部から屈曲し外へ開くものと、椀形の杯部をもつものに分かれる。鉢は、口縁部が内湾し、端部が肥厚するものと、前期末から存在する口縁部が外反する筒形のものがある。前者は、口縁部外面に、張り付け突帯文、列点文を巡らし、後者は、口縁部から体部にかけて、櫛描文と直線文を交互に巡らす。

中期中葉前半

壺は、前様式のものに比べ、口縁端部が肥厚し、胴部が大きく張り、球形に近いものが多くなる。口縁端部外面や、頸部から胴部にかけて、櫛描文が多用され、装飾性の高いものが多くなる。甕は、前様式のものに比べ、胴部の張りが大きくなる。頸部に押圧突帯文を巡らせるも

のも出現し、その中には、口縁部に比べ胴部が大きく張るものが多くなる。高杯は、杯部が浅くなり、端部で内側に屈曲するものと、前様式からつづく椀形のものがある。

中期中葉後半

壺は、前様式からつづく形態に口縁端部外面に甕と同様の凹線文が2～3条巡る。甕は、口縁端部が肥厚するようになり、端部外面に、凹線文を2条程度巡らせるようになる。高杯・鉢は前様式からつづくものが多く、全体の中で占める割合が高くなる。いずれのものも肥厚した口縁端部や、外面に、凹線文を巡らせるものが多い。

中期後葉前半

壺は、前様式からつづく広口壺の他に、複合口縁をもつものが出現するほか、短頸広口壺もみられる。無頸壺は、口縁部外面に、凹線文を巡らせる。甕は、前様式のものに比べ、口縁端部外面の凹線文が多条化する。高杯は、形が限定されるようである。前様式から継続するものが、杯部の屈曲部が明瞭になり、口縁部外面に凹線文を巡らせる。

中期後葉後半

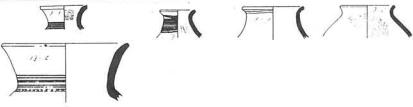
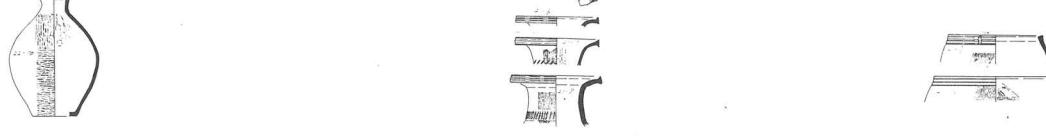
壺は、口縁部から頸部にかけて多条化した凹線文を巡らせる。甕は、口縁端部の上下への拡張が大きくなり、凹線文も、多条化する。高杯は、杯部の屈曲部に明瞭な陵を持つものが存在する。

後期以降

これ以降はしばらくの断絶期をおいて、後期後半以降の壺、甕、高杯が存在するのみである。以上が、SR01 11層出土土器の変遷であるが、前でも述べたとおり、一括性の無い遺物により変遷図を作製したため完全な変遷図にはなっていない。東道路関連の他の遺跡で一括性の高い遺物も出土しているため、東道路の整理作業が進んでいくうちに不備な部分について、修正していきたいと考えている。(山 元)

第3節 石器の組成と形態の特徴

本遺跡からは、総数にして250点を越す石器が出土している。これらの石器の内報告書中に掲載できたのは、150点弱である。石器の器種は、一般的な遺跡から出土するものとの差異は認められない。ここでは、石器がまとまって出土したSR01 11層のものについて、若干の検討を行いたい。11層出土遺物については、出土遺物他の文中でも書いてあるとおり、弥生時代前期末から後期後半の土器がてでいることより、これらの出土した土器群に共伴する石器についても同様の時期が与えられるということである。弥生時代の石器を考える上で、石器の形態・組成等が変化する時期を一括して考えるには、多くの問題を含んでいると思うが、香川県にお

	壺
前期末	
中期前葉前半	
中期前葉後半	
中期中葉前半	
中期中葉後半	
中期後葉前半	
中期後葉後半	
後期	

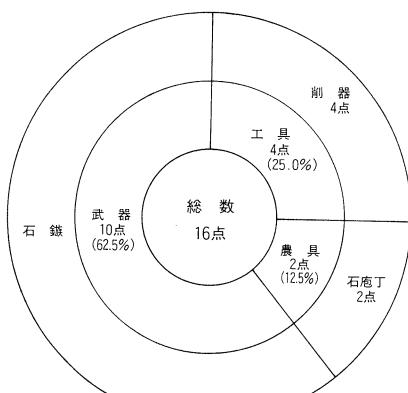
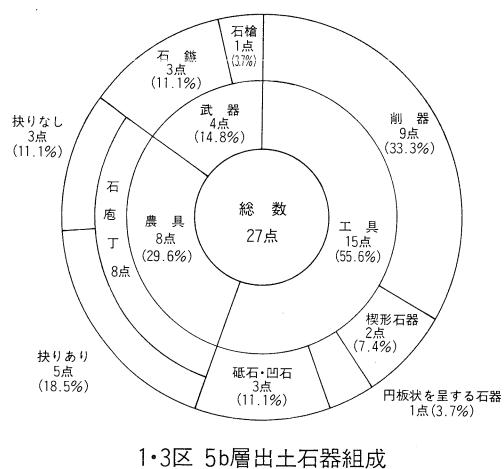
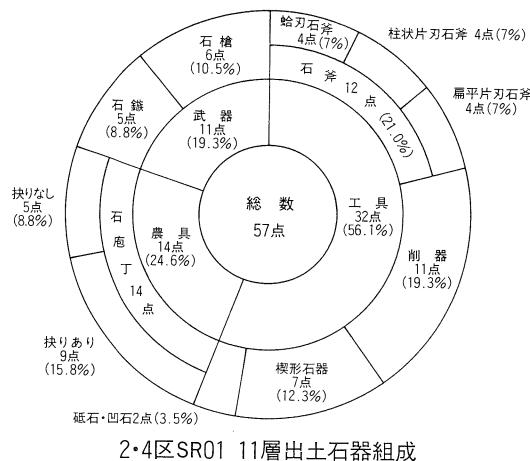
第123図 浴・長池遺跡出土土器変遷図(1)

	甕
前期末	
中期前葉前半	
中期前葉後半	
中期中葉前半	
中期中葉後半	
中期後葉前半	
中期後葉後半	
後期	

第124図 浴・長池遺跡出土土器変遷図(2)

	高杯	鉢	蓋
前期末			
中期前葉前半			
中期前葉後半			
中期中葉前半			
中期中葉後半			
中期後葉前半			
中期後葉後半			
後期			

第125図 浴・長池遺跡出土土器変遷図(3)



第7表 遺構別出土石器組成表

いて、弥生時代中期を中心とする時期の遺跡の調査例が少ないとや、出土した弥生土器の8割方は、前期末から中期中葉の時期のものであり、その以外の時期の石器の混在率が少ないと考えられることより、ある程度の傾向は導き出せるのではないかという観点に立ち1·3区5b砂層中出土の石器、SX03出土の石器を交えて、以下の3点について検討を行う。

- 1) SR01 11層出土石器の器種構成とその割合について
- 2) SR01 11層出土石庖丁における形態的特徴及びその組成について
- 3) 本遺跡出土石庖丁の使用形態とその痕跡について

- 1) SR01 11層出土石器の器種構成とその割合について

SR01 11層出土の石器総数は、57点である。これらを分類したのが第7表である。欠落している器種もあるが、本来の組成からは大きく変わらないものと考えられる。11層出土の石器を大きく分類すれば、工具(32点)56.1%、農具(14点)24.6%、武器(狩猟具を含む)(11点)、19.3%となり、工具は、全体の5割以上を占め、農具が3割弱、武器は2割弱である。これと同様の状況が5b砂層出土石器にもみられる。5b砂層は、出土遺物から前期末から後期後半の時期が与えられる。総数27点の内訳は、工具(15点)55.6%、農具(8点)29.6%、武器(4点)14.8%であり11層砂層の傾向と似かよった傾向を示す。これらの状況と傾向を異にするのが、出土遺物から弥生時代中期後半と考

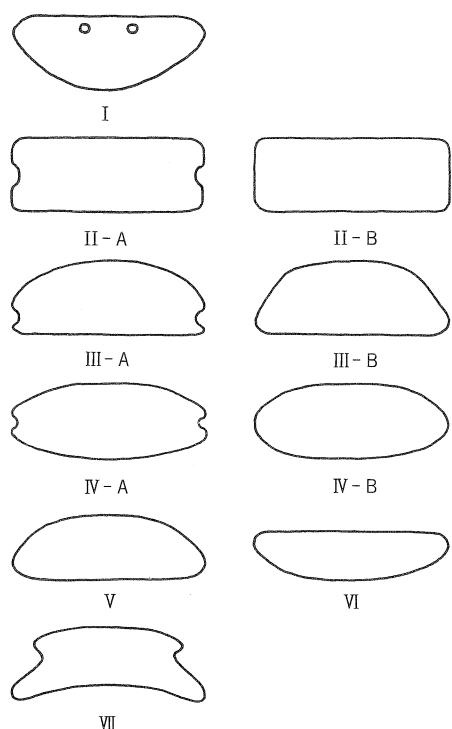
えられるSX03の状況である。総数16点の内訳は、工具（4点）25%、農具（2点）12.5%、武器（10点）62.5%であり、総数が少なく器種組成も不完全であるが武器が6割を越える。

香川県を含めて弥生時代中期後半から武器類が増加する傾向に合致する。この遺構一つを例にあげて比較検討するのは問題があろうと考えられるが、この比較より器種構成の違いには時期差によるものと考えられる。出土遺物からみた当遺跡の存続時期から考えて、後期以降は殆ど機能しなくなることより、出土遺物の8割を越える弥生時代前期末から中期前半の土器に共伴していると考えてもよさそうである。今後、資料の増加によって一括遺物が確認された時点での再考する必要が考えられるが、現時点の乏しい資料からは、このような結果が導き出された。

2) 11層出土石庖丁における形態の特徴及びその組成について

11層から出土した石庖丁を分類したのが第120図である。

I類 磨製石庖丁を意識したものと考えられ、半月形を呈し、紐孔をもつ形態は磨製石庖丁と同様であるが、研磨が全域に及ばず、縁辺部のみを研磨する



II類 長方形状を呈し、刃部、背部とも直線的である

-A 両側縁に抉りをもつもの

-B 両側縁に抉りをもたないもの

III類 刃部は直線的で、背部が湾曲する

-A 両側縁に抉りをもつもの

-B 両側縁に抉りをもたないもの

IV類 刀部、背部とも湾曲するもので、木葉形を呈する

-A 両側縁に抉りをもつもの

-B 両側縁に抉りをもたないもの

V類 形状はI類を逆にした形をし、使用痕が多く認められるもの

11層以外からは、これらの形状以外のものも認められる

VI類 背部は直線的で、刃部は湾曲するもの

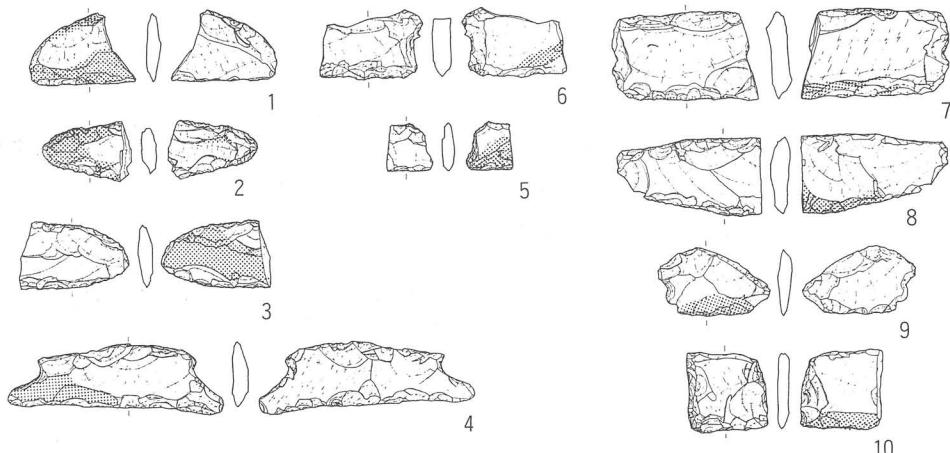
VII類 両側縁に抉りをもち、刃部、背部とも湾曲し、ブーメラン状を呈する

11層出土の石庖丁を分類した結果、両側縁に抉りをもつものと、もたないものの比率は、64.3%、

第126図 浴・長池遺跡出土石庖丁形態分類

35.7%であり、主流は、抉りをもつものであることがわかる。これを浴・長池遺跡全体の石庖丁でみてみると、石庖丁37点のうち21点が抉りをもち、16点がもたない。これを比率に直すと、前者56.8%に対し、後者43.2%であり、これも抉りが、半数を越える状況がみられる。ここで気をつけなければならないのは、抉りをもつものが半数を越えるが、圧倒的多数ではなく、抉りをもたないものも相当数存在することである。調整方法は同様であるのに抉りが存在しないのは、どのような原因によるものなのか、一つに製作途中で廃棄された、と考える説がある。抉りを入れるのを残して全て同じ状況で廃棄されるのだろうか。これに反する状況として、刃部から体部にかけて、使用による摩滅等が確認できるものがある。このことより根拠に乏しい。次に製作方法の簡略化と考える説があるが、簡略化するのであれば、背部及び刃部の調整についても簡略化しそうであるが、その状況は、観察できない。石庖丁に抉りをいれる作業にのみ簡略を行うということは、「両端の抉り=紐掛け」という打製石庖丁の特性が、実は、絶対的に必要なものではなく、「両端の抉り=紐掛け」を行わなくても穂摘み作業が行えるという実証でもある。現段階で考えられるのは、石庖丁の素材として使われるサヌカイトの材質にも影響されると考えられるが、製作者の個性がでた結果ではないかとの可能性を指摘しておく。これは、あとで述べる使用形態と痕跡についても大きく関わってくる問題である。

3) 本遺跡出土石庖丁の使用形態とその痕跡について



第127図 浴・長池遺跡出土石庖丁にみる使用痕

2)では、11層出土石庖丁における形態の特徴及び、その組成について検討を行ったが、ここでは、それらの石庖丁に残された使用痕を観察することによってその使用形態を考えてみたい。周辺地域においても、石庖丁の使用痕について検討されている。第127図は、石庖丁に使用痕が認められるものをまとめたものである。破片等が多く全容がつかみにくいが、使用痕が認められる部分に違いがあり、それを観察することによって使用形態が復元できそうである。

磨滅痕が残る位置によって分類を行うと以下のようになる。

1. 片側縁に片寄り、刃部から体部にかけて磨滅痕が認められるもの（1～6）
2. 刃部のみに磨滅痕があり側縁部に片寄るもの（9，10）
3. 刃部のみに磨滅痕があり中央部に寄るもの（7，8）

いずれの石庖丁も片面に顕著な磨滅痕が認められる。

以上のことから参考にして、使用方法を推定すると、1の状況から考えれば、右手で石庖丁を持つと、親指の位置が磨滅のある範囲に納まることより右利きの人間が穂摘みを行ったと考えられる。2の状況も1と同様に右手で石庖丁を使っていることが考えられるが、1のように体部まで磨滅が及ばない点に違いが認められる。逆に3は、1，2とは逆の面に磨滅が認められることより左手で、石庖丁を持って、穂摘みが行われたと考えられる。以上のことを見ると、1は、石庖丁を持った手の親指で穂を押さえて穂摘みを行う。一方、2，3は石庖



第128図 打製石庖丁の使用方法復元

丁を持たない手で穂を持ち、石庖丁で穂を摘み取るのではないかと考えられる。(第128図) 2, 3のような使用方法をとれば、抉りを持たなくても、刃部をつくり、背部に背潰しを行ない、石庖丁をしっかりと保持していれば、十分機能するものと考えられる。

これまでのことをまとめれば、石庖丁が個々の持ち物である可能性がある。それらを裏付ける資料として、片面に顕著な使用痕が確認され、その使用痕が、両測縁部のいずれか一方に、片寄る傾向がある。個々の石庖丁において、使用箇所が限定できることより、どの程度使用すれば、石庖丁に磨滅痕が残るのか見当がつかないが、共用はせずに、同一人物による長期使用が考えられる。使用痕からみれば、石庖丁を右手を持って使用したものが10点中8点まで存在することより、当遺跡では、右利きの人間が多かった可能性が高いと考えられる。

ただ、この状況は、浴・長池遺跡の資料についてのみ観察を行ったもので、他の遺跡の資料等まで、観察が及ばなかった。今後、他の遺跡の資料も含めた上で考えてみたい。(山元)

第4節 出土木製品について

本遺跡では、主としてSR01・02より多くの木製品や自然木などの植物遺体が出土したが、図示できたのは明らかに加工されている23点の木製品のみである。その器種としては、農具3、杭8、板材5、割材7である。SR02の河床より出土した木製品は共伴した土器により縄文晩期～弥生前期初頭のものと考えられ、それ以外の木製品は弥生中期～後期にかけてのものである。

ここでは杭と農具、特にSR02より出土した鋤状木製品について若干述べることとする。

1 杭について

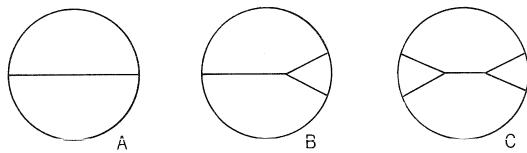
8本の杭のうち板材である1・6以外は丸木であり、それについて先端部の加工痕を基に分類してみる。杭に対する斧の加撃角度には2種類ある。木にはほぼ垂直な角度で打ち込まれた加工－タイプ1－と斜め角度からの加工－タイプ2－であり、タイプ1は木の長軸に対して斜め方向の加工痕となっており、立木を伐採した際の加撃痕であると考えられる。一方、タイプ2は伐採した木を横にして斧による加工と考えられる。タイプ1は杭2・4、タイプ2は杭3・5・7・8に施されている。杭4には1方向のみこの加工が見られ、伐採の際に1方向から斧が打ち込まれたと考えられ、反対側の加工面と比較すると加工の面積が広く木の芯より深い位置まで達している。ただし、杭2・4は垂直角度の加工だけでなくその後に斜め方向からの加工も行われている。

次に、先端部を正面からみた場合の加工面に関して分類する。加工面は3分類することがで

きる。A-2方向からの加工が施され加工面の境が「一」の字状をなしている。B-3方向から加工され、加工面の境が「Y」字状をなしている。C-4方向から加工され、加工面の境が「Y」字を繋げた形を呈している。Aは杭4・5・7、Bは杭8、Cは杭2・3である。この3分類のうち最も基本的な形態はAであり、2方向から大きく加工し先端の断面は「V」字形を呈している。B・Cは2方向の加工面の境と同方向に加工を加えたものであり、片側から加工するとBになり、両側から加工するとCになる。加工痕が残っている杭2は、このような加工段階を明瞭に著している。

この二つの分類を合わせると、次のようになる。

- | | |
|-----|-----------|
| 1-A | -----杭4 |
| 1-C | -----杭2 |
| 2-A | -----杭5・7 |
| 2-B | -----杭8 |
| 2-C | -----杭3 |



第129図 先端部における加工面の模式図

本遺跡の杭には1-Bタイプの杭が存在していないが、加工工程から推測すれば当然あると考えられる。このように6本という少ない数の杭でありながら5ないし6の加工形態を示しており、杭を作製する際に統一した加工は行われていない。このことは、検討の対象の数量が少なく確実なことは言えないが、組織的な生産集団の存在は考えられず、多くの人が各自に杭の製作に関わっていたのだろう。

2 鋤状木製品について

SR02の河床から出土した1（第14図）は、櫂状木製品とも考えられるがその形状から鋤状木製品とした。刃先は欠損するが現存長76.2cmを測る一本鋤である。刃幅は約9cmであり、一般的な鋤と比較するとやや小型となっている。刃部の断面は内側の平坦な偏平半円形を呈している。柄は全面縦方向の面取りが施されているが、握り部はなく、柄の上端は2方向からの加工により切り取られている。この鋤は池上遺跡における型式分類の鋤AⅡにあたると考えられ、年代はやや新しくなるが池上遺跡の構（SF078・SF084）よりほぼ同様な形態の鋤が出土している。特にSF084出土の鋤は平面形・偏平半円形の刃部断面とともに本遺跡出土の鋤と同一である。このような鋤の類例はその他に大阪府の巨摩廃寺遺跡・瓜生堂遺跡や島根県のタテチョウ遺跡等出土の鋤が挙げられる。しかし、池上遺跡を含めたこれらの鋤は弥生中期～後期のものであり、本遺跡のような縄文晩期～弥生前期にかけての鋤の出土例は非常に希有で高松市林・坊城遺跡のみである。林・坊城遺跡は本遺跡の東方約1km離れた位置にあり、旧河道の河床から縄文晩期～弥生前期の土器に伴って農具8点が出土した。その種類は、諸手鋤1、スプーン状木

製品4、櫛状木製品3である。そのスプーン状木製品は本遺跡の鋤とほぼ同様な形と大きさをなし、柄からあまり肩が張らずに刃部となっている。その形状からスプーン状木製品と仮称されている。また、櫛状木製品は木を半截しただけの刃部であり、スプーン状木製品の未製品である可能性も考えられている。鋤は鋤とともに最も代表的な農具の一つであり、深耕に適した農具である。その機能は土の反転や掘削・移動などの一般耕作作業、開墾土木作業に最も適している。しかし、本遺跡の鋤状木製品や林・坊城遺跡のスプーン状木製品は、刃部が非常に薄く華奢であり前述したような作業に耐え得るかどうか疑わしく、別の用途に使用されたとも考えられる。このように近接した遺跡から、形・年代・出土状況ともほとんど類似する木製品が出土したことは注目すべきであり、高松平野における農耕の開始という問題に大きく関わってくる。

現在、四国において検出された水田は、近年増加傾向を示すが数例にすぎず、弥生前期に限定すると高知県南国市の田村遺跡、香川県坂出市の下樋遺跡と高松市の本遺跡が挙げられる。愛媛県では松山市大渕遺跡において縄文晩期の畝圧痕、石包丁が出土した。林・坊城遺跡では水田が検出されていない。本遺跡ではSR02の両側の微高地に不定形小区画水田が検出され、さらにその水田より1段階古いと考えられるSR02の埋土に土壤層が数枚あり畦畔状高まりも見つかっている。ただし後者は土層断面のみの検出であり、プラント・オパール等の自然科学の分析結果を参考に水田であるかどうか検討しなければならない。高松平野における水田の開始－稻作の開始－が弥生前期古段階まで遡ることは、本遺跡の水田の検出で確実となったが、それ以前の水田はまだ検出されていない。しかし、SR02の河床よりやや上がった所で縄文晩期～弥生前期の溝があり、地下水位の高い湿田の排水路あるいは灌漑用水路としての機能を果たしていたと考えられる。このようなSR02中の土壤層や溝の存在は、この時期の水田の存在をうかがわせる。さらに、本遺跡では鋤状木製品1点のみであるが、林・坊城遺跡ではスプーン状木製品と供伴して諸手鋤が出土しており、これらの木製品は水田の存在をうかがわせる重要な資料となるのである。

紀元前400年前後に中国大陸から日本に入ってきた稻作は、まず北九州に定着し次第に東方に広がっていった。菜畑遺跡や板付遺跡において縄文晩期の水田が確認されてから西日本の各地、特に瀬戸内沿岸でその存在が認められるようになってきた。四国では前述したように本遺跡のほかに愛媛県の大渕遺跡や香川県の林・坊城遺跡があり、岡山県の津島江道遺跡、兵庫県の今宿丁田遺跡、口酒井遺跡などの山陽道南岸ルートと別の稻作伝播における四国北岸ルートがしだいに明らかになってきた。今後このような水田の検出例が増加することにより、初期水田－弥生文化－の伝播の様子がさらに明らかにされるだろう。 (中 西)

註1 石庖丁としたものの中には本来の石庖丁の用途である穂摘み作業を行わず、別の用途に使用されたものとも考えられるが、肉眼観察では区別はつかないため、使用痕があるものについてはすべて石庖丁として取り扱った。

註2 磨製石包丁の使用痕について検討されているものがある。

松山 聰 「石庖丁の使用痕」『第31回埋蔵文化財研究会 弥生時代の石器－その始まりと終わり－』第6分冊 発表要旨・追加資料
埋蔵文化財研究会関西世話人会1992

参考文献

第1節

工楽善通 『水田の考古学』 東京大学出版会 1991年

第2節

正岡睦夫 「備前地域」 正岡睦夫、松本岩雄編 『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編』 1992年

第3節

埋蔵文化財研究会関西世話人会編 『第31回埋蔵文化財研究会 弥生時代の石器－その始まりと終わり－』 1992年

第4節

埋蔵文化財研究会編 『第14回埋蔵文化財研究会 木製農具について』 1983年

金閔恕・佐原真編 『弥生文化の研究』 第2巻 生業 1988年

金閔恕・佐原真編 『弥生文化の研究』 第5巻 道具と技術 I 1985年

工楽善通 『水田の考古学』 東京大学出版会 1991年

廣瀬常雄・宮崎哲治 「香川県高松市林・坊城遺跡」 日本考古学協会編 『日本考古学年報41』 1990年

遺物觀察表

1・3区 S R 0 2 7層以下出土土器

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第12図 —1	図版20	縄文土器 粗製深鉢	残存高3.7	口縁部外面 刻目突帯文 体部外面 ハラ描沈線文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を多量に含む	表裏 茶灰茶褐	良好	
2	図版20	〃 深鉢	残存高8.3	口縁部外面 刻目突帯文 体部外面 ハラ描沈線文	体部内面 二枚貝条痕	細～粗砂を多量に含む	表裏 灰白灰黄	良好	
3	図版20	〃 〃	残存高6.4	頸部外面 刻目突帯文	頸部内外面 板状のものでナデた痕あり	1mm以下の砂粒を含む	表裏 にぶい黄橙 灰黄褐	良好	
4	図版20	〃 〃	口径 30.0 残存高 4.0	口縁部外面 刻目突帯文	口縁部内面 ヘラミガキ	3mm以下の砂粒を含む	表裏 黄灰 にぶい黄	良	口縁外面 黒斑
5	図版20	〃 粗製深鉢	口径 27.2 残存高12.5	口縁部外面 刻目突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 ヨコナデ				体部外面 煤付着
6	図版20	〃 鉢	口径35.4 残存高12.3		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ヘラ削り 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	口縁部内 面黒斑 体部外面 煤付着
7	図版20	〃 波状口縁 精製浅鉢	残存高3.7		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 削り 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	黒	良好	
8	図版20	〃 浅鉢	残存高17.8	口縁部 円孔 1個 沈線1条	全面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	表裏 黄灰 黒褐	良好	黒色磨研
9	—	〃 〃	残存高5.3		体部外面 体部内面 〃 ヘラミガキ ヘラミガキ 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含み精良である。	茶灰	良好	
10	—	〃 〃	口径 23.4 残存高 5.2		体部内外面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	表裏 灰白淡黄	良	
11	図版20	〃 〃	口径 14.7 底径 6.1 器高 6.5		体部内外面 ヘラミガキ	2mm以下の砂粒を含む	黒	良	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第13図 -1	図版21	弥生土器蓋	口径10.6 残存高 2.8	体部外面 円孔1個	体部内外面 ヘラミガキ	2mm以下の砂粒を含む	表にぶい黄褐色 裏灰黄	良	体部内面黒斑、外 面に赤色顔料によ る模様
2	—	〃	口径5.8 残存高8.9		体部外面 〃 内面 〃 内面	ヘラミガキ ヘラミガキ 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含む	表にぶい橙褐色 裏灰褐	良好 体部外面 煤付着
3	—	〃 壺	口径 16.8 残存高 4.6		口縁部外面 体部内外面	指頭圧痕 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	表にぶい橙 裏 橙	良
4	図版21	〃	残存高 4.9	体部外面 連弧文	体部内外面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰黄	良好	
5	—	〃 瓢	口径27.4 残存高 5.0	口縁端部 刻目文	体部内面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	黄灰	不良	
6	—	〃	口径25.8 残存高19.5	口縁端部 刻目文					体部外面 煤付着
7	—	〃 鉢	口径26.2 底径 7.6 残存高10.4 以上		口縁部内外面 体部内外面	ヨコナデ ヘラミガキ	1mm程度の砂粒を含む	灰白	良 底部内部 に黒斑
8	—	〃 底部	口径 7.6 残存高 2.7	底部 穿孔	体部内面 ヨコナデ	1~2mmの砂粒を含む	表裏灰黄 浅黄	良	
9	—	〃 壺底部	口径 7.0 残存高 5.7		体部外面 体部内面 底部外面	ヘラミガキ ヘラ状工具によるナデ ヨコナデ ナデの粗ミガ	1~3mmの大 の長石石英の砂粒 を多量に含む	表裏茶灰 黄灰	良好
10	—	〃 底部	口径 9.0 残存高 3.3		体部外面 体部内面 底部外面	ヘラミガキ 表面剥落の為 不明 ヨコナデ	1~3mmの大 の砂粒を多量に含む	灰白	良
11	—	〃	口径9.2 残存高3.7		体部外面 体部内面 底部外面	ヘラミガキ ヘラミガキ ヘラケズリ ハケ目	砂粒を多 量に含む	灰白	良 体部内面 底部外面 黒斑
12	—	弥生土器 底部	口径21.0 残存高4.4		体部内外面 底部外面	ヘラミガキ 〃	3mm以下の砂粒を含む	表裏灰白 黄灰	良 底部内外 面 黒斑

3区 ST 01 出土土器

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第28図 -1	図版21	弥生土器 壺	口径11.4 残存高10.6	口縁端部 四線1条	体部外面 ハケ目 " 内面 ヨコナデ " しづり目	3mm以下の砂粒を含む	表裏 黒褐 灰白	良	体部内面 黒斑
2	図版21	" "	口径11.4 残存高21.0		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面(上部) 粗いハケ目 " (下部) ヘラミガキ " 内面 磨滅の為の調整不明	1mm以下の砂粒を含む	表裏 褐 灰	良	

3区 ST 02 出土土器

第28図 -3	—	弥生土器 壺	口径18.2 残存高3.7	口縁端部 頸部外面	刻目文 刻目突帯文 2条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm程度の砂粒を含む	表裏 赤	良好
4	—	" "	口径 18.2 残存高 5.5	口縁端部 口縁部内面	刻目文 刻目突帯文 3条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	表裏 に ぶい黄橙	良
5	—	" "	口径 18.0 残存高 3.2	口縁端部	刻目文		2mm以下の砂粒を含む	表裏 灰白 浅黄 橙	不良
6	—	" "	口径 19.4 残存高 1.7	口縁端部	四線3条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	表裏 褐	良
7	—	" "	口径 20.2 残存高 4.1	口縁端部	弱い四線4 条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	表裏 褐 褐灰	良好
8	—	" "	口径 8.8 残存高 5.0	口縁部外面 頸部外面	四線1条 沈線2条	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部内面 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含む	表裏 に ぶい褐	良好
9	図版21	" "	口径 8.4 残存高 7.5	頸部外面	四線5条 ハケ原体による押压文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部内面 しづり目	1mm以下の砂粒を含む	明赤褐	良好
10	—	弥生土器 甕	口径22.4 残存高3.0	口縁端部	刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい褐	良好

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第28図 -11	-	弥生土器 甕	口径13.2 残存高 3.6		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	明赤褐	良好	
12	-	〃	口径16.4 残存高 6.0	口縁端部 四線2条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 指頭圧痕	5mm以下の砂粒を含む	表 橙 裏 褐灰	良	
13	-	弥生土器 高杯	口径25.8 残存高3.2		体部内外面 磨滅のため調整不明	1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良好	
14	-	〃	口径24.2 残存高11.4		体部内外面 磨滅のため調整不明	1mm以下の砂粒を含む	明褐	良好	
15	-	〃	底径 17.4 残存高 4.6		脚部内面 ヘラ削り	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
16	-	〃	底径 9.2 残存高10.3		体部内外面 磨滅のため調整不明	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
17	図版 21	弥生土器 蓋	口径12.9 残存高 2.3		体部内外面 ナデ	1~2mmの砂粒を含む	にぶい赤 褐	良	
18	-	紡錘車	外径 4.2×3.7cm (縦×横) 孔径 0.8×0.9cm (縦×横)			1mm以下の砂粒を含む	表 にぶい褐 裏 オリーブ褐	良	土器片利用

1区 SX01 出土土器

第30図 -1	-	弥生土器 壺	口径18.2 残存高 5.5	口縁端部 斜格子文 口縁部内面 刻目突帯文	体部内外面 磨滅のため調整不明	1mm以下の砂粒を含む	淡黄	良	
2	-	〃	口径16.4 残存高 6.7	頸部外面 押圧突帯文	体部内外面 磨滅のため調整不明	3mm以下の砂粒を含む	橙	不良	
3	-	〃	口径16.6 残存高 6.8	口縁部 円線1条 口縁部内面 円孔2孔1対 頸部外面 押圧突帯文	体部内外面 磨滅のため調整不明	5mm以下の砂粒を含む	表 橙 裏 明赤 褐	不良	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第30図 -4	—	弥生土器 甕	口径 26.4 残存高 4.7		口縁部内外面 ヨコナデ	3mm以下の砂粒を多量に含む	にぶい橙	不良	
5	—	〃	口径 30.0 残存高 9.9		口縁部内外面 体部外面 ハケ目 〃 内面 5~6条/cm 指ナデ	1mm以下の砂粒を含む	表灰黄 裏にぶい黄橙	良	
6	—	弥生土器 高杯	口径 20.0 残存高 6.0		杯部内外面 磨滅のため調整不明	2mm以下の砂粒を含む	表にぶい橙 裏 橙	良好	杯部内面 黒斑
7	—	弥生土器 高杯	底径14.6 残存高10.4		脚部内外面 脚部内面 磨滅のため調整不明 しづり目	3mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	不良	
8	—	紡錘車	外径 3.3×3.4cm (縦×横) 孔径 0.5×0.3cm (縦×横)	両面 中央部	磨滅のため調整不明 穿孔	1mm以下の砂粒を含む	表黒 裏黒褐	良	土器片利用

1区 SX02 出土土器

第30図 -9	—	弥生土器 底部	底径 7.6 残存高 2.6		底部内外面 磨滅のため調整不明	2mm以下の砂粒を含む	表 橙 裏 暗褐色	良	
10	—	〃 壺	口径 11.0 残存高 4.9	頸部 円孔2個1対	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm程度の砂粒を含む	灰白	良	
11	—	〃 底部	底径 7.4 残存高 8.5		底部内外面 磨滅のため調整不明	2mm以下の砂粒を含む	表にぶい橙 裏明褐 灰	良	底部外面 黒斑

3区 SX03 出土土器

第31図 -1	—	弥生土器 壺	口径11.2 残存高 5.5		口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	浅黄	良	
2	—	〃 〃	口径16.0 残存高 3.5		口縁部内外面 ヨコナデ	1~2mmの砂粒を含む	赤	良	
3	—	〃 〃	口径16.8 残存高 2.6		口縁部内外面 頸部外面 ヨコナデ 磨滅のため調整不明	2mm以下の砂粒を含む	表 黒褐 裏 明褐 灰	良	

捕図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第31図 -4	—	弥生土器 壺	口径20.4 残存高 2.4	口縁端部 斜格子文	口縁部内外面 磨滅の為調整 不明	3mm以下の 砂粒を含む	灰白	不良	
5	—	〃	口径16.8 残存高 6.4	口縁端部 弱い凹線2条	口縁部内外面 磨滅の為調整 不明	1mm以下の 砂粒を含む	褐	良好	口縁部内面 に黒斑
6	—	〃	口径21.6 残存高 3.1	口縁部外面 弱い凹線2条	体部内外面 磨滅の為調整 不明	2mm以下の 砂粒を含む	にぶい黄橙	良	
7	—	〃	口径23.6 残存高 1.9	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の 砂粒を含む	灰白	良	
8	—	弥生土器 高杯	口径 29.0 残存高 6.6		口縁部内外面 ヨコナデ	砂粒含む	表 橙 裏 黄橙	良	
9	—	〃	口径23.4 残存高 4.7	口縁端部 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 砂粒を含む	表 橙 裏 灰白	良好	
10	—	〃	口径27.8 残存高 6.6	口縁部外面 凹線4条	口縁部内面 ヨコナデ	2mm以下の 砂粒を含む	灰白	良	口縁部内面 黒斑
11	—	〃	口径30.2 残存高 7.4	口縁部外面 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ 杯部内面 ヘラミガキ	1mm程度の 砂粒を多量 含む	表 にぶい 赤褐 裏 暗赤褐	良好	
12	—	〃	底径 17.6 残存高 3.0		脚部内外面 磨滅の為調整 不明	3mm以下の 砂粒を含む	表 黄灰 裏 灰褐	良	
13	—	〃	底径 16.0 残存高 2.7	脚端部 凹線1条	脚部外面 ヨコナデ 脚部内面 磨滅の為調整 不明	2mm以下の 砂粒を含む	にぶい黄橙	良	
14	—	〃	残存高 6.1		脚部外面 粗い ヘラミガキ 杯底部 円板充填	砂粒を含む	にぶい橙	良	

1・3区 5b 砂層出土土器

捕図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第38図 -1	-	弥生土器 壺	口径12.4 残存高 4.8	口縁端部 刻目文	口縁部外面 内面 頸部外面 ヨコナデ ヨコナデ 指頭圧痕 ハケ目 10条/cm	1mm以下の 砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	
2	-	〃	口径15.6 残存高 3.7	口縁端部 刻目文	体部内外面 磨滅のため調 整不明	2mm以下の 砂粒を含む	明赤褐	良	
3	-	〃	口径14.6 残存高 5.0	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 頸部外面 ヨコナデ ハケ目 6条/cm	2mm以下の 砂粒を含む	表 褐 裏 灰白	良	
4	-	〃	口径16.6 残存高 6.0	口縁端部 刻目文	頸部外面 ハケ目	2mm以下の 砂粒を含む	表 橙 裏 灰褐	良	
5	-	〃	口径14.8 残存高 6.4	口縁端部 頸部外面 刻目文 押圧突帯文	体部内外面 磨滅のため調 整不明	2mm以下の 砂粒を含む	表 灰黄 褐 裏 にぶ い黄橙	良	口縁頸部 黒斑
6	-	〃	口径14.0 残存高 6.2	口縁端部 頸部外面 刻目文 刻目突帯文 3条	口縁部内外面 ヨコナデ	1~2mm程 度の砂粒 を含む	灰白	良好	
7	-	〃	口径15.6 残存高 7.3	口縁端部 円形浮文 3個 口縁部から 頸部外面 刻目突帯文 4条	体部内外面 磨滅のため調 整不明	1mm以下の 砂粒を含む	灰白	良	
8	-	〃	口径14.2 残存高 9.9	体部外面 櫛描直線文 7条 波状文 4条	口縁部内外面 体部外面 ヨコナデ ハケ目 6~7条/cm 〃 内面 指頭圧痕	2mm以下の 砂粒を含む	灰白	良	
9	-	〃	口径18.8 残存高9.3	頸部外面 押圧突帯文	体部内外面 磨滅のため調 整不明	2mm以下の 砂粒を含む	表 にぶ い褐 裏 橙	良	
10	-	〃	口径12.0 残存高9.3	口縁端部 刻目文	頸部外面 体部内面 ハケ目 ハケ目	2mm以下の 砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
11	-	〃	口径21.4 残存高6.0	口縁端部 口縁部 内孔2個1対 2組 頸部外面 突帯文1条		2mm以下の 砂粒を多 量に含む	にぶい褐	良好	
12	図版22	〃	口径26.4 残存高10.0	口縁端部 頸部外面 斜格子文 押圧突帯文	体部内外面 磨滅のため調 整不明	3mm以下の 砂粒を含む	橙	良	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
第38図 -13	—	弥生土器壺	口径 23.0 残存高 2.5	口縁端部 円形浮文 3個1組 刻目文 斜格子文 円孔2個1対 口縁部内面	ヨコナデ	口縁部内外面	2mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	不良		
14	図版22	〃	口径 24.8 残存高 9.4	口縁部内面 斜格子文 列点文 頸部外面	磨減のため調整不明	体部外面	3mm以下の砂粒を含む	表にぶい黄 橙裏 黄褐	良		
15	—	〃	口径 23.8 残存高 4.0	口縁端部 凹線3条 棒状浮文 円孔2個1対 2組 櫛状工具による刺突 文斜格子文 口縁部内面	ヨコナデ	口縁部内外面	2mm以下の砂粒を含む	茶褐	良好		
第39図 -1	—	〃	口径 19.0 残存高 7.5	口縁端部 体部外面	凹線4条 刻目文	口縁部内外面 体部内面	ヨコナデ しづり目	4mm以下の砂粒を多量に含む	褐	不良	
2	図版22	〃	底径 7.0 残存高16.5	頸部外面	刻目文	頸部内面 体部内面 体部外面 〃	しづり目 指頭圧痕 上部ハケメ 下部ヘラミガキ	2mm以下の砂粒を含む	表 淡黄 裏 黄灰	良好	
3	—	〃	口径25.2 残存高 5.0	口縁端部	凹線3条	口縁内外面	ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	褐灰	良	
4	—	〃	口径18.5 残存高 4.5	口縁部外面	凹線3条	口縁内外面 体部内面	ヨコナデ ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良	
5	図版22	〃	口径11.7 残存高20.4 底径 4.9	口縁端部 口縁部内面 頸部外面	弱い凹線2条 円形浮文 3個1組 刻目文	体部外面 〃内面ナデ	磨減の為調整不明 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を多量に含む	明赤褐		体部外面 下部黒斑あり
第40図 -1	—	弥生土器甕	口径 23.0 残存高19.6	口縁端部	刻目文	体部外面 体部内面	磨減のため調整不明 ヘラミガキ	3mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
2	—	〃	口径 17.0 残存高10.0			口縁部内外面 体部外面 体部内面	ヨコナデ ハケ目 ハケ目	2mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	体部内面 黒斑
3	—	〃	口径20.2 残存高 3.4			口縁部内外面	ヨコナデ	1~5mmの砂粒を含む	表にぶい赤褐 裏 淡橙	良好	
4	—	〃	口径 25.0 残存高 7.0	口縁端部	刻目文	口縁部内外面	ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	表にぶい黄 橙裏 灰白	良	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第40図 -5	—	弥生土器 甕	口径 27.0 残存高 7.1		口縁部内外面 ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	表 淡黄 橙 裏 灰白	良	口縁部内面 黒斑
6	—	〃	口径 29.0 残存高 4.7		体部外面 体部内面 ヨコナデ 磨滅のため調整不明	5mm以下の砂粒を多量に含む	明褐	良好	
7	—	〃	口径 10.2 残存高 5.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目	3mm以下の砂粒を含む	表 灰黄 褐 裏 にぶい黄褐	良	
8	—	〃	口径 25.0 残存高 5.0	口縁端部 四線3条	口縁部内外面 ヨコナデ	1~2mm以下の砂粒を含む	黄褐	良	
9	—	〃	口径31.4 残存高 2.3	口縁端部 四線3条		2mm以下の砂粒を含む	表 にぶい黄 橙 裏 黄褐	良	
10	—	弥生土器 甕底部	底径 6.4 残存高 7.9	底部 穿孔	底部外面 底面内面 ヘラミガキ ヘラ削り	1mm程度の砂粒を含む	表 明赤 褐 裏 灰褐	良	底部下 黒斑
11	—	〃	底径 7.4 残存高 9.3		底部外面 底部内面 ヘラミガキ ヘラミガキ	2mm以下の石粒若干含む	表 赤橙 裏 赤灰	良好	底部外面 煤付着
第41図 -1	図版22	弥生土器 高杯	口径 23.4 残存高 8.2	口縁端部 刻目文 円形浮文 3個1組	杯部外面 杯部内面 ヘラミガキ ナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	杯部外面 黒斑あり
2	—	鉢	口径26.9 残存高11.5		体部内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	表 赤橙 裏 橙	良	
3	図版22	〃 高杯	口径 14.0 底径 10.3 器高 20.6	底部 三角形透孔 7個	杯部内面 ヘラミガキ	2mm以下の砂粒を含む	表 黒褐 裏 橙	良	杯部内面 煤付着 脚部外面 黒斑
4	—	〃 高杯	底径 12.2 残存高 4.3	脚端部 四線2条	脚部内外面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	表 黒褐 裏 橙	良好	脚部外面 黒斑
5	—	鉢	口径 12.0 底径 4.0 器高 5.8		体部内外面 磨減のため調整不明	砂粒を含む	表 灰白 裏 橙	良	底部 黒斑

2. 4区 SD09出土土器

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第52図 -1	—	弥生土器壺	口径16.1 残存高1.4		口縁部外面 〃 内面 ヘラミガキ ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良好	
2	—	〃	口径16.6 残存高3.9		口縁部外面 〃 内面 ヨコナデ ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	黒褐	良	
3	—	〃	口径13.5 残存高7.7		体部外面 〃 内面 ヘラミガキ 指頭圧痕・ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	体部外面 黒斑
4	—	〃	口径10.2 残存高15.9		体部外面 〃 内面 ヘラミガキ 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	体部外面 黒斑
5	—	〃	口径12.5 残存高4.9		口縁部内外面 磨滅の為調整 不明	4mm以下の石粒を含む	灰白	不良	口縁部内外面 黒斑
6	—	〃	口径11.9 残存高5.0	頸部外面 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目5条/cm 〃 内面 指頭圧痕・細かいハケ目	1mm以下の砂粒を含む	表にぶい赤褐 裏 橙	良	
7	図版30	〃	口径33.8 残存高2.5	口縁端部 刻目文 口縁内面 押圧突帯文 押圧突帯文 鋸歛文		2mm以下の砂粒を含む	黄灰	良	
8	—	〃	口径12.4 残存高4.8	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目10条/cm	1~2mmの砂粒を含む	表 淡黄 裏 黒	良	
9	—	〃	口径21.5 残存高9.0	口縁端部 刻目文 頸部外面 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 ハケ目	1~2mm以下の砂粒を含む	灰黄	良	
10	—	〃	口径18.6 残存高1.9	口縁端部 四線4条 〃 内部 波状文	口縁部外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰黄褐	良好	
11	—	〃	口径15.7 残存高2.1	口縁部内面 ナデによる 擬四線	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第52図 -12	—	弥生土器壺	口径17.4 残存高2.3	口縁部内面 ナデによる 擬凹線	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 砂粒を含む	表 暗灰 裏 にぶ い黄橙	良好	
13	—	〃 甕	口径22.7 残存高6.7		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 ハケ目 〃 内外面 ヘラミガキ	3mm以下の 砂粒を含む	表 にぶ い黄橙 裏 灰白	良	
14	—	〃 〃	口径27.0 残存高5.5	口縁端部 体部外面 刻目文 櫛描直線文 10条 刺突文	口縁内面 ヘラミガキ	2mm以下の 砂粒を含む	表 褐灰 裏 灰白	良	表面全部 煤付着
15	—	〃 〃	口径15.4 残存高5.9	体部外面 櫛描直線文	口縁端部 口縁部内外面 体部内面 指頭圧痕 ヨコナデ ヘラミガキ	砂粒を含む	表 灰白 裏 灰黄	良	体部外面 煤付着
16	—	〃 〃	口径24.0 残存高7.0	体部外面 櫛描直線文 40条	口縁内面 体部内面 指頭圧痕 磨滅の為調整 不明	1mm以下の 砂粒を含む	表 灰白 裏 にぶ い黄橙	良	体部内外 面 煤付 着
17	—	〃 〃	口径24 残存高7.8	体部外面 櫛描直線文 28条	口縁内外面 体部内面 ヨコナデ ヘラミガキ	1mm以下の 砂粒を含む	表 にぶ い黄橙 裏 にぶ い黄褐	良	体部内外 面 煤付 着
18	—	〃 〃	口径27.4 残存高5.0		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目4条/cm	2mm以下の 砂粒多量 に含む	橙	良	
19	—	〃 〃	口径38.4 残存高6.5		口縁部内外面 ヨコナデ	2.5mm以下の 砂粒含む	灰オリー ブ	良	
20	—	〃 〃	口径12.3 残存高3.1		体部外面 〃 内面 ハケ目 指頭圧痕	1mm以下の 砂粒を含む	にぶい橙	良好	体部外面 煤付着
21	—	〃 〃	口径22.2 残存高2.2	口縁端部 凹線3条	口縁内外面 ヨコナデ	1mm以下の 砂粒を含む	赤	良	口縁内外 面 黒斑
22	—	弥生土器 高杯	口径20.0 残存高4.0	口縁端部 凹線3条	体部外面 〃 内面 ヘラミガキ 〃	1mm以下の 砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	杯部外面 黒斑
23	—	〃 〃	口径20.0 残存高4.2	口縁端部 凹線3条	体部外面 〃 内面 ヘラミガキ ハケ目	1mm以下の 砂粒を含む	灰白	良好	杯部内外 面 黒斑

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第52図 -24	図版23	弥生土器 鉢	口径15.0 器高10.0 底径6.2		体部外面 粘土接合痕明瞭 体部内面 ナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	体部内面下部黒斑
25	図版23	弥生土器 蓋	口径20.2 器高10.3		体部外面 ナデ? 体部内面 ヘラミガキ	3mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良好	
4区 SP11 出土土器									
第56図 -1	図版23	弥生土器 壺	口径8.3 底径4.2 器高11.5		体部内面 しづり目	3mm以下の砂粒を含む	表裏 灰白 褐灰	良	体部外表面黒斑
4区 SP13 出土土器									
第57図 -1	図版23	弥生土器 壺	口径12.6 底径5.7 器高11.2		体部外面 ハケ目 体部内面 指頭痕 ヘラ削り	3mm以下の砂粒を含む	表裏 橙 灰白	良	体部内面黒斑
2	-	弥生土器 底部	底径5.6 残存高4.5		体部外面 ヨコナデ 体部内面 磨滅のため調整不明	1~3mm位の砂粒を多量に含む	表裏 明赤 褐 赤灰	良	底に黒斑
3	-	弥生土器 甕	口径25.5 残存高9.4		口縁部内外面 ヨコナデ	3mm以下の砂粒を若干含む	表裏 黒褐 明赤	良	体部内外面黒斑
4	-	々々	口径22.0 残存高5.0			3mm以下の砂粒を含む	にぶい赤褐	良	体部外表面黒斑
5	-	々々	口径24.4 残存高13.5	口縁端部 刻目文		5~6mm以下の砂粒を含む	表裏 にぶい褐 灰黄褐	良	
4区 SK09 出土土器									
第58図 -1	-	弥生土器 壺	口径13.3 残存高4.0		口縁部内外面 磨滅のため調整不明	3mm以下の砂粒を若干含む	表裏 にぶい黄褐 にぶい赤橙	良	
2	-	弥生土器 甕	口径14.5 残存高10.0		口縁部内外面 磨滅のため調整不明	2mm以下の砂粒を含む	浅黄橙	不良	

捕団番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第58図 -3	図版23	弥生土器 甕	口径18.9 残存高10.0		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 磨滅のため調整不明	1mm以下の砂粒を含む	黒褐	不良	
4	—	弥生土器 底部	底径6.1 残存高6.3		体部外面 磨滅のため調整不明	3~4mm以下の砂粒を含む	表 橙裏 赤橙	不良	
5	—	弥生土器 底部	底径6.2 残存高13.0		体部外面 体部内面 ヘラミガキ 磨滅のため調整不明	2mm以下の砂粒を含む	表 裏 灰白 淡黄	不良	体部外面 黒斑
6	—	底部	底部10.8 残存高15.2		体部外面 体部内面 ヘラミガキ ヘラ削り後ナデ	2mm以下の砂粒を含む	表 にぶい 橙裏 にぶい褐	良好	

2.4区 SR01 10~11層出土土器

第59図 -1	—	弥生土器 壺	口径13.6 残存高7.9	口縁部外面 波状文9条 櫛描直線文10条	口縁部内外面 頸部外面 ヨコナデ 〃 内面 ハケ目7条/cm 指頭圧痕が顕著に残る	1mm以下の砂粒を含む	褐灰	良好	
2	—	〃 〃	口径15.4 残存高7.0	口縁端部 刻目文 頸部外面 ヘラ記号	口縁部内外面 頸部外面 ヨコナデ 〃 内面 ハケ目 しづり目	砂粒を含む	表 にぶい 橙裏 淡橙	良	内面全体 黒斑
3	—	〃 〃	口径17.4 残存高9.3	口縁端部 刻目文 頸部外面 貼付突帯文2条	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	淡黄橙	良好	
4	—	〃 〃	口径20.2 残存高9.2	口縁端部 刻目文 頸部外面 抑圧突帯文 櫛描直線文5条(現存)	口縁部外面 頸部外面 ヨコナデ 〃 内面 ハケ目9~10条/cm 磨滅のため調整不明	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
5	—	〃 〃	口径18.0 残存高5.7	口縁端部 凹線3条 口縁部内面 半円連弧文 櫛描直線文	口縁部外面 頸部外面 ヨコナデ ハケ目	3mm以下の砂粒を含む	表 裏 灰黄 褐灰	良	口縁端部 黒斑
6	図版30	〃 〃	口径20.8 残存高8.2	口縁端部 斜格子文 口縁部内面 櫛描波状文3条 頸部外面 円孔2個1組 〃 内面 刻目突帯文2条 櫛描波状文3条 (約60°間隔で波状文 がある)	口縁部外面 ヨコナデ 粗いハケ目	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	

捕図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第59図 -7	図版30	弥生土器壺	口径19.4 残存高5.0	口縁端部 斜格子文 " 部内面 貼付突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 磨滅のため調整不明	1~3mm以下の砂粒を少量含む	灰白	良	口縁部黒斑
8	図版30	"	口径21.4 残存高1.9	口縁端部 刻目文 弱い凹線2条 口縁部内面 斜格子文 円孔2孔1対		1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄橙	良好	口縁部内面黒斑
9	-	弥生土器甕	口径25.4 残存高6.8	口縁端部 体部外面 刻目文 波状文	口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 " 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	表にぶい黄橙 裏灰黄褐	良	
10	-	弥生土器高杯	口径21.6 残存高3.7	口縁端部 凹線3条	杯部内外面 磨滅のため調整不明	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄橙	良	
11	-	紡錘車	外径 4.9×5.0 (縦×横)	未完通		2~3mm以下の砂粒を含む	黒褐	良	
12	-	紡錘車	外径 4.0×4.1 (縦×横) 孔径 0.6×0.5 (縦×横)	内外面	磨滅のため調整不明 中央部穿孔	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄橙	良	
13	-	弥生土器ミニチュア	口径3.1 残存高2.3	脚部外面 円孔2好1対	体部内面 ヨコナデ	砂粒を含む	灰白	良	外面黒斑
14	-	弥生土器高杯脚部	底径6.8 残存高3.6	脚部外面 " 内面	指頭圧痕が顯著に残る 磨滅のため調整不明	1mm以下の砂粒を含む	表橙 裏にぶい橙	良好	
15	-	弥生土器把手				1mm以下の砂粒を含む	淡黄	良好	
16	-	弥生土器鉢	口径41.0 残存高7.4	口縁端部 凹線3条 口縁部外面 凹線5条	体部外面 ハケ目 " 内面 ハケ目	3mm以下の砂粒含む	表褐灰 裏にぶい黄橙	良	体部内面黒斑
2.4区 S R 0 1 11層出土土器									
第60図 -1	-	弥生土器壺	口径10.2 残存高5.0	頸部外面 凹線16条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 ヘラミガキ	3mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第60図 -2	—	弥生土器壺	口径15.4 残存高5.0		体部内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
3	—	〃	口径13.4 残存高6.7		口縁部内外面 ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	灰黄	良	外面 黒斑
4	—	〃	口径16.1 残存高5.7		口縁部外面 磨滅の為調整不明 〃 内面 ヘラミガキ	1~5mmの砂粒を多量に含む	表 橙 裏 浅黄 にぶい黄橙	良	内面 黑斑
5	—	〃	口径11.8 残存高6.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ヘラミガキ 〃 内面 ヘラミガキ	砂粒を含む	褐灰色	良	
6	図版24	〃	口径27.6 残存高11.5	頸部外面 沈線7条・列点文	口縁部内面 ヨコナデ	3mm以下の砂粒を多量に含む	灰	良	
7	図版24	〃	口径7.6 残存高6.0	頸部外面 楯描直線文18条 刺突文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部内面 しぶり目	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
8	図版24	〃	口径6.5 残存高11.0	口縁部 楯描直線文12条 波状文 楯描直線文6条 波状文 楯描直線文6条 波状文 楯描直線文6条 波状文 楯描直線文6条 波状文 楯描直線文6条 波状文	口縁内部 体部内面 ヨコナデ 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含む	暗赤褐	良好	
9	—	〃	口径13.2 残存高6.0	口縁端部 刻目文 頸部外面 四線15条 円孔1個	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
10	図版24	〃	口径15.2 残存高11.2	口縁端部 刻目文 頸部外面 楯描直線文20条 体部外面 列点文 波状文4条	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
11	—	〃	口径13.4 残存高3.3		口縁部外面 ヨコナデ 〃 内面 ヘラミガキ 体部外面 ハケ目	砂粒を含む	黒褐	良	
12	—	〃	口径9.2 残存高8.0		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 しぶり目	1mm以下の砂粒少々含む	灰白	良好	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第60図 -13	図版24	弥生土器 壺	口径10.0 器高15.2 底径4.5		口縁部内外面 体部外面 〃 内面 ヨコナデ ヘラミガキ ナデ	2mm以下の 砂粒を 少々含む	灰白	良	外面 黒 斑
14	—	〃	口径7.8 残存高6.0		口縁部内外面 体部内面 ヨコナデ 指頭圧痕	1mm以下の 砂粒を含 む	表 裏 明褐 灰褐	良好	外面 黑 斑
15	—	〃	口径15.0 残存高6.6		口縁部内外面 体部外面 ヨコナデ ハケ目	2mm大の砂 粒含む	灰白	良	
16	—	〃	口径12.8 残存高9.8		口縁部内外面 体部外面上部 内面 ヨコナデ ハケ目 指頭圧痕	砂粒を含 む	灰白	良	体部外面 黒斑
第61図 -1	—	弥生土器 甕	口径20.2 残存高6.0	体部外面 ヘラ描沈線 10条 刺突文	口縁部内外面 体部外面上部 ヨコナデ ハケ目	2mm以下の 砂粒含む	赤	良	
2	—	〃	口径23.2 残存高4.5	体部外面 ヘラ描沈線9 条 体部外面 弱い凹線1条 上部	口縁部内外面 ヨコナデ	3mm以下砂 粒含む	灰白	良	
3	—	〃	口径28.2 残存高9.8	体部外面 ヘラ描沈線 10条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 体部内面 ヘラミガキ	1mm以下の 砂粒を含 む	灰黄	良	体部外面 黒斑
4	—	〃	口径26.2 残存高10.5	口縁端部 体部外面 刻目文 ヘラ描沈線 11条 刺突文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 砂粒を含 む	灰白	良	体部外面 煤付着
5	—	〃	口径28.2 残存高8.5	体部外面 ヘラ描沈線 11条 列点文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部 外面 ハケ目 6条/cm	1mm程度の 砂粒を多 量に含む	灰白	良	体部外面 煤付着
6	—	〃	口径24.0 残存高5.9	口縁端部 体部外面 列点文 ヘラ描沈線 文12条 列点文	体部外面 体部内面 ハケ目 指頭圧痕	2~3mmの 砂粒を多 量に含む	灰白	良好	体部外面 煤付着
7	—	〃	口径26.3 残存高7.1	体部外面 ヘラ描沈線 文14条 刺突文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 指頭圧痕	2~3mmの 砂粒を含 む	灰白	良好	口縁部外 面 煤付 着
8	—	〃	口径28.8 残存高9.0	口縁端部 体部外面 列点文 ヘラ描沈線 文11条 列点文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 指頭圧痕	砂粒を多 量に含む	灰白	良好	

捕図 番号	図版 番号	器種	法量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第62図 -1	図版25	弥生土器 甕	口径12.8 底径6.2 器高9.2		口縁部内外面 〃 内面 体部外面 ヨコナデ 細いハケ目 ヘラミガキ後 ハケ目8条/cm	1mm以下の 砂粒を含む	表にぶ い黄橙 裏 黒	良	外部全体 黒斑
2	—	〃 〃	口径15.1 残存高4.5		口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の 砂粒を含む	明赤灰	良	口縁部外 面 黒斑
3	—	〃 〃	口径16.0 残存高6.0		口縁部内外面 〃 内面 体部外面 ヨコナデ 指頭圧痕 ハケ目9条/cm		にぶい橙	良	
4	—	〃 〃	口径20.0 残存高5.3		口縁部内外面 体部外面 〃 ヨコナデ 指頭圧痕 ハケ目11条/1.2cm	1mm以下の 砂粒少々 を含む	灰白	良	全体 煤 付着
5	—	〃 〃	口径25.3 残存高4.6		口縁部外面 〃 内面 体部外面 指頭圧痕 ヨコナデ ヘラミガキ ヨコナデ ハケ目	1mm以下の 砂粒を含む	表 黒褐 裏 オ リーブ黒	良好	全体 煤 付着
6	—	〃 〃	口径18.6 器高10.5		口縁部内外面 体部外面 〃 内面 ヨコナデ ハケ目 9~10 条/cm ナデ	5mm以下の 砂粒を含む	灰白	良好	体部外面 煤付着
7	—	〃 〃	口径20.5 残存高7.7		口縁部内外面 体部外面 体部内面 ヨコナデ ハケ目 指ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	表にぶ い赤褐 裏 橙	良	体部外面 黒斑
8	図版25	〃 〃	口径16.9 底径5.4 器高19.5		体部内外面 ヘラミガキ	3mm以下の 砂粒を含む	灰白	良	
9	—	〃 〃	口径16.4 残存高8.0		口縁部内外面 ヨコナデ	3mm以下の 砂粒を含む	表にぶ い橙 裏 浅黄 橙	不良	
10	—	〃 〃	口径18.7 残存高10.3		口縁部外面 〃 内面 ヨコナデ 磨滅のため調 整不明	1~3mm以 下の砂粒 を若干含 む	明赤灰	良	体部外面 黒斑
11	—	〃 〃	口径21.0 残存高7.9		口縁部内外面 〃 内面 ヨコナデ 指頭圧痕が顕 著に残る	1~3mm以 下の砂粒 を多量に 含む	赤褐	良好	
12	—	〃 〃	口径21.6 残存高3.1		口縁部内外面 〃 内面 ヨコナデ 指頭圧痕	3~4mm以 下の砂粒 を多量に 含む	褐	良好	口縁部外 面全体に 煤付着

捕図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第62図 -13	—	弥生土器 甕	口径22.0 残存高6.5		口縁部内外面 ヨコナデ	2~5mmの砂粒を多量に含む	にぶい黄褐	良	全体 煙付着
14	—	〃	口径31.0 残存高6.1		口縁部外面 ヨコナデ 体部内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	体部外面 黒斑
15	図版25	〃	口径32.6 残存高8.2		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケナデ 〃 内面 ヘラミガキ 指ナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
第63図 -1	—	弥生土器 鉢	口径28.6 残存高4.8		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ヘラミガキ 〃 内面 ヘラミガキ	2mm以下の砂粒を含む	灰白	良	外面 黒斑
2	—	〃	口径14.0 残存高5.8		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ミガキを行つ ていると思わ れるが調整不 明	2~3mm以 下の砂粒 を含む	表 裏 灰褐 灰黃 褐	不良	体部外面 煙付着
3	—	〃	口径18.0 残存高13.9		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 ヘラミガキ	砂粒を少々含む	灰白	良	
第64図 -1	—	弥生土器 甕	口径17.4 残存高8.0	体部外面 櫛描沈線11 条 〃 波状文3条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	全体 煙付着
2	—	〃	口径20.6 残存高10.0	体部外面 櫛描沈線14 条 〃 櫛描波状文 4条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 ハケ目9条/ cm	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
3	—	〃	口径23.5 残存高12.5	体部外面 櫛描直線文 20条 波状文4条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ヘラミガキ 〃 ハケ目10条/ cm 体部内面 ヘラミガキ	2mm以下の砂粒を含む	褐灰	良好	全体 煙付着
4	—	〃	口径20.6 残存高10.4	体部外面 櫛描直線文 30条 波状文5条	体部内外面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	全体 煙付着
5	—	〃	口径22.2 残存高10.1	口縁端部 刻目文 体部外面 櫛描直線文 12条 波状文3条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
6	—	〃	口径23.2 残存高11.0	体部外面 櫛描直線文 23条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラミガキ	砂粒を含む	灰白	良	体部外面 黒斑

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
第64図 -7	—	弥生土器甕	口径25.0 残存高6.7	体部外面 櫛描直線文 21条	口縁部内外面 体部内面	ヨコナデ ヘラミガキ	2mm以下の砂粒を含む	灰白	良好		
8	—	〃	口径16.7 残存高6.2	体部外面 櫛描直線文 18条 簾状文6条	口縁部内外面 体部内面	ヨコナデ ナデ	1mm以下の砂粒を含む	表赤灰 裏暗赤 褐	良好		
9	—	〃	口径23.6 残存高9.0	体部外面 櫛描直線文 12条	口縁部内外面 〃外面	ヨコナデ 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	体部外面 黒斑	
10	—	〃	口径24.6 残存高5.6	体部外面 櫛描直線文 23条	口縁部内外面 体部外面 体部内面 〃	ヨコナデ ハケ目 ヘラミガキ 指頭圧痕	砂粒を少量含む	表にぶい黄 橙 裏明赤 褐	良好		
11	—	〃	口径19.4 残存高6.9	体部外面 櫛描直線文 28条	口縁部内外面 体部内面	ヨコナデ ヘラミガキ	砂粒を含む	灰白	良好	体部外面 黒斑	
12	—	〃	口径23.1 残存高12.5	口縁端部 体部外面 刻目文 櫛描直線文 21条 刺突文	体部内外面	ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	体部外面 煤付着	
13	図版25	〃	口径21.6 残存高10.4	体部外面 櫛描直線文 35条 波状文7条	体部内外面	ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰黄褐	良	全体 煤付着	
14	—	〃	口径23.0 残存高8.9	体部外面 櫛描直線文 33条 波状文7条	口縁部内外面 体部内外面	ヨコナデ ヘラミガキ	砂粒を含む	灰黄	良好		
第65図 -1	—	〃	口径26.4 残存高13.6	体部外面 櫛描直線文 21条 刺突文	口縁部内外面 体部内外面	ヨコナデ ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	体部外面 煤付着	
2	—	〃	口径26.0 残存高13.3	体部外面 櫛描直線文 28条 刺突文	口縁部内外面 体部内外面	ヨコナデ ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	全体 煤付着	
3	図版25	〃	口径29.0 残存高12.0	体部外面 櫛描直線文 28条 刺突文	口縁部内外面 体部内外面	ヨコナデ ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	全体 煤付着	
4	—	〃	口径31.2 残存高15.0	体部外面 櫛描直線文 波状文	口縁部内外面 口縁部外面 体部外面 体部内面	ヨコナデ 指頭圧痕 ヘラミガキ 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	体部外面 煤付着	

捕図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第66図 -1	—	弥生土器壺	口径6.8 残存高2.7		体部内外面 ヨコナデ	2~3mmの砂粒を若干含む	灰白	良好	
2	—	〃	口径11.0 残存高4.0	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
3	—	〃	口径11.0 残存高3.3	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目	3~5mm大の砂粒を含む	灰白	良	
4	—	〃	口径12.8 残存高3.2		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 磨滅の為調整不明	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
5	—	〃	口径12.1 残存高3.4	体部外面 円孔1個	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 9条/cmハケ目	1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良	
6	—	〃	口径14.4 残存高4.0		口縁部内外面 ヨコナデ	1mmの砂粒を含む	橙	良	
7	—	〃	口径13.0 残存高8.0	体部外面 沈線2条	体部外面 ハケ目	2mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
8	—	〃	口径15.6 残存高5.5	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	1~3mmの小石を多量に含む	にぶい橙	良	
9	図版30	〃	口径10.4 残存高5.3	口縁部外面 円孔1個 口縁部内面 刻目突帯文 頸部外面 刻目突帯文2条	口縁部外面 8~9条/cm ハケ目	1mm以下の砂粒含む	橙	良好	
10	—	〃	口径18.2 残存高9.1	口縁端部 刻目文 刻目突帯文 円孔1対 櫛描列点文 断面三角形 の空帶文 櫛描直線文 3条	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 5条/cmのハケ目	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
11	—	〃	口径19.4 残存高1.4	口縁端部 ハケ目原体による押圧文 口縁部外面 U字浮文の上に刻目文	口縁外部 ナデ	1mm以下の砂粒を含む	表 黄灰 裏 にぶい橙	良好	
12	—	〃	残存高9.4	頸部外面 押圧突帯文2条	頸部外面 ハケ目 頸部内面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第66図 -13	—	弥生土器壺	口径21.0 残存高3.3	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	3mm以下の砂粒を多數含む	赤橙	良	
14	—	〃	残存高8.5	口縁部内面 体部外面 体部外面	刺突文 突帯文3条 櫛描沈線現 存6条	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	表にぶい黄橙 裏にぶい橙	良好
15	—	〃	口径25.6 残存高8.0	口縁端部 体部外面	刻目文2条 凹線2条	体部外面 10条/cmのハケ目 体部外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒含む	灰白	良好
第67図 -1	—	〃	口径13.5 残存高5.0	口縁部外面	押圧突帯文3 条 櫛描直線文8 条	口縁部内外面 ヨコナデ 〃 外面 ハケ目	砂粒を少々含む	灰白	良好
2	—	〃	口径16.6 残存高4.0	口縁端部 〃 部外面	刻目文 押圧突帯文3 条	口縁部内外面 ヨコナデ 〃 内面 ハケ目6条/ 6mm	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好
3	—	〃	口径13.0 残存高6.5	口縁部外面	刻目突帯文3 条		3mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良
4	—	〃	口径14.0 残存高7.1	口縁部外面	刻目突帯文3 条	口縁部外面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	橙	良
5	—	〃	口径12.8 残存高6.1	口縁端部 〃 部外面	刻目文 刻目突帯文2 条	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を少々含む	表にぶい黄 裏灰白	良好
6	—	〃	口径18.4 残存高6.0	口縁部外面	刻目突帯文3 条	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良好
7	—	〃	口径17.1 残存高6.5	口縁端部 口縁部外面	刻目文 刻目突帯文3 条	口縁部外面 ヨコナデ 〃 内面 ハケ目	2mm以下の砂粒を含む	灰白	良
8	—	〃	口径10.6 残存高4.6	口縁端部	刻目文	口縁部外面 ハケ目6条/ cm 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰黄褐	良
9	—	〃	口径9.2 残存高5.1	口縁端部	刻目文	口縁部内外面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	明褐灰	良好
								口縁部外 面 黒斑	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第67図 -10	—	弥生土器壺	口径13.0 残存高6.2	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ " 外面 粗いハケ目	2mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
11	—	〃	口径11.6 残存高7.0	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	頸部外面黒斑
12	—	〃	口径10.3 残存高6.0	口縁端部 刻目文	口縁部外面 ヘラミガキ " 内面 ナデ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	
13	—	〃	口径11.7 残存高7.7	口縁端部 体部外面 刻目文 櫛描沈線文 10条	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目5条/cm	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	
14	—	〃	口径10.9 残存高7.5	体部外面 櫛描沈線文 現存9条	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部内面 しづぼり目 体部外面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
15	—	〃	口径10.7 残存高4.6		口縁部内外面 ヨコナデ " 内面 粗いハケ目 頸部外面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
16	—	〃	口径10.7 残存高5.5		口縁部外面 ハケ目 口縁部内面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	表 黄 裏 灰 黄 黄	良好	
17	—	〃	口径11.3 残存高5.6		口縁部外面 ハケ目 " 内面 ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
18	—	〃	口径11.5 残存高4.7		口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	灰黄	良	
19	—	〃	口径14.1 残存高6.3		口縁部外面 ハケ目	砂粒を含む	灰白	良	
20	—	〃	口径10.8 残存高5.0		口縁部内面 ヨコナデ	1~3mmの砂粒を含む	灰白	良好	
21	—	〃	口径12.2 残存高5.4		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第67図 -22	—	弥生土器 壺	口径14.8 残存高6.2		口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 指頭圧痕 〃 内面 しづり目	3mm以下の砂粒を含む	淡黄	良好	
23	—	〃	口径11.5 残存高2.7	口縁端部 刻目文 〃 部 円孔2個 体部外面 波状文9条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	表 灰黄 裏 灰白	良	
第68図 -1	—	弥生土器 甕	口径14.0 残存高11.6		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目7条/cm 〃 内面 ヘラミガキ ハケ目6条/cm ヘラミガキ	1~2mm程度の砂粒含む	にぶい黄褐	良	体部外面 煤付着 体部内面 黒斑
2	—	〃	口径12.4 残存高8.0		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	明褐灰	良	体部外面 煤付着
3	—	〃	口径15.6 残存高6.4		口縁部外面 ヨコナデ 体部内面 指頭圧痕	2mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
4	—	〃	口径16.8 残存高5.2		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目8条/cm	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄橙	良	体部外面 煤付着
5	—	〃	口径16.0 残存高5.3		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目	1~2mm以下砂粒を含む	表 にぶい橙 裏 褐灰	良	体部外面 全体 煤付着
6	—	〃	口径18.8 残存高4.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒若干含む	暗赤灰	良	体部外面 全体 煤付着
7	—	〃	口径18.6 残存高6.4		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒含む	表 褐灰 裏 灰黄	良	体部外面 煤付着
8	—	〃	口径19.2 残存高6.6		口縁部内外面 ヨコナデ、 体部外面 ハケ目9条/cm 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒少々含む	灰色	良	口縁部外 面 煤付 着
9	—	〃	口径20.0 残存高6.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目7条/cm 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰黄褐	良	
10	—	〃	口径21.8 残存高5.7		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目5~6 条/cm ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	暗赤褐	良	体部外面 煤付着

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第68図 -11	—	弥生土器 甕	口径21.0 残存高6.2		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 " 内面 ヘラミガキ	1mm以下の 砂粒を含む	黒褐	良	体部外面 全体 煤付着
12	—	"	口径19.2 残存高6.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目7条/cm " 内面 ヘラミガキ	1mm以下の 砂粒を含む	灰褐	良	体部外面 煤付着
13	図版25	"	口径18.1 器高24.9 底径5.6		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 " 内面 ヘラミガキ 底部外面 ミガキ " 内面 ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	
14	—	"	口径19.3 残存高8.0		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目5条/cm " 内面 ヘラミガキ	1mm以下の 砂粒を含む	褐灰	良好	体部外面 煤付着
15	—	"	口径20.2 残存高9.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目8条/cm	1mm以下の 砂粒を含む	表赤 裏にぶい黄 橙	良好	
16	—	"	口径21.2 残存高14.8	体部外面 竹管文2条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目	2mm以下の 砂粒を含む	表灰黄 褐裏にぶい黄 褐	良好	
17	—	"	口径24.4 残存高9.8	体部外面 列点文2条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目	1mm以下の 砂粒を含む	表灰白 裏にぶい橙	良	
第69図 -1	図版25	"	口径22.8 残存高15.5		口縁部外面 指頭圧痕 " 内面 ヨコナデ 体部外面下部 ヘラミガキ " 内面 指頭圧痕 底部内面 ヘラミガキ ヘラミガキ	3mm以下の 砂粒を含む	灰白	良	体部外面 下部 黒 斑
2	—	"	口径26.6 残存高11.5		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヘラミガキ " 内面 ヘラミガキ 指頭圧痕	2mm以下の 砂粒を含む	灰白	良好	
3	—	"	口径29.2 残存高6.5		口縁部外面 ヨコナデ " 内面 ヨコナデ 体部外面 ヘラミガキ " 内面 ハケ目 ヘラミガキ	1mm以下の 砂粒を含む	灰白	良	口縁部外 面 煤付 着
4	—	"	口径29.4 残存高10.8		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 " 内面 ヘラミガキ	2mm以下の 砂粒を含む	灰白	良	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第69図 -5	—	〃 〃	口径32.0 残存高7.8		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目7条/cm 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	体部外面全体 煤付着
6	—	〃 〃	口径31.4 器高9.0		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目	砂粒を少量含む	明褐灰	良	体部外面 煤付着
7	—	〃 〃	口径32.4 残存高7.8		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	明褐灰	良好	口縁外面 体部外面 煤付着
第70図 -1	図版27	弥生土器 高杯	口径23.6 残存高5.8		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 磨滅のため調整不明	1~3mm砂 粒を若干含む	にぶい黄	良好	
2	—	〃 〃	口径23.4 残存高7.6	口縁端部 口縁部	凹線1条 円孔2孔1対	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰	良好
3	図版27	〃 〃	口径25.0 底径11.6 器高20.5	口縁部 脚部外面	円孔 円孔	体部外面 〃 内面 脚部外面 〃 内面 ヘラミガキ ヨコナデ ヘラミガキ しづり目 磨滅の為調整 不明	1~5mmの 砂粒を含む	にぶい赤 褐	良
4	—	〃 〃	口径20.2 残存高5.5	口縁端部	刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 褐	良
5	—	〃 〃	口径26.0 残存高4.5	口縁端部	刻目文	体部内面 ヘラミガキ	2~3mm以下 の砂粒を含む	表 明赤 褐 裏 にぶ い橙	良
6	図版27	〃 〃	口径26.8 底径13.0 器高18.6	口縁端部	刻目文	外面全体 体部内面 ハケ目 磨滅のため調整不明	5mm以下の 砂粒を含む	灰黄褐	良
7	—	弥生土器 鉢	口径32.4 残存高5.0	口縁端部	刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ヘラミガキ 〃 内面 ハケ目	1~2mm以下 の砂粒を含む	表 灰黄 褐 裏 黒褐	良好
8	—	〃 〃	口径20.6 残存高5.3			口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 ヘラミガキ	1~2mm以下 の砂粒を含む	灰白	良好

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第70図 -9	—	弥生土器 鉢	口径19.0 残存高5.3	口縁端部 刻目文 口縁部外面 刻目突帯文 2条 体部外面 櫛描列点文	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ハラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰黄	良好	
10	—	〃	口径22.8 残存高6.0	口縁端部 刻目文 口縁部外面 刻目突帯文 2条 体部外面 櫛描列点文	口縁部内面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目7条/cm 〃 内面 ハラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	淡黄	良好	
11	—	〃	口径21.6 残存高8.0		磨滅のため調整不明	1mm以下の砂粒を含む	灰オリーブ	良	
12	—	〃	口径25.6 残存高5.3	口縁端部 刻目文		2~3mmの砂粒を含む	灰白	良好	
13	—	〃	口径27.8 残存高4.4	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目7条/cm 〃 内面 ハラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
14	—	〃	口径18.2 残存高7.5	口縁端部 刻目文 口縁部内面 波状文4条 〃 外面 波状文10条 体部外面 櫛描直線文5条	体部内面 ハラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	表 黒 裏 灰オリーブ	良好	
15	図版28	〃	口径17.6 底径13.2 器高19.6	口縁部外面 波状文 円孔2孔一対 体部外面 櫛描直線文 底部外面 波状文、 円孔(2孔一対)	体部外面 ハケ目 〃 内面 ハラミガキ 底部内外面 ハラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	体部から 底部にかけて黒斑
第71図 -1	—	弥生土器 壺	口径11.8 残存高3.0	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目8条/cm	1mm以下の砂粒を含む	灰黄	良	
2	—	〃	口径14.4 残存高5.6	口縁端部 刻目文 頸部外面 汎線1条(現存)	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目5条/cm	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	口縁部外 面 頸部外面 黒斑
3	—	〃	口径14.0 残存高6.9	口縁端部 刻目文 頸部外面 櫛描直線文 9条 体部外面 波状文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部・体部外面ハケ目 体部内面 指頭圧痕	砂粒を多 量に含む	黒褐	良好	
4	—	〃	口径10.8 残存高4.1	口縁端部 刻目文 頸部外面 回線1条 円孔1孔	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目5条/cm	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第71図 -5	-	弥生土器 壺	口径15.8 残存高1.5	口縁端部 刻目文 円形浮文	口縁部内外面 ヨコナデ	砂粒を含む	表 裏 灰白 黒褐	良	
6	-	〃	口径16.1 残存高4.0		口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目	1~3mmの 砂粒を若 干含む	淡橙	良	口縁部内 面 黒斑 (磨滅あり)
7	-	〃	口径22.4 残存高7.7	口縁端部 頸部外面 刻目文 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部内外面 ハケ目	2mm以下の 砂粒を含む	灰白	良好	
8	-	〃	口径24.0 残存高2.8	口縁端部 刻目文 円形浮文2 個1組 連弧文 円孔2孔1対 口縁部内面	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の 砂粒を含む	灰白	良好	
9	-	〃	口径23.6 残存高8.4	口縁端部 頸部外面 斜格子文 押圧突帯文 沈線6条	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目 11~ 12条/cm 〃 内面 ハケ目 9条/ cm	1mm以下の 砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	
10	-	〃	口径25.0 残存高5.5	口縁端部 口縁部内面 刻目文 円孔2孔1対 4組	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の 砂粒を多 量に含む	橙	良	
11	-	〃	口径13.4 残存高1.5	口縁端部 斜格子文	口縁部内外面 ヨコナデ	3mm以下の 砂粒を含む	灰白	良	
12	-	〃	口径14.4 残存高3.5	口縁端部 口縁部内面 斜格子文 円孔2孔1対	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部内面 ハケ目 7~8 条/cm	2~3mmの 砂粒を多 量に含む	表 裏 灰白 黒	良	
13	-	〃	口径16.8 残存高6.0	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	砂粒を少 量含む	灰白	良好	
14	-	〃	口径23.6 残存高7.9	口縁端部 刻目文 円形浮文 頸部外面 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 粗いハケ目 〃 内面 指頭圧痕	1mm以下の 砂粒を含む	にぶい褐	良好	
15	-	〃	口径24.0 残存高2.5	口縁端部 口縁部内面 斜格子文 半円連弧文	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の 砂粒少々 含む	にぶい橙	良	
16	-	〃	口径26.4 残存高3.0	口縁端部 口縁部内面 斜格子文 斜格子文 櫛描列点文	口縁部外面 ヨコナデ	砂粒を多 量に含む	にぶい黄 橙	良好	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第72図 -1	—	弥生土器壺	口径13.2 残存高4.0	口縁端部 斜格子文 頸部外面 円孔	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
2	—	〃	口径14.2 残存高4.3	口縁端部 斜格子文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
3	—	〃	口径16.6 残存高3.5	口縁端部 刻目文 口縁部内面 円孔2孔1対	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm程度の砂粒を含む	灰白	良好	
4	—	〃	口径21.0 残存高6.0	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目6条/cm	3mm以下の砂粒を含む	灰白	不良	
5	—	〃	口径23.1 残存高5.5	口縁端部 斜格子文 頸部外面 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良好	
6	—	〃	口径24.5 残存高6.6	口縁端部 斜格子文 頸部外面 押圧突帯文	口縁部外面 ヨコナデ 口縁部内面 ヘラミガキ	5mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	
7	—	〃	口径30.6 残存高5.7	口縁端部 斜格子文 頸部外面 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
8	図版26	〃	口径30.4 残存高3.0	口縁端部 刻目文	口縁部外面 ヨコナデ ハケ目8条/cm 口縁部内面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
9	—	〃	口径28.6 残存高8.6	口縁端部 斜格子文 頸部外面 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部内面 ハケ目6条/cm	1mm以下の砂粒を多量に含む	にぶい黄 褐	良	
10	—	〃	口径31.6 残存高7.0	口縁端部 斜格子文 頸部外面 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を多量に含む	にぶい赤 褐	良	
11	—	〃	口径16.7 残存高3.5	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	砂粒を含む	灰黄褐	良	
12	—	〃	口径17.0 残存高8.0	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第72図 -13	—	弥生土器壺	口径17.8 残存高7.0	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目6条/cm	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
14	—	〃	口径20.6 残存高7.3	口縁端部 斜格子文 口縁部 頸部外面 円孔2孔1対 押圧突帯文 欠損部分	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	口縁部外面 煤付着
15	—	〃	口径30.8 残存高6.0	口縁端部 刻目文	口縁部外面 ヨコナデ 口縁部内面 ヘラミガキ	1~2mmの砂粒を少々含む	灰オリーブ	良	
16	—	〃	口径33.8 残存高6.5	口縁端部 斜格子文	口縁部外面 指頭圧痕 口縁部内面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を多量に含む	灰白	良好	
17	—	〃	口径35.4 残存高7.0	口縁端部 斜格子文	口縁端部 指頭圧痕 口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ヘラミガキ	2mm以下の砂粒を含む	灰黄褐	良好	
18	—	〃	口径29.4 残存高5.9	口縁端部 斜格子文	頸部外面 磨滅の為調整不明 頸部内面 ハケ目6条/cm	3mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
第73図 -1	図版26	〃	口径13.2 残存高5.5	口縁端部 斜格子文	口縁部内外面 ヨコナデ 対部外面 ハケ目8条/cm	1~2mm程度の砂粒を含む	にぶい橙	良好	口縁端部黒斑
2	図版26	〃	口径13.0 残存高6.2	口縁端部 斜格子文 頸部外面 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目6条/cm	1mm以下の砂粒を含む	表裏 淡赤 橙	良	
3	—	〃	口径14.3 残存高9.5	頸部外面 極描直線文7条 体部外面 極描波状文14条 極描直線文7条	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目7~8条/cm 体部外面 ハケ目7~8条/cm 〃 内面 ハケ目7~8条/cm 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
4	—	〃	口径20.0 残存高4.5	口縁端部 円形浮文 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を多量に含む	黒褐	良	
5	図版26	〃	口径19.0 残存高21.0	口縁端部 刻目文 頸部外面 押圧突帯文 体部外面 極描直線文11条 波状文22条 極描直線文12条	口縁部内外面 ヨコナデ 〃 外面 指頭圧痕 頸部外面 ハケ目 体部外面 ハケ目	3mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	

捕図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第74図 -1	—	弥生土器壺	口径12.4 残存高4.5	口縁端部 刻目文 口縁部外面 刻目突帯文3条	口縁部内面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒含む	にぶい橙	良	
2	—	〃	口径13.4 残存高4.0	口縁端部 刻目文 口縁部外面 刻目突帯文1条	口縁部外面 内面 ナデ 粗いナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰オリーブ	良	
3	—	〃	口径13.2 残存高5.0	口縁部外面 刻目突帯文2条	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	表にぶい橙 裏褐灰	良	
4	図版26	〃	口径14.0 底径8.4 器高22.4	口縁部外面 刻目突帯文	体部外面 磨滅の為調整不明	2mm以下の砂粒を多量に含む	にぶい褐	良	体部外面 黒斑
5	—	〃	口径14.0 残存高5.0	口縁端部 円形浮文 口縁部外面 断面三角形の突帯文4条 棒状浮文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良好	
6	図版26	〃	口径15.3 残存高9.2	口縁部外面 突帯文3条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 磨滅のため調整不明	1mm以下の砂粒を含む	灰色	良好	
7	—	〃	口径11.2 残存高6.9	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 ハケ目5条/cm	1mm以下の砂粒を含む	灰黄	良	
8	—	〃	口径12.7 残存高8.2	口縁端部 刻目文	体部内外面 磨滅のため調整不明	2mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良好	
9	—	〃	口径18.0 残存高10.5	口縁端部 頸部外面 刻目文 体部外面 押圧突帯文2条 波状文5条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目8条/cm	砂粒を含む	灰白	良	
10	図版26	〃	口径18.1 残存高8.6	口縁端部 頸部外面 刻目文 押圧突帯文2条	口縁部内外面 ヨコナデ	砂粒を含む	暗灰黄	良	
11	—	〃	口径12.2 残存高5.1	頸部外面 突帯文1条	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
12	—	〃	口径11.7 残存高5.5	頸部外面 押圧突帯文1条	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目(磨滅のため不明瞭)	1mm以下の砂粒を少々含む	灰白	良	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第74図 -13	—	弥生土器壺	口径15.5 残存高12.5	頸部外面 押圧突帯文 1条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を多量に含む	表 橙 裏 ぶ い橙	良	
14	—	〃	口径17.8 残存高4.2	口縁端部 斜格子文	口縁部内外面 ヨコナデ 〃 外面 ヘラミガキ	2mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
15	—	〃	口径17.0 残存高3.3	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	砂粒を多量に含む	表 橙 裏 ぶ い橙	良好	
16	—	〃	口径19.0 残存高2.3	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
17	—	〃	口径18.9 残存高4.0	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	1~2mm以下の砂粒を含む	浅黄	良	
18	—	〃	口径11.4 残存高6.7		体部外面 〃 内面 ヘラミガキ ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	表 ぶ い橙 裏 黄 褐	良好	
19	—	〃	口径10.6 残存高7.8		体部外面 〃 内面 ハケ目8~10 条/cm 磨滅のため調整不明	1mm以下の砂粒を含む	灰黄	良	
20	—	〃	口径9.8 残存高11.7		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 磨滅のため調整不明	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	体部内外面 黒斑
21	—	〃	口径11.2 残存高11.1	体部外面 列点文	体部内面 磨滅のため調整不明	1mm以下の砂粒を含む	表 ぶ い黄 褐	良	
22	—	〃	口径12.4 残存高10.1	頸部外面 ヘラ状圧痕文	体部外面 〃 内面 ヘラミガキ 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
23	図版30	〃	口径33.8 残存高6.5	口縁端部 刻目文 四線1条 口縁部内面 貼付突帯文 2条	口縁部外面 ハケ目7条/cm	3mm以下の砂粒を含む	橙	良	
第75図 -1	—	弥生土器甕	口径15.2 残存高4.0		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケメ	1mm以下の砂粒を含む	灰黄	良	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第75図 -2	—	〃 〃	口径15.2 残存高6.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
3	—	〃 〃	口径19.2 残存高4.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目7条/cm 〃 内面 ハケ目10条/cm	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	口縁部外 面 煤付 着
4	—	〃 〃	口径16.0 残存高6.6		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 磨滅の為調整 不明	1~3mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
5	—	〃 〃	口径17.1 残存高5.1		口縁部内外面 ヨコナデ ハケ目7条/cm	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
6	—	〃 〃	口径18.6 残存高4.3		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
7	—	〃 〃	口径20.4 残存高4.7		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目11条/cm 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	体部外 面 煤付 着
8	—	〃 〃	口径18.6 残存高5.2		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	表 裏 にぶ い黄	良	口縁部外 面 煤付 着
9	—	〃 〃	口径17.6 残存高4.7		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 磨滅の為調整 不明	2mm以下の砂粒を含む	表 にぶ い橙 裏 にぶ い黄橙	不良	
10	—	〃 〃	口径14.2 残存高5.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目9条/cm 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	口縁部外 面 体部外 面 黒斑
11	—	〃 〃	口径15.4 残存高7.3		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 指頭圧痕	2mm以下の砂粒を含む	灰黄	良	
12	—	〃 〃	口径20.8 残存高6.8		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 ヘラミガキ	2mm以下の砂粒を含む	灰黄	良	体部外 面 黒斑

捕図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第75図 -13	—	〃	口径23.4 残存高5.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	表裏 灰白 灰黄	良	体部外面 煤付着
14	—	〃	口径19.2 残存高8.7		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラミガキ	1~3mmの砂粒を若干含む	灰黄褐	良	
15	—	〃	口径20.8 残存高5.0		口縁部内外面 磨滅の為調整 不明 体部内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
16	—	〃	口径19.4 残存高5.8		口縁部外面 ヨコナデ 体部内面 ヘラミガキ	1~3mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
17	—	〃	口径19.6 残存高6.1		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰黄	良好	体部外面 黒斑
18	—	〃	口径22.4 残存高7.0		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	表裏 褐灰 灰褐	良	体部外面 黒斑
19	—	〃	口径24.1 残存高5.8		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 ハケ目 7~8 条/cm	1mm程度の砂粒を含む	にぶい褐	良	
20	—	〃	口径18.4 残存高9.7		口縁部内外面 ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	灰黄	良	
第76図 -1	—	弥生土器 甕	口径29.0 残存高8.5		口縁部外面 ハケ目のあと ヨコナデ 〃 内面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ハケ目の上から ヘラミガキ	やや細い砂粒を含む	淡黄	良好	
2	—	〃	口径30.8 残存高8.0		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 9条/ cm 〃 内面 ヘラミガキ	1~4mmの砂粒を含む	明赤褐	良	
3	—	〃	口径33.2 残存高9.4		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 9~10 条/cm 〃 内面 ハケ目 9~10 条/cm ヘラミガキ	1mm以下の砂粒少々含む	浅黄	良	口縁部 体部外面 黒斑

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第76図 -4	—	弥生土器 甕	口径29.1 残存高5.5		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	赤	良	口縁部内面 黒斑
5	—	〃 〃	口径31.0 残存高4.5		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を少量含む	灰白	良好	
6	—	〃 〃	口径33.0 残存高9.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目9~10 〃 内面 条/cm ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄	良好	
7	—	〃 〃	口径33.2 残存高13.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラミガキ	砂粒を少量含む	灰黄褐	良好	体部外面 煤付着
第77図 -1	—	〃 〃	口径20.4 残存高6.2	体部外面 列点文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 ハケ目	1mm以下の砂粒を少々含む	灰白	良	口縁外面 黒斑
2	—	〃 〃	口径18.8 残存高8.0	体部外面 円孔2孔1対	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ヘラミガキ 〃 内面 指頭圧痕	3mm以下の砂粒を含む	灰黄	良	
3	—	〃 〃	口径23.4 残存高5.2	口縁端部 斜格子文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラミガキ	1~2mmの砂粒を含む	灰褐	良	体部内面 黒斑
4	—	〃 〃	口径25.6 残存高5.1	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
5	—	〃 〃	口径24.4 残存高4.4	頸部外面 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	黄灰	良好	
6	—	〃 〃	口径27.4 残存高2.8	口縁端部 頸部外面 刻目文 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
7	—	〃 〃	口径38.2 残存高4.5	頸部外面 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	
8	—	〃 〃	口径13.6 残存高5.7	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第77図 -9	—	弥生土器 甕	口径18.6 残存高3.3	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰黄褐	良好	
10	—	〃	口径16.8 残存高5.8	口縁端部 斜格子文 (変形)	口縁部内外面 ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	灰白	良	体部外面 黒斑
11	—	〃	口径17.2 残存高4.5	口縁端部 斜格子文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目	1mmの砂粒を含む	明赤褐	良	
12	—	〃	口径17.6 残存高8.0	口縁端部 刻目文	口縁部外面 " 内面 体部外面 ヨコナデ ヨコナデ ハ ケ目 ハ ケメ・ヘラ ミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい褐	良好	
13	—	〃	口径19.8 残存高8.5	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
14	—	〃	口径21.2 残存高9.2	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	橙	良	体部外面 煤付着
15	—	〃	口径20.6 残存高5.5	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目4条/cm	1mm以下の砂粒を含む	褐	良	
16	—	〃	口径21.8 残存高6.9	頸部外面 押圧突帯文	口縁部内面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	浅黄	良	
17	—	〃	口径25.2 残存高6.8	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目9~10 条/cm	1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良好	
第78図 -1	—	弥生土器 鉢	口径22.4 残存高4.4		体部外面 ヘラミガキ ハケ目 体部内面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	灰黄褐	良	
2	—	〃	口径27.2 残存高5.6		体部内外面 磨滅のため調 整不明	3~4mm以 下の砂粒 を含む	灰黄	不良	
3	—	〃	口径34.8 残存高7.0		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ナデ 〃 内面 ヘラミガキ	1~3mm以 下の砂粒 を若干含 む	にぶい橙	良好	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
第78図 -4	図版28	弥生土器 鉢	口径17.2 残存高11.1	体部外面 口縁部	櫛描直線文 3列 円孔2個1対	体部内面	ナデ	1mm以下の砂粒を若干含む	灰白	良好	体部外面 煤付着
第79図 -1	図版30	弥生土器 壺	口径16.6 残存高1.4	口縁端部 口縁部内面	刻目文・棒状 浮文 凹線3条 斜格子文 円孔			1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄	良好	
2	図版30	〃	口径16.8 残存高1.6	口縁端部	刻目文 凹線2条	口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
3	—	〃	口径16.0 残存高3.9	口縁端部 口縁部内面	凹線3条 斜格子文 円孔	口縁部外面	ヨコナデ	砂粒を多量に含む	褐灰色	良好	
4	—	〃	口径16.2 残存高5.6	口縁部 体部外面	凹線2条 押圧突帯文	口縁部内外面 体部外面 〃 内面	ヨコナデ ハケ目9条/cm しづり目	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
5	—	〃	口径16.0 残存高3.7	口縁端部	円形浮文2 個1組 弱い凹線4 条	口縁部内外面	ナデ	2mm以下の砂粒を含む	浅黄	良好	体部内面 黒斑
6	—	〃	口径17.0 残存高5.5	口縁端部	円形浮文 凹線3条	口縁部内外面 頸部外面	ナデ ハケ目5~6 条/cm	1mm以下の砂粒含む	外 灰黄	良	口縁部内 面全体 黒斑
7	—	〃	口径17.0 残存高7.5	口縁端部 口縁部外面	凹線3条 棒状浮文3 本1組 刻目突帯文	口縁部内外面 体部外面	ヨコナデ ハケ目7条/cm	1mm以下の砂粒を多量に含む	赤褐	良	
第80図 -1	—	弥生土器 甕	口径13.3 残存高6.9			口縁部内外面 体部内面	ヨコナデ ヘラ削り	2mm以下の砂粒を含む	灰オリーブ	良好	体部外面 黒斑
2	—	〃	口径17.7 残存高4.7	口縁端部	凹線2条	口縁部内外面 体部外面	ヨコナデ ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
3	—	〃	口径18.5 残存高5.1	口縁端部 口縁部	凹線3条 円孔2個	口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
4	—	〃	口径20.2 残存高3.5	口縁端部	凹線3条	口縁部内外面	ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	口縁部外 面 黒斑

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第80図 -5	—	弥生土器 甕	口径22.0 残存高5.5	口縁端部 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 ヘラ削り	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
	6	—	〃 〃	口径21.8 残存高9.5	口縁端部 凹線3条 円形浮文2個1組	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目7条/cm	2mm以下の砂粒を多量に含む	暗灰黄	良
	7	—	〃 〃	口径25.7 残存高5.5	口縁端部 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含む	暗灰黄	良
	8	—	〃 〃	口径26.8 残存高2.7	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良
	9	—	〃 〃	口径31.8 残存高2.0	口縁端部 (外) 凹線3条 (内) 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好
	10	—	〃 〃	口径30.0 残存高3.7	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良
	11	—	〃 〃	口径33.4 残存高5.5	口縁端部 凹線1条 口縁部外面 爪圧痕	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	灰黄	良 体部外面 煤付着
第81図 -1	—	弥生土器 高杯	口径24.0 残存高4.1		体部内外面 ヨコナデ	1m以下 の砂粒を含む	にぶい褐	良好	体部内外 面 黒斑
	2	—	〃 〃	口径31.2 残存高3.5		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下 の砂粒を含む	灰白	良好
	3	—	〃 〃	口径39.6 残存高5.7	口縁端部 斜格子文 口縁部外面 刻目文	体部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 褐	良好
第82図 -1	—	弥生土器 壺	口径18.6 残存高5.5	口縁端部 体部外面 凹線2条 列点文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目9条/cm 頸部内面 しづり目	1mm以下の小石を少 量含む	灰黄		
	2	—	〃 〃	口径19.0 残存高28.0	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ		表にぶ い黄 裏 淡黄	良 口縁部内 面 黑斑

捕図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第82図 -3	—	弥生土器壺	口径22.2 残存高3.5	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目	1~2mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良	
4	—	〃	口径23.0 残存高2.5	口縁端部 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	口縁外面黒斑
5	—	〃	口径24.2 残存高2.1	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい褐	良好	
6	—	〃	口径18.4 残存高2.1	口縁端部 口縁部内面 凹線2条 波状文4条 3条1対櫛描 直線文	口縁部外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	表 橙 裏 明褐	良	
7	—	〃	口径20.0 残存高8.0	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目6条/cm 〃 内面 しづき目	1mmの砂粒を少量含む	淡黄	良	
8	—	〃	口径20.6 残存高10.5	口縁端部 頸部外面 凹線3条 押圧文	頸部外面 ハケ目8条/cm	1mm以下の砂粒を含む	灰黄	良好	
9	—	〃	口径21.2 残存高5.8	口縁部外面 凹線3条 棒状浮文	口縁部内面 体部外面 ヨコナデ ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	外 灰白 内 明褐 灰	良	
10	—	〃	口径27.4 残存高5.0	口縁部外面 凹線3条	口縁部内面 体部内外面 ヨコナデ ハケ目	砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
第83図 -1	—	弥生土器甕	口径19.2 残存高7.9	口縁端部 頸部外面 凹線2条 刻目文 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ	1~2mmの砂粒を多量に含む	灰白	良好	
2	—	〃	口径17.6 残存高2.3	口縁端部 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
3	—	〃	口径20.4 残存高3.0	口縁端部 頸部外面 凹線3条 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	橙	良	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第83図 -4	—	弥生土器 甕	口径22.4 残存高7.0	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
5	—	〃	口径25.4 残存高5.7	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 指頭圧痕	3mm以下の砂粒を多量に含む	灰黄	良好	
6	—	〃	口径25.8 残存高11.4	口縁端部 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 指頭圧痕	2mm以下の砂粒を含む	浅黄	良	
7	—	〃	口径30.0 残存高4.5	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目	1mm以下の砂粒を多量に含む	にぶい黄 橙	良	
8	—	〃	口径34.6 残存高4.0	口縁端部 頸部外面 凹線3条 押圧文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	表にぶ い橙 裏にぶ い褐	良好	
9	—	〃	口径35.0 残存高7.5	口縁端部 頸部外面 凹線4条 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	表にぶ い橙 裏にぶ い黄 橙	良好	
10	—	〃	口径34.6 残存高8.1	口縁端部 頸部外面 凹線4条 押圧突帯文	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内外面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰黄	良好	
第84図 -1	—	弥生土器 高杯	口径17.6 残存高3.0	口縁端部 凹線2条(弱い)	口縁部内外面 ヨコナデ 杯部内外面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
2	—	〃	口径24.7 残存高2.7	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヘラミガキ	2mm以下の砂粒を含む	灰オリー ブ	良	
3	—	〃	口径14.8 残存高4.2	口縁部外面 凹線1条	口縁部内外面 ヨコナデ 杯部内外面 ヘラミガキ	2~3mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良	
4	—	〃	口径2.4 残存高3.3	口縁部外面 凹線2条 〃 内面 ナデによる擬凹線	口縁部内面 ヨコナデ 杯部内面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	表にぶ い橙 裏灰褐	良好	
5	—	〃	口径24.6 残存高4.3	口縁部外面 凹線3条	口縁部内面 杯部内外面 ヨコナデ 磨滅の為調整不明	3mm以下の砂粒を含む	表にぶ い橙 裏灰	良	

捕図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第84図 -6	—	弥生土器 高杯	口径20.0 残存高2.3	口縁部外面 四線2条	杯部内外面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	灰黄	良	口縁部外面 黒斑
7	—	〃 〃	口径26.0 残存高4.0	口縁部外面 四線2条	杯部外面 〃 内面 ヘラミガキ ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	体部外面 煤付着
8	—	〃 〃	口径24.0 残存高5.5	口縁部外面 四線3条	口縁部内面 杯部外面 ヨコナデ ヘラケズリ後 〃 内面 ヘラミガキ ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良	
9	—	〃 〃	口径32.6 残存高4.1	口縁端部 四線2条 口縁部外面 四線2条		砂粒を含む		良好	体部内面 黒斑
10	—	〃 〃	口径34.8 残存高4.7	口縁部外面 四線4条	口縁部内面 杯部外面 ヨコナデ ヘラケズリ後 〃 内面 ヘラミガキ ヘラミガキ	2mm以下の砂粒を含む	灰黄	良	
第85図 -1	—	弥生土器 鉢	口径 23.8 残存高 5.8	口縁端部 四線2条 口縁部外面 四線4条	体部内面 ヘラミガキ ハケ目	砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	体部外面 黒斑
2	—	〃 〃	口径 28.1 残存高 5.5	口縁端部 四線2条 口縁部外面 四線4条	口縁部内面 体部内面 ヨコナデ ハケ目 12条/cm	1mm以下の砂粒を含む	浅黄橙	良好	体部外面 煤付着
3	—	〃 〃	口径 34.0 残存高 4.5	口縁端部 四線2条	口縁部内外面 体部外面 ヨコナデ ハケ目	砂粒を含む	灰黄	良好	
4	図版28	〃 〃	口径39.8 残存高 8.0	口縁端部 四線3条(不明瞭) 口縁部外面 四線3条	口縁部内面 体部外面 ヨコナデ ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を多量に含む	表にぶ い橙 裏にぶ い黄橙	良	
5	—	〃 〃	口径 31.8 残存高 3.2	口縁端部 四線3条 刻目文 口縁部外面 四線2条	口縁部内外面 ヨコナデ	砂粒を含む	灰白	良好	
6	—	〃 〃	口径 5.4 残存高 4.8	口縁端部 四線2条 口縁部外面 四線4条	口縁部内面 ヨコナデ	砂粒を含む	淡黄	良好	
7	—	〃 〃	口径 40.2 残存高 4.2	口縁端部 四線2条 口縁部外面 四線4条	口縁部内面 ナデ	2mm以下の砂粒を含む	表黒褐 裏にぶ い黄橙	良好	

捕図 番号	図版 番号	器種	法量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第86図 -1	-	弥生土器 壺	口径 15.0 残存高 1.7	口縁端部 竹管文4個	口縁部内面 ヨコナデ	1mm以下の 砂粒含む	にぶい橙	良	
2	-	〃	口径 18.0 残存高 4.6	口縁端部 刺突文	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の 砂粒を含 む	灰褐	良	
3	-	〃	口径16.8 残存高 3.1	口縁端部 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の 砂粒を含 む	灰黄	良	
4	-	〃	口径 16.6 残存高 3.5	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 砂粒を含 む	浅黄	良	
5	-	〃	口径 14.6 残存高 5.9	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目5条/cm	1mm以下の 砂粒を多 量に含む	にぶい橙	良	
6	-	〃	口径 17.6 残存高 4.1	口縁端部 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ	2~5mmの 砂粒を含 む	明オリー ブ灰	良好	
7	-	〃	口径 15.4 残存高 5.0	口縁端部外面 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目5条/cm 〃 内面 指頭圧痕	1mm以下の 砂粒を含 む	灰黄褐	良	
8	-	〃	口径 18.0 残存高 8.2	口縁端部外面 凹線4条 頸部外面 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケ目	3~5mm大 の砂粒を 含む	にぶい黄 褐	良好	
9	-	〃	口径 10.6 残存高 5.9	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 磨滅の為調整 不明	1mm以下の 砂粒を含 む	にぶい褐	良	
10	図版26	〃	口径 10.1 底径 9.6 器高 28.4	口縁部外面 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ヘラミガキ 〃 内面 しづり目 指頭圧痕	1~2mmの 砂粒を多 量に含む	にぶい橙	良	
11	-	〃	口径 8.6 残存高 8.3	体部外面 凹線7条	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 指頭圧痕	砂粒を若 干含む	表 灰褐色 裏 黒褐色	良好	
12	-	〃	口径 10.5 残存高 5.3	口縁端部上面 凹線2条 〃 部外面 凹線8条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 指頭圧痕	砂粒を若 干含む	褐灰色	良好	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第87図 -1	-	弥生土器 高杯	口径 16.6 残存高3.2	口縁部外面 凹線3条	口縁部内面 ヨコナデ 杯部外面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
2	-	〃 〃	口径 23.5 残存高 5.0	口縁端部外面 凹線1条 口縁部外面 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ 杯部外面 ヘラミガキ 〃 内面 ハケ目	2mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	杯部外面 黒斑
3	-	〃 〃	口径 26.9 残存高5.5	口縁端部 凹線1条 口縁部外面 凹線5条	口縁部内外面 ヨコナデ 杯部外面 ヘラミガキ 〃 内面 ヘラミガキ	2mm以下の砂粒を含む	灰黄褐	良好	杯部内面 黒斑
4	-	〃 〃	口径 28.2 残存高 5.5	口縁部外面 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ 杯部外面 ヘラミガキ ヘラ削りの後 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良	
5	-	〃 〃	口径 28.9 残存高 3.8	口縁部外面 凹線4条	杯部外面 ヘラミガキ	3mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
第88図 -1	-	弥生土器 壺	口径 14.6 残存高4.3		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 磨滅のため調整不明	1mm以下の砂粒を若干含む	灰白	良好	
2	-	〃 〃	口径 17.2 残存高4.3		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	
3	-	〃 〃	口径 17.2 残存高5.2	口縁端部 凹線3条 (不明瞭)	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	
4	-	〃 〃	口径 14.0 残存高6.8		口縁部内外面 ハケ目 体部外面 ハケ目 体部内面上部 ハケ目 〃 下部 ヘラ削り	砂粒を少量含む	灰白	良	
第89図 -1	-	弥生土器 甕	口径 24.6 残存高3.4	口縁端部 凹線3条		3mm以下の砂粒を含む	表にぶい橙 裏褐灰	良	
2	-	〃 〃	口径 17.6 残存高4.7	口縁端部 凹線1条	口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
3	-	〃 〃	口径 28.6 残存高3.7		口縁部内外面 ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第89図 -4	—	弥生土器 甕	口径 15.2 残存高 3.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含む	表にぶい黄橙 裏褐灰	良	口縁端部 体部外面 黒斑
5	—	〃	口径 18.0 残存高 3.0		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良	
6	—	〃	口径 19.6 残存高 3.3		口縁部内外面 ヨコナデ 頸部内面 強いヨコナデ 体部外面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	灰黄	良	
7	—	〃	口径 18.4 残存高 2.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目	1mm以下の砂粒を含む	にぶい褐	良	
8	—	〃	口径 19.3 残存高 4.7		口縁部内外面 ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	にぶい褐	良好	
9	—	〃	口径 20.8 残存高 7.8		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 指頭圧痕	3mm以下の砂粒を含む	明褐灰	良好	
10	—	〃	口径 14.4 残存高 5.3		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含む	橙	良	
11	—	〃	口径 14.4 残存高 8.0		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 6~7 条/cm 〃 内面 指頭圧痕	2mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	
12	—	〃	口径 15.5 残存高 8.8		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ハケ目 〃 内面 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含む	表にぶい黄 裏にぶい橙	良好	体部外面 煤付着
第90図 -1	—	弥生土器 高杯	口径 17.0 残存高 3.6		口縁部内外面 ヨコナデ 杯部外面 ヘラ削り後ヘ ラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良	
2	—	〃	口径 16.7 残存高 4.5		口縁部内外面 磨滅の為調整	1mm以下の砂粒を含む	表明赤 褐裏にぶい橙	良	
3	—	〃	口径 21.0 残存高 3.2		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を若干含む	表灰黄 褐裏褐灰	良好	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考	
第90図 -4	—	弥生土器 高杯	口径 20.8 残存高 5.8		口縁部内外面 ヨコナデ 杯部外面 ヘラ削り " 内面 ヘラミガキ	1mm以下の 砂粒を含む	にぶい橙	良好		
5	—	" "	口径 22.2 残存高 8.8		口縁部内外面 ヨコナデ ナデによる擬 四線4条 杯部外面 ヘラ削り " 内面 ヘラ削り、ミ ガキ	1~3mmの 砂粒を含む	灰オリーブ	良好	杯部外面 煤付着	
6	図版27	" "	口径 21.0 残存高11.3		杯部外面 ヘラ削りの後 ヘラミガキ下 方、四方にヘ ラミガキ " 内面 もみ痕あり ヘラミガキ	2mm以下の 砂粒を含む	にぶい橙	良好		
7	図版27	" "	口径 21.2 残存高18.2	脚端部 脚部	凹線1条 円孔	口縁部内外面 ヨコナデ 杯部外面 ヘラ削りの後 " 内面 ヘラミガキ 脚部内面 ヘラミガキ ヘラ削り	1mm以下の 砂粒を含む	橙	良好	
8	—	弥生土器 鉢	口径 21.7 残存高 4.2		体部外面 " 内面	ヘラ削り ハケ目	砂粒を少 量含む	にぶい褐	良好	
9	—	" "	口径 23.1 残存高 8.0		口縁部内外面 体部内面	ヨコナデ ヘラミガキ ハケ目 指頭圧痕	1~3mmの 砂粒を多 量に含む	にぶい黄 橙	良好	体部外面 煤付着
第91図 -1	—	弥生土器 壺体部	残存高 7.7	体部外面 "	波状文9条 櫛描直線文 9条	体部内面	指頭圧痕	1mm以下の 砂粒を含む	表 裏 灰白 褐灰	良好
2	—	" "	残存高 6.2	体部外面	櫛描直線文 23条 波状文5条	体部内面	指頭圧痕 しづり目	1~3mm以 下的砂粒 を含む	にぶい黄 橙	良
3	—	" "	残存高 5.5	体部外面	櫛描直線文 波状文3条	体部内面	指頭圧痕 しづり目	1mm以下の 砂粒を含 む	表 にぶ い黄 橙 裏 灰白	良好 体部外面 一部 黒斑
4	—	" "	残存高 7.6	体部外面	列点文	体部内面	ハケ目、しづ り目	1mm以下の 砂粒を含 む	にぶい黄	良
5	—	" "	残存高 4.9	体部外面	円形浮文 櫛描列点文	体部内面	ハケ目	1mm以下の 砂粒を含 む	にぶい黄 橙	良好

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第91図 -6	—	弥生土器 壺体部	残存高 5.9	体部外面 櫛描直線文 8条 波状文 8条 斜格子文 刺突文 円形浮文	体部内面 指頭圧痕 ハケ目9条/cm	1mm以下の砂粒を含む	表 裏 灰白 褐灰	良好	
7	—	〃	残存高 4.4	体部外面 円形浮文 斜格子文 列点文 櫛描直線文 9条		1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	
8	—	〃	残存高 5.6	体部外面 円形浮文 斜格子文 列点文 櫛描直線文	体部内面 ハケ目	1~2mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
9	—	〃	残存高 6.8	体部外面 波状文13条 櫛描直線文 14条	体部内面 ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
10	—	〃	残存高12.2	体部外面 櫛描直線文 18条 波状文18条	体部外面 ハケ目10~12条/cm	1mm以下の砂粒を含む	表 裏 灰白 黒褐	良好	体部外面 黒斑
11	図版24	〃	残存高12.8	体部外面 櫛描直線文 6条 波状文6条 流水文6条	体部内面 指頭圧痕	1mm以下の砂粒を含む	表 裏 褐 にぶい黄 橙	良好	体部外面 煤付着
12	—	〃	残存高10.5	体部外面 波状文 押圧痕突帯文		1mm以下の砂粒を含む	表 裏 灰白 黒	良	
13	—	〃	残存高 9.1	体部外面 櫛描直線文 波状文 斜格子文	体部内面 ハケ目	3~4mm以下の砂粒を含む	表 裏 灰黄 明灰 黄	良	
第92図 -1	—	弥生土器 高杯脚部	底径 8.4 残存高 2.5	脚部外面 円孔2孔1対	脚部外面 ヨコナデ、ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良	
2	—	〃	底径 10.2 残存高 7.4	脚部外面 円孔2孔1対	脚部内外面 ヘラミガキ	2mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	良	
3	—	〃	底径 7.2 残存高 4.7		底部外面 ヨコナデ	1mm程度の砂粒を含む	表 裏 灰白 灰	良好	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第92図 —4	—	弥生土器 高杯脚部	底径 8.4 残存高 4.5		杯部内外面 杯部外面 底部外面	ハケ目 ヘラミガキ ヨコナデ	1mm以下の 砂粒を含む	表裏 黄褐色	良好
5	—	〃 〃	底径 12.0 残存高 9.7	脚部外面 円孔2孔1対	脚部外面 脚部内面 底部	磨滅の為調整 不明 しづり目 ヨコナデ	1mm以下の 砂粒を含む	灰白	良好 脚部外面 黒斑
6	—	〃 〃	底径 13.6 残存高 9.1	脚部外面 円孔2孔1対	脚部外面 〃 内面 脚部内面	ヘラミガキ しづり目 ヨコナデ	1mm以下の 砂粒を含む	表裏 灰黃 灰白	良 脚部外面 黒斑 円板充填
7	—	〃 〃	底径 11.6 残存高 7.2		脚部外面 〃 脚部内面	ハケ目 磨滅の為調整 不明 指頭圧痕・ナ デ	2mm以下の 砂粒を多 量に含む	にぶい赤	良
8	—	〃 〃	口径 14.4 残存高 5.5		脚部外面 脚部内外面	ヘラミガキ ヨコナデ	1mm程度の 砂粒を含む	黒褐	良好
9	—	〃 〃	口径 10.6 残存高 8.6		杯部内外面 各部外面 脚部内面	ナデ ハケ目 しづり目	1mm以下の 砂粒を含む	灰白	良好
10	—	〃 〃	口径 8.6 残存高 9.1	脚部外面 円孔2孔1対	脚部外面	ヘラミガキ	1mm以下の 砂粒を含む	赤	良
11	—	〃 〃	口径 14.0 残存高 7.1		脚部外面 〃 内面	ヘラミガキ ヨコナデ	1~3mm砂 粒を多量に含む	灰黃	良
12	—	〃 〃	口径 10.0 残存高 7.5	脚部外面 三角形透孔 沈縁3条			1mm以下の 砂粒を含む	灰白	良好 脚部内面 黒斑
13	—	〃 〃	残存高 6.1	脚部外面 円孔1孔 竹管文			2mm以下の 砂粒を含む	表裏 にぶい黄橙 褐灰	良 脚部外面 黒斑
14	—	〃 〃	残存高 7.7	脚部外面 円孔2孔1対	脚部外面 〃 内面	ヘラミガキ しづり目	1mm以下の 砂粒を含む	表裏 にぶい黄橙 灰黃 褐	良好 脚部外面 黒斑
15	—	〃 〃	残存高10.8	脚部外面 三角形透孔	脚部杯部外面 杯部内面	ヨコナデ ヘラミガキ	2mm以下の 砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好

插図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第92図 -16	図版27	弥生土器 高杯脚部	底径 12.8 残存高16.0	脚部外面 円孔2孔1対	杯部内外面 ヘラミガキ 脚部外面 ヘラミガキ 脚部内面 しづり目	1mm程度の砂粒を含む	灰黄	良	脚部外面 黒斑
第93図 -1	—	〃	底径 13.0 残存高 8.0		脚部内外面 ヘラミガキ	3mm以下の砂粒を含む	表裏に ぶい橙	良好	
2	—	〃	底径 12.8 残存高 9.4		脚部外面 ヘラミガキ 〃 内面 ヘラ削り	1~2mm程度の砂粒を含む	表裏に ぶい赤褐	良好	脚部 黒斑
3	—	〃	底径 9.6 残存高 4.0	脚端部 四線2条	脚部外面 ヨコナデ 〃 内面 ヘラ削り	2mm以下の砂粒を含む	表裏 灰白	良	
4	—	〃	底径 9.0 残存高 4.3	脚端部 四線3条 (不明瞭)	脚部内外面 ヨコナデ 〃 内面 ヘラ削り	1mm以下の砂粒を含む	明褐	良好	
5	—	〃	底径 9.6 残存高 4.7		脚端部内外面ヨコナデ 脚部外面 ハケ目 〃 内面 ヘラ削り	2mm以下の砂粒を含む	灰黄	良好	
6	—	〃	底径12.0 残存高 3.0	脚端部 四線2条	脚部外面 ヨコナデ 〃 内面 ヘラ削り	1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄 橙	良	
7	—	〃	底径 10.4 残存高 4.8		脚部外面 ヘラミガキ 〃 内面 ヘラ削り	1mm以下の砂粒を含む	表裏 灰 黄	良	脚部外面 黒斑
8	—	〃	底径 12.0 残存高 4.3	脚端部 四線2条		1mm以下の砂粒を含む	表裏にぶ い橙 裏 赤黒	良	脚部外面 黒斑
9	—	〃	底径 14.4 残存高 6.5	脚端部 四線1条	脚部内面 しづり目	1mm以下の砂粒を含む	表裏 明赤 褐 黒褐	良	
10	—	〃	底径 15.0 残存高 5.1	脚端部 四線1条	脚部内外面 ヨコナデ	1~3mmの砂粒を若干含む	表裏にぶ い黄褐	良	
11	—	〃	底径 11.0 残存高10.7	脚端部 四線2条	脚部外面 ヨコナデ 〃 内面 ヘラ削り	1~5mmの砂粒を多量に含む	にぶい黄 橙	良好	杯部内面 黒斑 脚端部 黒斑

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第93図 -12	—	弥生土器 高杯脚部	底径 8.8 残存高 4.3	脚端部 脚部外面 凹線2条 櫛描直線文	脚部外面 " 内面 ヨコナデ ヘラ削り	1mm以下の 砂粒を含む	表裏 灰白	良好	
13	—	" "	底径 8.0 残存高 4.1	脚端部 凹線3条	脚部内面 ヘラ削り	1mm以下の 砂粒を含む	表にぶ い黄橙 裏 灰赤	良好	
14	—	" "	底径 10.0 残存高 3.9	脚端部 脚部外面 凹線2条 へら描沈線 4条(現存) ヘラ描文	脚部内面 ヘラ削り	やや粗い 2~3mmの 砂粒を含む	にぶい橙	良好	
15	—	" "	底径 9.8 残存高 5.2	脚部外面 ヘラ描直線 文4条 沈線7条	脚部内面 ヘラ削り	1mm以下の 砂粒を含む	表裏 明 赤褐	良好	
16	—	" "	底径 9.4 残存高 3.3	脚端部 脚部外面 凹線2条 ヘラ描直線 文4条	脚部外面 " 内面 ヨコナデ ヘラ削り	1~5mmの 砂粒を多 量に含む	赤	良好	
17	—	" "	底径 12.6 残存高 4.0	脚端部 脚部外面 凹線2条 櫛描直線文 長方形透孔	脚部外面 " 内面 ヨコナデ ヘラ削り	砂粒を多 量に含む	灰白	良好	脚部外面 黒斑
18	—	" "	底径 14.2 残存高 6.1	脚端部 脚部外面 凹線1条 三角形透孔 (未貫通) ヘラ描直線 文9条	脚部内面 ヘラ削り	1mm以下の 砂粒を含む	灰白	良	
19	図版27	" "	底径 10.0 残存高10.9	脚端部 脚部外面 凹線2条 ヘラ描直線 文6条 ヘラ描直線 文5条 ヘラ描直線 文3条 鋸歯文	脚部内面 ヘラ削り	2mm以下の 砂粒を含む	表にぶ い橙 表下部 黒褐 裏 黒	良好	
20	—	" "	残存高 8.6	柱状部外面 ヘラ描直線 文4条	杯部外面 " 内面 柱状部外面 " 内面 ヘラミガキ ヘラミガキ、 ハケ目 ヘラミガキ ヘラ削り	1mm以下の 砂粒を含む	表裏 灰白	良好	柱状部外 面 黒斑
21	—	" "	残存高 7.0	柱状部外面 ヘラ描沈線 8条	杯部内面 柱状部内面 ヘラミガキ ヘラ削り	1mm以下の 砂粒を含む	にぶい黄 橙	良好	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第94図 -1	—	弥生土器 蓋形土器	口径 12.0 残存高35.0		口縁部内外面 ヨコナデ 体部内面 ヘラ削り	1mmの砂粒 を含む	灰白	良	
2	図版28	〃	口径 33.0 残存高 6.9		体部外面 ヘラによるハ ケ目 〃 内面 弱く細いハケ 目少々あり	1mmの砂粒 を含む	黒	良好	
3	—	〃	口径 5.6 残存高 8.0		口縁部内外面 ナデ	3mm以下の 砂粒を含 む	灰白	良	
4	—	〃	口径 21.6 残存高 5.5		口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面 ヘラミガキ		表 裏 灰	灰白 明褐	口縁部 煤付着
5	—	〃	口径 21.3 残存高 7.1		口縁部内面 ヨコナデ 体部外面 磨滅の為調整 不明 〃 内面 ヘラミガキ ヘラによる刻 目あり	2mm以下の 砂粒を含 む	灰白	良	体部内面 黒斑
6	図版28	〃	残存高 3.5	体部外面 櫛描沈線文 6条 櫛描波状文 6条 円孔1個 つまみが4 個に分かれ ている	体部内面 ヘラミガキ	1mm以下の 砂粒を含 む	灰白	良好	
7	—	〃	口径 19.5 残存高 2.2	口縁外面 四線2条	口縁部外面 磨滅の為調整 不明 口縁部内面 ヨコナデ	1mm以下の 砂粒を含 む	明褐色	良	
挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)		成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第95図 -1	図版30	紡錘車	外径 縦4.0×横4.0 孔径 0.4× 0.4	表面 中央部穿孔	ヘラミガキ	1mm以下の 砂粒を含 む	にぶい橙	良好	土器片利 用
2	図版30	〃	外径 縦4.3×横3.8 孔径 0.4× 0.4	表面 中央部穿孔	ヘラミガキ	〃	灰黄褐	良好	〃
3	図版30	〃	外径 縦3.7×横3.5 孔径 0.3× 0.3	両面 中央部穿孔	ヘラミガキ	〃	表 裏 灰 黒褐	良	〃
4	図版30	〃	外径 縦4.8×横4.7	表面	ヘラミガキ	〃	灰白	良好	〃 未成品

捕図番号	図版番号	器種	法量(cm)		成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
第95図 -5	図版30	紡錘車	外径 縦4.7×横4.6 孔径 0.4×0.4		表面 刻目文 中央部穿孔		1mm以下の砂粒を含む	表裏 黒褐 灰黄	良	土器片利用
6	図版30	"	外径 縦4.8×横5.2 孔径 0.5×0.5		裏面 ヘラミガキ 中央部穿孔 指頭圧痕 表面 磨滅のため調整不明	"	にぶい褐	良	"	
7	図版30	"	外径 縦5.0×横4.2 孔径 0.4×0.4		裏面 ヘラミガキ 中央部穿孔	"	黒	良	"	
捕図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法		胎土	色調	焼成	備考
8	-	弥生土器把手					1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	
9	図版28	弥生土器鉢 ミニチュア	口径 6.3 底径 4.4 器高 6.2	体部外面ツメによる押压文	体部外面 ハケメ 指頭圧痕 " 内面 指頭圧痕	砂粒を含む	にぶい黄 澄	良	体部外面 黒斑	
10	-	"	口径 7.4 残存高 4.0	体部外面円孔(貫通)	体部外面 ヘラミガキ・ 指頭圧痕 " 内面 ヘラミガキ 指頭圧痕	1mm以下の砂粒少々含む	黒	良		
11	図版28	"	口径 5.8 器高 3.6		体部外面 " 内面 指頭圧痕 ヨコナデ ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	表 裏 灰オ リーブ 黒褐	良	外面 黒 斑	
12	-	弥生土器脚付壺	底径 7.3 残存高 9.0		体部内外面 磨滅のため調整不明	3mm以下の砂粒を含む	灰白	不良	外面全体 黒斑	
13	-	"	底径 6.9 残存高 9.0		体部外面 指頭圧痕が顕著に残る	2mm以下の砂粒を含む	灰白	良	体部外面 黒斑	
14	-	弥生土器底部	底径 6.8 残存高 9.0		体部内面 ヘラミガキ	1~5mmの石粒を多量に含む	表 裏 にぶい黄 澄 灰白	良	体部外面 黒斑	

1. 3区 4a層出土土器

第107 図-1	-	須恵器 蓋のつまみ	口径 1.3 残存高 1.5			1mm以下の砂粒を含む	明黄褐	不良	
2	-	須恵器 杯蓋	口径 15.3 残存高 2.3			1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	堅緻 反転復元

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第107 図-3	—	須恵器 杯蓋	口径 15.8 残存高 0.9			1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	堅緻 反転復元
4	—	〃	口径 12.0 残存高 1.4			1mm以下の砂粒を含む	灰	良好	堅緻 反転復元
5	—	須恵器 杯身	底径 12.7 残存高 1.3		底部外面 ヘラ切りのあと高台付	1mm以下の砂粒を含む	表 青灰 裏 暗青 灰	良好	堅緻 反転復元
6	—	〃	底径 15.4 残存高 2.2		体部外面 接合痕が顯著に残る	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	反転復元
7	—	須恵器 皿	口径 14.1 残存高 2.7			1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	反転復元
8	—	〃	底径 9.4 残存高 0.9		底部外面 ヘラ切りのちナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰	良	反転復元
9	—	〃	底径 8.2 残存高 1.6		底部外面 ヘラ切りのちナデ	1mm以下の砂粒を含む	表 明青 灰 裏 青灰	良	反転復元
10	—	〃	底径 9.0 残存高 1.6		底部外面 ヘラ切りのちナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	反転復元
11	—	〃	底径 12.2 残存高 1.3		底部外面 ヘラ切りのちナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	反転復元
12	—	〃	底径 10.0 残存高 1.9		底部外面 ヘラ切りのちナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	堅緻 反転復元
13	—	〃	底径 9.2 残存高 2.0		体部内外面 底部外面 ヨコナデ ヘラ切りのちナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	反転復元
14	—	〃	底径 13.0 残存高 2.3		底部外面 ヘラ切りのちナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	反転復元

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第107 図-15	—	須恵器 高杯脚部	残存高 2.1			1mm以下の砂粒を含む	青灰	良好	堅緻 反転復元

2. 4区 SR01 6a~9b層出土土器

第109 図-1	—	須恵器 蓋	口径 14.4 残存高 1.4		体部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰	良	反転復元
2	—	〃 〃	口径 14.2 残存高 1.7		体部外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	堅緻 反転復元
3	—	〃 〃	口径 17.0 残存高 2.0		内外面 ヨコナデ	砂粒を含む	灰白	良	反転復元
4	—	〃 〃	口径 18.9 残存高 2.0		外面 内面 ヨコナデ ナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	反転復元
5	図版29	〃 〃	口径 20.3 残存高 1.7			砂粒を含む	灰白	良	反転復元
6	—	〃 〃	口径 20.7 残存高 1.4		内外面 ヨコナデ	砂粒を含む	灰白	良	反転復元
7	図版29	〃 〃	口径19.9 残存高 2.2		内外面 ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	反転復元
8	図版29	須恵器 杯身	底径 8.2 残存高 3.5			1mm以下の砂粒を含む	表 暗灰 裏 灰	良好	堅緻 反転復元
9	—	〃 〃	口径 13.1 残存高 2.4			1mm以下の砂粒を含む	青灰	良	堅緻 反転復元
10	—	〃 〃	口径 13.0 残存高 3.1			1mm以下の砂粒を含む	暗青灰	良好	堅緻 反転復元
11	—	〃 〃	口径 12.8 底径 10.0 器高 4.0		底部外面 ヘラ切りのあと高台を付け る	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	堅緻 反転復元

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第109 図-12	—	須恵器 杯身	口径 15.0 残存高 2.5			1mm以下の砂粒を含む	灰	良好	堅緻 反転復元
13	図版29	〃	口径 15.8 残存高 2.0			1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	堅緻 反転復元
14	—	〃	口径 16.4 残存高 2.7			1mm以下の砂粒を含む	青灰	良	反転復元
15	—	〃	口径 20.4 残存高 3.5		内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	青灰	良好	堅緻 反転復元
16	—	〃	底径 14.2 残存高 1.5		底部外面 ヘラ切りの後 ナデ 高台付	1mm以下の砂粒を含む	灰	良好	堅緻 反転復元
17	—	〃	底径 14.2 残存高 1.1		内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	堅緻 反転復元
18	—	〃	底径 9.4 残存高 2.4	底部外面 回線2条	体部内外面 底部外面 ヨコナデ ヘラ切り	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	堅緻 反転復元
19	—	〃	底径 9.2 残存高 2.1		底部外面 ヘラ切り	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	堅緻 反転復元
20	—	〃	底径 10.4 残存高 1.7		底部外面 ヘラ切りの後 ナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	反転復元
21	—	〃	底径 11.1 残存高 2.5		内外面 底部外面 ヨコナデ ヘラ切りの後 あり	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	堅緻 反転復元
22	—	〃	底径 8.4 残存高 3.0		体部内外面 底部外面 ヨコナデ ヘラ切りの後 ナデ消し	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	堅緻 反転復元
23	—	〃	底径 9.0 残存高 1.3		底部外面 ヘラ切り	1mm以下の砂粒を含む	灰色	良	堅緻 反転復元

捕図 番号	図版 番号	器種	法量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第109 図-24	—	須恵器皿	底径 9.1 残存高 1.3		内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	表灰 裏灰白	良	反転復元
25	—	〃	底径 10.0 残存高 0.8		底部外面 ヘラ切り	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	反転復元
26	—	須恵器壺	底径 4.4 残存高 1.8			1mm以下の砂粒を含む	明青灰	良	反転復元
27	29	黒色土器 A類椀	底径 7.2 残存高 1.4		内外面 ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	浅黄橙	良	反転復元
28	29	須恵器 杯身	口径 12.0 残存高 3.3			1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	堅緻 反転復元
29	—	〃	口径 14.0 残存高 1.9			1mm以下の砂粒を含む	表青黒 裏青灰	良好	堅緻 反転復元
30	—	〃	口径 20.0 残存高 3.4			1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	反転復元
31	—	須恵器 高杯	口径 16.2 残存高 2.8		内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰	良好	堅緻 反転復元
32	—	須恵器皿	底径 9.0 残存高 0.9		底部外面 ヘラ切り	1mm以下の砂粒を含む	明青灰	良	堅緻 反転復元
33	—	須恵器 杯身	底径 9.0 残存高 1.0		内外面 底部外面 ヨコナデ ヘラ切りのち ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰	良好	堅緻 反転復元
34	—	〃	口径 11.6 残存高 2.0			1mm以下の砂粒を含む	灰白	良好	堅緻 反転復元
35	—	〃	口径 10.0 残存高 3.7		内外面 ナデ	1mm以下の砂粒を含む	表青灰 裏明青	良好	堅緻 反転復元

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第109 図-36	—	須恵器壺	残存高 5.8			1mm以下の砂粒を含む	青灰	良	反転復元
37	—	須恵器杯蓋	口径 18.2 残存高 2.5			1mm以下の砂粒を含む	表裏 灰白 灰	良好	堅緻 反転復元

2. 4区 水田層出土土器

第112 図-1	—	瓦器椀	底径 6.4 残存高 1.9		体部外面 〃 内面	ヨコナデ 暗文	1mm以下の砂粒を含む	表裏 浅黄 暗灰	良	
2	—	黒色土器椀	底径 6.6 残存高 2.0		体部内外面	ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	表裏 灰白 灰	良	内外面 炭素吸着
3	図版29	須恵器蓋	残存高 1.7		体部内外面	ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	堅緻 反転復元
4	図版29	〃	口径 14.4 残存高 2.6		体部内外面	ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	堅緻 反転復元
5	—	〃	口径 18.0 残存高 2.0		体部内外面	ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	堅緻 反転復元
6	—	〃	口径 18.0 残存高 1.3		体部内外面	ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	堅緻 反転復元
7	—	〃	口径 24.0 残存高 2.1		体部内外面	ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	表裏 灰白 灰	良	堅緻 反転復元
8	—	須恵器皿	口径 15.1 残存高 2.2		体部内外面 底部	ヨコナデ ヘラ切り	1mm以下の砂粒を含む	灰	良	堅緻 反転復元
9	図版29	〃	口径 13.0 残存高 2.0		体部内外面 底部	ヨコナデ ヘラ切り	1mm以下の砂粒を含む	灰白	良	堅緻 火襷あり 反転復元

捕図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴	成形及び調整技法	胎土	色調	焼成	備考
第112 図-10	—	須恵器皿	口径 7.4 残存高 2.0		体部内外面 底部 ヨコナデ ヘラ切り	1mm以下の 砂粒を含む	灰	良	堅緻 反転復元
11	—	〃	口径 4.3 残存高 2.3		体部内外面 底部 ヨコナデ ヘラ切り	1mm以下の 砂粒を含む	灰白	良	堅緻 反転復元
12	図版29	須恵器 脚部	口径 10.0 残存高 1.0		体部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 砂粒を含む	表 裏 灰 灰	良	堅緻 反転復元
13	—	須恵器 皿	底径 7.4 残存高 1.3		体部内外面 底部 ヨコナデ ヘラ切り	1mm以下の 砂粒を含む	灰	良	堅緻 反転復元
14	—	〃	口径 10.0 残存高 0.7		体部内外面 底部 ヨコナデ ヘラ切り	1mm以下の 砂粒を含む	灰	良	堅緻 反転復元
15	図版29	〃	口径 11.0 残存高 1.2		体部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 砂粒を含む	灰白	良	堅緻 反転復元
16	—	須恵器 皿	口径 10.0 残存高 1.5		体部内外面 底部 ヨコナデ ヘラ切り	1mm以下の 砂粒を含む	灰	良	堅緻 反転復元
17	—	〃	底径 11.4 残存高 0.7		体部内外面 底部 ヨコナデ ヘラ切り	1mm以下の 砂粒を含む	灰	良	堅緻 反転復元
18	—	〃	口径 12.4 残存高 0.5		体部内外面 底部 ヨコナデ ヘラ切り後ナ デ消し	1mm以下の 砂粒を含む	灰	良	堅緻 反転復元
19	—	須恵器 杯身	口径 9.2 残存高 1.2		体部内外面 底部 ヨコナデ ヘラ切り後高 台付	1mm以下の 砂粒を含む	暗青灰	良	堅緻 反転復元
20	図版29	〃	底径 9.5 残存高 1.4		体部内外面 底部 ヨコナデ ヘラ切り後高 台付ける	1mm以下の 砂粒を含む	表 裏 灰 灰	良	堅緻 反転復元 転用観
21	図版29	〃	底径 11.0 残存高 2.0		体部内外面 底部 ヨコナデ ヘラ切り後高 台付ける	1mm以下の 砂粒を含む	灰白	良	反転復元 外面煤付着

S T 0 2 出土石器

捕図番号	図版番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
第29図 -1	図版34	打製石庖丁	9.4	5.2	1.3	69.5	サヌカイト	両側縁に抉りをもつ。刃部は両面からの打ち欠きにより刃をつける。背部は、両面からの粗い打ち欠きを行なった後、敲打による背潰しを行なう。両側縁部の抉りは、粗い打ち欠きによってつくる。厚い素材を使用。
-2	図版34	"	9.7	5.5	0.9	67.2	"	右側縁部に抉りをもち、左半分を欠損する大形のものである。刃部及び背部が湾曲する形態をもつ。刃部は、鋭利な大剥離面を利用し、縁辺部には両面からの細かい打ち欠きを行ない刃部をつくる。背部は敲打による粗い背潰しを行なう。抉りは、両面からの粗い打ち欠きによりつくられる。
-3	図版34	"	4.5	5.0	0.9	23.3	"	右側縁部に抉りをもつ。刃部は大剥離面を利用し縁辺部に両面からの打ち欠きにより刃をつける。一方背部は、両面からの粗い打ち欠きの後、敲打による背潰しを行う。この敲打は、抉り周辺にまで及ぶ。抉りは両面からの打ち欠きにより細かな調整をする。
-4	図版34	扁平片刃石斧	6.0	2.8	0.9	21.2	結晶片岩	刃部周辺のみ残存。刃部は縦方向に丁寧な研磨が行なわれる。
-5	図版34	"	5.3	3.4	0.9	34.0	"	刃部を欠損する。基部から刃部にむかってすぼまる形態。全面に丁寧な研磨を行う。
-6	図版34	削器	6.5	7.3	1.6	66.6	サヌカイト	刃部以外は截断面をもつ。刃部は両面からの粗い打ち欠きにより刃をつける。厚い素材を使用。
-7	図版34	楔形石器	3.6	4.5	2.9	35.5	"	両側縁に截断面をもつ。上縁部、下縁部とも打撃による刃潰れ、階段状剥離がみられる。厚い素材を使用。
-8	図版34	敲打痕のある石器	7.0	6.3	1.3	62.3	"	下縁部以外は明瞭な調整はみられない。下縁部は敲打による刃潰れ、階段状剥離が顕著にみられる。工具等の用途が考えられる。
-9	図版34	石鎌	3.8	1.5	0.5	2.4	"	有茎式。やや厚めの素材を使用し、縁辺部を両面からの打ち欠きにより調整する。
-10	図版34	削器	4.8	3.8	0.5	11.3	"	下縁部以外は截断面をもつ。下縁部は鋭利な大剥離面を利用し、縁辺部に両面からの打ち欠きによって刃部をつくる。
第32図 -1	図版34	石庖丁	10.9	4.6	1.0	117.9	結晶片岩	磨製石斧を転用、左側縁に両面からの打ち欠きによる抉りをつくる。下縁部は敲打による刃部をつくる。
-2	図版34	打製石庖丁	4.2	3.3	0.7	9.0	サヌカイト	右側縁部に抉り残存。抉り及び背部は片面からの打ち欠きによって大半を整形する。背部は若干の敲打を行う。刃部は欠損して不明

挿図番号	図版番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
第32図 -3	図版34	削器	3.1	3.9	0.7	11.6	サヌカイト	上縁部は片面からの打ち欠きによって調整を行う。下縁部は鋭利な大剥離面を利用し、簡単な打ち欠きを行い刃部をつくる。
-4	図版34	"	4.0	1.0	0.6	2.5	"	刃部のみ残存、両面からの打ち欠きによる鋭利な刃部をもつ。
-5	-	"	4.3	5.9	0.9	31.4	"	下縁部のみに調整を行う。下縁部は両面からの粗い打ち欠きによって刃部をつくる。
-6	図版34	"	3.0	5.4	1.3	22.1	"	両側縁に截断面をもつ。刃部は両面からの粗い打ち欠きにより刃をつける。
-7	図版34	石鎌	2.4	1.7	0.4	1.4	"	凹基式。先端部及び基部を欠損。縁辺部は、両面からの細かい打ち欠きを行い調整する。
-8	図版34	"	2.5	1.8	0.4	1.4	"	凹基式。先端部から基部にかけての縁辺部に両面からの細かい打ち欠きを行い調整する。
-9	図版34	"	3.3	2.0	0.5	3.6	"	凹基式。厚めの素材を使用する。先端部から基部にかけての縁辺部に両面からの粗い打ち欠きを行い調整する。
-10	図版34	"	3.9	2.1	0.5	3.2	"	凹基式。基部右逆刺を欠損。先端部から基部にかけての縁辺部に両面からの粗い打ち欠きを行い調整する。
-11	図版34	"	3.0	1.7	0.5	1.9	"	平基式。先端部及び基部右側縁を欠損。先端部から基部にかけての縁辺部に両面からの細かい打ち欠きを行い調整する。
-12	図版34	"	2.3	2.2	0.5	2.6	"	平基式。先端部を欠損。縁辺部に両面からの粗い打ち欠きを行い調整する。
-13	図版34	"	3.3	2.3	0.5	3.8	"	平基式。先端部及び基部両側縁を欠損。先端部から基部にかけての縁辺部に両面からの大きな打ち欠きを行い調整する。
-14	図版34	"	3.8	1.6	0.5	2.8	"	凸基式。完形。先端部から基部にかけての縁辺部に両面からの細かい打ち欠きを行い調整する。幅狭い精巧な仕上りである。

捕団番号	図版番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
第32図 -15	図版34	石鎌	4.2	1.8	0.4	3.7	サヌカイト	凸基式。完形、先端部がやや右寄りの形をもつ。先端部から基部にかけての縁辺部に両面からの粗い打ち欠きを行う。
-16	図版34	"	3.4	1.7	0.4	2.4	"	凸基有茎式。先端部を欠損。先端部から茎にかけての縁辺部に両面からの打ち欠きを行う。
第33図 -1	図版34	楔形石器	3.1	2.7	0.8	11.0	"	下縁部以外は截断面を残す。下縁部は打撃による刃潰れ及び階段状剥離がみられる。
-2	図版34	"	4.1	2.9	0.8	14.0	"	左側縁部には截断面を、上縁部は自然面が残る。下縁部から右側縁部にかけて打撃による刃潰れ及び階段状剥離がみられる。
-3	図版34	"	4.5	2.8	0.9	10.0	"	三角形状を呈する。両側縁部に截断面をもつ。下縁部は打撃による刃潰れ及び階段状剥離がみられる。
-4	図版34	"	3.9	3.5	1.0	19.2	"	両側縁部に截断面をもつ。上縁部、下縁部は打撃による刃潰れ、階段状剥離がみられる。
-5	図版34	"	3.9	2.3	1.1	11.9	"	下縁部以外は、すべて截断面をもつ。下縁部は打撃による刃潰れ、階段状剥離がみられる。厚い素材を使用。
-6	図版34	"	3.4	2.5	0.7	6.9	"	左側縁部に截断面をもつ。上縁部、下縁部は打撃による刃潰れ、階段状剥離がみられる。
-7	図版34	"	3.6	3.6	1.0	19.2	"	両側縁部に截断面をもつ。上縁部、下縁部は打撃による刃潰れ、階段状剥離がみられる。
-8	図版34	"	1.7	3.8	0.6	5.1	"	縦長の素材である。両側縁部に截断面をもつ。上縁部、下縁部は打撃による若干の刃潰れ、階段状剥離がみられる。薄い素材を使用。
1. 3区 5 b 砂層出土石器								
第42図 -1	図版35	打製石庖丁	10.5	4.6	0.8	53.4	サヌカイト	完形。刃部及び背部が湾曲する木葉形を呈する。刃部は両面からの打ち欠きによって刃をつける。背部は両面からの粗い打ち欠きの後、敲打による背潰しを行う。

捕図番号	図版番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
第42図 -2	図版35	打製石庖丁	11.7	4.2	0.9	44.0	サヌカイト	完形。背部が湾曲し、刃部は直線的で半月状を呈する。刃部は、両面からの細かい打ち欠きによって刃をつけ、背部は、両面からの大きな打ち欠きを行なった後、背部中央に敲打による背潰しを行う。
-3	図版35	"	11.4	4.2	1.3	73.2	"	左側縁に抉り残存。刃部は直線的で、背部は若干湾曲する。刃部は両面からの打ち欠きにより銳利な刃をつける。背部は両面からの大きな打ち欠きの後、敲打による背潰しを行う。抉り部は、敲打による刃潰しを行う。厚めの素材を使用。
-4	図版35	"	3.1	4.0	0.8	9.9	"	左側縁の抉り部分周辺残存。刃部は、縁辺部に両面からの打ち欠きにより刃をつける。背部においても両面からの打ち欠きを行なった後、敲打による背潰しを行なう。抉り部は、両面からの打ち欠きの後、敲打による刃潰しを行う。
-5	図版35	"	6.0	3.8	0.8	17.9	"	左側縁に抉り残存。刃部は直線的で、背部は湾曲する。刃部は両面からの打ち欠きにより刃をつける。刃部には使用によると考えられる磨滅痕がみられ、背部は、粗い打ち欠きの後、敲打による背潰しを行なう。抉り部は、両面からの粗い打ち欠きの後、敲打による刃潰しを行なう。
-6	図版35	削器	6.5	4.9	0.9	38.1	"	左側縁に截断面をもつ。右側縁は敲打によって抉り状の凹みをつくる。下縁部は両面からの打ち欠きにより刃をつくる。上縁部は、粗い打ち欠きを行う。石庖丁の可能性もある。
-7	図版35	"	4.3	4.4	0.6	19.0	"	下縁部は両面からの打ち欠きにより刃部をつくる。左側縁部は片面からの打ち欠きにより抉り状の凹みをつくる。右側縁部は両面からの打ち欠きにより銳利な刃をつくる。上縁部は、敲打による背潰しを行う。
-8	図版35	"	7.6	5.3	0.8	37.8	"	下縁部が湾曲するもので、両面からの打ち欠きにより刃部をつくる。上縁部は湾曲し、両面からの打ち欠きを行うが、残存部分が少ない為詳細は不明である。右側縁部は欠損する。
-9	—	"	3.0	4.4	0.9	15.0	"	右側縁部に截断面をもつ。下縁部は両面からの打ち欠きによって刃部をつくる。上縁部、左側縁部とも粗い打ち欠きを行うのみである。
-10	図版35	"	7.1	6.8	1.5	52.4	"	右側縁部及び下縁部は銳利な大剥離面を利用し縁辺部に両面からの打ち欠きを行い刃部をつくる。左側縁部は大きな打ち欠きを行なった後、粗い敲打を行い刃潰しを行う。
-11	図版35	"	4.2	4.7	1.2	23.6	"	下縁部以外は、すべて截断面をもつ。下縁部は両面からの打ち欠きにより刃部をつくる。
第43図 -1	図版35	円板状を呈する石器	9.0	8.2	2.4	227.9	"	上縁部以外は、打撃による敲打痕、階段状剥離がみられる。何らかの工具の可能性がある。
-2	図版35	楔形石器	3.5	2.5	0.9	12.8	"	両側縁に截断面をもつ。上縁部、下縁部とも打撃による刃潰れ、階段状剥離がみられる。

捕図番号	図版番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
第43図 -3	図版35	楔形石器	3.9	3.3	1.4	19.7	サヌカイト	下縁部以外は、截断面を残す。打撃による刃潰れ、階段状剥離がみられる。厚い素材を使用
-4	図版35	削器	2.5	2.6	0.6	6.0	〃	左側縁部に截断面をもつ。右側縁部には、片面からの打ち欠きにより抉り状の凹みがみられる。上縁部、下縁部とも両面からの打ち欠きを行ない刃部をつくる。
-5	図版35	〃	4.4	3.7	0.7	12.8	〃	両側縁部に截断面をもつ。上縁部、下縁部とも両面からの打ち欠きを行ない刃部をつくる。
-6	図版35	〃	4.8	3.3	0.7	15.0	〃	右側縁部に截断面をもつ。上縁部、下縁部とも両面からの打ち欠きを行ない刃部をつくる。
-7	図版35	〃	5.5	3.8	1.0	28.4	〃	左側縁部及び上縁部を欠損する。刃部は両面からの打ち欠きを行ない鋭い刃をつける。側縁部は両面からの打ち欠きを行ない抉り状の凹みをつくる。片面の刃部から体部にかけて使用によるものと考えられる磨耗痕がみられ、石庖丁の可能性が考えられる。
-8	図版35	削器	4.0	2.5	0.8	10.0	〃	右側縁部を欠損する。刃部は、両面からの粗い打ち欠きを行ない刃をつける。上縁部は両面からの粗い打ち欠きを行なった後、敲打による背潰しを行う。
-9	—	〃	5.2	3.1	0.9	11.6	〃	側縁部に抉りをもつ。下縁部は両面からの打ち欠きによって刃部をつくる。側縁部の抉りは、両面からの打ち欠きによりつくりだす。上縁部は欠損して不明である。抉りをもつことより石庖丁の可能性がある。
-10	図版35	石槍	4.0	2.9	0.7	9.7	〃	基部を欠損。尖頭部は両面からの打ち欠きにより縁辺部を調整する。尖頭部の縁辺は鋭利な刃はつけない。
-11	図版35	石鎌	5.2	1.5	0.6	6.0	〃	凸基式。先端部、基部、左側縁部を欠損。左側縁部以外は最近の欠損である。右側縁部は両面からの打ち欠きにより刃をつける。一方左側縁部は明確な刃はつけない。
-12	図版35	〃	4.2	1.8	0.6	3.7	〃	凸基式。両側縁部は、両面からの打ち欠きにより刃をつける。
-13	図版35	〃	5.3	2.4	0.9	8.4	〃	凹基式。先端から基部にかけて縁辺部に両面からの粗い打ち欠きを行い、鋭利な刃をつける。抉りは、両面からの粗い打ち欠きを行ない抉り部をつくる。全体に粗雑なつくりで大型の石鎌である。
第44図 -1	—	砥石	22.3	12.0	4.5	—	砂岩	2面を使用する。うち1面は使用による磨滅で中央部が凹む。

捕図番号	図版番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
第44図 -2	—	砥石	22.9	12.0	5.8	—	安山岩	1面を使用する。中央部は若干凹む。
-3	—	〃	15.7	9.4	3.5	—	砂岩	2面を使用する。両面とも使用による磨滅で表面はなめらかである。

S R 0 1 1 1層出土石器

第97図 -1	図版32	打製石庖丁	9.2	4.8	0.7	47.4	サスカイト	完形。両端に抉りをもつ。片面は、自然面を多く残す。刃部は粗い調整、刃部中央に使用による磨耗痕あり。
-2	図版32	〃	10.2	4.8	0.7	53.8	〃	片側に抉りをもつ、刃部は両面からの打ち欠きによって鋭利な刃をつくる。背部は敲打による背潰しを行う。刃部及び背部が湾曲する。
-3	図版32	〃	11.5	3.6	0.9	38.2	〃	完形。両端に抉りをもつ。背部は刃部に比べ長さが短い。刃部は両面からの打ち欠きにより鋭利な刃をつくる。背部は敲打による背潰しを行う。刃部から背部にかけて使用による磨耗痕あり。
-4	図版32	〃	11.2	4.6	1.1	74.2	〃	完形。両端に抉りをもつ。やや厚い素材を利用。刃部は、両面からの打き欠きにより鋭利な刃をつくる。背部は敲打による背潰しを行う。抉りにおいても敲打による刃潰しを行う。
-5	図版32	〃	3.5	4.8	0.7	16.8	〃	片側辺に抉り残存。抉りは、敲打による刃潰し。刃部は片面からのみの打ち欠きにより刃をつくる。背部は敲打による背潰しを行う。
-6	図版32	〃	4.7	4.4	1.0	15.3	〃	片側辺に抉り残存。抉りは、敲打による刃潰し、刃部は、ほとんどを片面からの打ち欠きにより刃をつくる。背部は敲打による背潰しを行う。
-7	図版32	〃	6.1	4.2	0.9	28.6	〃	片側辺に抉り残存、抉りは、敲打による刃潰し、刃部は両面からの打ち欠きにより鋭利な刃をつくる。背部は敲打による背潰しを行う。
-8	図版32	〃	5.9	3.9	1.1	29.3	〃	片側辺に抉り残存。抉りは、敲打による刃潰し、刃部は両面からの打ち欠きにより鋭利な刃をつくる。背部は敲打による背潰しを行う。
-9	図版32	〃	7.5	3.8	0.8	21.0	〃	片側辺に抉りが残存するが、抉りは両面からの打ち欠きにより鋭利である。刃部は、厚めの素材を両面からの打ち欠きにより刃をつくる。

挿図番号	図版番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
第96図 -1	図版32	局部磨製石庖丁	10.0	5.2	0.6	39.4	讃岐岩質安山岩	1/3を欠損。半月状を呈する。2孔一対の紐穴をもつ。刃部は、両面からの横方向の研磨により刃をつける。背部においても縁辺部において両面からの研磨を行う。握り部は、敲打による背潰を行う。
-2	図版32	打製石庖丁	8.6	4.4	0.8	31.1	サスカイト	完形。刃部は鋭利な大剥離面を利用し、縁辺部に若干の打ち欠きを行う。背部は、片面からの打ち欠きのみによって整形。部分的に敲打による背つぶしを行う。
-3	図版32	"	10.9	5.5	1.0	72.8	"	完形。側辺部に自然面をもつ、刃部は大剥離面を利用し、縁辺部を両面からの打ち欠きによって刃をつける。背部は敲打による背潰しを行う。
-4	図版32	"	6.0	3.6	0.8	22.6	"	刃部及び背部は、側縁部にむかって湾曲する木葉形を呈する。刃部は両面からの粗い打ち欠きによって鋭利な刃をつける。背部は敲打による背潰しを行う。体部には使用によると考えられる磨耗痕あり。
-5	図版32	"	8.1	4.8	0.6	34.6	"	残存する側辺部に自然面をもつ。刃部は両面からの打ち欠きによって鋭利な刃部をつくる。
第98図 -1	図版31	蛤刃石斧	13.8	7.5	4.7	—	カンラン石を含む讃岐岩質安山岩	全面に丁寧な研磨。基部欠損。刃部に使用による刃こぼれあり。
-2	図版31	"	13.2	7.7	4.2	752.2	"	完形。全面に丁寧な研磨、基端部に敲打痕を残す。刃部に使用による擦痕が残る。
第99図 -1	—	"	7.2	7.7	4.7	—	"	基端部及び刃部を欠損、欠損部以外は全面に研磨
-2	図版31	"	10.6	5.7	3.0	—	讃岐岩質安山岩	基端部及び両側面に成形による敲打痕が残る。他の面は研磨を行う。
-3	図版31	柱状片刃石斧	10.3	1.0	3.8	—	結晶片岩	一側面を残し、大半を欠損。基部中央に抉り、残存する一側面は研磨を行う。欠損する面においても研磨を行うことより破損後に転用を意図したもの？
-4	図版31	"	14.4	2.1	4.0	—	"	刃部及び両側面を欠損。残存する面は、丁寧な研磨を行う。
-5	図版31	"	9.9	1.8	3.7	—	"	一側面及び基部を欠損。残存する面は、丁寧な研磨を行う。刃部先端は使用による摩滅が残る。

插図番号	図版番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
第99図 -6	図版31	柱状片刃石斧	7.3	0.8	2.9	—	結晶片岩	一側面及び刃部の一部を残し大半を欠損。残る面は丁寧な研磨を行う。刃部先端は使用による摩滅が残る。
-7	図版31	扁平片刃石斧	10.8	3.7	1.8	—	〃	一側面及び刃部を欠損。残存する側面も成形による敲打痕が残る。残存する面は、丁寧な研磨を行う。
第100図 -1	図版31	〃	3.1	3.3	0.9	—	讃岐岩質安山岩	完形。正方形を呈す。刃部は鈍い刃をつける。全面に丁寧な研磨を行う。
-2	図版31	〃	6.9	2.8	2.0	—	結晶片岩	基端部及び一側面を欠損。残存する面は、丁寧な研磨を行う。側面中央部に、使用によると考えられる擦痕が顕著に残る。
-3	図版31	〃	6.6	4.3	1.4	—	〃	完形。断面カマボコ状を呈する。刃部は鋭く、丁寧なつくりである。全面に丁寧な研磨を行う。
第101図 -1	—	削器	3.7	2.1	0.5	3.1	サヌカイト	刃部は、鋭利な大剥離面を利用し、若干の打ち欠きを行い刃をつくる。
-2	図版32	〃	3.6	2.75	0.5	4.5	〃	両側縁に截断面に残す。刃部は、鋭利な大剥離面を利用し、若干の打ち欠きを行い刃をつくる。背部は、敲打による背潰しを行う。
-3	図版32	〃	6.8	3.7	1.1	35.9	〃	やや厚い素材を利用する。刃部は両面からの打ち欠きによって刃をつける。背部は敲打による背潰しを行う。刃部中央に使用によると考えられる磨滅痕がみられる。
-4	図版32	〃	3.9	4.2	0.6	15.0	〃	左側縁及び上縁はほとんど調整を行わない。下縁部は、粗い打ち欠きにより鋭利な刃部をつくる。右側縁部は敲打による刃潰しを行う。
-5	図版32	〃	3.6	4.1	0.4	9.9	〃	左側縁及び上縁はほとんど調整を行わない。下縁部は、粗い打ち欠きにより鋭利な刃部をつくる。右側縁部中央にのみ両面からの打ち欠きを行う。
-6	—	〃	3.5	3.9	0.7	—	〃	下縁部に粗い打ち欠きを行い、刃部をつくる。その他の縁は、調整をあまり行なわない。
-7	—	〃	4.3	3.7	0.8	15.3	〃	上縁及び下縁部のみ片面からの打ち欠きによって調整を行う。

挿図番号	図版番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
第101図 -8	図版32	削器	6.2	4.4	0.6	18.3	サヌカイト	下縁部は鋭利な大剥離面をそのまま利用する刃部をもち、上縁部は敲打による背潰しを行う。
-9	図版32	"	5.2	5.0	0.8	27.3	"	上縁及び下縁部に調整がみられる。いずれも片面からの打ち欠きによってのみ調整を行う。
-10	図版32	"	5.9	5.3	1.1	39.0	"	下縁部は、鋭利な大剥離面を利用し、縁辺部に両面からの細かい打ち欠きを行い刃部をつくる。右側縁は一部自然面を残し、下部は両面からの打ち欠きにより刃をつける。上縁部は、敲打による軽い刃潰しを行う。
-11	図版32	"	5.7	4.4	0.6	22.1	"	下縁部は、両面からの打ち欠きによって刃部をつくる。上縁部は、敲打による背潰しを行う。
第102図 -1	—	楔形石器	3.0	3.3	0.5	7.6	サヌカイト	右側縁に截断面を残す。下縁部に両面からの剥離がみられる。
-2	図版33	"	3.5	2.7	0.8	9.4	"	両側縁に截断面をもつ。上縁部は打撃による刃潰れがみられる。
-3	図版33	"	3.5	3.5	1.6	25.1	"	厚い素材を利用する。両側縁に截断面をもつ。上下縁部とも打撃による刃潰れ、階段状剥離が顕著にみられる。
-4	—	"	4.6	2.9	0.9	13.0	"	左側縁に自然面を残す。上縁部は截断面を残す。下縁部は打撃による階段状剥離がみられる。
-5	図版33	"	4.0	2.8	0.8	13.6	"	両側縁に截断面を残す。上縁部、下縁部とも打撃による刃潰れ、階段状剥離がみられる。特に上縁部は顕著である。
-6	図版33	"	4.8	3.8	0.9	18.0	"	両側縁に截断面を残す。上縁部・下縁部とも打撃による刃潰れ、階段状剥離がみられる。
-7	図版33	"	4.0	4.6	1.4	37.0	"	大形のものである。厚い素材を利用する。両側縁に截断面をもつ。上縁部、下縁部とも打撃による刃潰れ、階段状剥離がみられる。

挿図番号	図版番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
第103図 -1	図版33	砥石	23.4	16.7	5.3	—	砂岩	大形の砥石で、1面のみを使用する。使用痕が認められる面は、使用によって中央部が凹む。中央部に擦痕が顕著に残る。
								長方形状を呈する。使用痕が認められる反対の面を欠損する。使用痕が認められる面は全体を使用している。
第104図 -1	図版31	石鎌	2.5	1.4	0.4	—	サヌカイト	凹基式。逆刺部分を欠損
								凹基式。
-2	図版31	〃	2.7	2.0	0.4	1.8	〃	凹基式。
								凹基式。
-3	図版31	〃	3.1	1.8	0.5	2.3	〃	凹基式。
								凹基式。
-4	図版31	〃	3.4	2.0	0.4	2.5	〃	凹基式。
								凹基式。
-5	図版31	〃	3.5	2.5	0.5	3.0	〃	凹基式。左側逆刺部分を欠損
								凹基式。
-6	図版31	石槍	8.7	3.0	0.9	31.9	サヌカイト	尖頭部を欠損。尖頭部から基部にかけて両面からの打ち欠きにより鋭利な刃部をつくる。丁寧なつくりである。
								尖頭部を欠損。基部から尖頭部にむかってすぼまる。両側縁は、敲打による刃潰しを丁寧に行う。やや厚い素材を利用。
-7	図版31	〃	6.7	2.9	1.4	36.7	〃	尖頭部を欠損。基部の両側縁が平行になる。両側縁は敲打による粗い刃潰しを行う。厚い素材を利用。
								尖頭部を欠損。基部の両側縁が平行になる。両側縁は両面からの打ち欠きを行なった後、敲打による刃潰しを行う。
-8	図版31	〃	7.5	3.8	1.6	65.5	〃	尖頭部を欠損。基部の両側縁が平行になる。両側縁は敲打による粗い刃潰しを行う。厚い素材を利用。
								尖頭部を欠損。基部の両側縁が平行になる。両側縁は両面からの打ち欠きを行なった後、敲打による刃潰しを行う。
-9	図版31	〃	4.3	3.4	1.0	23.2	〃	尖頭部及び基部を欠損。尖頭部へのすぼまり方は左右対称ではない。両側縁は両面からの打ち欠きにより鋭利な刃部をつくる。
								尖頭部及び基部を欠損。尖頭部へのすぼまり方は左右対称ではない。両側縁は両面からの打ち欠きにより鋭利な刃部をつくる。
-10	図版31	〃	5.1	3.4	0.8	17.8	〃	尖頭部及び基部を欠損。尖頭部へのすぼまり方は左右対称ではない。両側縁は両面からの打ち欠きにより鋭利な刃部をつくる。
								尖頭部及び基部を欠損。尖頭部へのすぼまり方は左右対称ではない。両側縁は両面からの打ち欠きにより鋭利な刃部をつくる。

挿図番号	図版番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
第104図 -11	図版31	石槍	14.1	3.7	1.0	67.4	サヌカイト	基部の両側縁が並行になり、尖頭部でくぼまる。両側縁は両面からの打ち欠きの後、敲打による刃潰し、尖頭部は両面からの打ち欠きによる鋭利な刃部をつくる。完形。
1. 3区出土石器								
1. 3区 側溝								
第116図 -1	図版35	打製石庖丁	11.4	4.5	1.2	71.2	サヌカイト	刃部及び背部がブーメラン状に湾曲する形態、背部に比べ、刃部が長い。両側縁部に抉りをもつ。刃部は鋭利な大剥離面を利用し、縁辺部を両面からの打ち欠きにより刃をつける。背部は両面からの打ち欠きの後、敲打による背潰しを行う。両抉りは、両面からの打ち欠きの後、敲打による刃潰しを行う。
-2	図版35	〃	11.5	4.5	1.1	61.1	〃	平面形は長方形状を呈する。直線的な刃部は鋭利な大剥離面を利用して、両面からの細かい打ち欠きを行ない刃をつける。背部は、両面からの打ち欠きの後、敲打による背潰しを行う。
1区7層								
第116図 -3	図版35	打製石庖丁	7.7	4.3	1.0	43.4	サヌカイト	約半分を欠損する。背部は直線的で、刃部は湾曲する。刃部は両面からの打ち欠きにより鋭利な刃をつける。背部は、両面からの打ち欠きの後、敲打による背潰しを行なう。背部の一部は截断面をそのまま利用する。刃部には使用によると考えられる磨耗痕がみられる。
3区4a層								
第116図 -4	図版35	打製石庖丁	7.5	5.7	0.9	45.2	サヌカイト	平面形は台形を呈する。刃部は両面からの打ち欠きにより鋭利な刃をつける。背部は、敲打による背潰しを行なう。右側縁部も両面からの打ち欠きにより刃をつける。左側縁部は截断面を残す。
出土地不明								
第116図 -5		打製石庖丁	9.5	4.5	1.1	66.8	サヌカイト	両側縁に抉りをもつ。刃部は両面からの粗い打ち欠きを行ない刃をつける。背部は両面からの粗い打ち欠きの後、敲打による背潰しを行なう。両側縁の抉りは両面からの打ち欠きを行なった後、敲打による刃潰しを行なう。
床土層								
第116図 -6	図版35	円板状を呈する石器	6.7	6.7	1.0	59.7	サヌカイト	平面形は円形を呈する。縁辺部に両面からの打ち欠きを行ない敲打による刃潰しを行なう。

挿図番号	図版番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
S R 0 1 10～11層出土石器								
第117図 -13	図版33	石鎌	4.7	2.2	0.5	3.1	サヌカイト	凹基式変形。凹基式の鎌身中央部に抉りをもつものである。縁辺部は先端から基部にかけて両面からの細かい打ち欠きを行ない。鋭利な先端部をつくる。抉りは両面からの打ち欠きによりつくる。
S R 0 1 8～9層出土石器								
第117図 -3	図版32	石庖丁	8.2	4.0	0.6		安山岩	紐孔をもつ。刃部及び側縁部は欠損し、平面形態は不明である。紐孔は両面から穿つもので孔径は0.4cmである。背部は面をもつ。全体に風化による縞模様がみられる。
-8	図版32	削器	4.7	4.8	0.7		サヌカイト	右側縁部に截断面をもつ。下縁部は、両面からの打ち欠きを行ない、刃をつける。左側縁部は両面から粗い打ち欠きを行なう。
-9	図版33	石鎌	6.1	2.3	0.7	8.8	〃	凹基式。基部右逆刺を欠損する。大形の石鎌である。先端部から基部にかけて両面からの細かい打ち欠きを行ない鎌身部をつくる。
S R 0 1 5 b層出土石器								
第117図 -6	図版32	削器	9.7	5.8	1.3		サヌカイト	刃部以外は自然面、截断面を残す。刃部は両面からの細かい打ち欠きによって刃をつける。
-7	—	〃	11.2	4.1	0.8		〃	刃部以外は自然面、截断面を残す。刃部は鋭利な大剥離面を利用し、片面からの打ち欠きにより刃をつける。背部は面をなす大剥離面をそのまま利用する。
S R 0 1 西肩検出中出土								
第117図 -1	図版32	打製石庖丁	5.5	6.2	1.0	33.8	サヌカイト	右半分を欠損する。刃部は大剥離面をほぼ利用し、簡単な打ち欠きを行なう。背部は敲打による背潰しを行なう。側縁部は両面からの粗い打ち欠きを行なう。
-2	図版32	〃	6.8	4.9	1.1	67.6	〃	右半分を欠損する。厚い素材を使用。長方形を呈する。刃部は両面からの打ち欠きにより刃をつける。背部は、敲打による粗い背潰しを行なう。抉り部は、両面からの打ち欠きにより抉りをつくり敲打による刃潰しを行なう。刃部には使用によるものと考えられる磨耗痕がみられる。

捕図番号	図版番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
第117図 -4	—	打製石庖丁	4.7	3.3	0.7	—	サヌカイト	平面形態は半月状を呈し、刃部は両面からの打ち欠きにより銳利な刃をつける。背部は両面からの粗い打ち欠きを行なった後、敲打による背潰しを行なう。刃部から体部にかけて使用によるものと考えられる磨耗痕がみられる。
-5	図版32	〃	5.7	3.9	0.7	—	〃	平面形態は半月状を呈し、約半分を欠損する。刃部は直線的で、背部は湾曲する。刃部は、片面からの打ち欠きを多く行ない刃をつける。背部は、両面からの打ち欠きの後、敲打による背潰しを行なう。片面のほぼ全体に使用によると考えられる磨耗痕がみられる。
SD09 出土石器								
第117図 -12	図版33	打製石庖丁	4.1	1.8	0.5	—	サヌカイト	平基式、先端部が狭い二等辺三角形状を呈する。縁辺部は、両面からの細かい打ち欠きを行ない、銳利な刃先をつくる。左側縁基部を欠損する。
SR01 西岸微高地上4b層								
第117図 -10	—	打製石庖丁	2.2	1.7	0.4	—	サヌカイト	凹基式。基部右逆刺を欠損する。小形の石鎌である。先端部から基部にかけて両面からの細かい打ち欠きを行なう。抉りについても両面からの細かい打ち欠きを行なう。
第117図 -11	—	石鎌	3.1	1.3	0.3	—	〃	平基式。五角形状を呈する。縁辺部に両面からの粗い打ち欠きを行ない。銳利な縁辺部をつくる。長さの割に幅が狭い形態をする。
-14	図版33	石槍	6.2	3.5	1.2	—	〃	尖頭部を欠損する。基部から尖頭部へは両側縁が平行になる形態をする。両側縁部は両面からの打ち欠きの後、敲打による刃潰しを行う。
-15	図版33	石錐	3.6	0.8	0.5	—	〃	両面からの打ち欠きにより銳利な縁辺部及び先端部をつくる。表面は風化が著しい。



圖 版



調査前状況全景(西から)



調査前状況全景(東から)



調査区土層堆積状況 3区北壁



3区 SR02最深部土層堆積状況-1



3区 SR02最深部土層堆積状況-2



2区 SR01最深部土層堆積状況



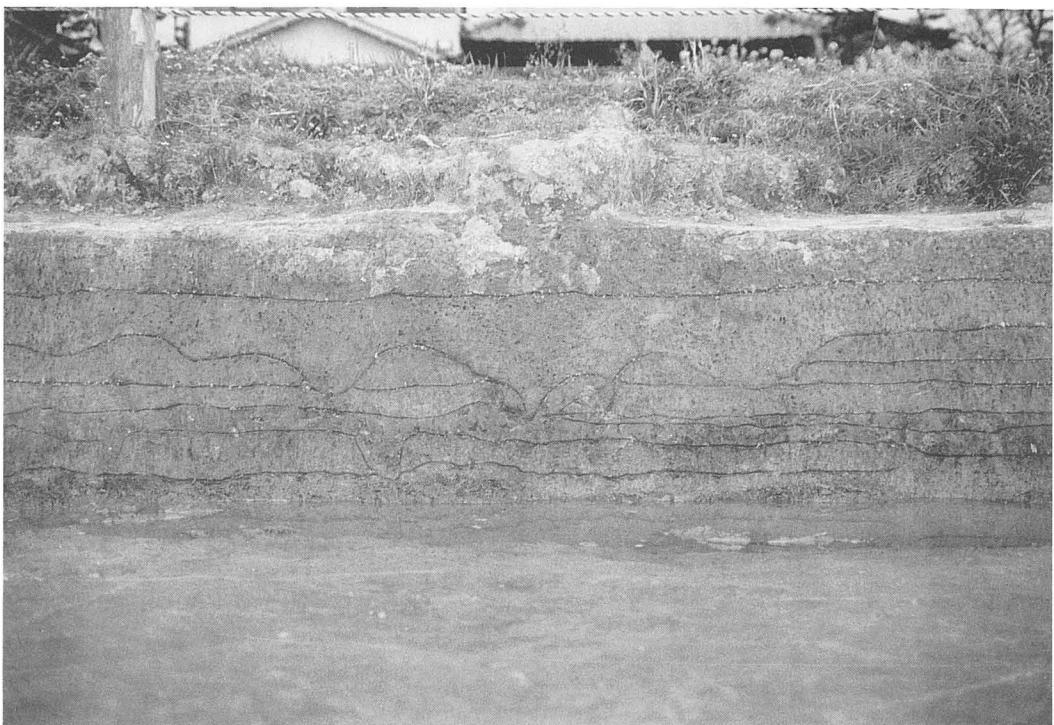
3区 SR02完掘状況(東から)



3区 SR02遺物出土状況



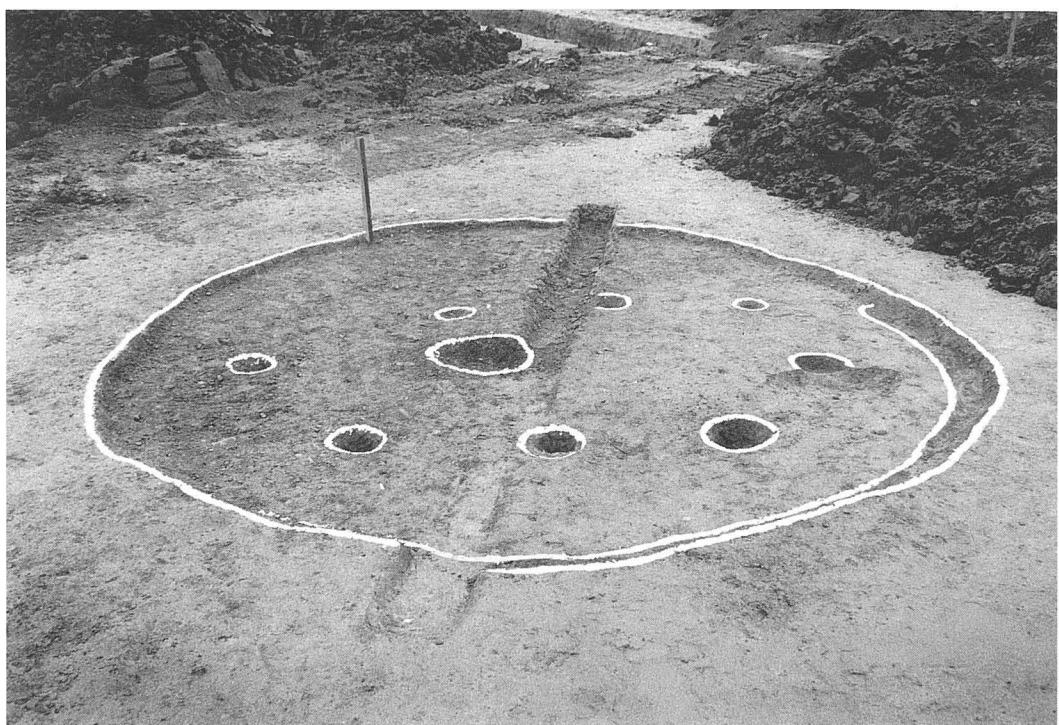
4区 SR01西岸微高地上水田全景(北から)



4区 SR01西岸微高地上土層堆積状況 北壁



3区 SH01炭化材検出状況（北東から）



3区 SH01完掘状況（南東から）



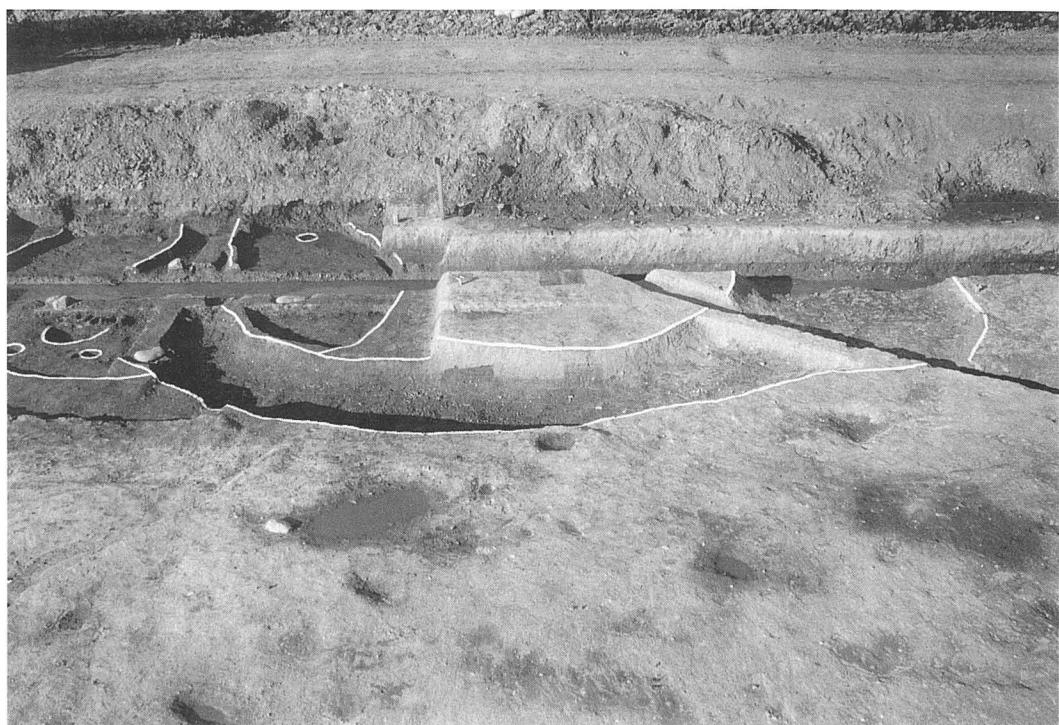
3区 SH02炭化材検出状況(北から)



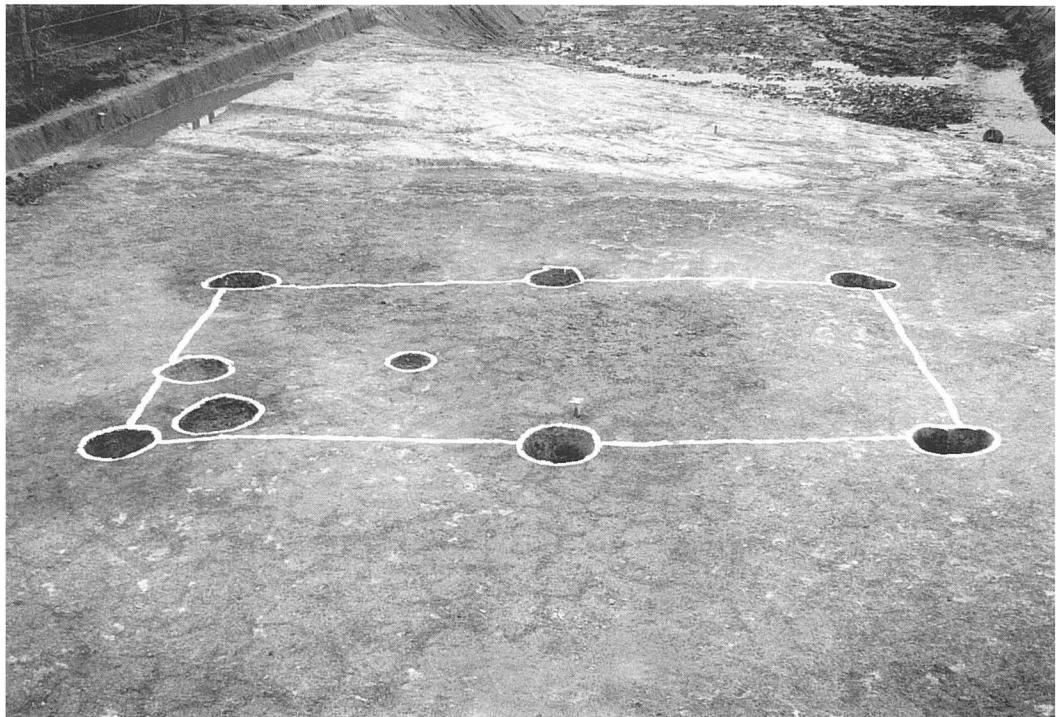
3区 SH02完掘状況(南から)



3区 ST01完掘状況(北西から)



3区 ST02完掘状況(南から)



3区 SB01完掘状況(東から)



3区 SD02完掘状況(北から)



1区 SX01遺物出土状況



1区 SX03完掘状況(西から)